

2. 美濃山廃寺第7次・ 美濃山廃寺下層遺跡第10次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、「美濃山閉鎖地区農地一時転用（盛土造成）」事業に伴って実施したものである。同事業は、農地を一時転用して新名神高速道路整備事業に伴う盛土造成工事を行うもので、盛土造成予定地内における埋蔵文化財を対象として発掘調査を実施した。

本事業に伴い発掘調査の対象となったのは、美濃山廃寺と美濃山廃寺下層遺跡の2遺跡である。前者はこれまでの発掘調査や出土遺物などから奈良時代を中心とする古代寺院であると考えられている。今回、新名神高速道路整備事業^(注1)と合わせて、推定寺域のほぼ全域を調査することになり、美濃山廃寺の全容の解明が期待された。後者もこれまでの調査で、弥生時代後期を中心とする竪穴建物などが確認されており、当該期の高地性集落の実態が明らかになるものと期待された。

また、本事業に伴う発掘調査は、調査対象地が広範囲に及ぶため、当調査研究センターのほか、八幡市教育委員会が調査を実施することになった。そこで、当調査研究センター調査担当分を美濃山廃寺第7次調査・美濃山廃寺下層遺跡第10次調査、八幡市教育委員会調査担当分を美濃山廃寺第8次調査・美濃山廃寺下層遺跡第11次調査として調査を実施した。

なお、調査にかかる経費は、全額八幡市が負担した。

〔現地調査体制〕

現地調査責任者	調査第2課長	水谷壽克
現地調査担当者	調査第2課主幹調査第3係長事務取扱	石井清司
	調査第2課調査第2係 専門調査員	岡崎研一
	調査第2課調査第3係 調査員	筒井崇史
	同 調査員	山崎美輪
調査場所	八幡市美濃山古寺4-1・26ほか	
現地調査期間	平成23年10月3日～平成24年3月2日	
調査面積	3,800㎡	

(筒井崇史)

2. 調査の経過

1) 調査に至った経緯

美濃山廃寺の所在する美濃山地区周辺において、新名神高速道路等の建設が計画された。

そこで遺跡の範囲を確認し、その内容を正確に把握して資料を作成することを目的に、平成11

年度より八幡市教育委員会が主体となって範囲確認調査が実施された(美濃山廃寺第1～5次調査)。調査の結果、寺域の位置をほぼ確定するとともに寺域の内外に多数の掘立柱建物が検出された。寺域は、区画溝の検出状況から一辺93m程度の方形状の区画と推定されたが、一方で、区画溝の外側でも建物が検出されていることから寺域が拡大する可能性も指摘された。一方、検出された建物はいずれも掘立柱建物であり、古代寺院において一般的にみられる礎石建物や基壇等は確認されておらず、塔や仏堂の検出には至らなかった。遺物としては、瓦類や土師器・須恵器の土器類のほか、覆鉢形土製品や宝珠形土製品(今回の調査でひさご形土製品としたもの)、須恵器水瓶、奈良三彩の瓶などの仏具と思われるものが出土した。これらの遺物から美濃山廃寺は奈良時代前半ごろに創建され、平安時代前期には廃絶したものと考えられた。^(注2)

さて、新名神高速道路等の整備事業が本格化するとともに、これらの道路によって囲まれる美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡の立地する丘陵頂部(この範囲を「美濃山閉鎖地区」と呼称)については、新名神高速道路の整備事業に伴う土置き工事(盛土造成)に伴って事前に発掘調査が必要であると判断された。

以上のような状況を受けて、発掘調査を実施することとなり、関係機関の協議の結果、対象となる範囲のうち3,800㎡を、八幡市が当調査研究センターに発掘調査の依頼をすることとなった。

なお、美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡については、昭和52年に市誌編纂の資料収集を目的とした発掘調査以降、合わせて8回(重複分を除く)に及ぶ調査を実施しており、多大な成果を得ている。^(注3) 今回の調査においても、これまでの調査成果に留意しながら発掘調査を実施した。今回の調査も含めて、これまでの調査区を第1図に示した。

2) 第7次調査の経過

今回の発掘調査は、調査対象地の竹林と入れ土が除去された後、平成23年10月3日に着手した。調査は遺構面直上に残った竹林の入れ土等を重機で除去する作業を調査地の北東部から開始し、順次南へ進めていった。重機による掘削後、人力による精査を開始した。その結果、多数の柱穴や溝を検出した。10月中旬以降は、調査補助員により、地区割に伴う基準杭の設置、1/100平面図の作成などを順次行った。また、作業員によって遺構の検出作業を継続するとともに、検出した遺構の一段下げを行った。特に柱穴については1/100平面図や現地での検討を行い、建物として復元できるものの抽出に努めた。さらに検出した遺構の1/20平面図を作成するとともに、柱穴を半截し、断面図の作成作業などを実施した。

この間、調査地南部で一辺1.3～1.5mの大型柱穴の列が複数確認された。この柱穴列の柱間寸法が7mに達するうえ、対となる柱穴列の柱穴がおよそ3.5mずれて検出された。そのため検出した柱穴群が千鳥に配列されることとなり、建物としては復元できないという状況に至った。このため中間に位置すると思われる柱穴の検出に努めたが、確認することはできなかった。検出した柱穴の規模や柱穴群の周辺から大量の瓦類が出土することから、この大型柱穴群が美濃山廃寺を考える上で重要な遺構の1つであると考え、寺院関連遺構や建築関係の有識者の方々からさまざまなご教示を得ながら調査を進めた。^(注4) その結果、これらの柱穴が確認された地点でも遺構面の



第1図 調査回数別調査区配置図(1/2,500)

残りが良い北西部で、礎石を据え付けるための柱穴を3基検出することができた。この結果、掘立柱と礎石を併用し、それを交互に配列する建物であると判断するに至った。そして、規模の点からこの建物が美濃山廃寺の中心的建物の1つであることが明らかとなった。

美濃山廃寺第7次調査の成果がおおむね明らかになった平成24年1月15日に現地説明会を新名神整備事業、府道八幡インター線整備事業ならびに八幡市教育委員会と合同で実施し、430人あまりの参加があった。現地説明会終了後、美濃山廃寺に関連する遺構の完掘、遺物の取り上げを行うとともに、1月30日からは調査地の北半部を中心に分布する弥生時代後期の竪穴建物(美濃山廃寺下層遺跡)の調査を開始した。美濃山廃寺下層遺跡についても一連の調査の結果、多数の竪穴建物を確認し、弥生時代後期の高地性集落の一端を明らかにすることができた。

美濃山廃寺第7次調査の成果がおおむね明らかになった平成24年2月21日にヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。その後、遺構の完掘や土層観察用セクションの除去作業、平面図・断面図の追加・補足作業を行うとともに、遺物の取り上げを随時行った。3月2日には調査に伴うすべての作業を終了し、3月9日までにすべての機材等を撤去した。

3) 調査の方法

今回の調査に際しては、調査対象地が広範囲であること、3事業が同時に発掘調査を実施することなどから、第6次調査と同じ地区割を使用した。地区割の概要については、第6次調査報告9頁を参照されたい。

検出した遺構には原則として通し番号をつけ、遺構の性格を示す略号を付した。今回の調査では、個々の柱穴と掘立柱建物もしくは掘立柱塀を明確に区別するため、建物については2000番台の、塀については2100番台の遺構番号を付した。また、明らかに弥生時代の遺構については3000番台、近・現代の攪乱については5000番台の遺構番号を付した。ただし001番からの通し番号を付した遺構でも弥生時代のものや近・現代のものが含まれている。また、3000番台の遺構でも調査の結果、古代の遺構と判断したものがある。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更しないようにした。使用した略号は、竪穴建物; S H、掘立柱建物; S B、溝; S D、土坑; S K、柱穴; S P、不明遺構・その他; S Xである。なお、本報告で使用した遺構番号は調査時のものである。ただし、調査時に番号のなかった遺構については、本報告作成時に新たに付した。

遺構の一段下げや半截を終えると、必要に応じて縮尺1/10ないし1/20の平面図や断面図の作成と写真撮影を行った。掘立柱建物や竪穴建物については、検出状況や完掘状況の全景写真を撮影するように努めた。

4) 報告書作成作業について

平成24年度は、平成23年度に実施した美濃山廃寺第7次調査で出土した遺物の整理作業ならびに報告書作成作業を実施した。出土遺物の整理作業では、遺物の洗浄・接合・注記を順次行った。なお、洗浄作業の一部は平成23年度にも実施している。注記等終了後、報告に必要な遺物の選別を行い、これらについては実測・拓本を行った。最終的に本報告に掲載した遺物は482点である。

実測した遺物のうち、復元可能なものについては石膏による復元を実施した。復元できた遺物や小破片でも重要な遺物については、遺物写真の撮影を行い、図版として掲載した。

本報告の刊行に当たっては調査担当者による遺構・遺物の検討とともに、外部有識者を交えて「美濃山廃寺検討会」を2回にわたって実施し、その成果を報告書にまとめた^(註5)。

(筒井崇史)

3. 調査の概要

まず基本層序を述べた後に、古代の遺構を美濃山廃寺として、また弥生時代の遺構を美濃山廃寺下層遺跡としてそれぞれ概要を述べる。

1) 基本層序

調査対象地は、調査前は丘陵全体がほぼ竹林であった。竹林の土入れに伴う入れ土の存在や地番ごとに大きく溝を穿って区画されていることから、本来の地形が大きく改変されていることが予想された。調査範囲については、八幡市教育委員会と協議の上、盛土造成対象地のうち、美濃山廃寺の推定寺域全体を取り込むように設定した。

調査を進めると、遺構の時期は大きく奈良時代と弥生時代後期の2時期であることが確認できた。しかし、これらの遺構は上記の竹林の造成等によって大きく削平されていたためか、検出面はすべて同一面であり、遺物包含層はほとんど存在しなかった。なお、攪乱土や入れ土には古代や弥生時代の遺物を多く含んでいた。

さて、第7次調査地は第1～5次調査地と重なるため、同調査の成果をもとに基本層序を確認したい。第2図は第1～5次調査の報告書より引用・再構成したもので、柱状図の作成箇所は第5図に示した。^(註6)

調査地の基本的な層序は、1:竹林表土、2:竹林入れ土、3:竹林以前の茶畑に伴う土層、4:それ以前の耕作土、5:遺構、6:地山となる。3層や4層は調査地の一部では認められない地点もある。調査地全体で明確な遺物包含層は認められず、遺構に伴わない遺物の多くが2～4層に混入した状態で出土した。遺構の大半は地山直上で検出したが、調査地北東部では弥生時代の竪穴建物の埋土の上から古代の遺構が掘削されていた。

調査地は、柱状図6付近が最も高く(標高48.2m前後)、周辺に向かって下がって行く。調査地北辺では柱状図1付近が最も高く(標高47.3m前後)、東に向かって徐々に下がっており、比高はおよそ2mである。一方、柱状図6付近から南へ向かっておよそ2m下がるが、柱状図8・9付近は竹林に伴う土取りや粘土の採掘等に伴う地形の改変、攪乱が著しく、調査地北半ほど遺構の残りは良くない(標高46.2～46.6m)。

2) 美濃山廃寺第7次調査

今回の調査で見つかった遺構は、柱穴600基以上、土坑10基以上、溝7条以上、瓦溜り2か所である。溝には区画溝4条が含まれる。検出した柱穴は、掘立柱建物や掘立柱塀として復元できるかどうか検討した結果、掘立柱建物19棟、掘立柱塀7条に復元できた。また、「第7次調査の

経過」の項で述べたように礎石・掘立柱併用建物1棟を検出した。

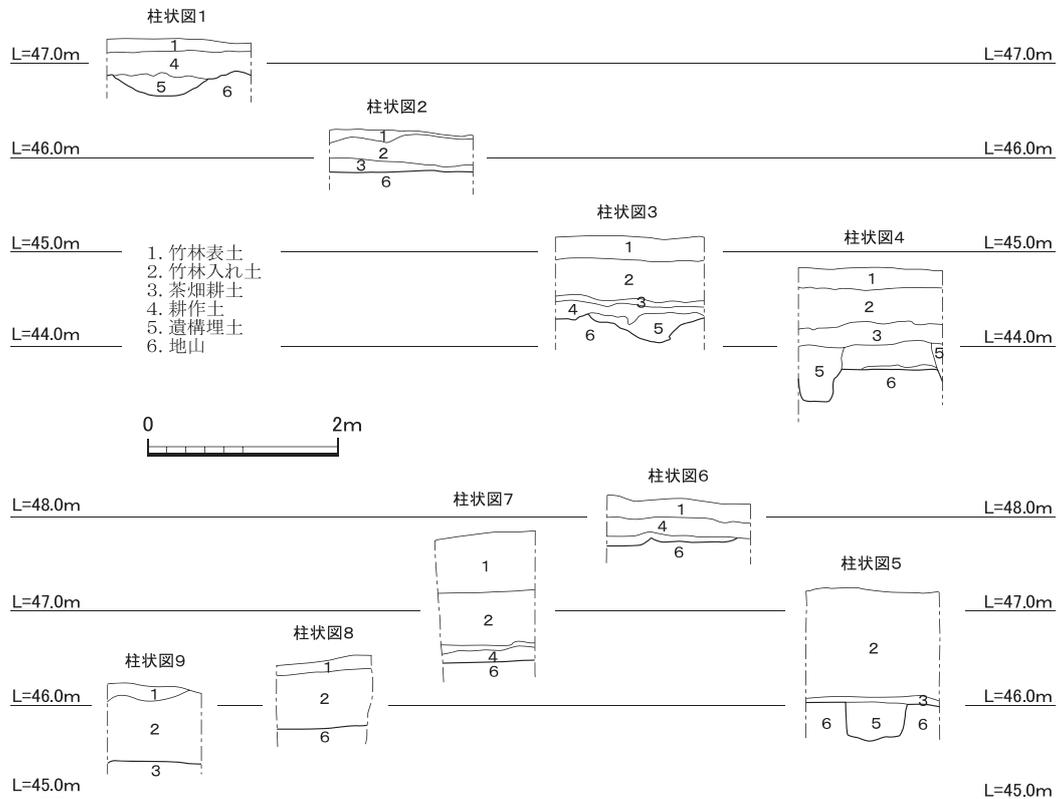
遺構の分布状況としては、調査地の北半部で掘立柱建物や区画溝など多くの遺構を検出した。一方、南半部では礎石・掘立柱併用建物1棟とその区画のほか、掘立柱建物1棟、掘立柱塀1条、瓦溜り2か所、若干の柱穴を検出したに留まる。むしろ耕作溝や土取りなどの攪乱を多数検出し、そこから瓦類を主体とする多数の遺物が出土した。

また、遺物の出土傾向としては、北半部では北東部で土器がややまとまって出土するほか、各建物の柱穴から多数の瓦類が出土した。しかし、美濃山廃寺全体から見ると全般的に少なめである。一方、南半部では礎石・掘立柱併用建物の周囲をはじめ、瓦溜りなどから瓦類を中心とする多数の遺物が出土している。出土した瓦の大半が南半部からの出土である。調査地全般に地形の改変等が及んでいるとはいえ、南半部で多数の瓦類が出土することは、瓦類を使用した建物が南半部に存在したことを示唆するものと考えられる。

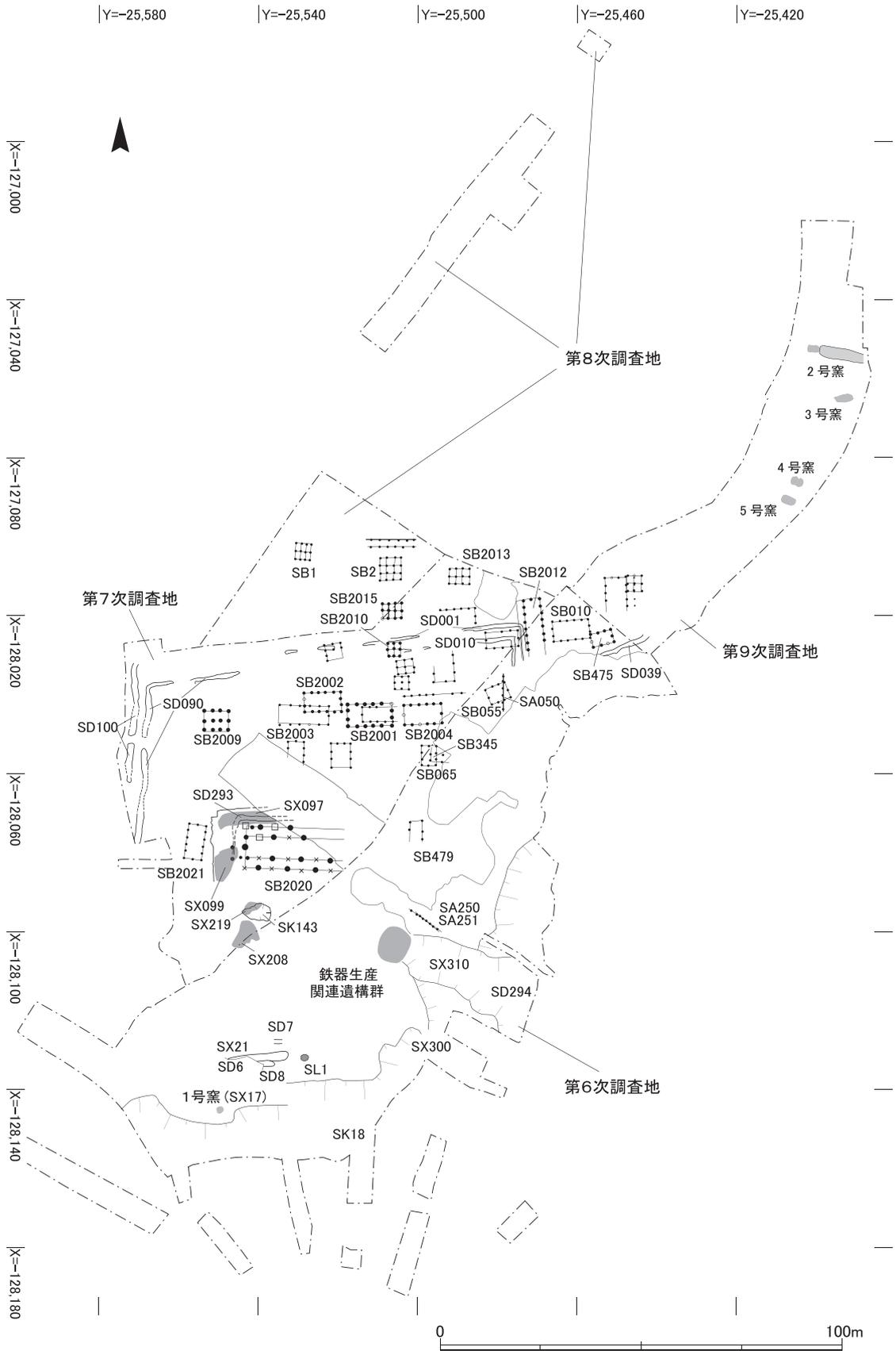
第7次調査をはじめとする今回の一連の調査では、金堂跡や塔跡を示すような遺構あるいは基壇跡は検出されておらず、美濃山廃寺全体の伽藍配置等は明らかにできなかった。しかし、区画溝や多数の掘立柱建物、上記の礎石・掘立柱併用建物の確認など、美濃山廃寺の全容を解明するための成果を得ることができた(第3図)。

3)美濃山廃寺下層遺跡第10次調査

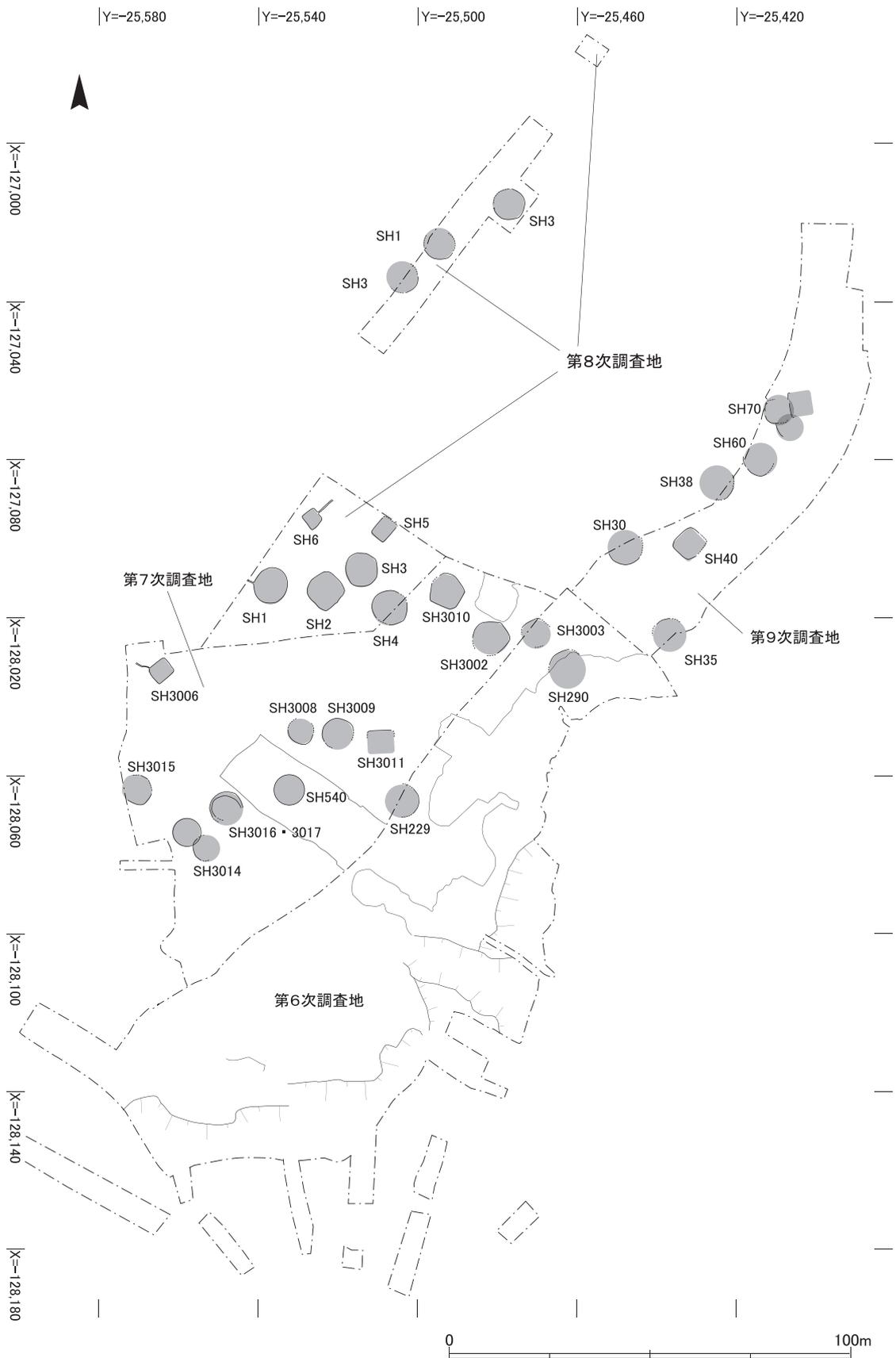
調査地の北半部を中心に竪穴建物12棟、溝1条、土坑3基などを検出した。調査地の南半部では礎石・掘立柱併用建物付近で竪穴建物数棟を検出したが、それよりも南側では攪乱等が著しく、



第2図 調査地基本層序(1/80)



第3図 美濃山廃寺遺構配置模式図(1/1,500)



第4図 美濃山廃寺下層遺跡遺構配置模式図(1/1,500)

土坑1基を検出したのみである。

検出した遺構の時期はいずれも弥生時代後期であるが、全般に出土遺物が少なく、詳細な時期は断定しにくい。竪穴建物には、平面形が円形を呈するもの、多角形を呈するもの、方形を呈するものが見られる。遺構は北半部を中心に検出したが、南半部でも少量ながらも弥生土器が出土しており、本来、調査地全体に集落遺跡が広がっていたものと推測される。

なお、弥生時代後期の竪穴建物は、八幡市教育委員会が実施した第11次調査や当調査研究センターが実施した第9・12次調査においても多数検出しており、弥生時代の集落が丘陵上全体の広範囲に及んでいたことが確認された(第4図)。

(筒井崇史)

4. 美濃山廃寺第7次調査

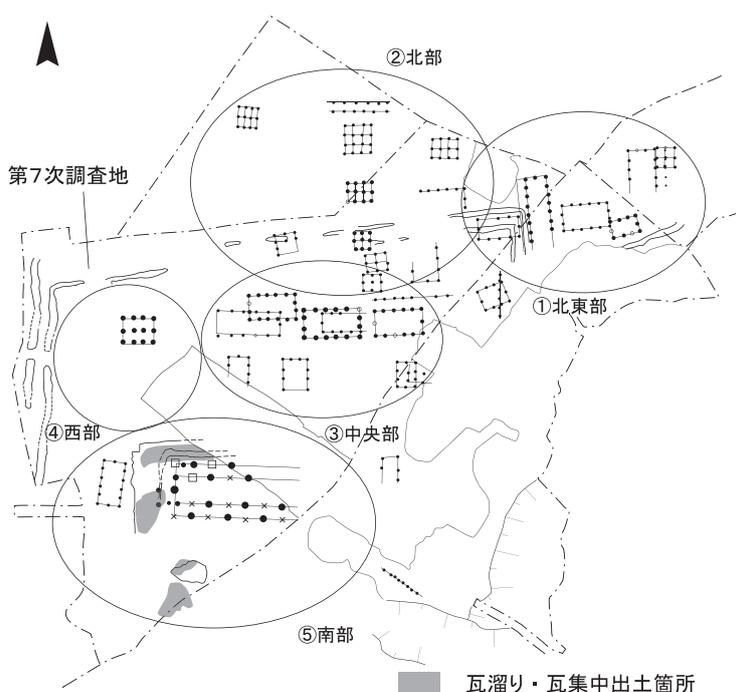
1) 検出遺構

第7次調査では、先述のように、区画溝4条、礎石・掘立柱併用建物1棟、掘立柱建物19棟、掘立柱塀7条、土坑10基、柱穴600基以上、溝3条などを検出した。これらの遺構は検出位置から①北東部、②北部、③中央部、④西部、⑤南部の大きく5つに分けることができる(第5図)。ただ、この区分けは、厳密な区画施設を確認したものでも、時期別の遺構変遷をふまえたものでもなく、便宜的なものである。また、検出遺構の報告にあたっては、後述する「美濃山廃寺の遺構の変遷について」(323～329頁)で示した時期区分にしたがって各遺構の時期を示す。

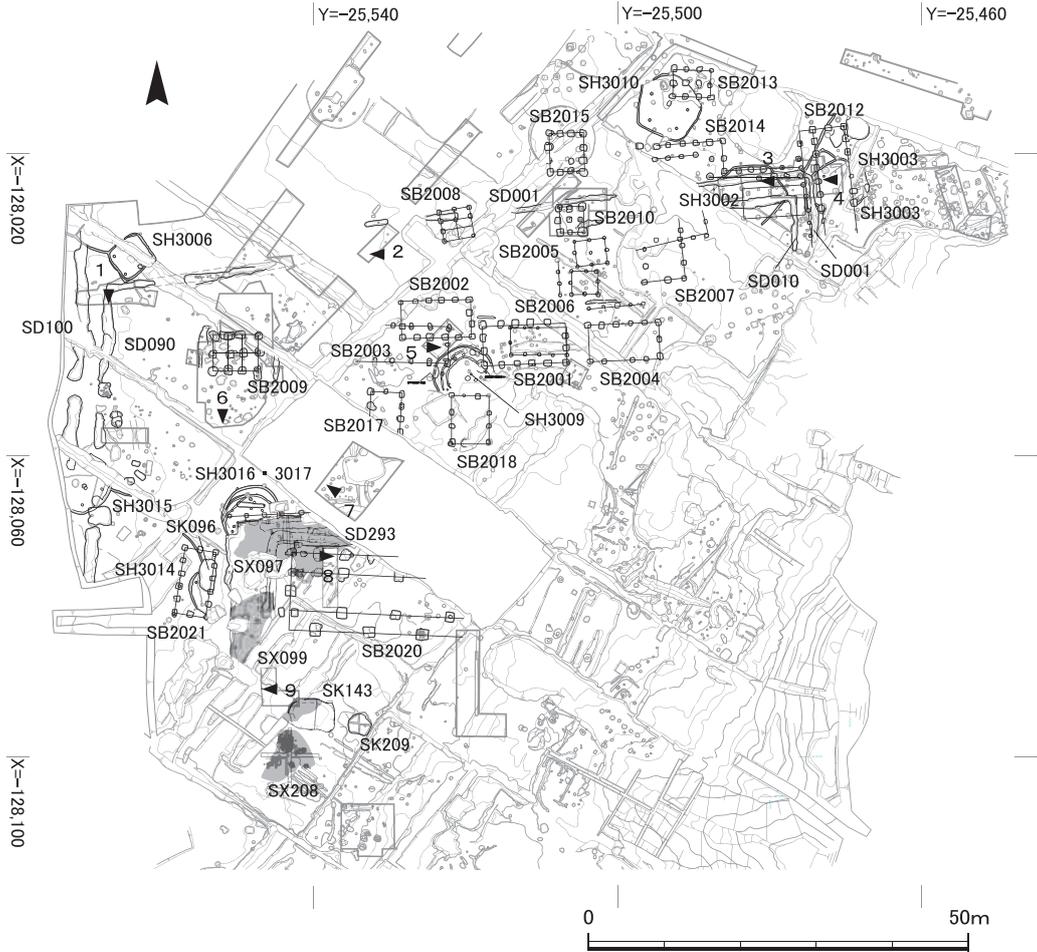
以下では、美濃山廃寺全体に関わると考えられる区画溝を最初に取り上げ、次に各区分けごとに個々の遺構について述べることにする。なお、遺構の報告に伴う挿図のうち、柱穴内の円形の網点は、原則として検出時の柱痕の範囲を示すものとする。網点のないものは柱痕を確認できなかったものである。また、各遺構から出土した遺物には、美濃山廃寺下層遺跡に伴う弥生土器も多数混入していたが、個別に記述しなかった。

(1) 区画溝

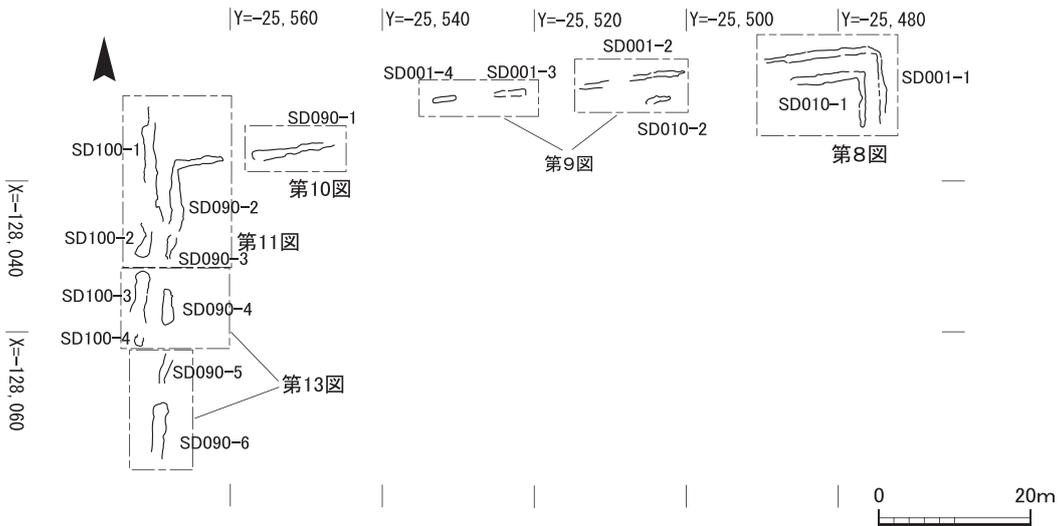
区画溝 S D 001・010(第8・9図) V-i19・i20区からⅧ-h9区にかけて検出した。第I期の寺域の北東部から北辺を区画する。S D 001・010ともに、後世の攪乱や竹林の造成によつてす



第5図 第7次調査地区分け概念図



第6図 美濃山廃寺第7次調査検出遺構配置図(1/1,000)



第7図 区画溝S D001・010・090・100全体図(1/1,000)

でに失われているところもある。両溝は平行しており、S D001が区画の外側、S D010が区画の内側に当たる。S D001とS D010の間隔は溝の心々間で2.8~3.2mである。検出状況や出土遺物などからS D001とS D010の2条が平行して同時に存在していたと推定される。また、両溝の間

には築地や掘立柱塀の痕跡があるかどうかを注意して精査を進めたが、確認することはできなかった。

S D001は、第4・5次調査の溝S D105・456、第6次調査の溝S D167に当たる。溝内の埋土堆積状況から水流の痕跡は認められなかった。S D001は、攪乱等により部分的に途切れており、その状況に合わせて、東から-1、-2、-3、-4と細分して記述する(第7図)。

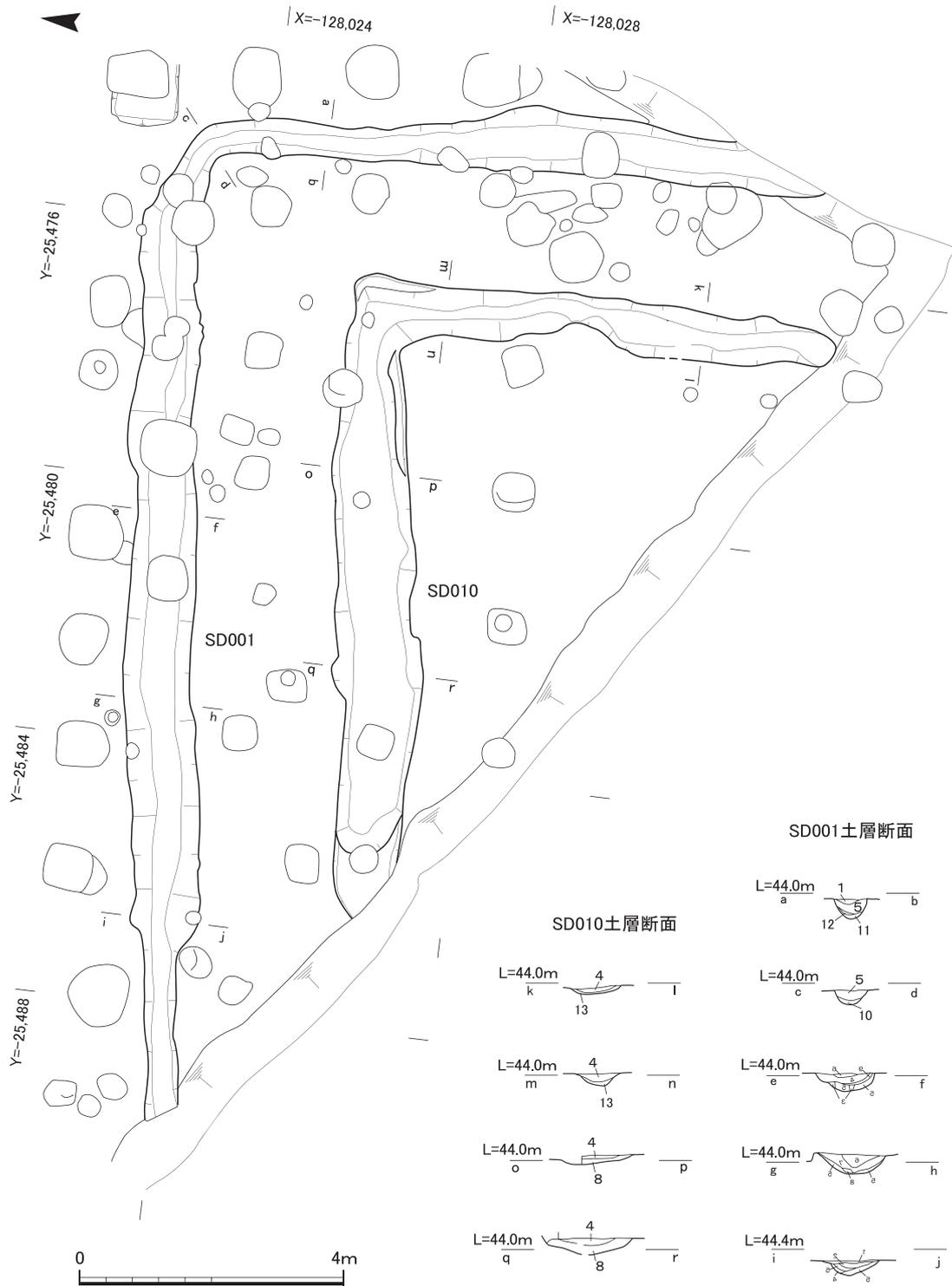
S D001-1は、寺域を区画する溝の北東角付近に当たり、遺構の遺存状況が良好である。遺構の一部は第4・5次調査で確認されている(02-6区・03-1区)。ここでは、第6次調査の成果と合わせて報告する。検出長は24.8mである。東辺では幅0.5~0.9m、深さ0.25~0.4mである。溝底の標高は43.5~43.6mで、北から南へ向かって低くなる。また、北辺では幅0.4~1.0m、深さ0.1~0.15mである。溝底の標高は43.6~44.2mで、西から東へ向かって低くなる。埋土はおもに褐色粘質土である。東辺での溝幅に対して、北東角よりも西側の北辺では幅がやや広くなる。しかし、北東角から西へ約12.5mのところから、再び溝の幅が0.4mと狭くなる。遺物として、第7次調査では、平瓦、土師器、須恵器などの破片が出土したものの、出土量は少なかった。一方、第6次調査ではS D167(S D001-1)の東辺で須恵器杯B・鉢Aなどが出土した(第75図100~105)。

S D001-2は、S D001-1の西側約11mで検出した。両者の間は竹林の土取りによって大きく削平されていたが、検出状況から本来はつながっていたものと推定される。遺構の一部は第1・4次調査で確認されている(99-1区・02-1区)。検出長14.2m、幅0.3~0.8m、深さ0.1m前後である。溝底の標高は44.6~44.9mで、東へ向かって低くなる。埋土は褐色粘質土の単層である。S D001-2の東端は、西側にくらべ幅が狭くなっており、S D001の西端に対応するようである。つまり、この両者の間の溝幅が他の部分よりも狭く掘られていることになり、溝を渡るためや区画溝の内側に入出入りするための施設があった可能性を考えている。溝幅が狭い箇所の長さは13.9mである。S D001は掘立柱建物S B2010A・Bと重複するが、八幡市教育委員会の調査成果(第4次調査)を踏まえると、S B2010AはS D001-2と同時期、S B2010BがS D001-2埋没後の遺構と判断されており、今回の調査でもこの関係を追認した。遺物として土師器の小破片などが少量出土したにすぎなかった。

S D001-3は、S D001-2の西側約7mで検出した。両者の間は里道によって大きく削平されていたが、本来はつながっていたものと推測される。検出長4.2m、幅0.8m前後、深さ0.1m前後で、溝底の標高は45.3~45.4mである。掘立柱建物S B2008と重複するが、両遺構の切り合い関係よりS B2008よりもS D001-3の方が新しい。埋土は褐色粘質土の単層である。遺物として土師器ないし弥生土器の破片が少量出土したにすぎない。

S D001-4は、S D001-3の西側約5mで検出した。両者の間に大きな攪乱は認められなかったが、両者をつなぐような痕跡を確認することはできなかった。検出長3.1m、深さ0.1m、溝底の標高は45.6m前後である。埋土は褐色粘質土の単層である。遺物として土師器ないし弥生土器の破片が少量出土したにすぎない。

S D001は、出土遺物や後述する掘立柱建物や掘立柱塀との重複関係から、第I期に掘削され、



1. 暗褐色 (10YR 3/4) 粘質土 (粗砂・炭まじり)
2. 褐色 (10YR 4/6) 粘質土
3. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土
4. 褐色 (10YR 4/4) 粘質土
5. 褐色 (10YR 5/6) 粘質土
6. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘質土 (粗砂・小レキを含む)
7. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土

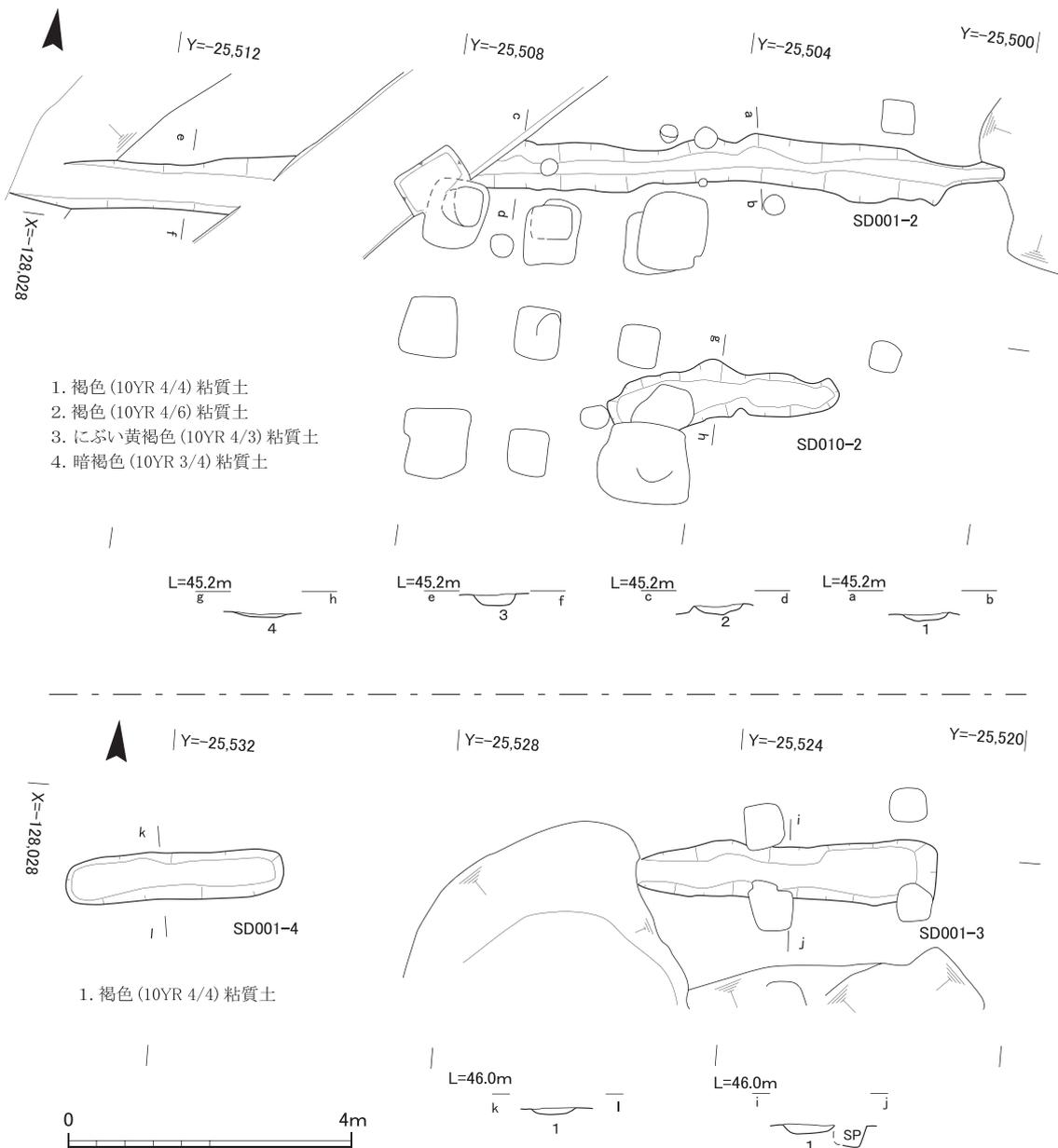
8. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘質土
9. 明褐色 (7.5YR 5/6) 粘質土 (粗砂まじり)
10. 褐色 (10Y 4/6) 粘質土
11. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土 (少し粗砂・小レキ混じる)
12. 黒褐色 (10YR 3/2) 粘質土
13. 黄褐色 (10YR 5/6) 粘質土

第8図 区画溝SD001-1・010-1実測図(1/100)

第II-1期には埋没したものと考える。

S D010は、第5次調査で遺構の一部が確認されていた。また、第6次調査でも一部を検出しており、溝S D106に当たる。S D001同様、水流の痕跡は認められなかった。S D010はS D001と同様、攪乱等により途切れているところがあり、2か所で確認したのみでありS D001にくらべると遺存状況が良いとはいえない。以下、-1、-2と細分して記述する(第7図)。

S D010-1は、S D001-1の南西側、すなわち寺域を区画するための溝の内側をめぐるものである。検出長は17.0mである。東辺は幅0.6~0.75m、深さ0.2m前後である。溝底の標高は43.7~43.9mで、南へ向かって低くなる。また、北辺は幅0.9~1.2m、深さ0.15~0.25mである。溝底の標高は43.9~44.0mで、西から東へ向かって低くなる。埋土は上層が褐色粘質土、下層が黄褐色粘質



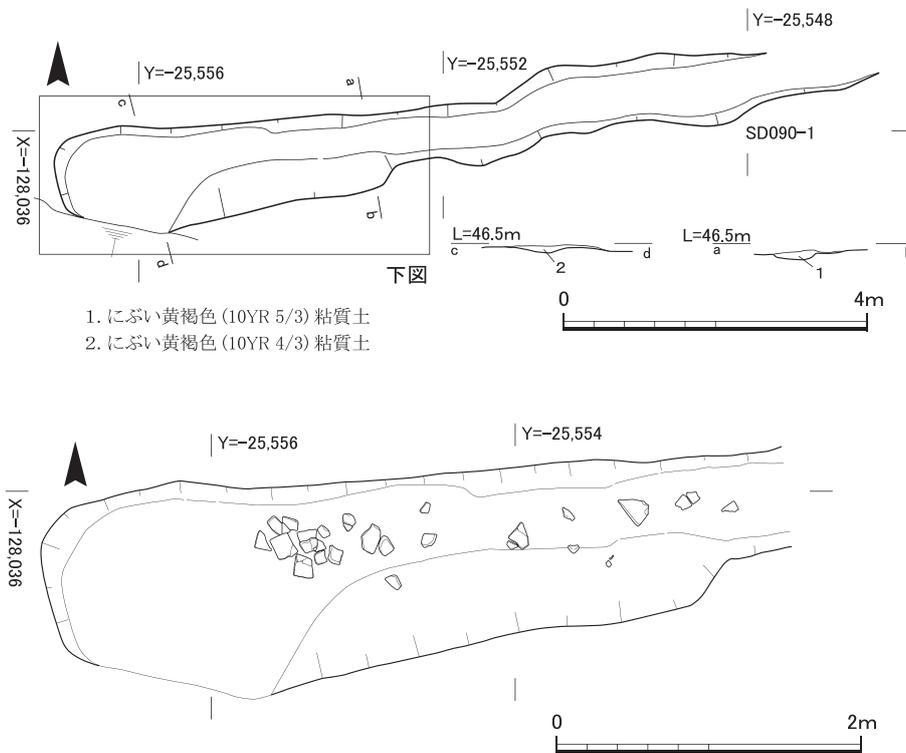
第9図 区画溝S D001-2~4・010-2実測図(1/100)

土またはにぶい黄褐色土である。東辺での溝幅に対して、北東角よりも西側の北辺では幅がやや広がっている。また、S D001-1と同様に、北東角から西へ約9.6mのところまで溝の幅が狭くなるようである。遺物として、第6・7次調査合わせて、平瓦、土師器、須恵器などの破片のほか、製塩土器の破片も出土した(第75図106～112)。

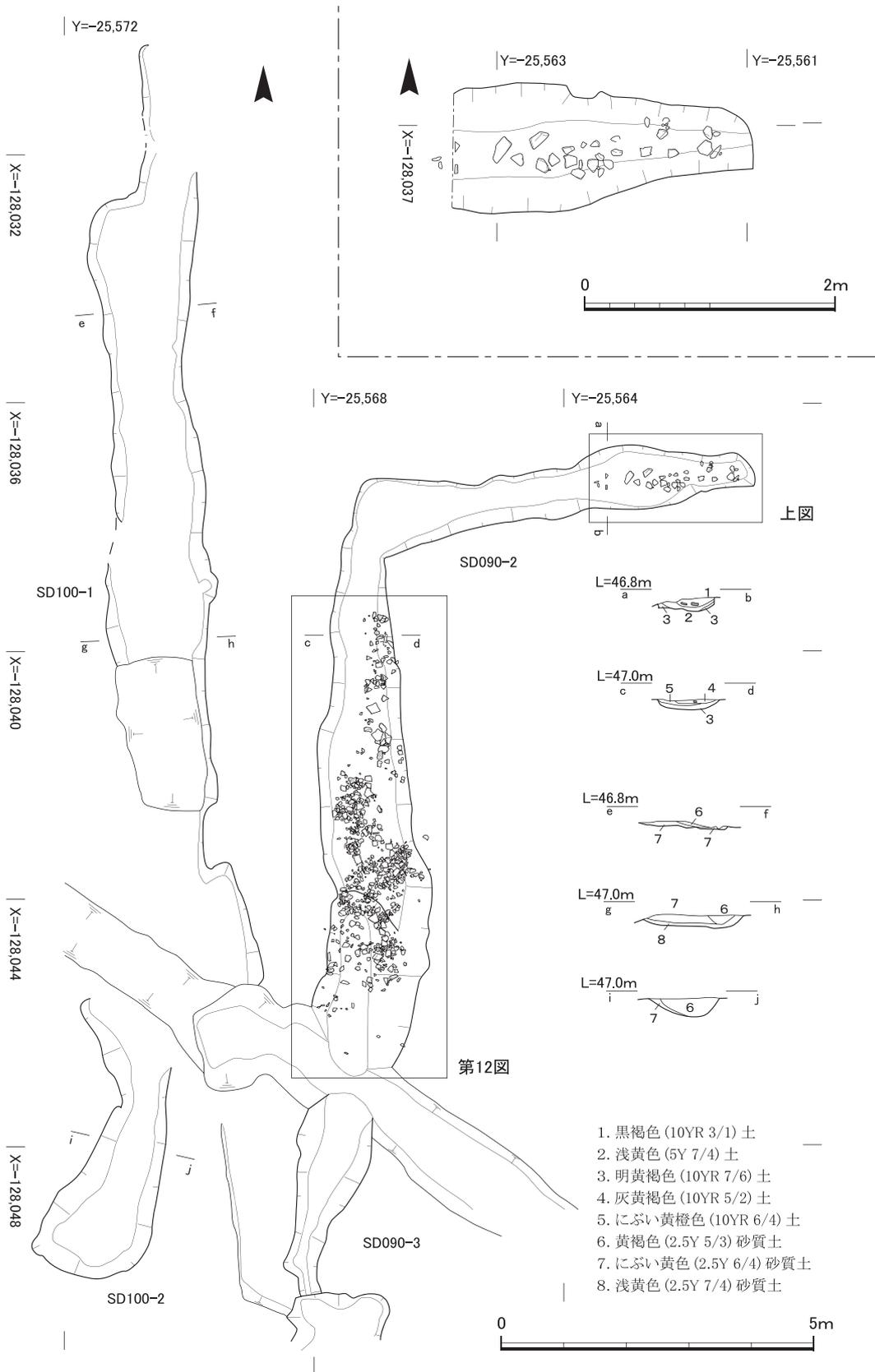
S D010-2は、S D010-1の西側約16mで検出した。両者の間は竹林の土取り等によって大きく削平されていた。遺構の一部は第5次調査で確認されていた(03-9区)。今回の調査により、S D010-1と方位が一致することやS D001-2と平行することから、区画溝の一部であると判断した。検出長3.3m、幅0.6～0.8m、深さ0.05～0.1mで、溝底の標高は44.7m前後である。埋土は暗褐色粘質土の単層である。出土遺物はなかった。なお、ここよりも西側ではS D010の延長に当たる遺構は検出できなかった。

S D010は、出土遺物や後述する掘立柱建物・掘立柱塀との重複関係から、第I期に掘削され、第II-1期には埋没したものと考えられる。

区画溝S D090・100(第10～13図) VIII-i12区からVIII-t18区にかけて検出した。第I期の寺域の北辺から西辺を区画する溝である。区画溝S D001・010と同様に、後世の攪乱や竹林の造成によって、溝の遺存状況は必ずしもよくない。S D090はS D010と同一の区画溝の可能性もあるが、両者の間に区画溝の痕跡は認められなかった。このため同一の区画溝と断定するのは難しく、別の遺構として扱うこととした。S D090は第3次調査の溝S D301に当たる。S D090は、S D001・010と同様に、攪乱等によって、途切れており、その状況から北東端から反時計回りに-1、-2、-3、-4、-5、-6と細分して記述する(第7図)。



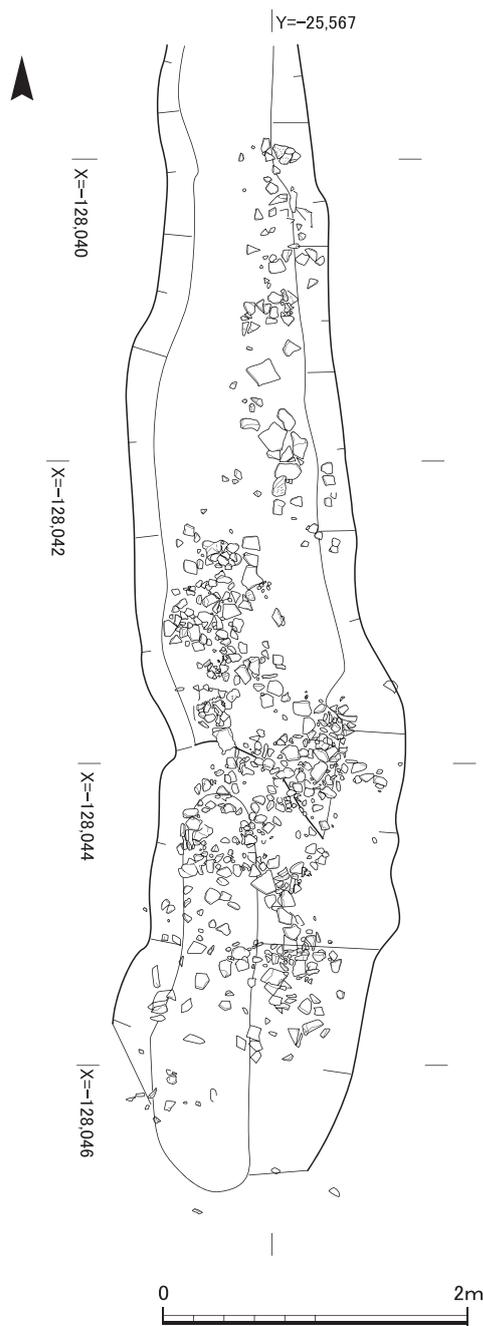
第10図 区画溝S D090-1実測図(1/100)および遺物出土状況図(1/50)



第11図 区画溝 S D090-2・3、S D100-1・2実測図(1/100)および S D090-2遺物出土状況図(1/50)

S D090-1は、S D010-2の西端から西へ約41mのところ検出した。遺構の一部は第3次調査で確認されている(01-5・6区)。検出長11.0m、幅0.8~1.3m、深さ0.1mである。溝底の標高は46.1~46.4mで、西から東へ向かって低くなる。埋土はにぶい黄褐色粘質土の単層である。遺物は瓦類を主体に出土した。遺構の東半部は、第3次調査の際に瓦類や覆鉢形土製品1点出土している。

S D090-2は、S D090-1の西側約4mで検出した。両者の間は境界溝によって大きく削平されているが、本来はつながっていたものと考えられる。S D090-2は東端から6.2mのところ南へ屈



第12図 区画溝 S D090-2西辺
遺物出土状況図(1/50)

曲しており、寺域を区画する溝の北西角と考えられる。この北西角は第3次調査で確認されている(01-7区)。検出長15.5m、幅0.7~1.6m、深さ0.1~0.2mである。溝底の標高は46.4~46.6mで、北西角付近が最も高く、東と南に向かってそれぞれ低くなる。埋土はおおむね3層に分かれ、下層は明黄褐色土、中層は浅黄色ないしにぶい黄褐色土、上層は黒褐色ないし灰黄褐色土である。おもに上層から遺物が出土した。遺物の出土状況は北辺から北西角にかけて、瓦類を中心とする遺物が出土した。これに対して北西角よりも南側では、長さ6.6mにわたって溝内から大量の瓦類が出土した(第12図)。瓦類の出土総量は388.4kgで、その大半は後述する平瓦H-A1類である(第58図32~第61図40)。区画溝で大量に遺物が出土したのはこの地点のみであることから、周辺で使用された建物あるいは施設に使われた平瓦を廃棄したものと推定される。

S D090-3はS D090-2のすぐ南側で検出した。両者の間は境界溝によって削平されていたが、本来はつながっていたものと考えられる。また、やや蛇行気味で溝幅が一定しない。南端を土坑S K415によって切られている。検出長3.2m、幅0.5~1.0m、深さ0.1~0.15mである。溝底の標高は46.6m前後である。遺物はほとんど出土しなかった。

S D090-4はS D090-3の南側約4mで検出した。検出長4.6m、幅1.0~1.5m、深さ0.15mである。溝底の標高は46.6~46.7mで、遺物として土師器片が少量出土したにすぎない。

S D090-5はS D090-4の南側約4mで検出した。両

者の間は境界溝によって削平されていた。また、南端は土坑S K 433に切られている。検出長3.9m、幅0.65～1.1m、深さ0.15m前後である。溝底の標高は46.6m前後である。遺物として瓦類、土師器などの小破片が出土した。

S D 090-6はS D 001-5の南側約2.5mで検出した。検出長7.5m、幅1.4m前後、深さ0.3m前後である。溝底の標高は46.7～46.8mで、北から南へ向かって緩やかに低くなる。遺物としては土師器などの破片が出土した。なお、S D 090-6の南端を調査地内では確認していないが、ここから南約4mに設けた東西方向の確認トレンチではS D 090の延長部を確認することはできなかった。現地形も南に向かって大きく下がることから、S D 090・100はともにこれ以上南へは延びないと判断した。

S D 090は、出土遺物や土坑S K 415・433との重複関係から、第I期に掘削され、第III期までに埋没したものと考えられる。

S D 100はS D 090の西側にほぼ平行するもので、SD090と同様、攪乱等によって途切れている。S D 100はS D 001に対応する外側の区画溝と考えられるが、S D 090の北辺に平行して西に折れるのではなく、そのまま北へ延びる。このことから、S D 100とS D 001は直接につながらない可能性もある。S D 090とS D 100の幅は溝の心々間で3.2～3.9mを測る。S D 100は第3次調査の溝S D 365に当たる。S D 100は、その状況から北端から南に向かって-1、-2、-3、-4と細分して記述する(第7図)。

S D 100-1はS D 090-2の西側で検出した。攪乱等が著しく、断続的に検出しているにすぎない。この溝の一部は第3次調査の際に確認されている(01-7区)。検出長15.1m、幅1.2～1.6m、深さ0.1～0.2mである。溝底の標高は46.4～46.6mで、北へ向かって緩やかに低くなる。埋土は2ないし3層に分かれ、上層は黄褐色砂質土、下層はにぶい黄褐色砂質土で、最下層は認められないところもあるが、浅黄色砂質土である。遺物として丸瓦・平瓦、土師器・須恵器などが出土したものの、量的に少なく、小破片が多い。

S D 100-2はS D 100-1のすぐ南側で検出した。両者の間は境界溝によって削平されていたが、本来はつながっていたものと考えられる。検出長4.5m、幅0.8～1.6m、深さ0.3m前後である。溝底の標高は46.6m前後である。遺物として平瓦や土師器の破片が少量出土したにすぎない。

S D 100-3はS D 100-2の南側約2mで検出した。検出長6.6m、幅1.7m前後、深さ0.1～0.15m、溝底の標高は46.7m前後である。遺物として軒丸瓦Ⅱ a型式1点(第55図1)のほか、平瓦H-A類、土師器、須恵器などが出土した(第75図113)。

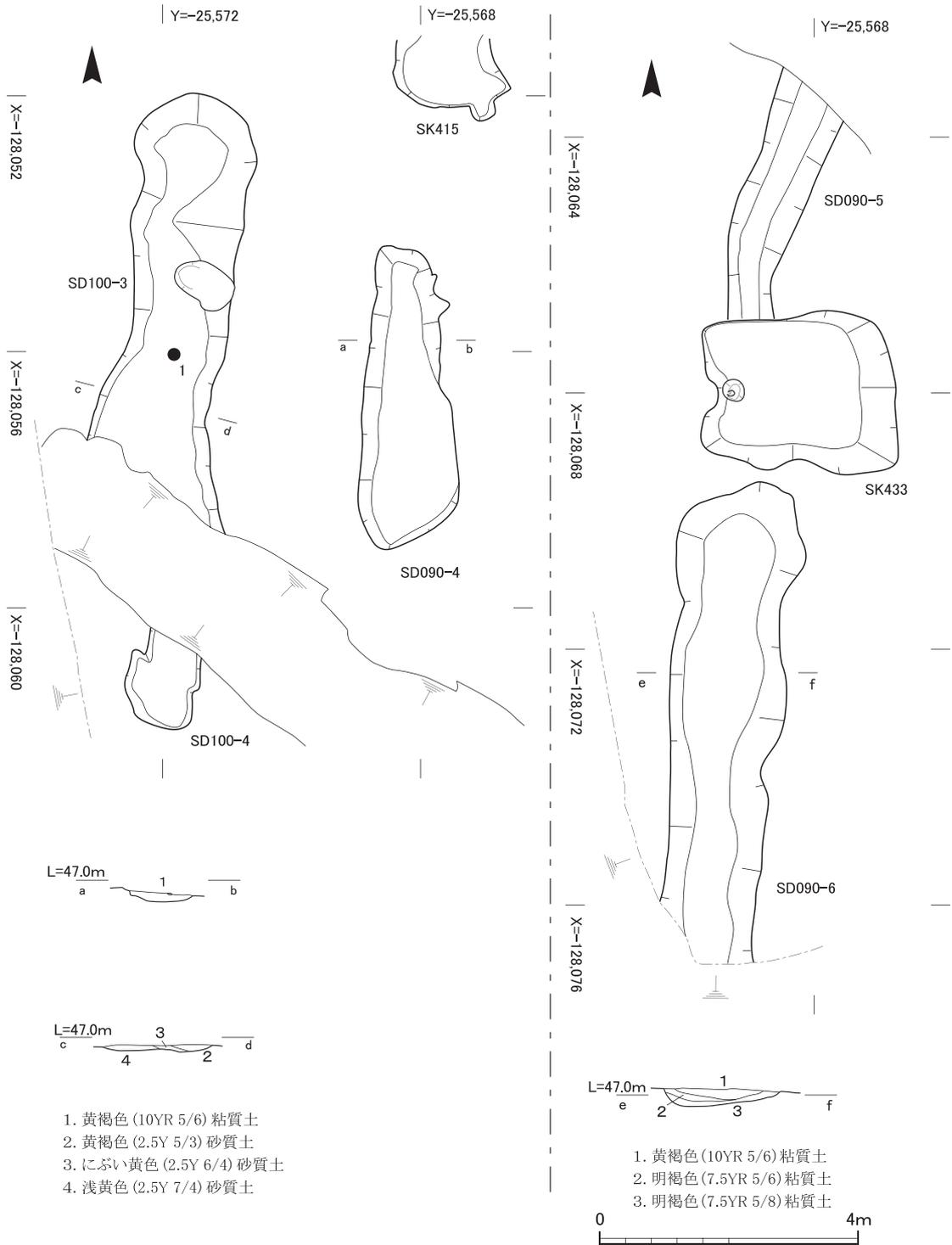
S D 100-4は、S D 100-3の南側約2mで検出した。両者の間は境界溝によって削平されていたが、本来はつながっていたものと考えられる。検出長1.5m、幅1.1m、深さ0.05m、溝底の標高は46.6mである。出土遺物はなかった。S D 090-3とS D 090-4の間は約4m、S D 100-2とS D 100-3の間は約1.8m、それぞれ溝の掘削されていない範囲がある。S D 090-3の南端には土坑S K 415があるものの、S D 090よりも新しいと考えられることから、この溝の途切れる部分は、寺域内への出入り口である可能性もある。

S D100は、出土遺物などから、第I期に掘削され、第III期までに埋没したものとする。

(筒井崇史)

(2)北東部

V地区22列よりも東側の範囲で、おもに区画溝S D001の北東角周辺とその北東側に当たる。ここでは、掘立柱建物2棟、掘立柱塀2条、土坑2基、柱穴50基以上などを検出した(第14図)。

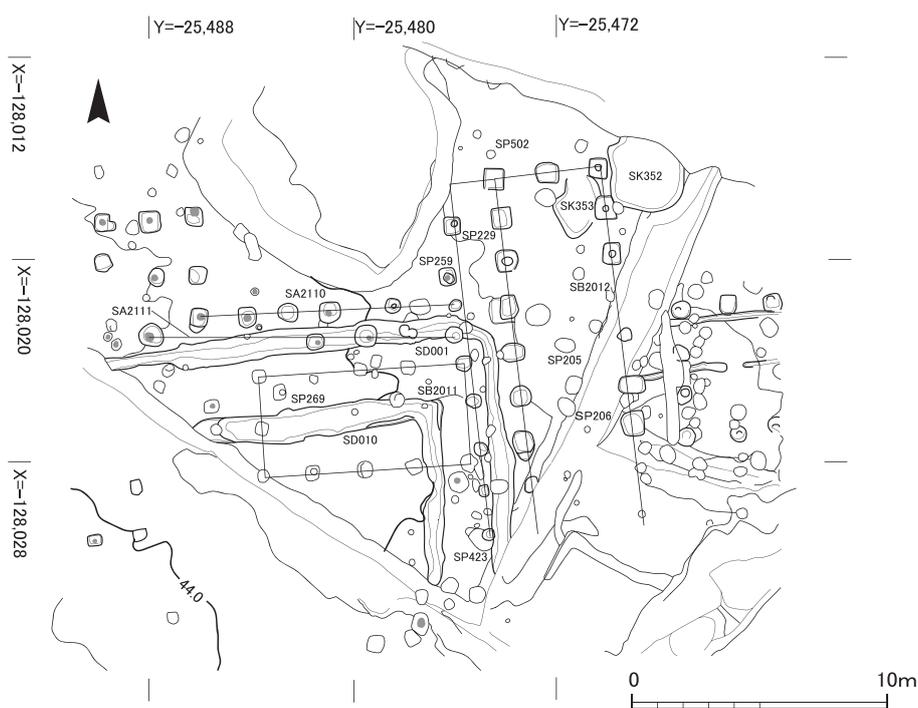


第13図 区画溝S D090-5・6、S D100-3・4実測図(1/100)

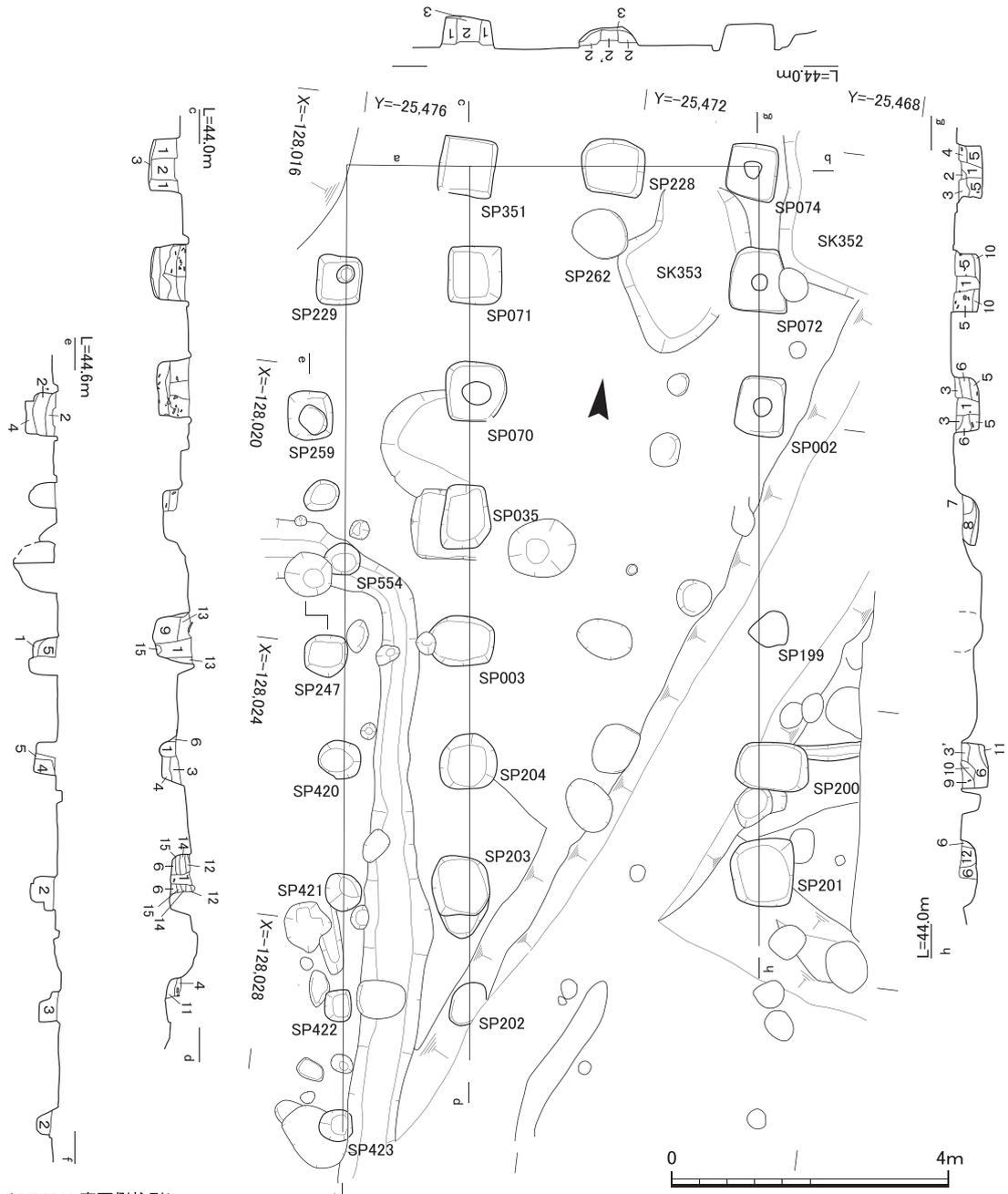
北東部で検出した遺構群は、第6次調査地の北部で検出された掘立柱建物や溝と一連のものと考えられる。

掘立柱建物 S B 2012 (第15図) 調査地北東部から第6次調査地にかけて検出した(V - e18・19、f18・19、g18・19、h18・19区)。第4・5次調査の掘立柱建物 S B 460、第6次調査の掘立柱建物 S B 035に当たる。調査の結果、西側に廂が付く建物と推定するに至った。身舎は、桁行6間以上(10.7m以上)、梁行2間(3.8m)の南北棟の建物である。柱間寸法は桁行が1.6~1.8m、梁行が約2.1mである。南側梁行の妻柱を確認しておらず、桁行7間目以南は削平されたものとする。柱穴掘形は一辺約0.6mの隅丸方形を呈する。掘形埋土は、少量の遺物を含む黄褐色粘質土、焼土や炭を含むにぶい赤褐色粘質土、焼土片を含む褐色粘質土、炭や土器片を多く含む暗褐色粘質土などである。柱穴 S P 003・074・203・204の柱痕埋土は、炭や土器片を含む暗褐色粘質土である。柱穴 S P 002・072の柱痕埋土は、炭や土器片を含むにぶい黄褐色粘質土である。建物の方位は北に対して7°西に振る。建物に伴う遺物として各柱穴から丸瓦や平瓦の破片、土師器杯A・杯C・皿A・甕・高杯、須恵器杯A・杯B蓋、灯火器、製塩土器、鉄釘、鉄滓などが多数出土した(第62図41~44、第76図121~第77図180、第91図430・431・435)。

柱穴 S P 229から柱穴 S P 423までのほぼ南北一直線に並ぶ柱穴列は、S B 2012の西側柱列とほぼ平行することから S B 2012に伴う廂と判断した。ただ、北側の柱穴 S P 247・259・554は、S B 2012の西側柱列と対応せず、また廂の北端の柱穴も未確認であるなど、検討の余地がある。廂の柱間寸法は約1.8mである。柱穴 S P 420・421は径0.6mの円形、S P 422は長辺0.3m、短辺0.2mの長方形を呈する。掘形埋土は、にぶい黄褐色粘質土ないし暗褐色土が混じる橙色粘質土である。柱痕は柱穴 S P 259のみ確認した。廂に伴う遺物として各柱穴から土師器や須恵器の小片な



第14図 北東部全体図(1/300)



<SB2012 東西側柱列>

1. 暗褐色 (10YR 3/4) 粘質土 (炭・土器片を含む)
2. 褐色 (7.5YR 4/6) 粘質土
3. にぶい黄褐色 (10YR 4/4) 粘質土 (炭・土器片を含む)
4. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘質土 (炭・土器を含む)
5. 黒褐色 (10YR 3/2) 粘質土
(炭・土器片を多く含む、小礫を少し含む)
6. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土 (炭・土器片を多く含む、小礫混じり)
7. 明黄褐色 (7.5YR 5/6) 粘質土 } 黒灰色土をすじ状に含む
8. 明黄褐色 (7.5YR 5/8) 粘質土 } 地山の再堆積土と推定
9. 褐色 (10YR 4/6) 粘質土 (遺物を含む) 小礫を少し含む
10. 明黄褐色 (7.5YR 5/8) 粗砂 (小礫混じり粘質土)
11. 4に10が混じる
12. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土 (遺物を少し含む)
13. 褐色 (10YR 4/4) 粘質土 (土器を多く含む)
14. にぶい赤褐色 (5YR 4/4) 粘質土 (焼土片、炭を含む)

<SB2012 北側柱列>

1. 黒褐色 (10YR 3/2) 粘質土
(土器片と焼土片を多く含む、小礫を少し含む)
2. 暗褐色 (10YR 3/4) 粘質土 (炭、土器を含む、小礫を少し含む)
2'. 土器片は含まない
3. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘質土 (炭を含む)

<SB2012 廂>

1. 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘質土
2. 橙色 (7.5YR 6/8) 粘質土に暗褐色 (10YR 3/4) 土が混じる
2'. 土器片が混じる
3. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘質土
4. 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘質土に黄褐色 (10YR 5/8) 土が混じる
5. 褐色 (10YR 4/4) 粘質土

第15図 掘立柱建物 S B 2012実測図(1/100)

どが出土した。

S B2012は、出土遺物などから第Ⅱ－1期に位置づけられる。

掘立柱建物 S B2011 (第16図) 区画溝 S D010に重複して検出した(V-g19~21、h20・21区)。桁行4間(8.1m)、梁行2間(4m)の東西棟の建物である。柱間寸法は桁行が2.0~2.2m、梁行が2.0mである。柱穴掘形は一辺約0.4mの歪な正方形で、掘形埋土は灰黄褐色粘質土や褐色粘質土などである。柱穴 S P095・196・197では径約0.2mの柱痕を確認した。柱痕埋土は暗褐色粘質土である。また、検出状況から S B2011は S D010の廃絶後に建てられたものである。建物の方位は北に対して4°西に振る。遺物は各柱穴から須恵器片や土師器片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、建物の構造などから第Ⅲ－1期に位置づけられる可能性が高い。

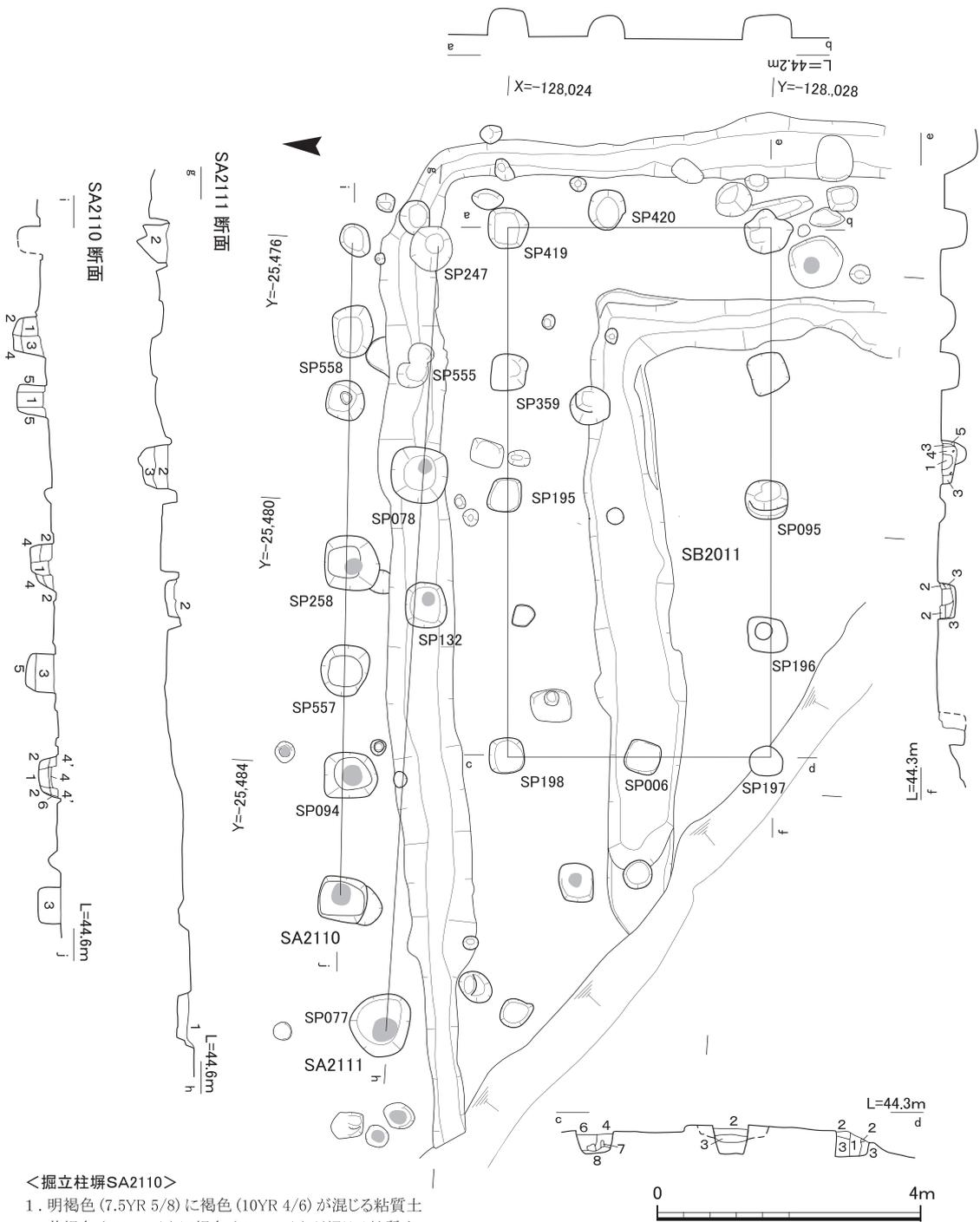
掘立柱塀 S A2110 (第16図) 区画溝 S D001の北側に接して検出した(V-f19~22区)。7基の柱穴からなる東西方向の掘立柱塀である。上記の掘立柱建物 S B2011とおおむね平行する。検出長は10mで、柱間寸法は柱穴 S P077から柱穴 S P258までの4基は1.8m、柱穴 S P258と柱穴 S P558の柱間寸法は3.6mである。柱穴掘形は S P077が一辺約0.6mの隅丸方形で、それ以外の柱穴は長軸0.7m前後の楕円形である。S P077・094・258では直径約0.3~0.5mの柱痕を確認した。掘形埋土は、褐色土が混じる黄褐色粘質土や土器片を含む暗褐色土が混じる橙色粘質土、暗褐色粘質土などである。柱痕埋土は、褐色土が混じる明褐色粘質土である。塀の方位は北に対し2.5°西に振る。遺物として各柱穴から土師器や須恵器の小片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、S B2011とほぼ平行することから第Ⅲ－1期に位置づけられる可能性がある。

掘立柱塀 S A2111 (第16図) 区画溝 S D001と重複して検出した(V-f19~23区)。5基以上の柱穴からなる東西方向の掘立柱塀である。検出長は12mで、柱間寸法は2.0~6.8mとばらつきがあることから、柱間の広いところには未確認の柱穴が存在した可能性が高い。柱穴掘形は長辺約0.7~1.0mの円形である。掘形埋土は、炭と土器片を含む暗褐色土が混じる黄褐色粘質土、にぶい黄褐色土が混じる褐色粘質土、土器片を含む黒褐色土が混じる橙色粘土などである。塀の方位は東西方向である。切り合い関係から S D001の廃絶後に造られたものであるが、掘立柱建物 S B2011や掘立柱塀 S A2110との前後関係については不明である。遺物として各柱穴から平瓦や土師器、須恵器の破片などが出土した。S D001よりも新しいことから第Ⅱ－1期以降に位置づけられる。

(山崎美輪・筒井崇史)

土坑 S K352 (第17図) 掘立柱建物 S B2012の北東側にほぼ接して検出した(V-d17・18、e17・18区)。平面形は、やや不整形な隅丸形状を呈し、北辺から北東部にかけては現在の里道により削平されている。長軸2.9m以上、短軸2.8m、深さ0.2mである。埋土は炭を含む褐色粘質土の単一層で、遺物として土師器杯A・杯B・皿A・椀・甕・鍋・灯火器、須恵器杯A・杯B・同蓋・甕などが多数出土した(第78図181~第79図217)。掘立柱建物 S B2012と重複関係にあるが、出土した土器から大きな時期差を認めることはできず、第Ⅱ－1期に位置づけられる。

土坑 S K353 (第15図) 土坑 S K352の南西側で検出した(V-e18区)。掘立柱建物 S B2012(柱



<掘立柱塀SA2110>

1. 明褐色 (7.5YR 5/8) に褐色 (10YR 4/6) が混じる粘質土
2. 黄褐色 (10YR 5/8) に褐色 (10YR 4/6) が混じる粘質土
3. 橙色 (7.5YR 6/8) に暗褐色 (10YR 3/4) が混じる粘質土 (土器片を含む)
4. 暗褐色 (ちよつと明るい) 粘質土
- 4'. 暗褐色 (10YR 3/4) 粘質土
5. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土
6. 橙色 (7.5YR 6/8) 粘質土

<掘立柱塀SA2111>

1. 黄褐色 (10YR 5/8) をベースに暗褐色 (10YR 3/3) が混じる粘質土 (炭の粒と土器片を含む)
2. 褐色 (10YR 4/6) をベースににぶい黄褐色 (10YR 4/3) が混じる粘質土
3. 橙色 (7.5YR 6/8) をベースに黒褐色 (10YR 2/2) が混じる粘土 (土器片を含む)

<掘立柱建物SB2011>

1. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土 (細砂混じり)
2. 灰黄褐色 (10YR 5/2)
3. 褐色 (10YR 4/4) 粘質土 (細砂混じり)
4. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘質土
5. 褐色 (7.5YR 4/6) 粘質土 (粒砂、小礫混じり)
6. 褐色 (10YR 4/4) 粘質土に黄褐色 (10YR 5/8) 土の小ブロック混じる
7. 4に8が混じる
8. 明褐色 (7.5YR 5/6) 粘質土 (4が混じる)

第16図 掘立柱建物S B 2011、掘立柱塀S A 2110・2111実測図(1/100)

穴 S P 072 など) や柱穴 S P 262 と重複し、S K 353 の方が古い。不整形な形状を呈し、北辺は不明瞭である。長軸 2.5m、短軸 1.9m、深さ 0.1m である。埋土は褐色粘質土の単一層で、遺物として土師器甕 (第 80 図 218) や須恵器片のほか、鉄製品の破片などが少量出土した。詳細な時期は不明であるが、第 I 期ないし第 II - 1 期に位置づけられると考える。

(筒井崇史)

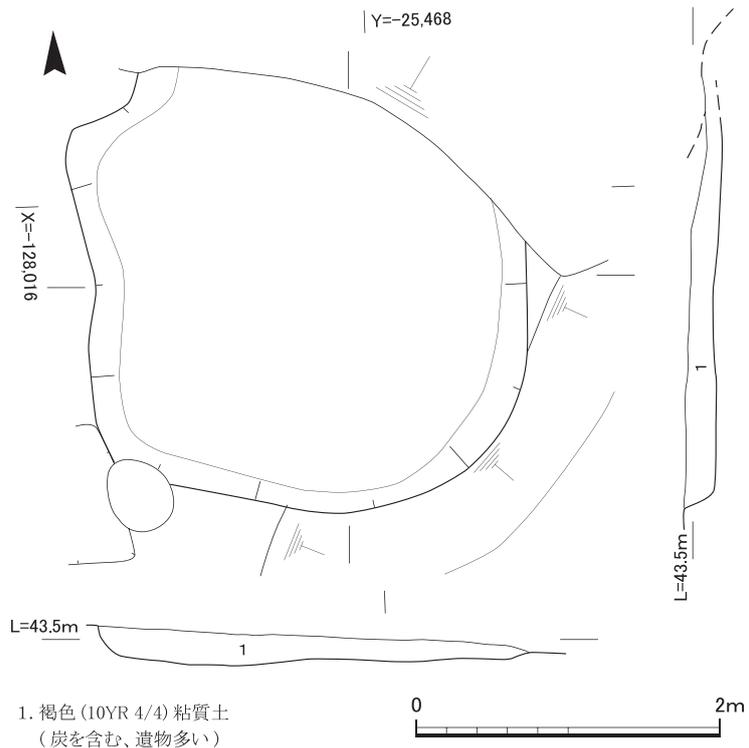
(3) 北部

V・Ⅷ両地区の j 列よりも北側で、V 地区 22 列よりも西側、Ⅷ地区 10 列よりも東側の範囲で

ある。区画溝 S D 001・010 の北側と南側に遺構群が広がる。ここでは、掘立柱建物 8 棟、掘立柱塀 3 条、土坑 2 基、柱穴約 70 基などを検出した (第 18 図)。北部で検出した遺構群は、総柱建物や 2 間四方の小規模な建物が多くみられる。

総柱建物 S B 2013 (第 19 図) 調査地の最北端部で検出した (V - c22~24、d22~24 区)。東西 3 間 (5.0m)、南北 2 間 (3.6m) の総柱建物である。柱間寸法は東西方向 1.5~2.0m、南北方向 1.7~1.9m である。柱穴掘形は一辺 0.5~0.7m の正方形で、柱穴 S P 110~115・252 では直径 0.3~0.4m の柱痕を確認した。掘形埋土は、明黄褐色砂質土やにぶい黄褐色砂質土などである。柱痕埋土は、柱穴 S P 110・111・115 が明黄褐色砂質土、柱穴 S P 113 は褐色砂質土、柱穴 S P 114・115 は黒褐色粘質土である。建物の方位は北に対して 2° 東へ振る。遺物として、各柱穴から瓦片や土師器片、須恵器片などが出土した。出土遺物に瓦類をほとんど含まない点から第 I 期に位置づけられると考える。

掘立柱建物 S B 2014 (第 20 図) 総柱建物 S B 2013 の南側 5.2m で検出した (V - e22~24・f22 区)。桁行 5 間以上 (8.8m 以上)、梁行 2 間以上 (4m 以上) の東西棟の建物である。南側の桁行の柱列、東側の梁行 2 個目以南の柱穴と西側の梁行の柱穴列は攪乱のため検出できなかった。桁行の柱間寸法は 1.6~1.7m である。梁行の柱間寸法は 2.0~2.4m である。柱穴掘形は一辺約 0.6~0.7m の正方形である。掘形埋土は、炭が混じる褐色粘質土、明褐色粘質土、明黄褐色粘質土などである。柱穴 S P 118~120・253 では径約 0.2~0.4m の柱痕を確認した。柱痕の埋土は褐色粘質土である。建物の方位は北に対して 4.5° 西に振る。遺物として、各柱穴から土師器片や須恵器杯 A・杯 B 蓋などの破片、平瓦片などが出土した (第 62 図 45~48、第 80 図 219~223)。出土遺物や建物の構造な

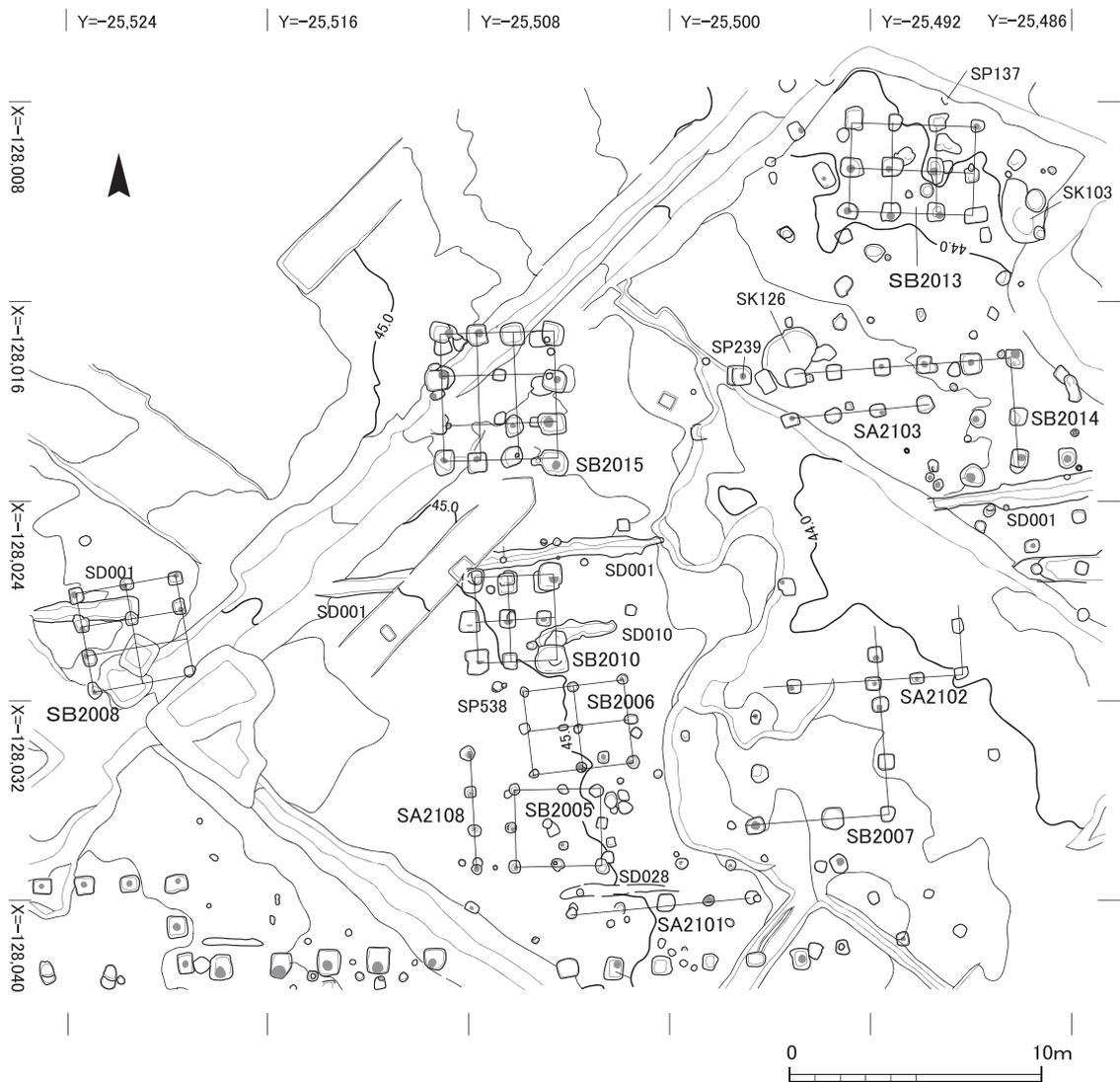


第 17 図 土坑 S K 352 実測図 (1/50)

どから第Ⅱ-2期ないし第Ⅲ-1期に位置づけられると考える。

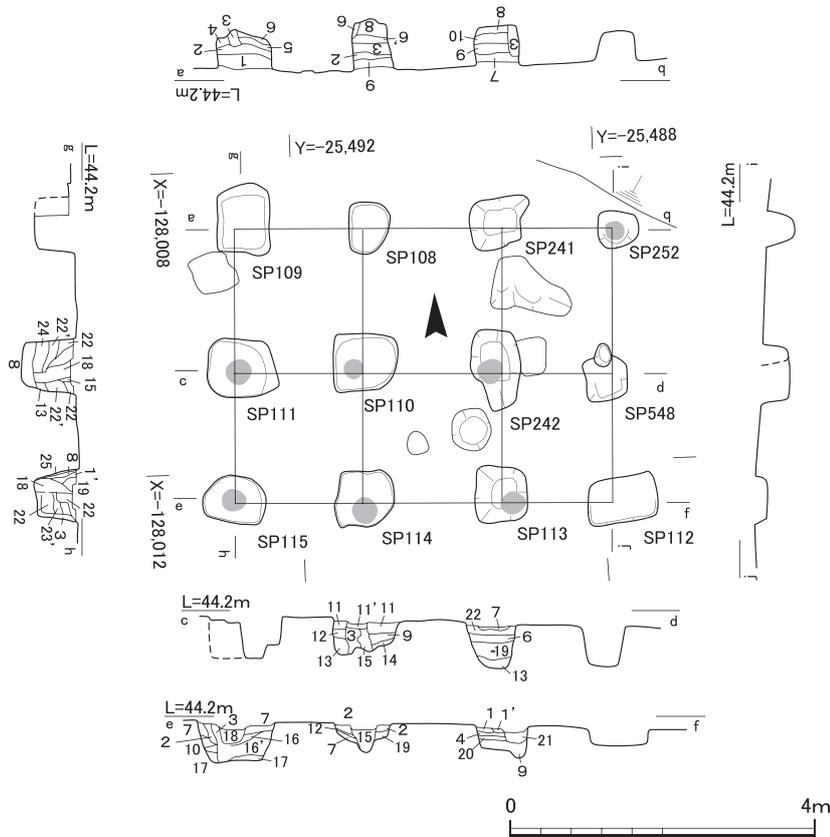
掘立柱塀 S A 2103(第20図) 掘立柱建物 S B 2014と重複して検出した(V - e23・f23・24区)。4基の柱穴が東西方向に並ぶ。検出長は5.2mで、柱間寸法は1.2mである。柱穴掘形は、おおむね長辺0.5m、短辺0.4mの長方形を呈するが、柱穴 S P 123のみは歪な形状を呈する。掘形埋土は、褐色砂質土、褐色土が混じる橙色砂質土、明褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土などである。柱穴 S P 124・503では直径0.2mの柱痕を確認した。柱痕埋土は、橙色砂質土である。塀の方位は北に対して6°西に振る。遺物としては柱穴 S P 125から土師器小片が出土したのみである。S A 2103と S B 2014の柱穴は切り合っていないため、その前後関係は不明である。したがって詳細な時期は断定できなかった。

総柱建物 S B 2015(第21図) 調査地北部から第8次調査地にかけて検出した(VIII - e2・3、f2・3区)。また、S B 2015の下層には弥生時代の竪穴建物 S H 3001を検出した。これらの遺構は、第8次調査地にまたがるため、八幡市教育委員会と調整の上、S B 2015については当調査研究セ



第18図 北部全体図(1/300)

ンターが、SH3001については八幡市教育委員会が報告することとした(第8次調査としての遺構番号は竪穴住居跡SH4である)。SB2015は、一部の柱穴が境界溝による削平のため検出できなかったが、東西3間(4.2m)、南北3間(5.1m)の総柱建物と推定される。柱間寸法は、東西方向が1.3~1.8m、南北方向が1.2~1.7mと、ややまばらである。柱穴掘形は一辺0.7~1.2mの正方形ないし歪な方形を呈する。掘形埋土は黒褐色土が混じる明褐色粘質土、黒褐色粘質土、赤褐色粘質土、赤褐色ないし灰色の粘土ブロックがまだらに混じる明褐色粘土などである。柱穴SP350・366・371・372で直径0.4~0.5m、柱穴SP361・363・364では直径0.2mの柱痕を確認した。柱痕埋土は灰黄褐色粘土、灰褐色が混じる褐灰色粘土などである。建物の方位は北に対して1.5°



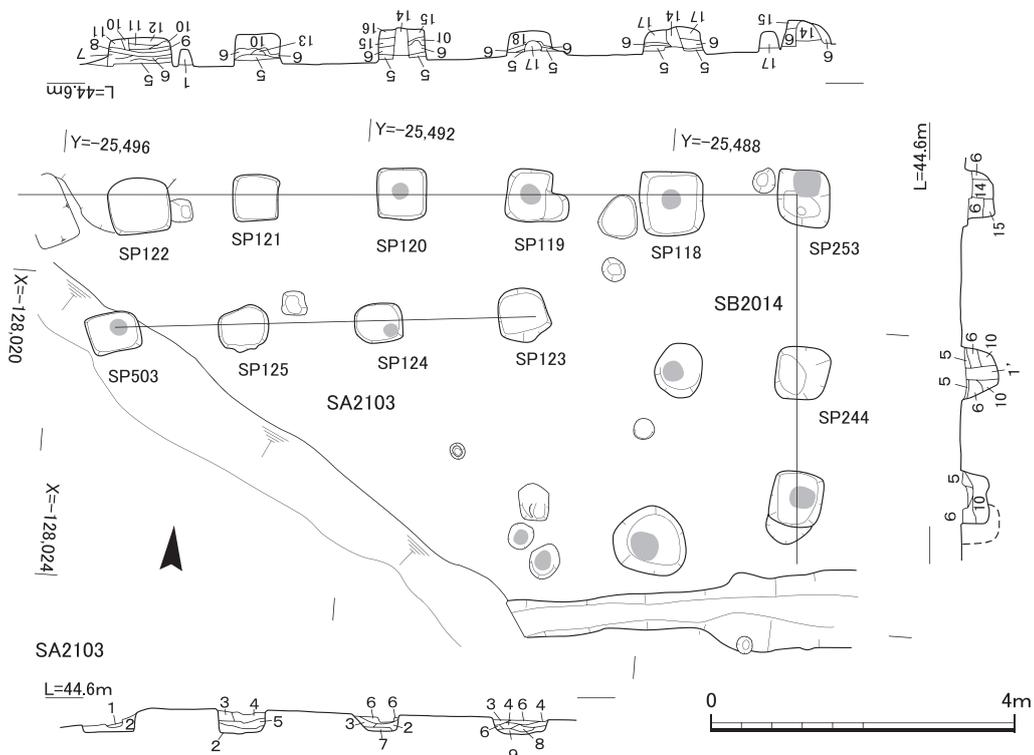
- | | |
|---|---|
| <p>1. 明黄褐色(10YR 6/8)砂質土
1'. 1より少し暗い</p> <p>2. 褐色(10YR 4/6)砂質土</p> <p>3. 暗褐色(10YR 3/4)粘質土(砂を多く含む)</p> <p>4. 明褐色(7.5YR 5/6)粘質土(砂を多く含む)</p> <p>5. 明褐色(7.5YR 5/8)砂質土</p> <p>6. 褐色(10YR 4/6)粘質土(砂を含む)
6'. 6より少し暗め(細砂を含む、オリーブ灰色(7.5YR 5/3)粘質土のブロックを含む)</p> <p>7. 褐色(10YR 4/6)砂質土</p> <p>8. 暗褐色(10YR 3/3)粘質土(粗砂を含む)</p> <p>9. 黄褐色(10YR 5/6)粘質土(粗砂を含む)</p> <p>10. 暗褐色(10YR 4/6)粘質土(砂を多く含む)</p> <p>11. オリーブ褐色(2.5YR 4/6)砂質土
11'. 11より少し明るい</p> <p>12. にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂質土</p> <p>13. 暗褐色(7.5YR 3/4)粘質土</p> | <p>14. 黄褐色(10YR 5/8)砂質土(0.2cm程度の小石を含む)</p> <p>15. 黒褐色(10YR 2/3)粘質土(細砂を含む、6と同じブロックを含む)</p> <p>16. 暗褐色(10YR 3/4)砂質土
16'. 16よりも砂粒は粗、0.3cm程度の小石を含む</p> <p>17. 褐色(7.5YR 4/6)粘土</p> <p>18. 黒褐色(10YR 3/1)砂質土</p> <p>19. 褐色(10YR 4/6)砂質土(0.5cm程度の小石を含む)</p> <p>20. にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂質土(6'と同じブロックを含む)</p> <p>21. にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘土
(やや暗く、粒は細かい、6'と同じブロックを含む)</p> <p>22. 明褐色(7.5YR 5/6)粘質土に黒褐色(10YR 2/3)土が混じる
(細砂を多く含む、6'と同じブロックを含む)</p> <p>22'. 6'のブロックを含まない</p> <p>23. オリーブ褐色(2.5YR 4/3)砂質土</p> <p>24. 明褐色(7.5YR 5/6)土と黒褐色(10YR 2/3)土が混じる
(粗砂、6'と同じブロックも含む)</p> <p>25. 明褐色(7.5YR 5/6)砂質土</p> |
|---|---|

第19図 総柱建物SB2013実測図(1/100)

西に振る。S B 2015の柱穴は、他の建物の柱穴と異なり、埋土に青灰白色の粘土ブロックが混じるのが特徴である。また、すべての柱穴においてではないが、大きい柱穴が小さい柱穴に切られているものがあり、建て替えの可能性もある。柱穴S P 350・365・367・371では柱痕に瓦類が落ち込んでいた。遺物として、各柱穴から平瓦片や土師器片、須恵器片などが出土した(第63図49~54、第80図224・225)。柱穴S P 365の柱痕から須恵器碗の破片が出土した点は注意される(224)。出土遺物などから第Ⅱ-2期に位置づけられる。

なお、S B 2015と後述する総柱建物S B 2010A・B、あるいは第8次調査で検出した掘立柱建物S B 2は、建物の東辺がほぼ一直線となるように建てられている。

総柱建物S B 2010(第22図) 総柱建物S B 2015の南側で検出した(VIII-g2・3、h2・3区)。第4次調査で2棟の重複が確認された建物に当たる。今回の調査では、古い方をS B 2010A(第4次



<掘立柱建物SB2014>

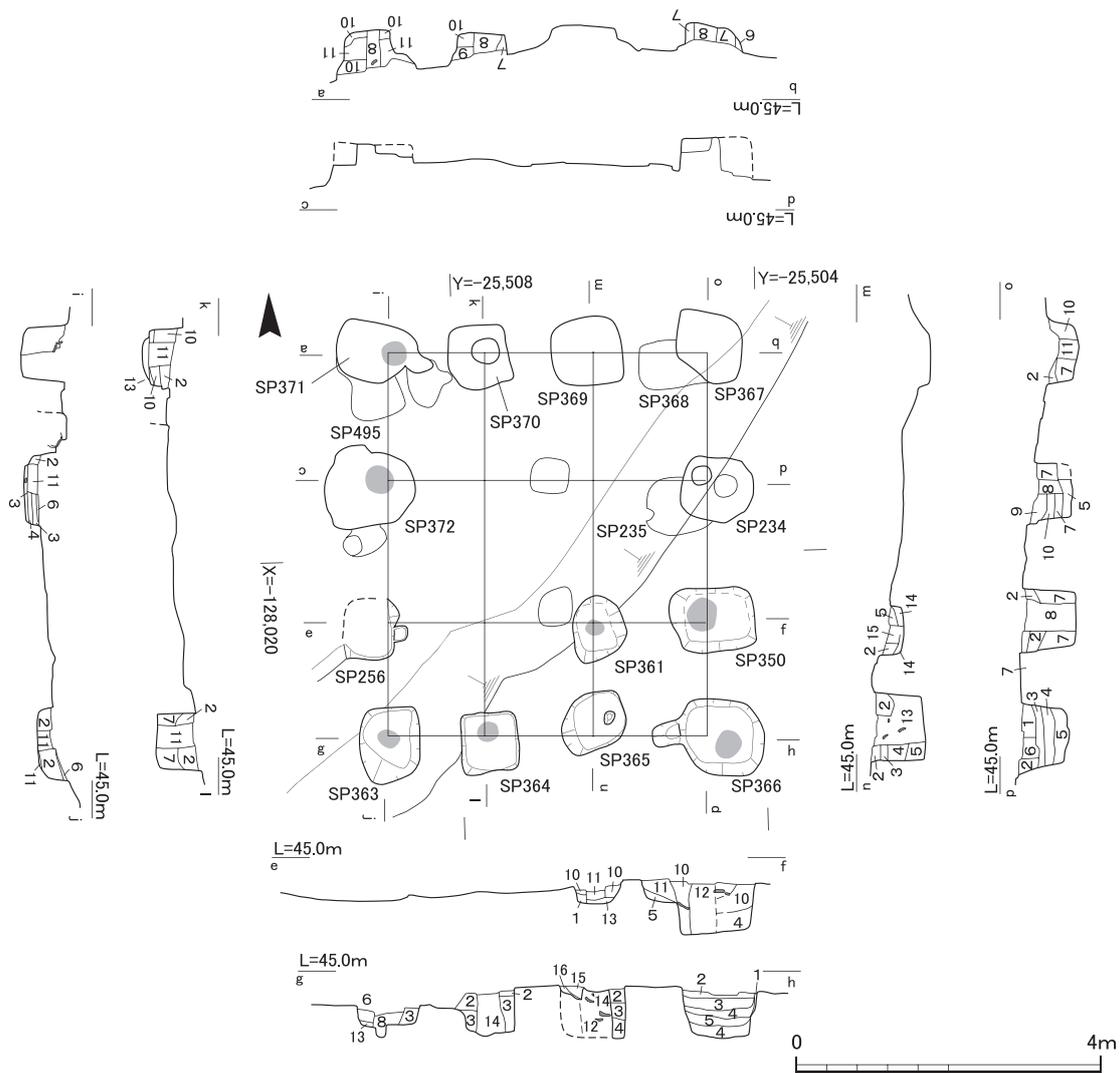
1. 褐色(10YR 4/6)砂質土
1'. 1よりも締まる
5. 褐色(10YR 4/6)粘質土(炭混じる)
6. 明褐色(7.5YR 5/6)粘質土(5がブロックで混じる)
7. オリーブ褐色(2.5YR 4/4)粘質土(炭混じる)
8. にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘質土
9. 褐色(10YR 4/4)粘質土
(明黄褐色(10YR 6/6)粘質土ブロック混じる)
10. 褐色(10YR 4/6)粘質土
11. 褐色(10YR 4/6)粘質土
(黄褐色(10YR 5/8)土ブロック多く混じる)
12. 褐色(10YR 4/6)粘質土
(黄褐色(10YR 5/8)土ブロック少し混じる)
13. 褐色(10YR 4/6)粘質土(6のブロックが混じる)
14. 褐色(7.5YR 4/3)粘質土
15. 明黄褐色(7.5YR 5/6)粘質土

16. オリーブ褐色(2.5YR 4/6)粘質土
17. にぶい黄褐色(10YR 5/3)粘質土
18. にぶい黄褐色(10YR 4/3)粘質土(炭混じる)

<掘立柱塀SA2103>

1. 橙色(7.5YR 6/8)砂質土
(粗砂・炭まじり、0.5~1cm程度の小石を含む、)
2. 褐色(10YR 4/6)砂質土
3. 橙色(7.5YR 6/8)をベースに褐色(10YR 4/4)が混じる粘質土
(細砂、1cm程度の小石も含む)
4. 褐色(10YR 4/4)砂質土
5. 明褐色(7.5YR 4/6)粘質土(粗砂を多く含む)
6. にぶい橙色(7.5YR 6/4)砂質土(中粒砂)
7. 褐色(10YR 4/6)粘質土(細砂を含む)
8. にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂質土(粗砂、小礫混じり)
9. 褐色(10YR 4/6)砂質土

第20図 掘立柱建物S B 2014、掘立柱塀S A 2103実測図(1/100)



<東西方向>

1. 褐色 (10YR 4/4) 粘土 (粗砂を少量含む)
2. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土に黒褐色 (10YR 3/2) 土が混じる (細砂を含む)
3. 黒褐色 (7.5YR 5/8) 粘土に黒褐色 (10YR 3/2) 土が混じる粘土
4. 黒褐色 (10YR 3/2) 粘土
5. 赤褐色 (5YR 4/8) 粘土
6. 暗褐色 (10YR 3/4) 粘質土 (粗砂を含む)
7. 明赤褐色 (5YR 5/8) 粘質土に黒褐色 (10YR 3/2) 土が混じる (細砂を含む)
8. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘土
9. 灰色 (10Y 5/1) 粘質土と暗褐色 (7.5YR 3/4) 粘質土の互層 (極細砂を含む)
10. 赤褐色 (5YR 4/8) 粘質土に9がまだらに混じる (細砂を含む)
11. 暗褐色 (7.5YR 3/4) 粘質土に灰色 (10Y 5/1) 土がブロック状に混じる (粗砂を含む)
12. 灰色 (10Y 5/1) 粘土
13. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘質土 (粗砂を含む)
14. 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘質土に暗褐色 (7.5YR 3/4) が混じる (細砂を含む)
15. 明赤褐色 (5YR 5/8) 粘質土に褐色 (7.5YR 4/4) が混じる (粗砂を含む)

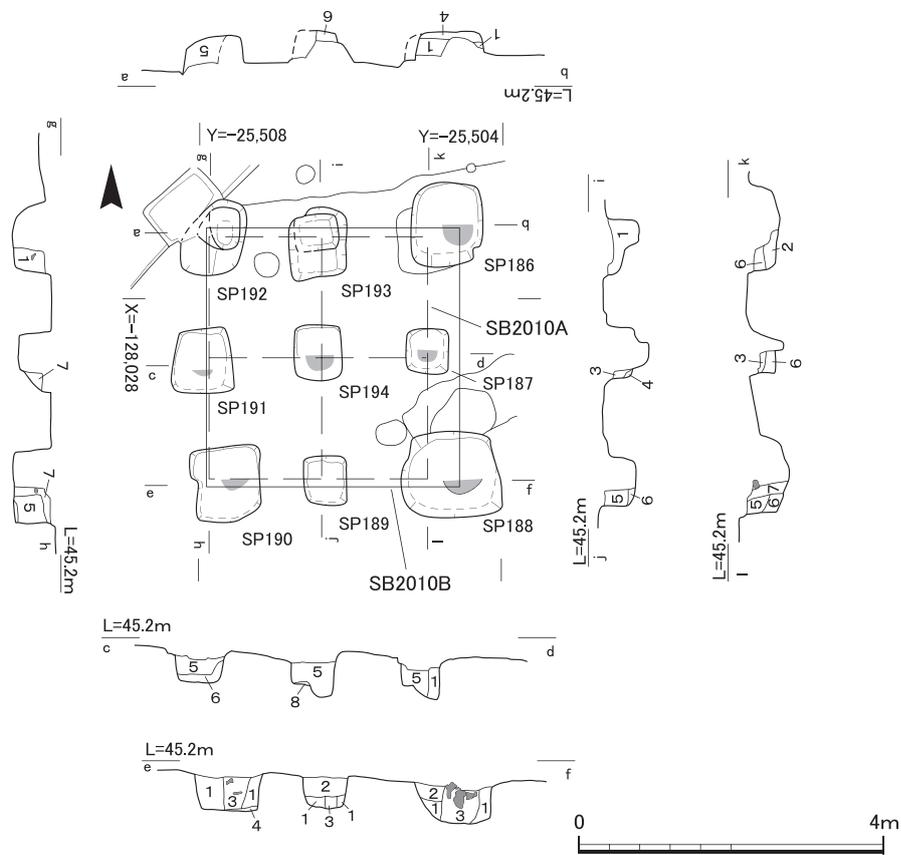
<南北方向>

1. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粘質土 (粗砂を含む)
2. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘土に黒褐色 (10YR 5/1) 土が混じる
3. 黒褐色 (10YR 3/2) 粘土
4. 赤褐色 (5YR 4/8) 粘土
5. 暗褐色 (10YR 3/4) 粘質土 (細砂を含む)
6. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘土
7. 赤褐色 (5YR 4/8) 粘質土に灰色 (10Y 5/1) 土と暗褐色 (7.5YR 3/4) 土がまだらに混じる (極細砂を含む)
8. 褐灰色 (10YR 5/1) 粘土と暗褐色 (7.5YR 3/4) 粘土が混じる
9. 7がそれぞれ交互にしま状になる粘質土 (砂を多く含む)
10. 暗褐色 (10YR 3/4) 粘質土に赤褐色 (5YR 4/8) 土と灰色 (10Y 5/1) がまだらに混じる (砂を含む)
11. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘土
12. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘土
13. 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘質土に褐色 (7.5YR 4/4) 土が混じる (灰色 (10Y 5/1) 土の大きいブロックが混じる)
14. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘質土 (粗砂を含む)
15. 明褐色 (10YR 6/8) 土に暗褐色 (7.5YR 3/4) が混じる
16. 橙色 (5YR 6/8) 粘土 (地山)

第21図 総柱建物 S B 2015実測図 (1/100)

調査の掘立柱建物 S B 411)、新しい方を S B 2010 B (第4次調査の掘立柱建物 S B 401) とした。S B 2010 A は東西 2 間 (2.9m)、南北 2 間 (3.2m) の総柱建物である。柱間寸法は東西方向約 1.4m、南北方向約 1.6m である。柱穴掘形は、一辺 0.55~0.85m の正方形ないし長方形を呈する。掘形埋土は、褐色土が混じる橙色粘質土や明赤褐色粘質土などである。直径約 0.2~0.4m の柱痕を確認した。柱痕埋土は褐色粘土である。建物の方角は南北である。遺物は柱穴 S P 187 から土師器小片や平瓦片が出土した。

S B 2010 B は東西 1 間 (3.3m)、南北 1 間 (3.4m) の建物である。柱穴掘形は一辺 1.4~1.0m と、やや大型である。建物の方角は北に対して 2° 西に振る。柱穴 S P 188・190 の柱痕では多くの平瓦が落ち込んだような状態で出土した。今回の調査で出土した遺物としては、須恵器片や土師器小片、丸瓦・平瓦の破片などがある。第4次調査では門の可能性が指摘されたが、今回の調査で



南北方向断面

1. 明赤褐色 (5YR 5/8) 粘質土に暗褐色 (10YR 3/4) 土がしま状に混じる (粗砂を多く含み、0.5 ~ 1cm の小石を含む)
2. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粘土 (粘り気が強い)
3. 明赤褐色 (5YR 5/8) 粘質土に暗褐色 (10YR 3/4) 土がしま状に混じる (粗砂を多く含み、0.5 ~ 1cm の小石を含む)
4. 橙色 (5YR 6/8) 粘土
5. 橙色 (5YR 6/8) 粘質土に灰黄褐色 (10YR 4/2) 土が混ざる (灰色 (10YR 7/2) 粘土ブロックを含む)
6. 橙色 (5YR 6/8) 粘質土に褐色 (10YR 4/4) 土が混じる
7. 褐色 (10YR 4/4) 粘土

東西方向断面

1. 橙色 (5YR 6/8) 粘質土に褐色 (10YR 4/4) 土が混じる
2. 橙色 (5YR 6/8) 粘質土に灰黄褐色 (10YR 4/2) 土が混じる (灰白色 (10YR 7/2) 粘土ブロックを含む)
3. 褐色 (10YR 4/4) 粘土
4. 橙色 (5YR 6/8) 粘土
5. 明赤褐色 (5YR 5/8) 粘質土に暗褐色 (10YR 3/4) 土がしま状に混じる (粗砂を多く含み、0.5 ~ 1.5cm の小石を含む)
6. 明赤褐色 (2.5YR 5/8) 粘土

第22図 総柱建物 S B 2010実測図 (1/100)

はS B 2010を倉庫群を構成する総柱建物の1つと判断するに至った。

第4次調査によれば、S B 2010A (S B 411)は区画溝S D 001 (溝S D 105)と同時期とされており、S D 001とS B 2010Aの廃絶後にS B 2010B (S B 401)が建てられたことになる。出土遺物や区画溝S D 001との切り合い関係から、S B 2010Aは第I期ないし第II-1期に、S B 2010Bは第II-1ないし第II-2期に位置づけられる。

総柱建物S B 2006(第23図) 総柱建物S B 2010の南側で検出した(VIII - h1・2、i1・2区)。東西2間(4.0m)、南北2間(3.3m)の総柱建物である。柱間寸法は東西方向1.6m、南北方向2.0mである。柱穴掘形は直径0.4~0.5mの円形で、柱穴S P 298・299・301・303で直径約0.2mの柱痕を確認した。掘形埋土は、灰オリーブ色土が混じる橙色砂質土、黄褐色粘質土、暗褐色粘質土などである。柱痕の埋土は、柱穴S P 298・299が灰オリーブ色土が混じる橙色粘質土、柱穴S P 301・303が黄褐色砂質土である。建物の方位は北に対して7°西に振る。柱穴から出土遺物はなく、時期は不明である。

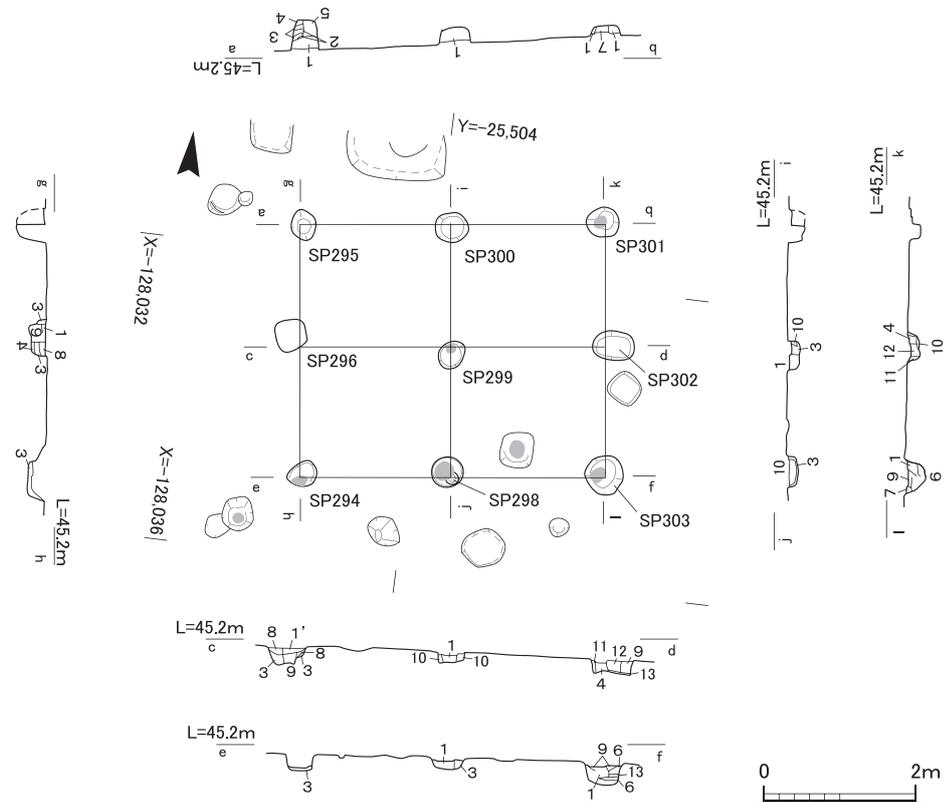
掘立柱建物S B 2005(第24図) 総柱建物S B 2006の南側に接して検出した(VIII-i1・2、j1・2区)。東西2間(3.3m)、南北2間(3.0m)の掘立柱建物である。柱間寸法は東西方向1.8m、南北方向1.6mである。柱穴掘形は直径約0.4~0.5mの円形である。掘形埋土は、暗オリーブ褐色砂質土、明黄褐色粘質土、褐色粘質土などである。また、柱穴S P 011・017・019で直径約0.2mの柱痕を確認した。柱痕埋土は、柱穴S P 017・019が明緑灰色粘土のブロックが混じる明橙色砂質土、柱穴S P 011が暗褐色砂質土である。建物の方位は北に対して1.5°西に振る。遺物としては、各柱穴から平瓦片や土師器小片などが少量出土したのみである。出土遺物などから第II-1期ないし第II-2期に位置づけられると考える。

掘立柱塀S A 2108(第24図) 掘立柱建物S B 2005の西側で検出した(VIII - i2・3、j2区)。4基の柱穴が南北方向に並ぶ掘立柱塀である。検出長は4.5m、柱間寸法は1.5~1.6mである。柱掘形は直径約0.5mの歪な円形もしくは隅丸方形を呈する。掘形埋土は、暗オリーブ褐色砂質土、暗褐色土が混じる橙色粘質土、明黄褐色砂質土などである。柱穴S P 012・016・020では直径約0.2mの柱痕を確認した。柱痕埋土は暗褐色粘質土などである。塀の方位は北に対して3°西に振る。遺物としては、柱穴S P 154から瓦類や土師器、須恵器などの小破片が出土したのみである。詳しい時期は断定できないが、第II期に位置づけられる可能性がある。

掘立柱建物S B 2007(第25図) 調査地中央部やや北東寄りで検出した(V - h23・i23~25・j23~25区)。この付近は近・現代の攪乱を受けて大きく削平されているため、遺構の遺存状況は必ずしも良くなく、全容は不明である。検出規模は、桁行3間以上(7.0m以上)、梁行2間(5.3m)の南北棟の建物と推定される。北側は削平をうけて、桁行3間以北は検出できなかった。柱間寸法は、桁行が2.0~2.2m、梁行が2.2mと3.1mである。柱穴掘形は一辺約0.5~0.6mのやや歪な正方形である。掘形埋土は、赤褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土、明褐色粘土などである。柱穴S P 164・165・168で直径0.2~0.4mの柱痕を確認した。柱痕埋土は褐色砂質土である。建物の方位は北に対して西に4.5°振る。いずれの柱穴からも遺物が出土しなかったため時期は不明である。

掘立柱塀 S A 2102 (第25図) 掘立柱建物 S B 2007に一部重複するように検出した (V - h23・24)。5基の柱穴がL字状に並ぶ。掘立柱建物 S B 2007と同様に、大きく削平されているため、遺構の遺存状況は必ずしも良くなかった。東西方向の検出長は6.8m、柱間寸法は柱穴 S P 497と S P 498の間が2間分と考えれば、1.7m前後である。南北方向の検出長は2.0mである。掘形埋土は橙色砂質土または明赤褐色砂質土である。柱穴 S P 497~499では径約0.2~0.3mの柱痕を確認した。柱痕埋土は、S P 497が橙色砂質土、S P 498・499がにぶい黄褐色土である。塀の方位は北に対して4°西に振る。いずれの柱穴からも遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

総柱建物 S B 2008 (第26図) 調査地の北辺中央で検出した (Ⅷ - g5・6、h5・6区)。南北3間 (4.0m)、東西2間 (4.0m) の総柱建物である。南北方向の柱間寸法は1.2~1.4m、東西方向の柱間間隔は2.0m等間である。建物の一部は攪乱を受けており、柱穴3基が削平されていた。柱穴掘形は一辺約0.3~0.4mのやや歪な正方形である。掘形埋土は、黒褐色土が混じる黄褐色粘質土、橙色粘質土、褐色粘土などである。柱穴 S P 171~177では直径0.2~0.3mの柱痕を確認した。柱



- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 橙色 (5YR 6/8) 砂質土に灰オリーブ色 (5Y 5/3) 土が混じる砂質土 (2cm 程度の砂礫を含む)
(1' は1に土器片を含む) 2. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土 (粗砂を含む) 3. 黄褐色 (10YR 5/8) に暗褐色 (10YR 3/3) が混じる粘質土 (粗砂・細砂を含む) 4. 明褐色 (7.5YR 5/6) 粘質土 (細砂を少量含む) 5. 褐色 (10YR 4/4) 粘質土 (粗砂を多く含む) 6. 明赤褐色 (5YR 5/8) 砂質土 (2~5cm の小石を含む) | <ol style="list-style-type: none"> 7. 黄褐色 (2.5Y 5/4) 砂質土 8. 黄橙色 (10YR 7/8) 砂質土 (土器片を含む) 9. 黄褐色 (10YR 5/8) 砂質土に
にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 土が混じる 10. 赤褐色 (5YR 4/8) 砂質土 (炭が混じる) 11. 褐色 (10YR 4/4) 砂質土 12. 黄褐色 (10YR 5/8) 砂質土 13. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土 (細砂を含む) |
|---|---|

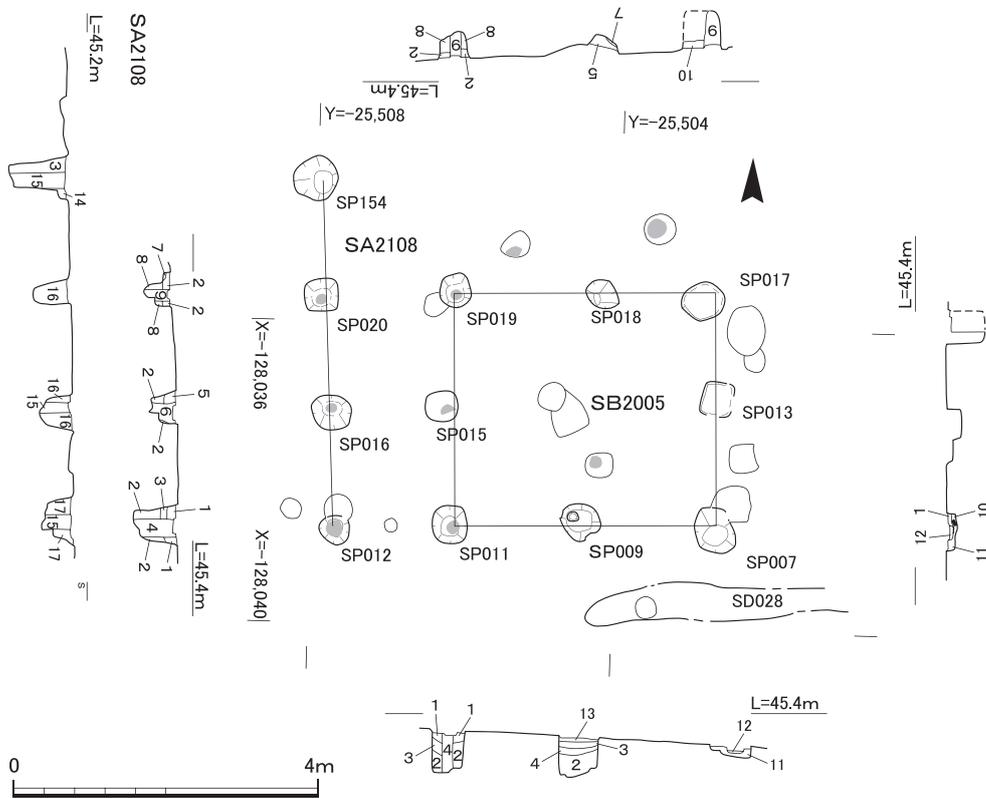
第23図 総柱建物 S B 2006実測図 (1/100)

痕埋土は、柱穴 S P 171・172、175～177が暗褐色粘質土、柱穴 S P 174がにぶい黄褐色粘質土である。S B 2008は区画溝 S D 001と切り合い関係にあり、S D 001に先行して建てられていた。建物の方位は北に対して10°西に振る。出土遺物は少なく、土師器の小片が出土した程度である。少なくとも第I期以前に位置づけられ、美濃山廃寺に伴わない遺構の可能性もある。

(山崎美輪・筒井崇史)

土坑 S K 103 (第27図左) 総柱建物 S B 2013の東側で検出した (V-d22・e22区)。南北方向に主軸をもつ楕円形を呈し、長軸2.7m、短軸1.7m、深さ0.2mである。埋土はにぶい黄褐色粘質土の単一層である。遺物として瓦類、土師器、須恵器の破片のほか、鉄滓や鞆羽口などが出土した (第80図227～234、第91図427)。遺物の量は少ないが、第II期に位置づけられる可能性が高い。

土坑 S K 126 (第27図右) 掘立柱建物 S B 2014の北西隅で検出した (V-e24・e25区)。S B 2014の柱穴 S P 122と重複し、S K 126の方が古い。北東から南西方向に主軸をもつ、やや歪な楕



<SB2005>

1. 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 砂質土
2. 橙色 (7.5YR 6/8) 粘質土に暗褐色 (10YR 3/3) が混じる (細砂を含む)
3. 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘質土 (細砂を多く含む)
4. 暗褐色 (10YR 3/4) 砂質土
5. 橙色 (7.5YR 6/8) 砂質土ににぶい黄褐色 (10YR 5/3) 土が混じる
6. 明橙色 (7.5YR 5/8) 砂質土に暗褐色 (10YR 3/4) 土が混じる
7. 明赤褐色 (5YR 5/8) 砂質土 (地山)
8. 褐色 (10YR 4/6) 粘質土 (細砂を含む)
9. 6に明緑灰色 (10GY 7/1) 粘土のブロックが混じる
10. 橙色 (7.5YR 6/8) 砂質土 (2cm 程度の小石を含む)

11. 2に炭が混じる
12. 4に炭と土器片が混じる
13. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土 (細砂を含む)
14. 6に炭が大量に混じる

<SA2108>

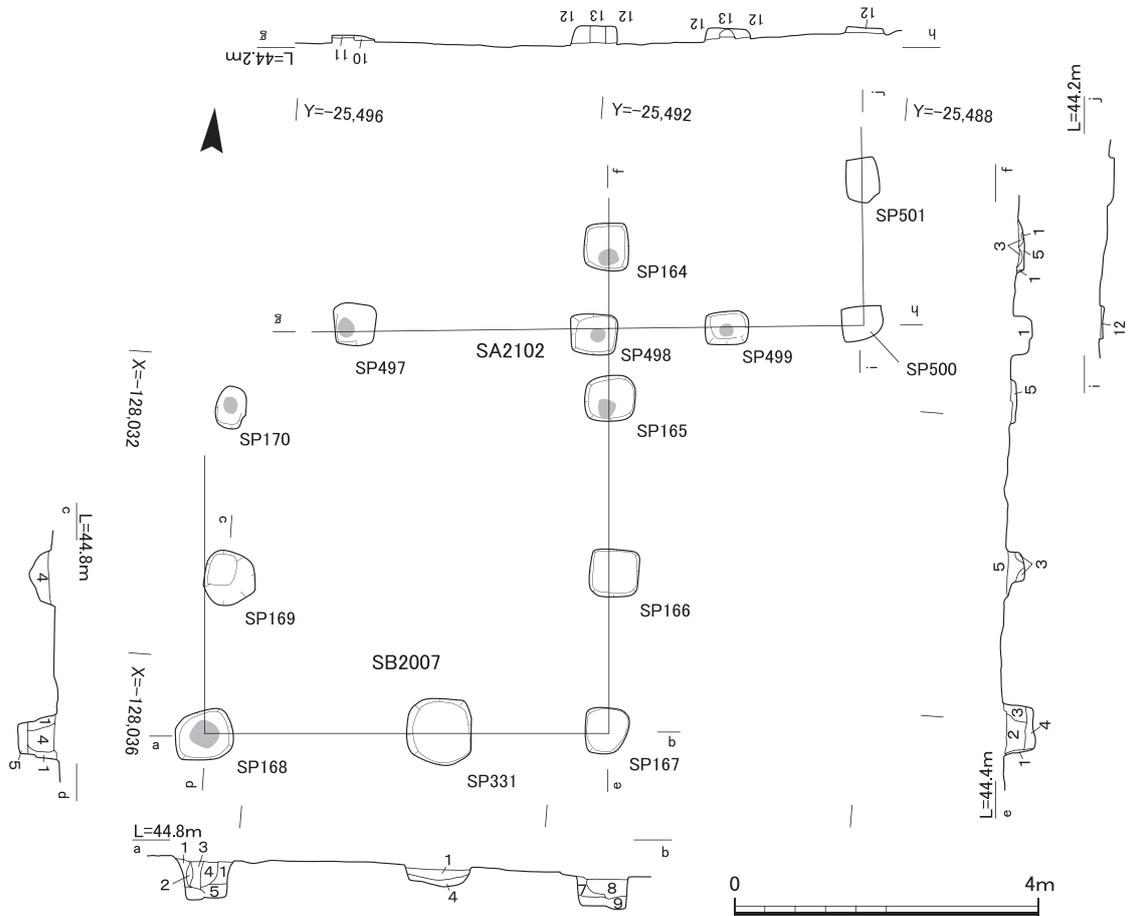
3. 橙色 (7.5YR 6/8) 粘質土に褐色 (10YR 4/4) 土が混じる (細砂を含み、1cm程度の小石も含む)
14. 橙色 (2.5YR 6/8) 粘土
15. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土
16. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土に黒褐色 (10YR 3/2) 土が混じる
17. 褐色 (10YR 4/4) 粘質土

第24図 掘立柱建物 S B 2005、掘立柱塀 S A 2108実測図(1/100)

円形を呈し、長軸2.5m、短軸1.8m、深さ0.15mである。埋土は褐色粘質土の単一層である。遺物として平瓦、土師器杯・皿、須恵器杯B蓋などが出土した(第80図235~238)。遺物の量は少ないが、土坑S K103と同様に第Ⅱ期に位置づけられる可能性が高い。

溝S D028(第24図) 掘立柱建物S B2005の南側で検出した(VIII-j1区)。検出長4.7m、幅0.3~0.5m、深さ0.1mである。検出状況から、掘立柱塀S A2101とともに北部の総柱建物群と中央部の大型側柱建物群を区画するための溝と考えている。遺物として瓦類や土師器、須恵器の小破片が少量出土したにすぎない。詳細な時期は不明であるが、検出状況から第Ⅱ期に位置づけられる可能性が高い。

(筒井崇史)



<掘立柱建物SB2007 a-b、c-d断面>

1. 赤褐色(5YR 4/6)砂質土(2~5cmの小石を含む)
2. にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂質土
3. 橙色(7.5YR 6/8)砂質土
4. 褐色(10YR 4/6)砂質土
5. 明褐色(7.5YR 5/6)粘質土(粗砂を少量含む)
6. 明褐色(7.5YR 5/6)砂質土ににぶい黄褐色(10YR 3/4)土が混じる(砂礫混じり)
7. 橙色(5YR 6/8)砂質土(砂礫混じり)
8. 明褐色(7.5YR 5/6)粘質土
9. 明褐色(7.5YR 5/6)粘土

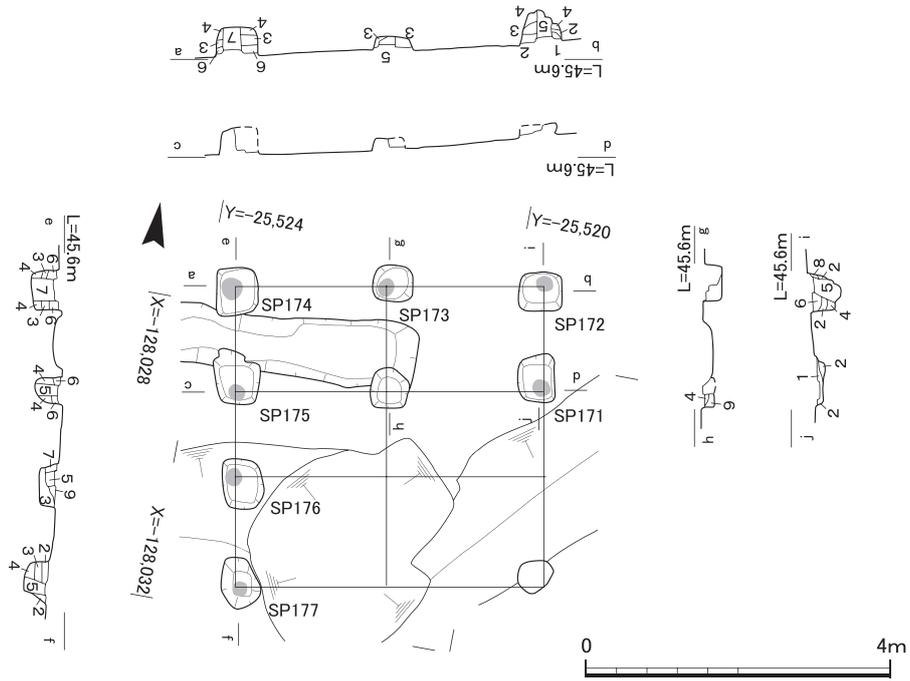
<掘立柱建物SB2007 e-f断面>

1. 黄褐色(10YR 5/6)粘土(粗砂を含む)
2. 明褐色(7.5YR 5/6)粘質土(細砂を含む)
3. 橙色(5YR 6/8)砂質土(砂礫混じり)
4. 明褐色(7.5YR 5/8)粘土(細砂を含む)
5. 明褐色(7.5YR 5/6)砂質土ににぶい黄褐色(10YR 3/4)土が混じる(砂礫混じり)

<掘立柱塀SA2102>

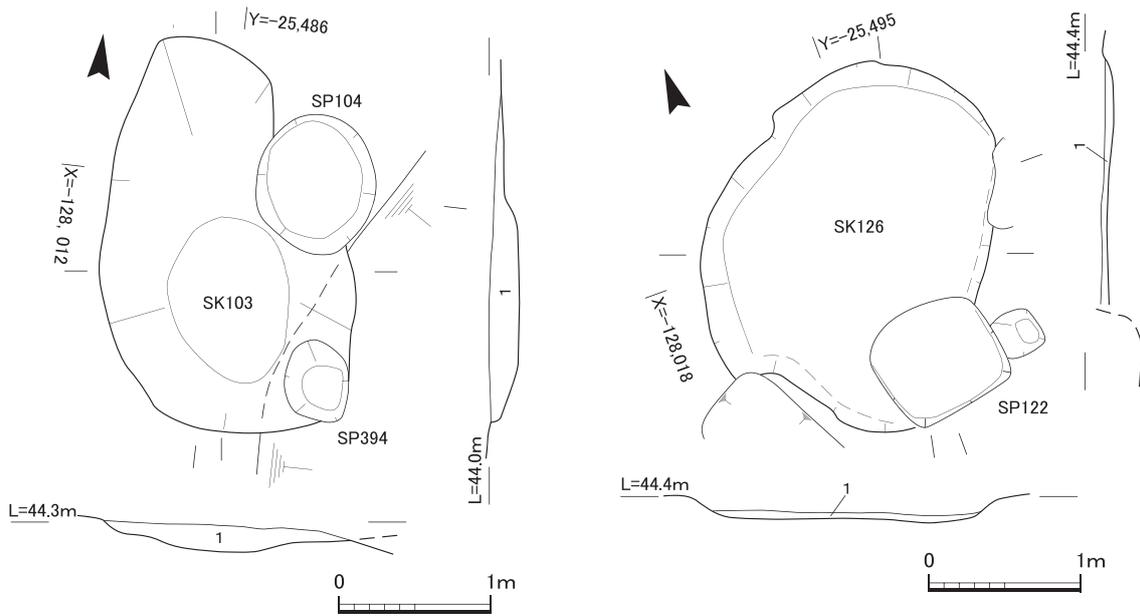
10. 橙色(7.5YR 6/8)砂質土
11. 橙色(5YR 6/8)粘質土(細砂を含む)
12. 明赤褐色(2.5YR 5/8)砂質土
13. にぶい黄褐色(10YR 6/4)粘質土(細砂を含む)

第25図 掘立柱建物S B2007、掘立柱塀S A2102実測図(1/100)



- | | |
|-------------------------------------|--|
| 1. 黒褐色 (10YR 2/2) 粘質土 (細砂を少量含む) | 6. 明黄褐色 (10YR 6/8) 砂質土
(暗褐色 (10YR 3/4) 砂質土が混じる) |
| 2. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土 (1が混じる、細砂を含む) | 7. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘質土 (細砂を含む) |
| 3. 橙色 (7.5YR 6/6) 粘質土 (細砂を含む) | 8. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土 (細砂を含む) |
| 4. 褐色 (10YR 4/6) 粘土 (細砂を少量含む) | 9. 明褐色 (7.5YR 5/6) 粘質土 (細砂を含む) |
| 5. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土 (粗砂を含む) | |

第26図 総柱建物 S B 2008実測図 (1/100)



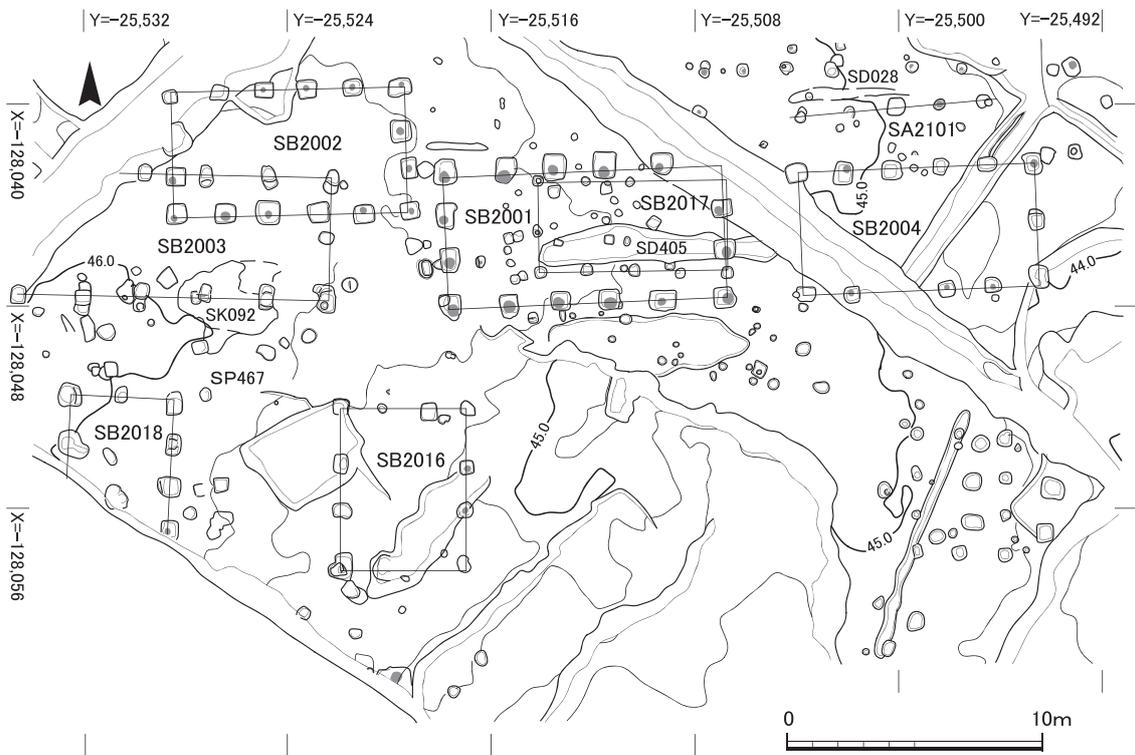
- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| 1. にぶい横褐色 (10YR 4/3) 粘質土 | 1. 褐色 (10YR 4/4) 粘質土 (炭を含む) |
|--------------------------|-----------------------------|

第27図 土坑 S K 103・126実測図 (1/50)

(4)中央部

V・Ⅷ両地区のj列よりも南側、Ⅷ地区10列よりも東側、調査対象地外の竹林よりも北側の範囲である。ここでは、掘立柱建物7棟、掘立柱塀1条、土坑1基、柱穴80基以上などを検出した(第28図)。北部にくらべると、桁行5間、梁行3間ないし2間の、やや大型の掘立柱建物が複数みられる。これらは後述する南部の礎石・掘立柱併用建物SB2020にくらべると一回り小さいが、美濃山廃寺において大型の建物が整然と造営される地区である。

掘立柱建物SB2001(第29図) 調査地中央部やや北寄りで検出した(Ⅷ - k2~5、l2~5、m4・5区)。桁行5間(10.9m)、梁行3間(5.5m)の東西棟の建物である。北東隅の柱穴は境界溝による削平で検出できなかった。桁行の柱間寸法は、柱穴SP049と柱穴SP050の間が2.6mとやや広いものの、桁行の柱間寸法は2.0~2.2m、梁行の柱間寸法は1.7~1.9mである。柱穴掘形は長辺が0.7~1.0m、短辺が0.7mの長方形である。掘形埋土は褐色粘質土、暗褐色粘質土、明褐色砂質土、黄褐色砂質土、明赤褐色粘土などである。柱穴SP038・043・049・092で直径約0.4m、それ以外の柱穴で直径約0.6mの柱痕を確認した。柱痕埋土は、SP038~045・050は暗褐色砂質土、SP051は褐色砂質土、SP091は褐色土が混じる明褐色砂質土である。また、SP042・044~046で抜き取り痕を確認した。特にSP046は、柱を抜き取った方向に平瓦が落ち込んでいた。建物の隅に当たる柱穴掘形は深さが0.6~0.7mに対して、他の柱穴の深さが0.3~0.5mであり、隅に当たる柱穴掘形が深く掘られている。建物の方位は北に対して2°西に振る。遺物として各柱穴から土師器杯A、須恵器杯B・皿E、灯火器、丸瓦、平瓦などが出土した(第64図55~第65図62、第81図239~245)。瓦類の出土総量は32.9kgに達し、掘立柱建物からの出土量としては特に多い。



第28図 中央部全体図(1/300)

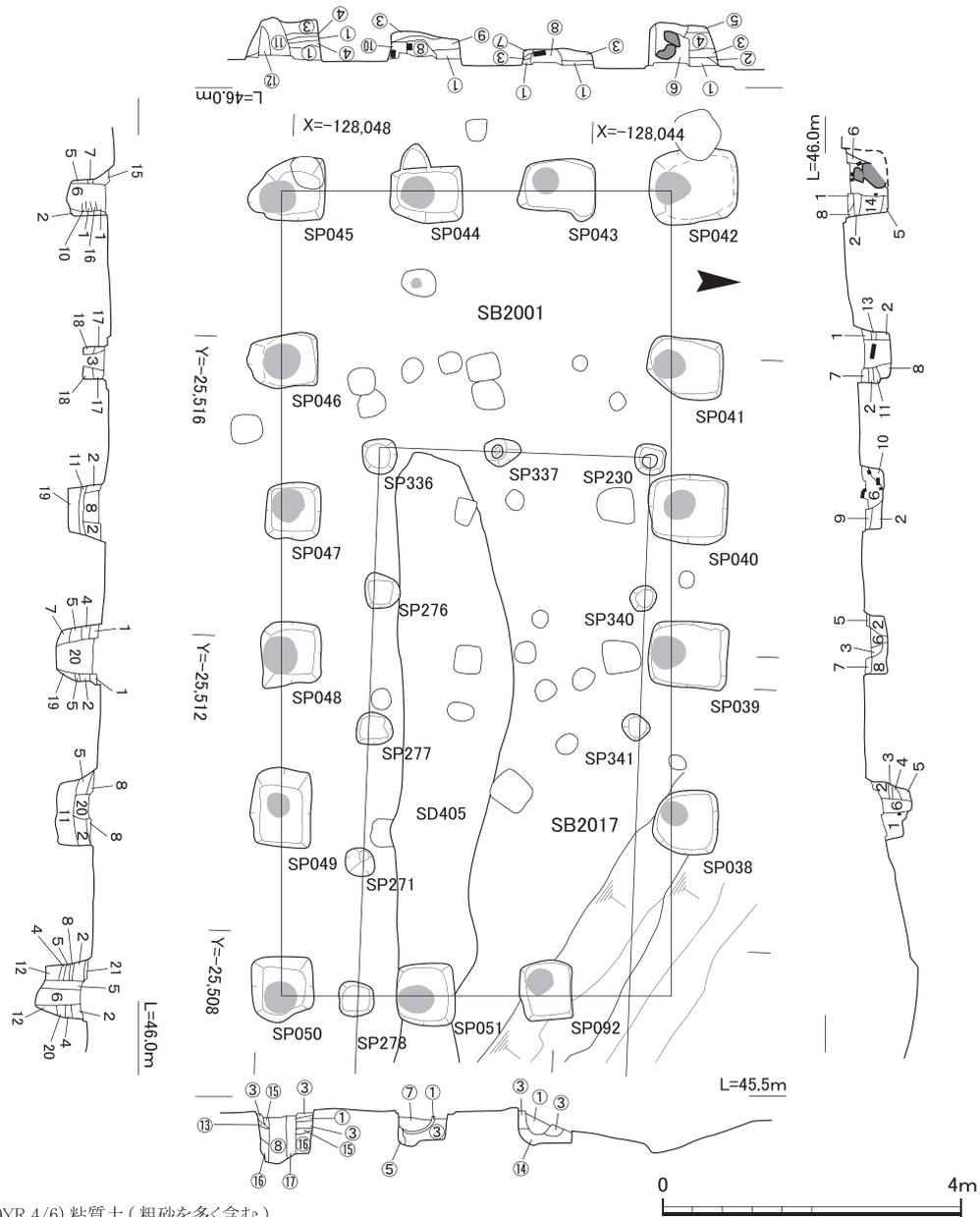
出土遺物や掘立柱建物 S B 2002との位置関係などから第Ⅱ - 2期に位置づけられる。

掘立柱建物 S B 2017 (第31図) 掘立柱建物 S B 2001とほぼ重複して検出した(VIII-k2~4、12~4区)。桁行4間以上(7.3m)、梁行2間(3.7m)の東西棟の建物である。S B 2001の建設に伴う足場穴の可能性も考えられたが、西側の妻を確認したことから、独立した建物と考える。柱穴掘形は一辺0.45m前後の隅丸方形、もしくは直径0.35m前後の円形である。掘形埋土は暗褐色粘質土、にぶい黄褐色砂質土、褐色粘質土、暗褐色粘土などである。柱穴 S P 336で直径0.15mの柱痕を確認した。柱痕埋土は暗褐色粘質土である。建物の方位は北に対して1°西に振る。遺物として須恵器の円面硯の破片や土師器の小片などが出土した(第81図249)。詳細な時期は不明であるが、S B 2001との重複関係や建物の構造などから第Ⅲ - 1期に位置づけられると考える。

掘立柱建物 S B 2002 (第30図) 掘立柱建物 S B 2001の西側に接して検出した(VIII-j5~8、k5~8、15~8区)。桁行5間(9.1m)、梁行3間(4.6m)の東西棟の建物である。桁行の柱間寸法は1.8~2.0m、梁行の柱間寸法は1.6~1.8mである。柱穴掘形は一辺0.7~0.8m前後の正方形で、掘形埋土は極暗褐色砂質土である。また、柱穴 S P 052~055、060・061・063~066では直径0.3~0.4mの柱痕を確認した。柱痕埋土は、S P 052が黒褐色粘質土、S P 053・055・064~066が暗褐色粘質土、柱穴 S P 059~061が土器片を含む黒褐色砂質土である。西側妻の北から2間目の柱穴は境界溝による削平で検出できなかった。なお、柱穴 S P 062は第2次調査で柱穴 S P 234として調査されており、完掘の状態であった。建物の方位は北に対して2°西に振る。遺物の出土量は、ほかの建物に比べてかなり少なく、土師器や須恵器などの破片が出土したにすぎない。また、瓦類は1点も出土しなかった。遺物の出土状況などから、第Ⅰ期に位置づけられる。

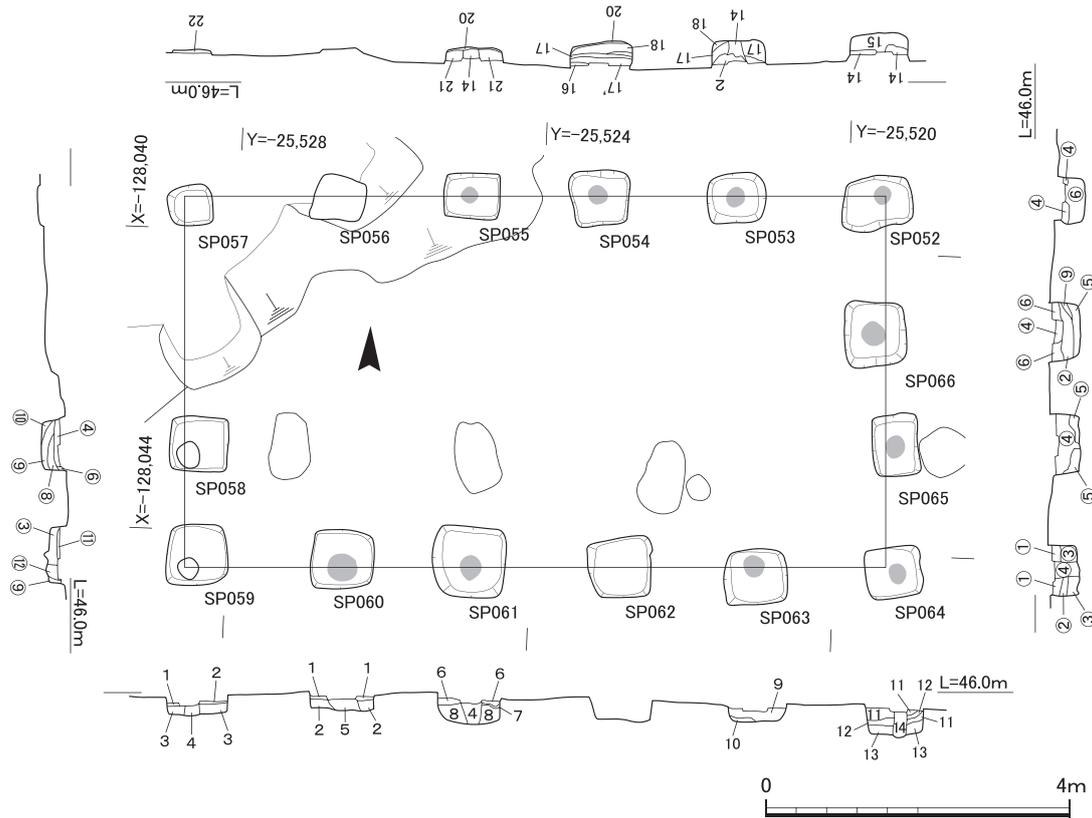
掘立柱建物 S B 2003 (第31図) 掘立柱建物 S B 2002と重複して検出した(VIII-k6~8、15~9区)。桁行5間以上(9.6m以上)、梁行2間(4.8m)の東西棟の建物で、S B 2002と北辺柱筋が重複する。西側妻は境界溝により削平されて検出できなかった。桁行の柱間寸法は2.4~2.5m、梁行の柱間寸法は2.5m等間である。柱穴掘形は長軸0.8~1m前後の楕円形で、掘形埋土は暗褐色土が混じる橙色砂質土、褐色砂質土などである。柱痕を確認できた柱穴はない。また、柱穴 S P 084・085は、第2次調査でそれぞれ柱穴 S P 290・237として調査されたものである。建物の方位は北に対して1.5°東に振る。S B 2002と S B 2003の柱穴に切り合い関係はみられず、新旧関係は確定できない。遺物としては丸瓦片、平瓦片、土師器片、須恵器片などが出土した(第66図65・66、第81図246~248)。建物の方位が S B 2020とおおむね一致することや、梁行が2間であることから、第Ⅲ - 1期に位置づけられる。

掘立柱建物 S B 2004 (第32図) 掘立柱建物 S B 2001の東側に接して検出した(V-k24・25、124・25、VIII-k1・2、11区)。桁行5間(9.2m)、梁行2間(4.5m)の東西棟の建物である。桁行の柱間寸法は1.8m、梁行の柱間寸法は2.2m等間である。柱穴掘形は柱穴 S P 146・147・151・362は一辺0.4~0.5mのほぼ正方形、柱穴 S P 150・153・273は長辺0.6~0.8m、短辺0.5mの歪な長方形、柱穴 S P 274は長軸1.0mの楕円形である。掘形埋土は橙色砂質土、黄褐色粘質土、明褐色粘質土などである。四隅の柱穴 S P 148・149・272・274の柱穴掘形は長辺0.7m、短辺0.4mの長方形で、



- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 褐色 (10YR 4/6) 粘質土 (粗砂を多く含む) 2. 明褐色 (7.5YR 5/8) 砂質土に褐色 (10YR 4/4) 土が混じる 3. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土 (細砂を多く含む) 4. 明褐色 (7.5YR 5/8) 砂質土 5. 褐色 (10YR 4/6) 粘土 6. 暗褐色 (10YR 2/2) 砂質 7. 黄褐色 (10YR 5/8) 砂質 8. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土に暗褐色 (10YR 2/2) 土が混じる 9. 明黄褐色 (10YR 6/8) 砂質土 10. 暗褐色 (10YR 3/4) 粘質土 (粗砂を少量含む) 11. 明褐色 (7.5YR 5/8) 砂質土 12. 暗褐色 (7.5YR 3/4) 砂質土 13. 黄褐色 (10YR 5/6) 粘質土 (粗砂を含む) 14. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土 (粗砂を少量含む) 15. オリーブ褐色 (2.5YR 4/6) 粘質土 (粗砂を含む) 16. 褐色 (10YR 4/6) 砂質土 17. 黄褐色 (10YR 5/6) 粘質土 (粗砂を含む) 18. 褐色 (10YR 4/6) 粘質土 (細砂を含む) 19. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘質土 (細砂を含む) 20. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土 (粗砂を含む) 21. 赤褐色 (やや明) (5YR 4/8) 砂質土 | <ol style="list-style-type: none"> ①. 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質土に褐色 (10YR 4/4) 土が混じる ②. 橙色 (5YR 6/8) 砂質土 ③. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土ににぶい黄褐色 (10YR 4/3) 土が混じる ④. 明褐色 (7.5YR 5/8) 砂質土 (細砂を含む) ⑤. 褐色 (10YR 4/6) 粘質土 (粗砂を多く含む) ⑥. 暗褐色 (10YR 3/3) 砂質土 ⑦. 褐色 (10YR 4/6) 砂質土 ⑧. 暗褐色 (10YR 3/4) 砂質土 ⑨. 明黄褐色 (10YR 6/8) 砂質土 ⑩. 黒褐色 (10YR 2/3) 砂質土 ⑪. 褐色 (10YR 4/6) 砂質土 ⑫. 暗褐色 (7.5YR 3/4) 砂質土 ⑬. 黄褐色 (10YR 5/6) 砂質土 ⑭. 橙色 (7.5YR 6/8) 粘質土 (粗砂を多く含む) ⑮. 褐色 (10YR 4/4) 砂質土 ⑯. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘土 (粗砂を少量含む) ⑰. 黄褐色 (10YR 5/8) 砂質土 |
|--|---|

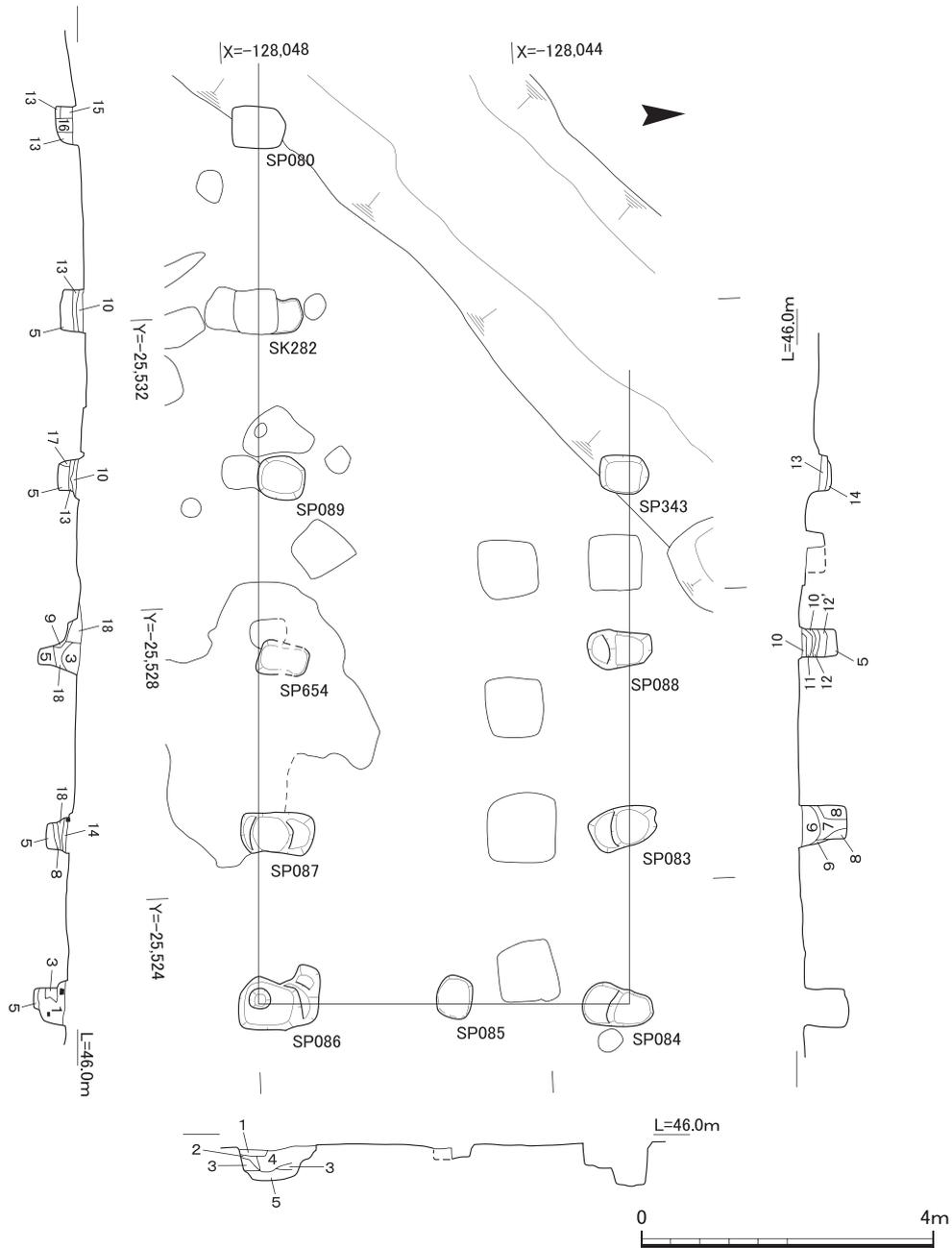
第29図 掘立柱建物 S B 2001実測図 (1/100)



- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 極暗褐色 (7.5YR 2/3) 砂質土 2. 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘質土に暗褐色 (10YR 3/3) 土が混じる (細砂を含む) 3. 褐色 (10YR 4/6) 粘土 4. オリーブ褐色 (2.5Y 4/6) 粘質土 (細砂を含む) 5. 黒褐色 (10YR 2/3) 砂質土 (土器片を含む) 6. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土 7. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘質土ににぶい黄褐色 (10YR 4/3) 土が混じる (粗砂を多く含む) 8. 暗褐色 (10YR 3/3) 砂質土 (0.5 ~ 1cmの小石、土器片を含む) 9. 黄褐色 (2.5Y 5/6) 砂質土 10. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘質土 (細砂を含む) 11. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土に暗褐色 (10YR 4/4) 土が混じる (細砂を含む) 12. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土 (0.2cm 程度の小石を含む) 13. 褐色 (10YR 4/6) 粘土 14. 暗褐色 (10YR 3/4) 粘質土 (細砂を含む) 15. 黒褐色 (10YR 2/3) 粘質土 (細砂を含む) 16. 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘質土に黒褐色 (7.5YR 2/2) 土が多く混じる 17. 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘質土に暗褐色 (10YR 3/4) 土が混じる (細砂を含む) 18. 明赤褐色 (2.5YR 5/8) 粘土に暗褐色 (10YR 3/4) 土が混じる (細砂を少量含む) | <ol style="list-style-type: none"> 19. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘質土に暗褐色 (10YR 3/4) 土が混じる (細砂を少量含む) 20. 明赤褐色 (2.5YR 5/8) 粘土 (地山) 21. 黒褐色 (10YR 2/2) 砂質土 22. 明赤褐色 (2.5YR 5/8) 砂質土ににぶい黄褐色 (10YR 4/3) 土が混じる ①. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土に暗褐色 (10YR 4/4) 土が混じる (細砂を含む) ②. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土 (0.2cm 程度の小石を含む) ③. 褐色 (10YR 4/6) 粘土 ④. 暗褐色 (10YR 3/4) 粘質土 (細砂を含む) ⑤. 褐色 (10YR 4/6) 砂質土 ⑥. 黒褐色 (10YR 2/3) 粘質土 (細砂を含む) ⑦. 明褐色 (7.5YR 5/6) 砂質土 ⑧. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘質土 (細砂を含む) ⑨. 明赤褐色 (5YR 5/8) 粘土 (細砂を少量含む) ⑩. 橙色 (5YR 6/8) 粘土 (地山) ⑪. 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘質土に暗褐色 (10YR 3/3) 土が混じる (細砂を含む) ⑫. オリーブ褐 (2.5YR 4/6) 粘質土 (細砂を含む) |
|---|---|

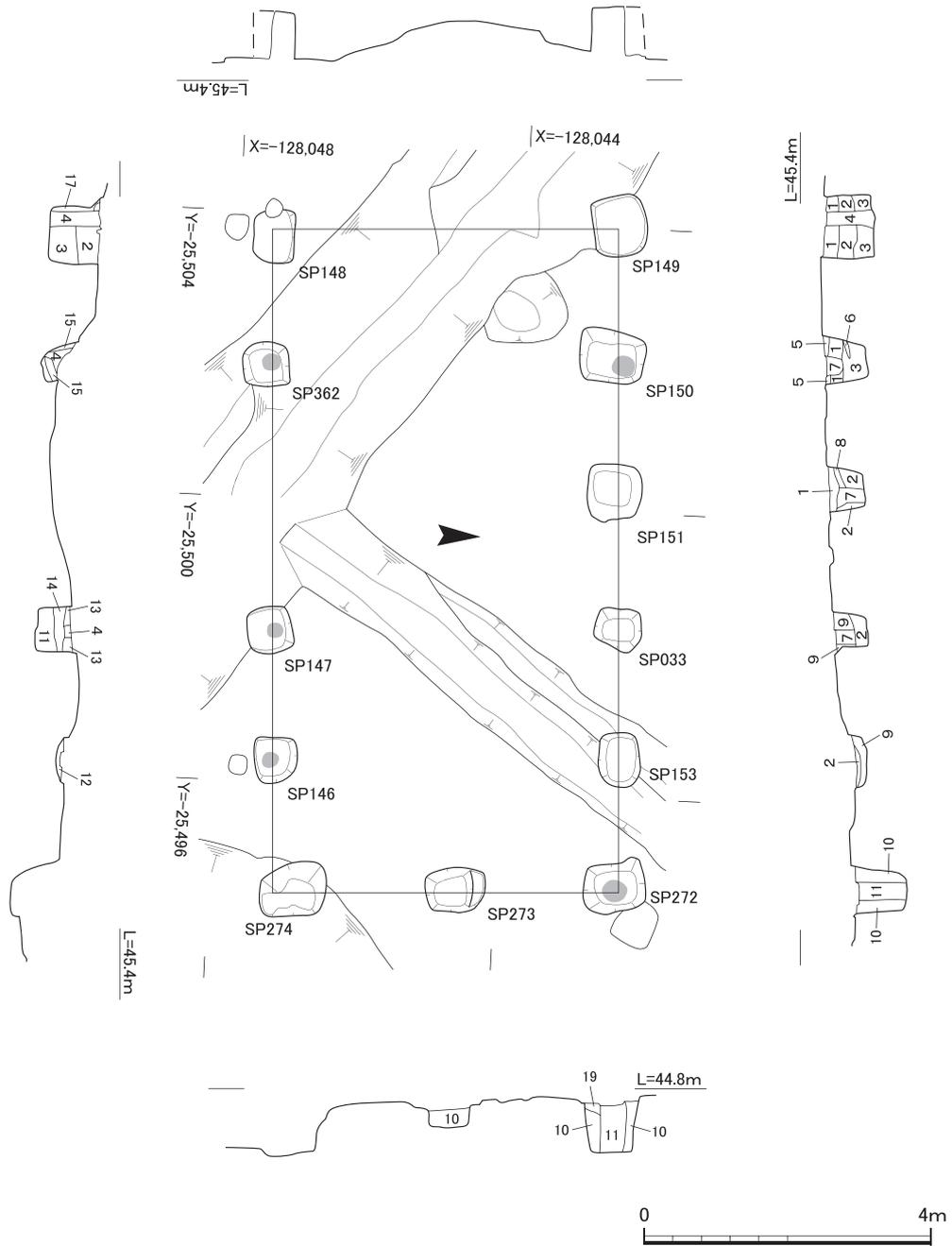
第30図 掘立柱建物 S B 2002実測図 (1/100)

遺構検出面からの深さ0.6~0.7mとかなり深く掘られている。また、柱穴 S P 148~150・272・362では直径0.2~0.4mの柱痕を確認した。柱痕埋土は灰褐色粘質土、にぶい黄褐色砂質土、黄褐色粘質土などである。西側妻の中央の柱穴と、南側柱列の西から3個目の柱穴は境界溝によって削平されており、検出できなかった。建物の方位は北に対して2.5°西に振る。遺物として土師器小片や平瓦などが出土したが、出土量は少なめである。ただ、S P 148の柱痕から平瓦がやや多く出土した(第66図67~69)。出土遺物は少ないが、建物が梁行2間であることから第三 - 1期に



- | | |
|--|---|
| <p>1. 橙色 (5YR 6/8) 砂質土 (暗褐色 (10YR 3/3) 砂質土が混じる)</p> <p>2. 暗褐色 (10YR 3/4) 粘質土 (細砂・土器片を含む)</p> <p>3. 橙色 (5YR 6/8) 砂質土
(暗褐色 (10YR 3/4) 砂質土が混じる、細砂を含む)</p> <p>4. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土 (微砂・土器片を含む)</p> <p>5. 褐色 (10YR 4/4) 粘質土 (細砂を含む)</p> <p>6. 褐色 (10YR 4/6) 砂質土 (土器片を含む)</p> <p>7. 明褐色 (7.5YR 5/8) 砂質土
(褐色 (10YR 4/6) 砂質土が混じる、2cm 程度の小石を含む)</p> <p>8. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘質土
(にぶい黄褐 (10YR 5/4) 粘質土が混じる、粗砂を含む)</p> <p>9. 明赤褐色 (2.5YR 5/8) 粘土 (地山)</p> | <p>10. 明黄褐色 (10YR 7/6) 土に黄色 (2.5Y 5/3) 土が混じる</p> <p>11. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘質土 (粗砂を含む)</p> <p>12. 褐色 (10YR 4/6) 砂質土
12' 粒が少し粗い</p> <p>13. 橙色 (7.5YR 6/8) 砂質土ににぶい黄褐色土 (10YR 5/4) が混じる</p> <p>14. 橙色 (7.5YR 6/8) 粘土</p> <p>15. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土</p> <p>16. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土</p> <p>17. 黄褐色 (10YR 5/6) 砂質土に褐色 (10YR 4/4) 土が混じる</p> <p>18. 褐色 (10YR 4/4) 砂質 (粒はかなり細かい)</p> |
|--|---|

第31図 掘立柱建物 S B 2003実測図 (1/100)

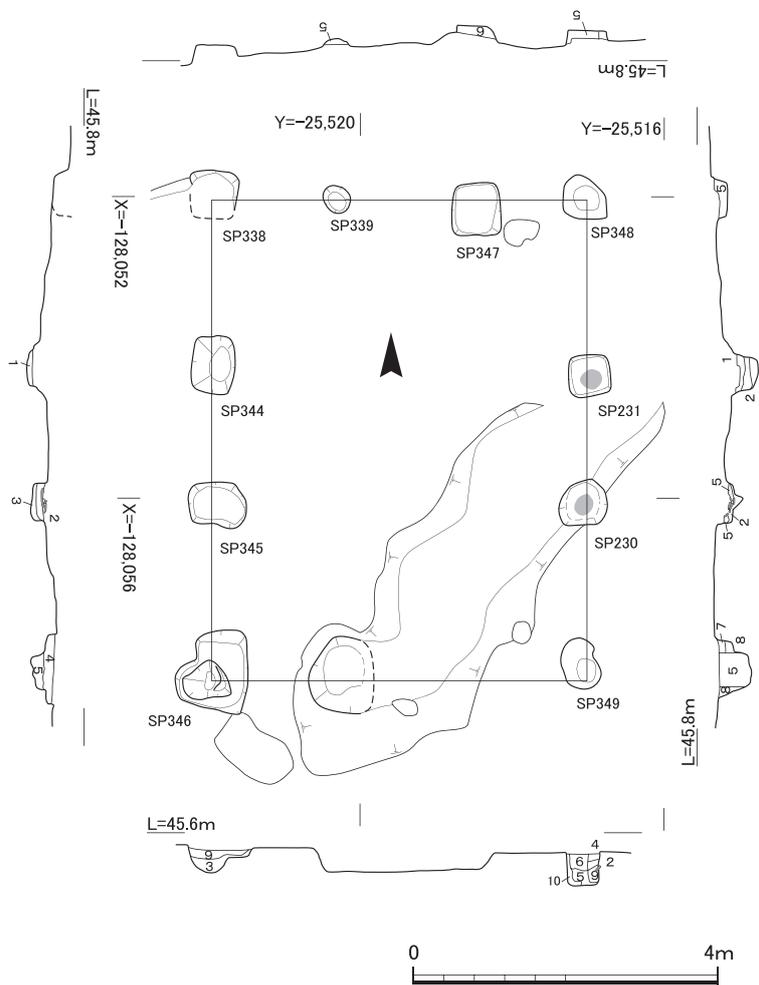


- | | |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 橙色 (7.5YR 7/6) 砂質土 (1cmの小石や砂礫を含む) 2. 橙色 (5YR 6/8) 粘質土 (細砂を含む) 3. にぶい橙色 (7.5YR 7/4) 粘質土 (極細砂を少量含む) 4. 灰褐色 (7.5YR 5/2) 粘質土
(粗砂、2~3cmの小石が混じる) 5. 橙色 (5YR 6/8) 砂質土 (1~2cmの小石、砂礫を含む) 6. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘質土 (細砂を含む) 7. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土 8. 明黄褐色 (10YR 6/6) 砂質土 (0.5~1cmの小石を含む) 9. 橙色 (7.5YR 6/8) 砂質土 (2cm程度の小石を多く含む) | <ol style="list-style-type: none"> 10. 黄橙色 (10YR 7/6) 粘質土 (細砂を含む) 11. 黄褐色 (10YR 5/6) 粘質土 (極細砂を含む) 12. 褐色 (10YR 4/4) 砂質土と明赤褐色 (5Y 5/6) 砂質土の互層 13. 橙色 (7.5YR 6/8) 粘質土に黄褐色 (10YR 5/6) 土が混じる 14. 褐色 (10YR 4/6) 粘質土 (極細砂を含む) 15. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘質土 16. 黄褐色 (7.5YR 7/8) 粘土 (極細砂を含む) 17. 2と3が混じる 18. 褐色 (10YR 4/4) 砂質土 19. にぶい橙色 (7.5YR 7/4) 粘質土 (極細砂を含む) |
|---|--|

第32図 掘立柱建物 S B 2004実測図 (1/100)

位置づけられると考える。

掘立柱建物 S B 2016 (第33図) 調査地中央部、掘立柱建物 S B 2001・2002の南側で検出した (Ⅷ - m5・6、n5・6、o5・6区)。桁行3間 (6.3m)、梁行3間 (4.9m)の南北棟の建物である。桁行の柱間寸法は2.2m等間、梁行の柱間寸法は1.5~1.6mである。柱穴掘形は長辺0.6~0.7m、短辺0.5mの長方形である。掘形埋土は橙色粘土、明黄褐色粘土、褐色粘土、黄褐色砂質土などである。柱穴 S P 230・231で直径0.3mの柱痕を確認した。柱痕埋土は褐色粘土ないし黄褐色土である。建物の方位は南北である。遺物として平瓦や土師器の小片などが出土した。特に柱穴 S P 230と柱穴 S P 345から平瓦が多く出土した (第65図63・64)。出土遺物や梁行が3間であることから第Ⅱ - 2期に位置づけられる。



1. 黄橙色 (7.5YR 7/8) 砂質土
2. 橙色 (2.5YR 6/8) 粘土 (細砂を少量含む)
3. 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘土 (細砂を含む)
4. 橙色 (5YR 6/8) 粘質土に褐色 (10YR 4/6) 土が混じる (細砂を含む)
5. 褐色 (10YR 4/6) 粘土
6. 黄褐色 (10YR 5/6) 粘質土 (粗砂を含む)
7. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質土
8. 橙色 (5YR 6/8) 土に7が混じる
9. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土 (細砂が混じる)
10. 浅黄色 (2.5Y 7/4) 粘質土 (細砂が混じる)

第33図 掘立柱建物 S B 2016実測図 (1/100)

掘立柱建物 S B 2018 (第34

図) 掘立柱建物 S B 2016の西側で検出した (Ⅷ-m8・9、n8・9、o8区)。桁行3間以上 (5.2m以上)、梁行2間 (4.1m)の南北棟の建物である。柱穴掘形は柱穴 S P 332・333は長径1.0mほどの歪な円形で、柱穴 S P 307~309・334・335は長辺約0.8m、短辺約0.4mの長方形を呈する。掘形埋土は、黄褐色土が混じる明褐色粘質土、黒褐色土が混じる明褐色粘質土、暗褐色粘質土、オリブ黄色粘土などである。建物の南側は調査対象地外に延びるため不明である。建物の方位は北に対して2°東に振る。遺物として土師器の小片などが出土したものの、瓦類は出土していない。梁行が2間であることや建物方位から第Ⅲ - 1期と推定される。

掘立柱塀 S A 2101 (第35図) 北部と中央部を区切るようにして S B 2004の北側で

検出した(VIII - i25・k25、V - k1・2)。5基の柱穴が並ぶ検出長7.2mの東西方向の掘立柱塀である。柱間寸法は2.0m等間である。柱穴掘形は直径約0.5mの円形で、深さは0.1~0.2mである。塀の方位は北に対して5.5°西に振る。遺物は出土しなかった。検出状況から第Ⅱ期に位置づけられる可能性が高い。

(山崎美輪・筒井崇史)

溝 S D 405 (第29図) 掘立柱建物 S B 2001と重複して検出した(VIII-12~4区)。切り合い関係から S D 405の方が先行する。検出長9.3m、幅1.0~1.4m、深さ0.15m前後で、東西方向に延びる。埋土は褐色ないし黄褐色粘質土である。遺物として細片化した平瓦、土師器、須恵器などが出土した(第81図252)。平瓦にはH-A類が含まれる。S D 405の溝としての機能は不明である。出土遺物や切り合い関係から第Ⅱ-1期に位置づけられると考える。

土坑 S K 092 (第36図) 掘立柱建物 S B 2003と重複して検出した(VIII-17・m7区)。遺構の切り合い関係から S K 092の方が新しい。平面形は不整形な楕円形で、浅い落ち込み状を呈する。長軸3.8m、短軸2.8m、深さ0.1m前後である。埋土は褐色ないし明褐色粘質土を主体とする。遺物として細片化した瓦類、土師器、須恵器、製塩土器などが出土した(第81図250・251)。遺構の切り合い関係から第Ⅲ-2期以降に位置づけられる。

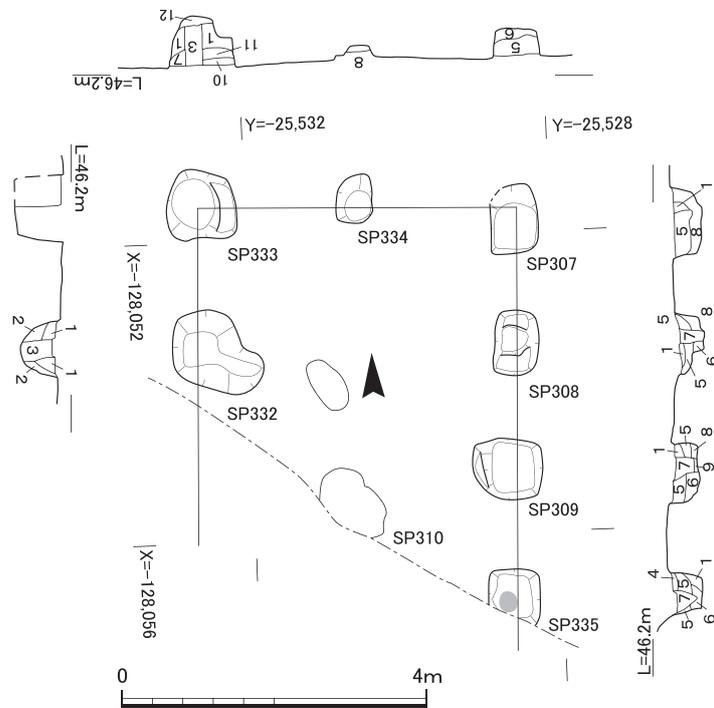
(筒井崇史)

(5)西部

VIII地区10列よりも西側、VIII地区p列よりも北側の範囲である。ここでは、総柱建物1棟、土坑8基、柱穴約60基などを検出した(第37図)。北部や中央部とは異なり、建物は総柱建物1棟のみ(S B 2009)である。ここでは建物としてまとまらない柱穴群や土坑などを多数検出した。

総柱建物 S B 2009 (第38図)

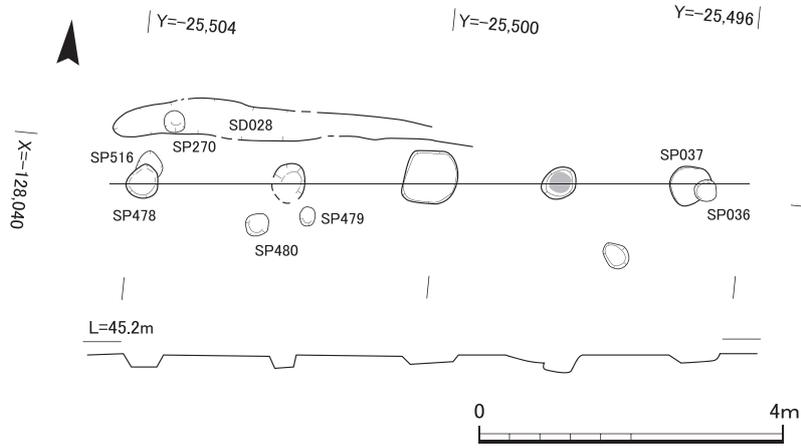
調査区西部で検出した(VIII - k12



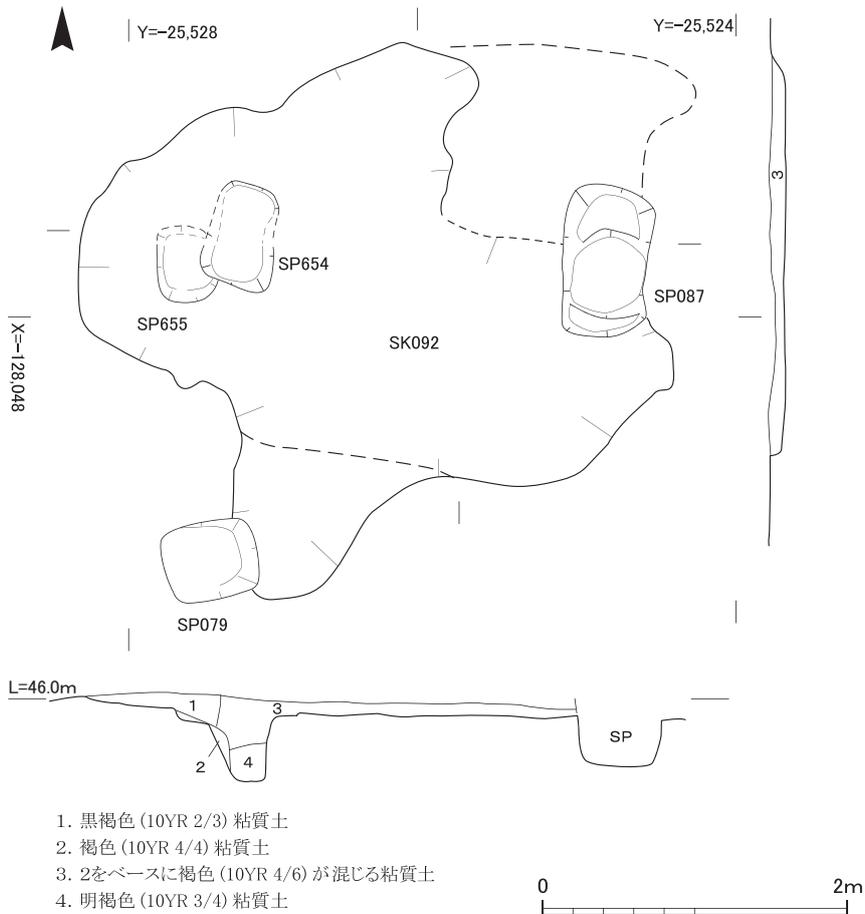
1. 明褐色(7.5YR 5/8)粘質土に黄褐色(10YR 5/8)土が混じる(細砂を含む)
2. 褐色(10YR 4/6)粘土(粗砂を含む)
3. 暗褐色(10YR 3/3)粘質土(細砂を含む)
4. 明赤褐色(5YR 5/8)粘土
5. 明褐色(7.5YR 5/8粘質土に黒褐色(10YR 2/3)土が混じる(細砂を含む)
6. 明赤褐色(5YR 5/8)粘土に黄褐色(10YR 5/6)土が混じる
7. 黒褐色(10YR 3/1)粘質土(粗砂を含む)
8. 暗褐色(10YR 3/4)粘質土(粗砂を含む)
9. オリーブ黄色(7.5Y 6/3)粘土
10. 橙色(7.5YR 6/8)土に11が混じる
11. 明黄褐色(10YR 6/8)砂質土
12. 9に明赤褐色(5YR 5/8)が混じる(粗砂が混じる)

第34図 掘立柱建物 S B 2018実測図(1/100)

～14、112～14、m12～14区)。東西3間(5.9m)、南北2間(5.0m)の総柱建物である。S B 2009は第3次調査の際に総柱建物S B 302として調査が行われている。当時の調査で確認されていた柱穴はすべて半截の上、埋め戻されていた。今回の調査で新たに確認した柱穴や全容を明らかにできた柱穴はS P 358・359・411である。柱間寸法は東西方向2.0m、南北方向2.2mである。柱穴掘



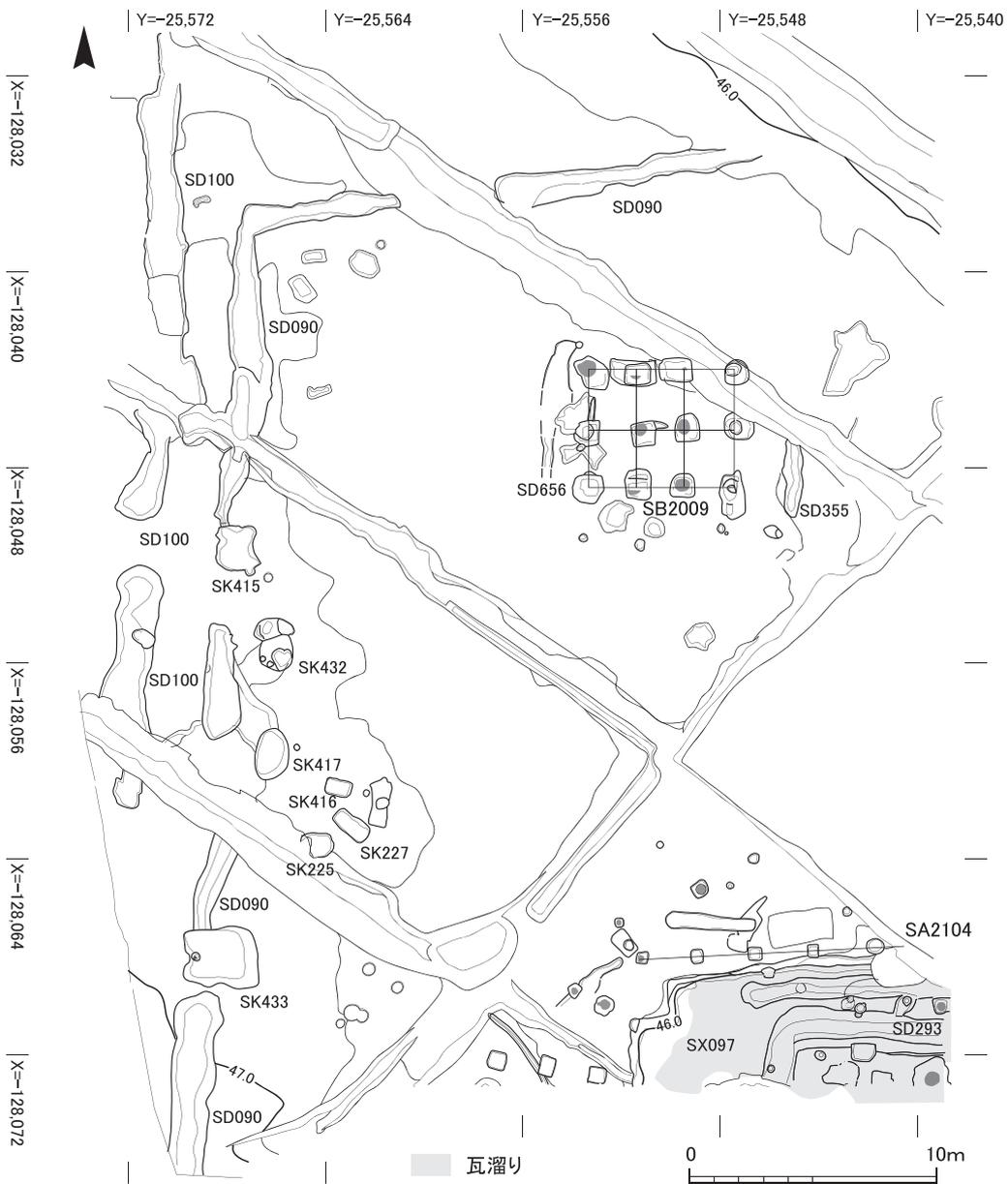
第35図 掘立柱塀 S A 2101実測図(1/100)



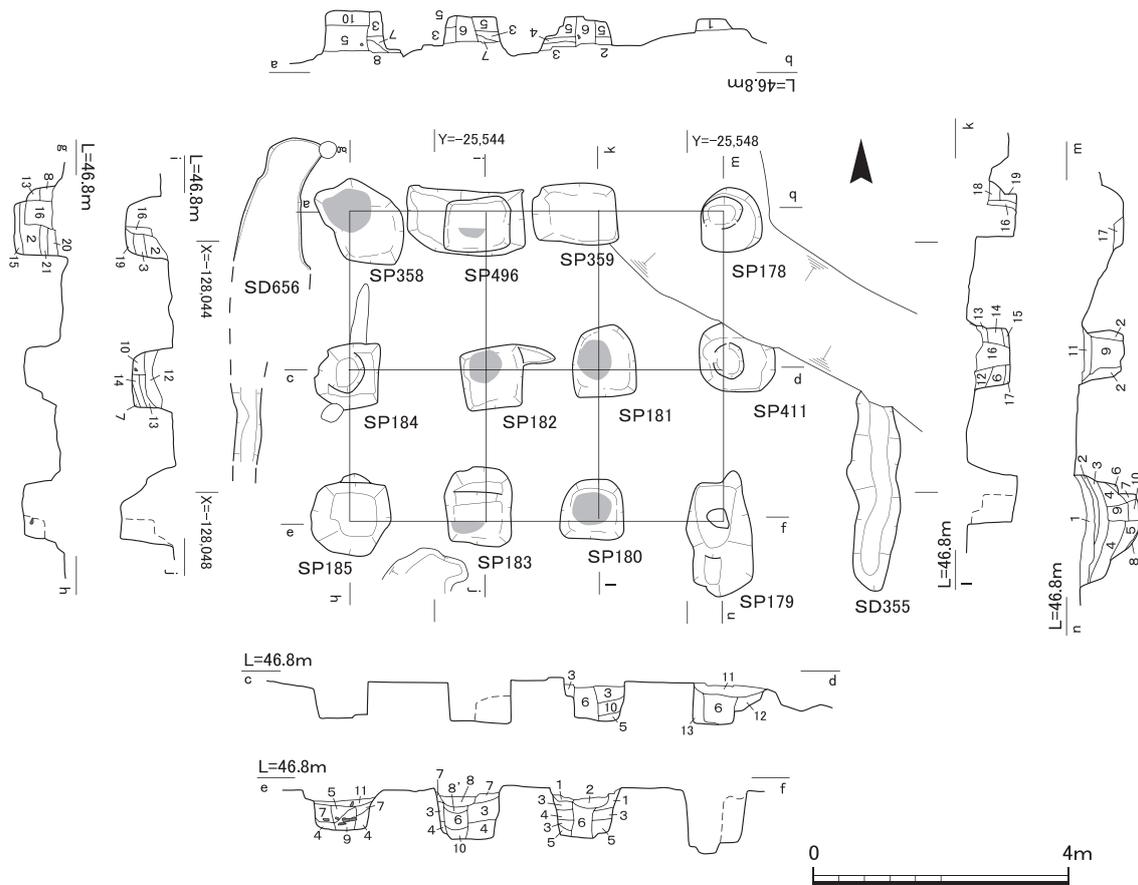
1. 黒褐色(10YR 2/3)粘質土
2. 褐色(10YR 4/4)粘質土
3. 2をベースに褐色(10YR 4/6)が混じる粘質土
4. 明褐色(10YR 3/4)粘質土

第36図 土坑 S K 092実測図(1/50)

形は一辺約0.9mの正方形のものと、長辺1.2m、短辺0.9mの長方形あるいは楕円形のものがある。掘形埋土は、明赤褐色土が混じる黄褐色砂質土、暗褐色粘質土、明赤褐色砂質土などである。直径約0.3mの柱痕を確認した。柱痕埋土は、暗褐色粘質土、明赤褐色土が粒状に混じる黄褐色粘土で、柱痕には多くの平瓦が落ち込んでいた。建物の方位は南北である。柱穴の断面を観察すると、柱痕の上に0.2~0.4mの土が堆積していることから、建物の柱材を途中で切っていると推測される。柱穴S P 185の最上層からは平瓦H-D類が出土している。S B 2009は、西部に単独で1棟のみ建てられていることや、他の建物にくらべてやや大型の柱穴で構成されていることから、ほかの総柱建物とは異なった役割を担っていたと考える。出土遺物としては、土師器や須恵器の破片のほか、大量の瓦類が出土した。なお、出土遺物や遺構の立地などから第Ⅱ-1期から第Ⅱ-2期に位置づけられる。(山崎美輪・筒井崇史)



第37図 西部全体図(1/300)



＜南北方向断面＞

1. 黄褐色 (10YR 5/6) 砂質土に赤褐色 (2.5YR 4/8) 土が混じる
2. 黄褐色 (10YR 5/6) 砂質土に明赤褐色 (5YR 5/8) 土が混じる
3. 褐色 (10YR 4/4) 粘質土に明赤褐色 (5YR 5/8) が粒状に混じる
4. 明黄褐色 (10YR 6/6) 粘土に暗褐色 (10YR 3/4) 土が混じり、明赤褐色 (2.5YR 5/8) 土を粒状に含む
5. 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘土に暗褐色 (10YR 3/4) 土と明赤褐色 (2.5YR) 土が混じる
6. 明赤褐色 (2.5YR 5/8) 粘質土にぶい黄褐色 (10YR 4/3) が混じる
8. 明赤褐色 (2.5YR 5/8) 粘質土に褐色 (10YR 4/6) が混じる
8. 黄褐色 (10YR 5/6) 砂質土に褐色 (10YR 4/4) 土が混じる
9. 黄褐色 (2.5YR 5/6) 粘土に明赤褐色 (5YR) が粒状に混じる粘土
10. 黄褐色 (10YR 5/6) 粘土
11. 黄褐色 (2.5YR 5/3) 砂質土
12. 黒褐色 (10YR 2/2) 粘質土と明赤褐色粘質土 (5YR 5/8) が交互に縷状になる
13. 橙色 (5YR 6/8) 粘質土
14. 明黄褐色 (10YR 6/6) 粘質土
15. 暗褐色 (10YR 3/4) 粘土
16. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘質土
17. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘質土に灰黄褐色 (10YR 4/2) 土が混じる (粗砂を多く含む)
18. 橙色 (7.5YR 6/8) 粘質土
19. 褐色 (10YR 4/6) 粘質土に明赤褐色 (5YR 5/8) 土が粒状に混じる
20. 黄褐色 (10YR 6/6) 粘質土に明赤褐色 (2.5YR 5/8) が少し混じる
21. 明赤褐色 (2.5YR 5/8) 砂質土

＜東西方向柱列① a-b、c-d 断面＞

1. 明褐色 (7.5YR 5/8) 粘質土に灰黄褐色 (10YR 4/2) が混じる (粗砂を多く含む)
2. 橙色 (7.5YR 6/8) 粘質土 (粗砂を含む)
3. 黄褐色 (10YR 5/6) 粘質土に明赤褐色 (5YR 5/8) 土を粒状に含む
4. 明赤褐色 (5YR 5/8) 粘質土
5. 褐色 (10YR 4/6) 粘質土に明赤褐色 (5YR 5/8) 土が粒状に混じる
6. 暗褐色 (10YR 3/3) 粘土
7. 褐色 (10YR 4/4) 粘質土
8. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘土
9. 明赤褐色 (2.5YR 5/8) 粘質土 (粗砂を多く含む)
10. 褐色 (10YR 4/4) 粘土に明赤褐色 (5YR 5/8) が粒状に混じる
11. 黄褐色 (7.5YR 7/8) 砂質土 (0.5cm 程度の小礫を含む)
12. 橙色 (5YR 6/8) 粘質土 (0.5 ~ 1cm の小礫を含む)
13. 明赤褐色 (5YR 5/8) 粘質土に褐色 (10YR 4/4) が混じる

＜東西方向柱列② e-f 土層断面＞

1. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土
2. 明黄褐色 (10YR 6/8) 粘質土に褐色 (10YR 5/8) 土が混じる
3. 明赤褐色 (5YR 5/8) 粘土
4. 明赤褐色 (5YR 5/8) 粘土に黄褐色 (10YR 5/8) が混じる
5. 褐色 (7.5YR 4/6) 粘質土 (粘り気が強い)
6. 褐色 (10YR 4/4) 粘土に明赤褐色 (5YR 5/8) が粒状に混じる
7. 黄褐色 (10YR 5/8) 粘質土に黒褐色 (10YR 3/2) 土が混じり、明赤褐色 (5YR 5/8) を粒状に含む
8. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘質土 8' 粘土
9. 褐色 (10YR 4/6) に明赤褐色 (5YR 5/8) が粒状に混じる粘土
10. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粘質土
11. 黄褐色 (10YR 5/6) 粘質土

第38図 総柱建物 S B 2009実測図 (1/120)

溝 S D 355 (第38図) 総柱建物 S B 2009の東側1.6mで検出した(VIII-l12・m12区)。S B 2009の東側雨落ち溝と推定される。S D 355は第4次調査の溝状遺構 S X 467として報告されているもので、今回の調査では北への延長部をわずかに検出した。検出長3.2m、幅0.7m前後、深さ0.15m前後である。埋土は上層がオリーブ褐色土、下層が浅黄色砂質土である。出土遺物としては平瓦、土師器などがあり、平瓦の主体はH-A類である。S B 2009と同時期の第Ⅱ-1期から第Ⅱ-2期に位置づけられる。

溝 S D 656 (第38図) 総柱建物 S B 2009の西側0.7mで検出した(VIII-k14・l14区)。S B 2009の西側雨落ち溝と推定される。S D 656は第3次調査の溝 S D 351として報告されているもので、今回の調査では北への延長部を検出した。検出長5.3m、幅0.4~1.0m、深さ0.05m前後である。埋土はにぶい黄褐色土である。出土遺物としては丸瓦、平瓦があり、平瓦にはH-A類が含まれる。S B 2009と同時期の第Ⅱ-1期から第Ⅱ-2期に位置づけられる。

土坑 S K 415 (第39図上) 区画溝 S D 090-3の南端に接して検出した(VIII-m17区)。両遺構の検出状況から S D 090-3よりも S K 415が新しい。平面形はやや歪な隅丸方形を呈し、長軸1.8m、短軸1.5~1.6m、深さ0.2mである。埋土は上層が灰黄褐色土、下層がにぶい黄色土である。遺物はおもに上層から出土しており、覆鉢形土製品1点(第88図399)、平瓦24点、丸瓦5点がある。いずれも破片である。このほか、大型の角礫が複数出土した。これらの出土遺物や切り合い関係から第Ⅱ-1期ないし第Ⅱ-2期に位置づけられる。

土坑 S K 433 (第39図下) 区画溝 S D 090-5の北側で検出した(VIII-q17・18、r17・18区)。平面形は東西方向にやや長い隅丸長方形を呈し、長軸2.9m、短軸2.4m、深さ0.2m前後である。埋土は褐色粘質土である。遺物として丸瓦、平瓦、土師器杯、須恵器甕などが出土しており(第82図256~258)、平瓦にはH-A類やH-C2類などが認められる。出土遺物から第Ⅱ-1期ないし第Ⅱ-2期に位置づけられる。

焼土坑 S K 225 (第40図左上) 土坑 S K 433の北東約4mで検出した(VIII-p16・17区)。平面形は東西方向にやや長い楕円形を呈すると思われるが、境界溝によって南西側が削平されている。残存する長軸1.3m、短軸1.0m、深さ0.2mである。埋土は上層がにぶい黄褐色土、下層が炭を多量に含む黒褐色土である。土坑の壁面の周囲が若干赤く変色していた。遺物として平瓦、土師器、須恵器鉢Dなどが出土した(第82図253~255)。

焼土坑 S K 227 (第40図右上) 土坑 S K 225の北西側にほぼ接して検出した(VIII-p16区)。平面形は長方形を呈し、長辺1.6m、短辺0.75m、深さ0.2mである。埋土は大きく3層に分かれ、上層は炭が若干混じるオリーブ褐色土、中層が明褐色土、下層が炭を多量に含む黒褐色土である。北西側の掘形壁面がやや赤く変色していた。遺物として瓦類、土師器などが出土したが、いずれも小破片で出土量も少ない。

焼土坑 S K 416 (第40図下) 土坑 S K 227の北側にほぼ接して検出した(VIII-p16区)。平面形は長方形を呈し、長辺1.1m、短辺0.65m、深さ0.2mである。埋土は大きく3層に分かれ、上層が炭が若干混じる暗灰黄色土、中層が明黄褐色土、下層が炭を多量に含む黒褐色土である。土坑の

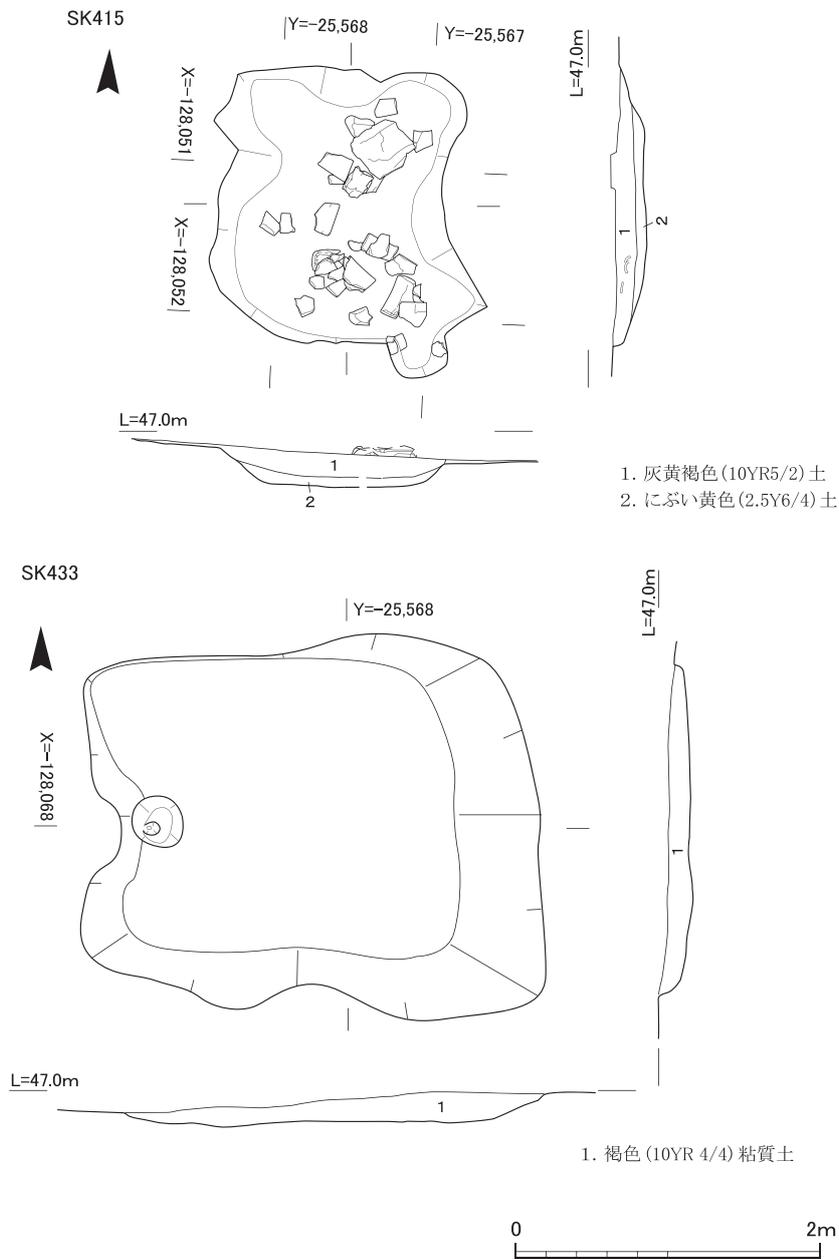
壁面の周囲が若干赤く変色していた。遺物としては、平瓦の破片がわずかに出土したのみである。以上の3基の焼土坑は、検出状況から炭窯の可能性が高いと考える。また、詳細な時期は不明であるが、第Ⅱ期ないし第Ⅲ期であろう。

土坑SK417 区画溝SD090-4の南端から南東に1.3mで検出した(Ⅷ-o17・18区)。平面形は楕円形を呈し、長軸2.1m、短軸1.4m、深さ0.2mである。埋土は上層が褐色粘質土、下層が黄褐色粘質土である。遺物として平瓦、土師器などの破片が出土した。

(筒井崇史)

(6)南部

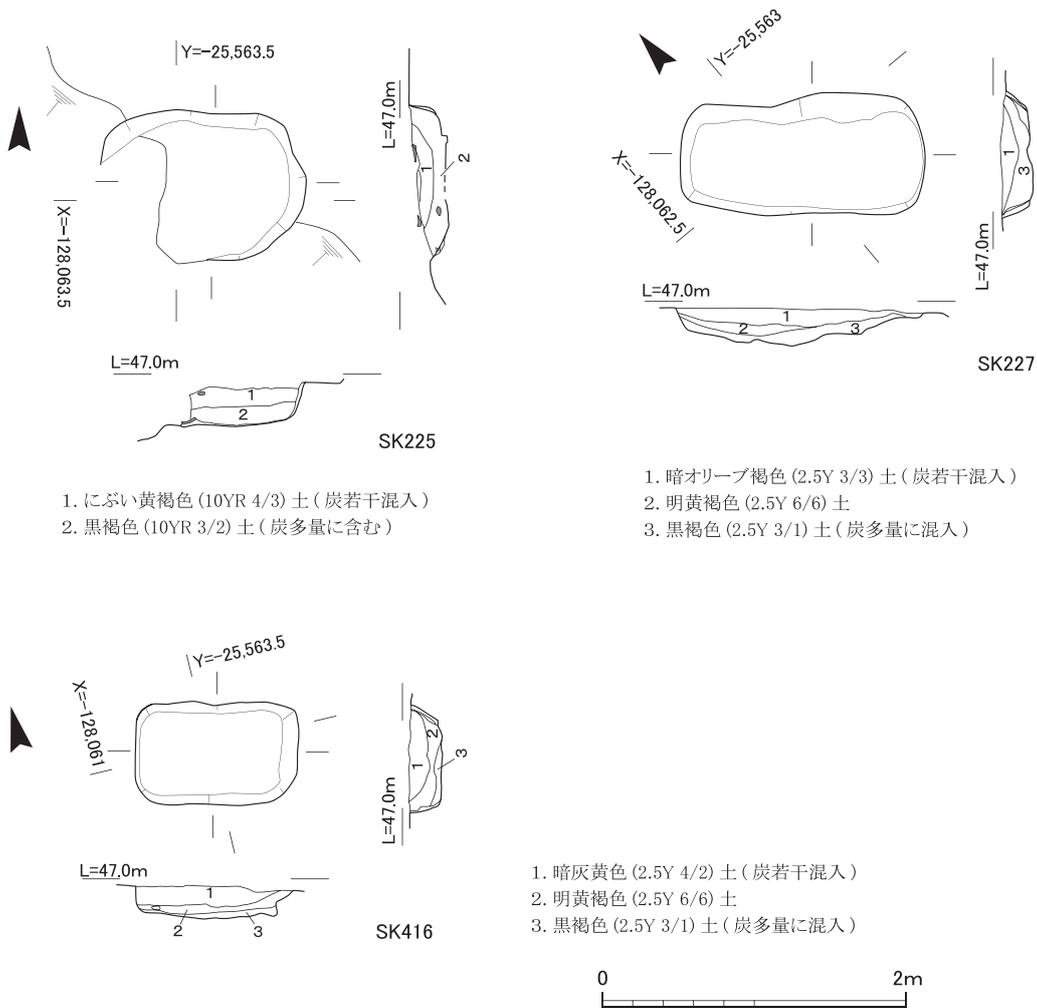
中央にある調査対象地外よりも南側の範囲である。ここでは礎石・掘立柱併用建物1棟、それ



第39図 土坑SK415・433実測図(1/50)

に伴う区画2か所、同じく雨落ち溝1条、掘立柱建物1棟、土坑2基、柱穴50基以上、瓦溜り2か所などを検出した(第41図)。南部では掘立柱建物が少ないものの、瓦溜りや瓦類が厚く堆積した遺構などを検出しており、この地点に瓦葺きの建物があったことを想像させる。

礎石・掘立柱併用建物 S B 2020 (第42～47図) 中央に残る調査対象地外のすぐ南側で検出した(VIII-k12～14、l12～14、m12～14区)。建物の一部は調査対象地外に延びているため、その全容は明らかにできなかった。桁行6間以上(21.2m以上)、梁行は身舎2間(5.1m)に南北に廂が1間(2.6m)ずつ取り付く、二面廂の東西棟建物である。建物の方位は北に対して2.5°東に振る。遺物は各柱穴から多数出土したが、詳細は後述する。柱穴から出土した遺物のほか、S B 2020に伴う雨落ち溝 S D 293や区画 S X 097から出土した瓦類などから、S B 2020は第三 - 1期に位置づけられる。建物の性格については明らかにし得ないが、他の遺構との配置状況から講堂の可能性がある。この建物の特徴は身舎・廂ともに柱の据え付け方法として、礎石立ち柱と掘立柱を交互に配列している点にある。礎石立ち柱は、深さが0.35～0.45mの礎石の据え付け穴を、遺構面が良好に遺存していた北西部において3基検出したのみである。礎石据え付け穴は礎石を固定するため



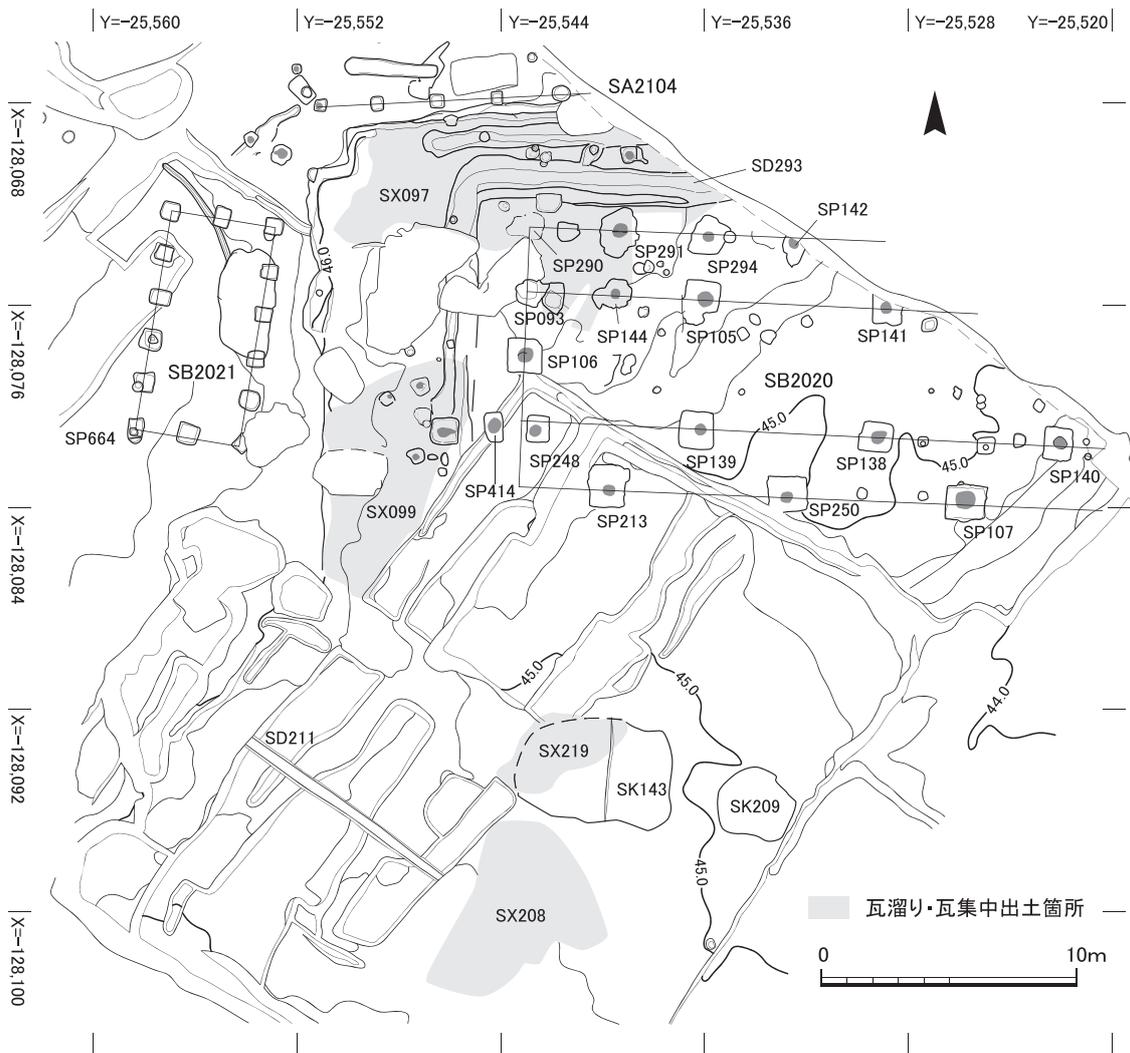
第40図 焼土坑 S K 225・227・416実測図(1/50)

の根石を確認したが、礎石そのものは遺存していなかった。なお、建物周辺ならびに第7次調査地あるいは第6次調査地のいずれにおいても、礎石や礎石の破片と思われる石材を確認することはできなかった。

これに対して掘立柱は、柱穴の深さが最大で1.3m前後に達するもので、遺構の遺存状態が良好であった北西部では、掘立柱の柱穴と礎石の据え付け穴が交互に配置されている状況が確認できた。身舎・廂とも桁行の柱間寸法は3.5mである。一方、S B2020の中央部から南東側にかけては、遺構検出面そのものが礎石据え付け穴の底(標高45.4m前後)よりも低くなるため、深く掘られた掘立柱の柱穴は検出できたものの、礎石据え付け穴は削平されて検出することができなかった。このため、本来存在したはずの礎石の据え付け穴が削平され、1つおきに掘られた掘立柱の柱穴のみを検出した。これが検出当初に柱間寸法7.0mの柱穴列として確認したものである。S B2020では個々の柱穴についてやや詳しく報告することにしたい。

まず、北面廂の柱穴について、西端の礎石据え付け穴S P290から順に東へみていく。

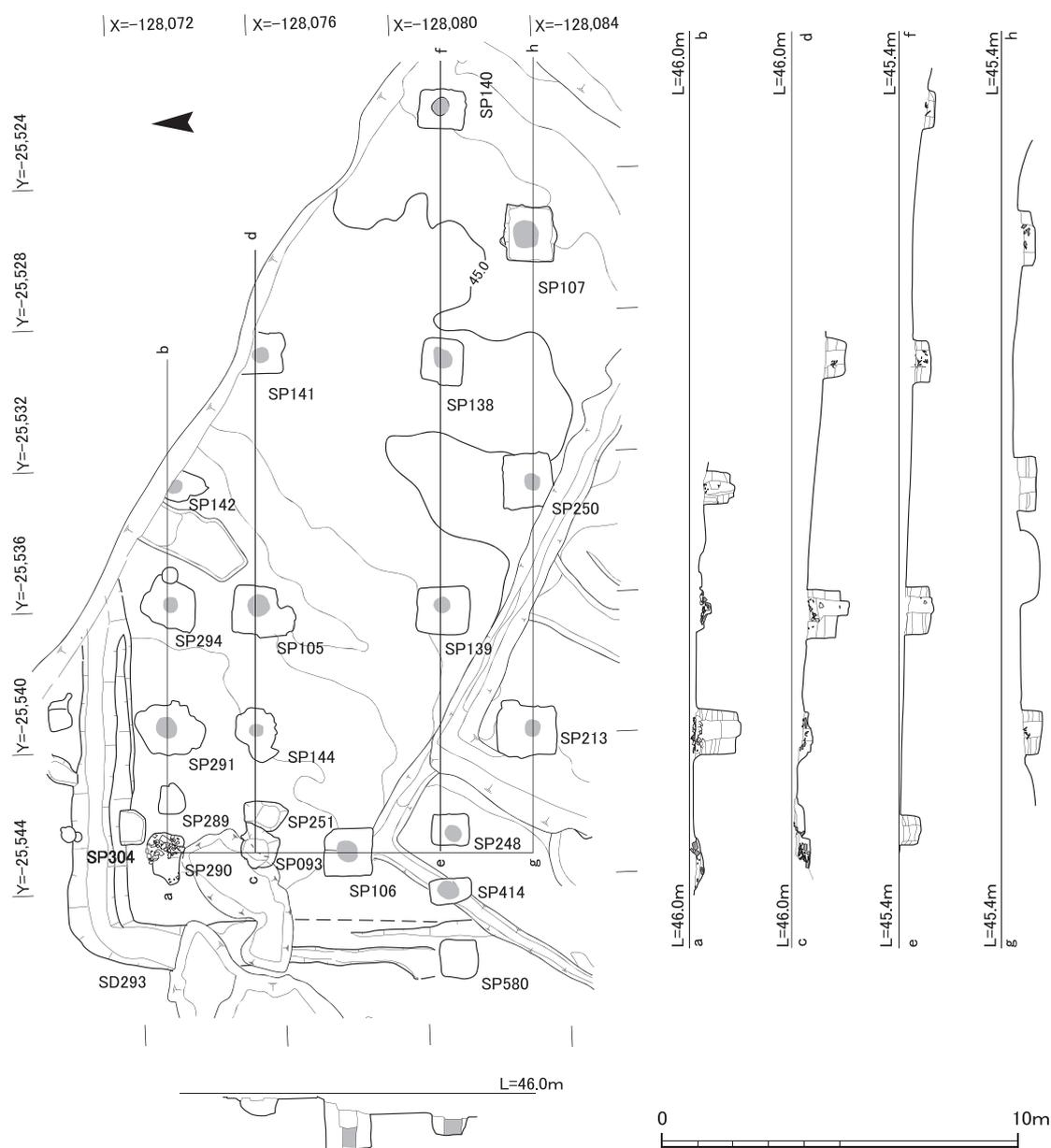
礎石据え付け穴S P290(第43図左上) 北面廂の西端に当たる礎石据え付け穴である。平面形



第41図 南部全体図(1/300)

はやや歪な隅丸方形を呈し、南西部がやや西に広がる。南北1.0m、東西1.2~1.4m、深さ0.3mである。断面形は浅い皿状を呈し、底面に10~20cmほどの角礫を多数検出した。これらの角礫の検出状況をみると、中央部がさらに浅く凹んでいることから、これらの角礫が礎石を固定するための根石であると判断した。遺物は、掘形の埋土から丸瓦・平瓦、土師器・須恵器等が出土し、凝灰岩の破片も確認した。

柱穴 S P 291 (第43図左下) 礎石据え付け穴 S P 290の東約2.2mで検出した。掘形の平面形は、南北にやや長い歪な隅丸長方形を呈するが、各辺は直線にならない。南北2.0m、東西1.45mで、掘形の深さは1.35mである。検出当初に柱穴掘形のほぼ中央付近で、瓦類が弧状にめぐっている状況であった。瓦類はいずれも内方に向かって傾斜していたことから、この瓦類は柱の回りに巻



第42図 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020実測図(1/200)

かれたもので、柱の腐蝕によって内側に崩れたものと考えている。この状況から直径0.5m程度の柱を推定していたが、掘形底面で直径0.45mの柱当たりを確認した。柱当たりの深さは掘形底面から0.13mである。また、柱穴を半截すると、柱痕と推定される箇所が空洞になっていることが判明した。これは柱の腐蝕に伴うものと考えられる。遺物は、柱穴の検出面を含む最上層(埋土1層)で、瓦類が多数出土したものの、柱痕埋土(2層)や掘形埋土(3～10層)からはほとんど出土しなかった。遺物として丸瓦・平瓦、土師器・須恵器などの破片が出土した(第68図75、第83図264)。

礎石据え付け穴 S P 294(第43図右上) 柱穴 S P 290の東約2.2mで検出した。平面形は歪な隅丸方形を呈する。南北1.5m、東西1.5m、深さ0.4mである。断面形は、東西方向では2段掘りのように見えるが、南北方向では逆台形状を呈する。底面に10～20cmほどの角礫を多数検出したが、北東部では一部角礫の見られない箇所がある。これらの角礫は礎石を固定するための根石と考えられ、中央から北東部にかけて礫が見られず、浅く凹んでいることから、ここに礎石があったと推定される。検出当初は、直径0.4mほどの柱痕と考えていたが、掘削作業を進めていく段階で、礎石の抜き取られた後の堆積土であることが明らかになった。遺物は、礎石を抜き取られた後の堆積土や掘形埋土から、丸瓦・平瓦の破片が出土した。

柱穴 S P 142(第43図右下) 礎石据え付け穴 S P 294の東約2.2mで検出した。掘形の北半部が調査対象地外となるため、正確な規模は不明である。平面形は、ほぼ方形を呈すると推定されるが、南辺は大きく南へ広がる。ただし、この痕跡は5cmほど掘削すると地山となり、規模がやや小さくなる。南北確認長0.8m、東西確認長0.85m、掘形の深さ0.9mである。検出時に直径0.65mほどの柱痕を確認していたが、掘形底面で直径0.4mの柱当たりを確認した。柱当たりの深さは掘形底面から0.15mである。遺物は柱痕埋土2層の最上部から平瓦の破片などがまとまって出土したものの、柱痕埋土1層や掘形埋土(3～7層)からはほとんど出土しなかった。遺物としては、平瓦のほか、丸瓦の破片や土師器の破片が少量ある。

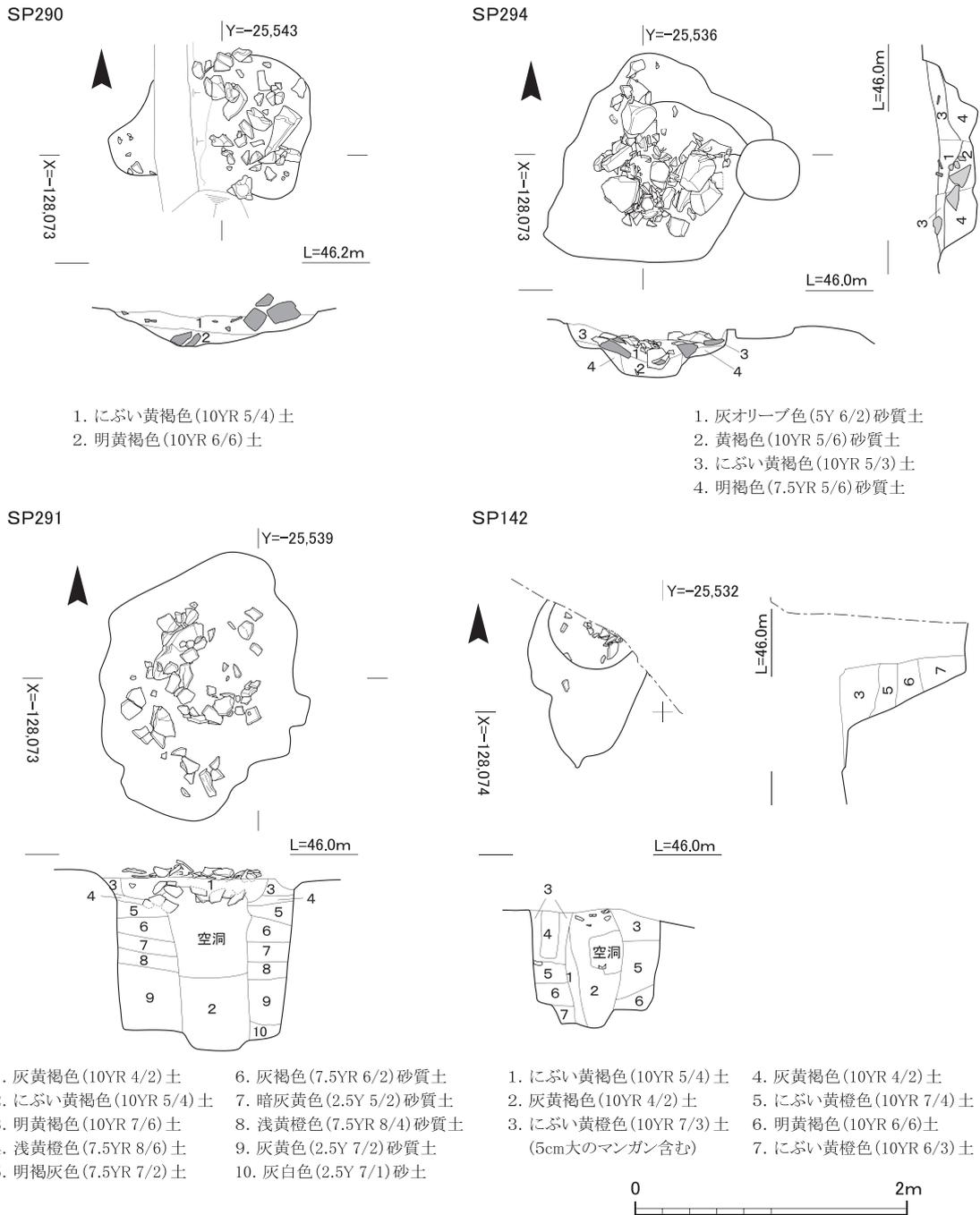
次に身舎北側柱列に伴う柱穴について、北西角の柱穴 S P 093から順次記述する。

柱穴 S P 093(第44図左上) 身舎の北西角の柱穴である。掘形の西半部に大きな攪乱を受けており、半截されたような状態であった。平面形は不整形な形状を呈し、南北長1.0m、東西残存長1.25m、深さ0.4mである。掘形内は多数の瓦類によって埋められているような状態であり、柱痕を確認することはできなかった。この瓦類が、当初から埋められていたのか、柱が抜き取られた後に埋められたものかは判断し難い。ただし、上述のように掘立柱と礎石を交互に配列しているとすると、S P 093は掘立柱に当たるが、柱穴の掘形底面の標高(標高45.5m前後)が、他の掘立柱柱穴の掘形底面の標高(標高44.5m前後)にくらべて高く、むしろ礎石据え付け穴の掘形底面の標高に近い。掘形からは多数の瓦類が整然と積まれたような状態で出土した。軒丸瓦 I b 型式1点・軒平瓦 I b 型式2点のほか、多数の平瓦・丸瓦、土師器の破片、鉄釘などがある(第57図7、第68図73・74、第90図419)。

S P 093の東側には柱穴 S P 251が重複している。当初は S P 093の抜き取り穴かと思われたが、

土層観察の結果、S P 251の方が古いと判断した。周辺に見られるほかの柱穴とは組み合わないようである。

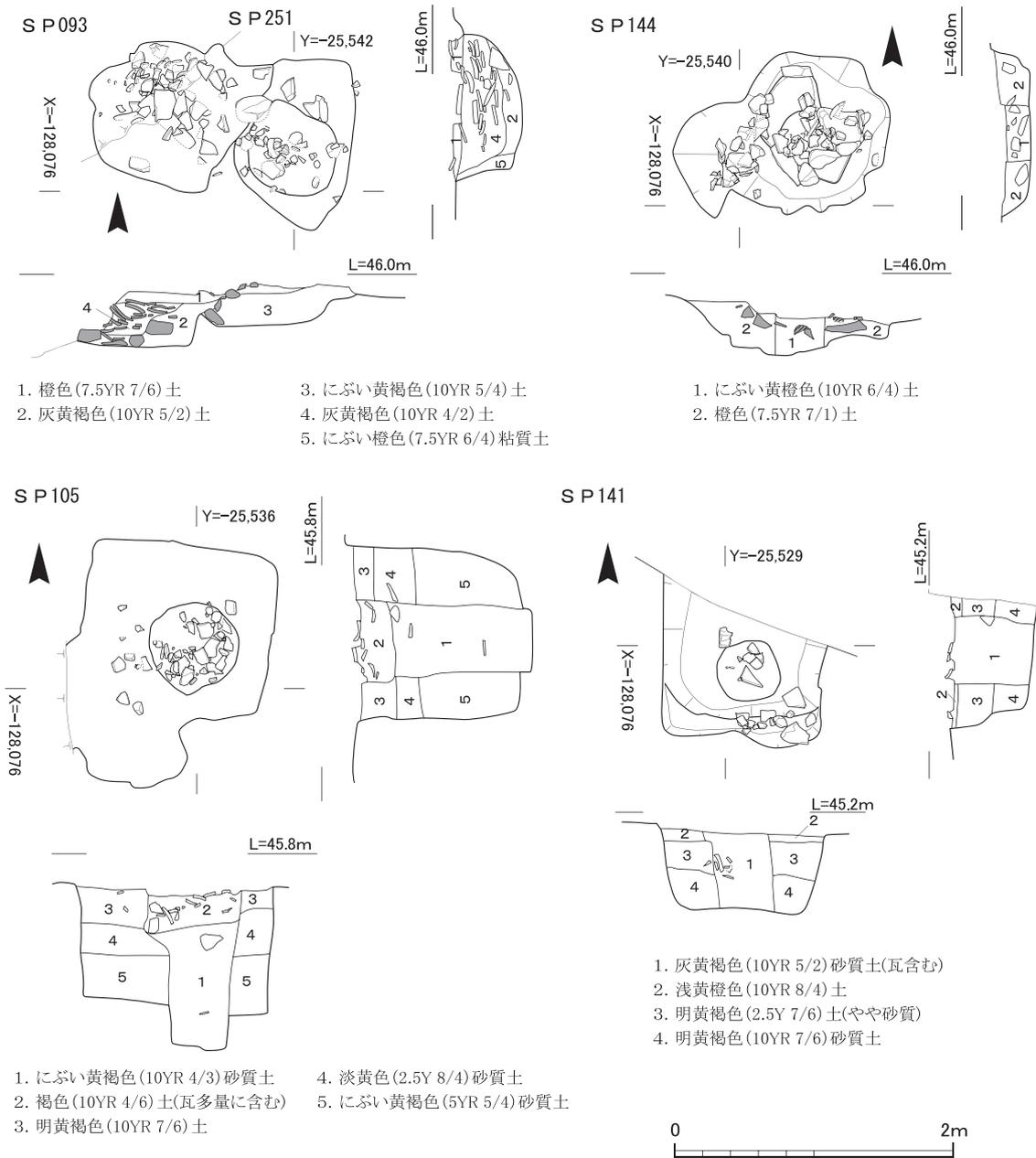
礎石据え付け穴S P 144(第44図右上) 柱穴S P 093の東約1.9mで検出した。平面形はやや歪な隅丸方形形状を呈し、西辺の南半部が大きく西に広がる。南北1.1m、東西1.55m、深さ0.4mである。断面形は浅い逆台形状を呈するが、西辺の広がり部分は緩やかに傾斜する。底面からやや浮いた状態で10~30cmほどの角礫が多数検出された。これらの角礫の検出状況は中央部がやや浅く凹んでいることから、これらの角礫が礎石を固定するための根石であると判断した。検出



第43図 礎石・掘立柱併用建物S B 2020柱穴実測図1 (1/50)

当初は、直径0.3mほどの柱痕と考えていたが、調査の結果、これは礎石の抜き取られた後の堆積土と考えられる(1層)。遺物は、礎石が抜き取られた後の堆積土や掘形埋土から、平瓦の破片のほか、土師器の小破片などが出土した。

柱穴 S P 105 (第44図左下) 礎石据え付け穴 S P 141の東約2.0mで検出した。掘形の平面形はほぼ方形を呈し、南辺西半部が南へ0.5mほど広がる。この広がりが柱の抜き取り穴であるという確証は得られなかった。南北1.25m(南への広がりを除く)、東西1.35m、掘形の深さ1.3mである。検出時に直径0.65mの柱痕を確認していたが、掘形底面で直径0.45mの柱当たりを確認した。柱当たりの深さは掘形底面から0.08mである。遺物は柱痕埋土の2層から非常に多く出土したもの



第44図 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020柱穴実測図 2 (1/50)

の、柱痕埋土1層や掘形埋土からはほとんど出土しなかった。遺物としては、丸瓦・平瓦の破片が多数あるほか、土師器の小破片がある。鞆の羽口と思われる破片も出土した。

柱穴 S P 141 (第44図右下) 柱穴 S P 105の東約6.0mで検出した。掘形の北辺が調査対象地外となるため、正確な規模は不明であるが、平面形はほぼ方形を呈すると推定される。掘形の南辺が南へわずかに広がる。南北確認長1.25m、東西1.22m、掘形の深さ0.65mである。検出時に直径0.47mの柱痕を確認していた。遺物は柱痕埋土(1層)から多く出土したほか、残存する掘形埋土の最上層からもまとまって出土した。遺物としては、丸瓦・平瓦の破片が多数あるほか、土師器の小破片が出土した(第67図70)。なお、平瓦の破片1点に朱線の残るものがある(第68図76)。

柱穴 S P 106 (第45図左) 身舎の西側妻柱である。平面形は方形を呈し、南北1.33m、東西1.35m、深さ1.25mである。検出時に直径0.6mほどの柱痕を確認していたが、完掘後に掘形底面で直径0.45mの柱当たりを確認した。柱当たりの深さは掘形底面から0.05mである。遺物は柱痕埋土1層から細片化した瓦類が多数出土したが、柱痕埋土2～5層、掘形埋土6～12層からはほとんど出土しなかった。遺物としては丸瓦・平瓦の破片が多数あるほか、土師器の小破片や鉄釘などがある(第83図260、第90図418)。また、柱痕内からひさご形土製品の最下段の破片が出土した(第89図409)。

次に身舎南側柱列に伴う柱穴について述べる。

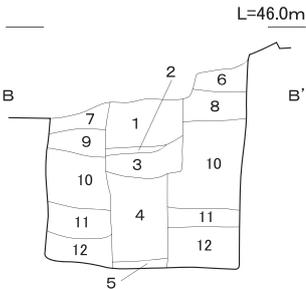
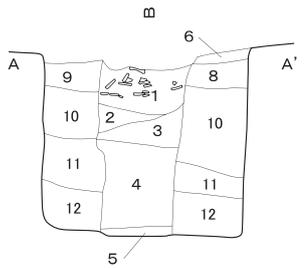
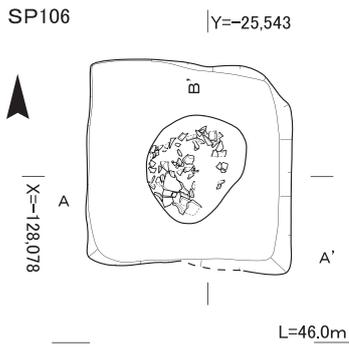
柱穴 S P 139 (第45図右上) 身舎の南側柱列の西から3つ目の柱穴である。平面形は方形を呈し、南北1.51m、東西1.34m、深さ0.8mである。検出時に直径0.5mほどの柱痕を確認していたが、完掘後に掘形底面で直径0.45mの柱当たりを確認した。柱当たりの深さは掘形底面から0.08mである。遺物は柱痕埋土(1層)からごく少量の瓦類が出土したのみで、掘形埋土(2～6層)からは出土しなかった。遺物としては細片化した瓦類が少量あるにすぎない。

柱穴 S P 138 (第45図右中) 柱穴 S P 139の東約5.8mで検出した。平面形はほぼ方形を呈するが、西辺の一部が10cmほど西へ突出する。南北1.16m、東西1.33m、深さ0.5mである。検出時に直径0.55mほどの柱痕を確認していたが、断面観察では掘形底面付近で直径0.45mである。遺物は検出面を中心に柱痕埋土(1層)から細片化した瓦類が出土したが、掘形埋土(2～4層)からはほとんど出土しなかった。遺物としては丸瓦や平瓦の破片がある。

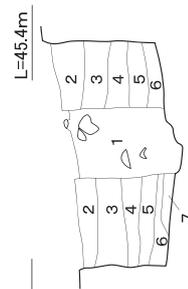
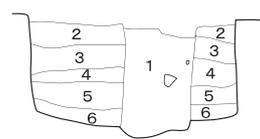
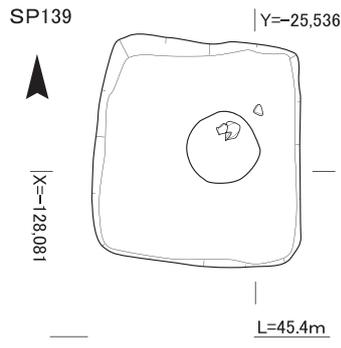
柱穴 S P 140 (第45図右下) 柱穴 S P 138の東約5.9mで検出した。平面形はやや南北に長い長方形を呈し、南北1.3m、東西1.1m、深さ0.3mである。検出時に直径0.45mの柱痕を確認していた。遺物は柱痕埋土1層から破片化した瓦類が出土したが、柱痕埋土2層や掘形埋土(3～6層)からはほとんど出土しなかった。遺物としては丸瓦・平瓦の破片のほか、土師器の小破片がある(第67図71)。

最後に南面廂の柱穴について、西端の柱穴 S P 213から順に東へみていく。なお、南面廂の柱穴列では、後世の削平のため、礎石据え付け穴を検出することはできなかった。

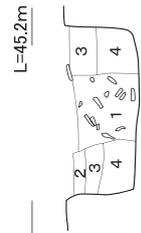
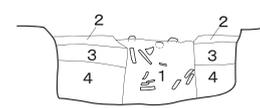
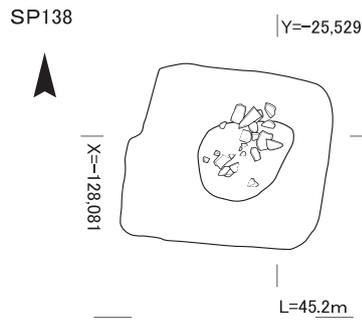
柱穴 S P 213 (第46図上) 南面廂の西から2番目の柱穴である。平面形はやや南北に長い方形を呈し、南北1.7m、東西1.5m、深さ0.6mである。柱穴掘形の規模は S B 2020の柱穴の中で最も



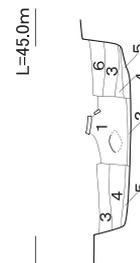
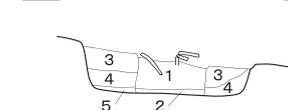
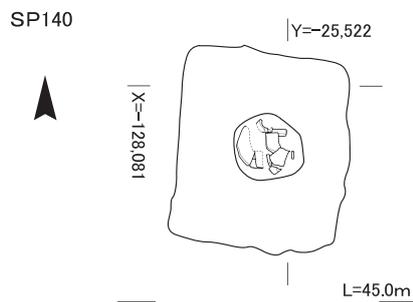
1. 暗褐色(10YR 3/3)砂質土(極細粒)
2. にぶい黄褐色(10YR 5/4)粘質土
(φ0.5~1cmの小石を含む)
3. 明黄褐色(10YR 6/6)粘土
(黒褐色(10YR 3/2)粘土が混じる)
4. 褐色(10YR 4/1)粘質土
(粒の細かい砂を多く含む)
5. 灰白色(7.5Y 8/1)粘質土
6. 明黄褐色(10YR 6/6)砂質土
(マンガン粒と明赤褐色(2.5YR 5/8)砂質土を粒状に含む)
7. 明赤褐色(5YR 5/8)砂質土
(明赤褐色(2.5YR 5/8)砂質土が混じる)
8. 黄橙色(10YR 7/8)砂質土
(マンガンが粒状に混じる)
9. 灰黄褐色(10YR 5/2)砂質土
10. 橙色(7.5YR 6/8)粘質土
(マンガンの粒と明赤褐色(2.5YR 5/8)砂質土が粒状に混じる)
11. 明黄褐色(10YR 6/8)粘質土
(粒の細かい砂を多く含む、明赤褐色(2.5YR 5/8)砂質土が粒状に混じる)
12. 褐色(10YR 4/6)粘質土
(粘り気が強く、粒の細かい砂を含む明赤褐色(2.5YR 5/8)砂質土が粒状に混じる)



1. 褐色(10YR 4/4)砂質土
2. 明黄褐色(2.5Y 7/6)砂質土
(粒子状のマンガンが混入)
3. 橙色(5YR 7/6)砂質土
(粒子状のマンガンが混入)
4. にぶい黄橙色(10YR 7/4)砂質土
5. 明黄褐色(2.5Y 7/6)砂質土
(粒子状のマンガンが若干混入)
6. にぶい橙色(7.5YR 7/3)砂土
7. 褐色(10YR 4/4)砂質土

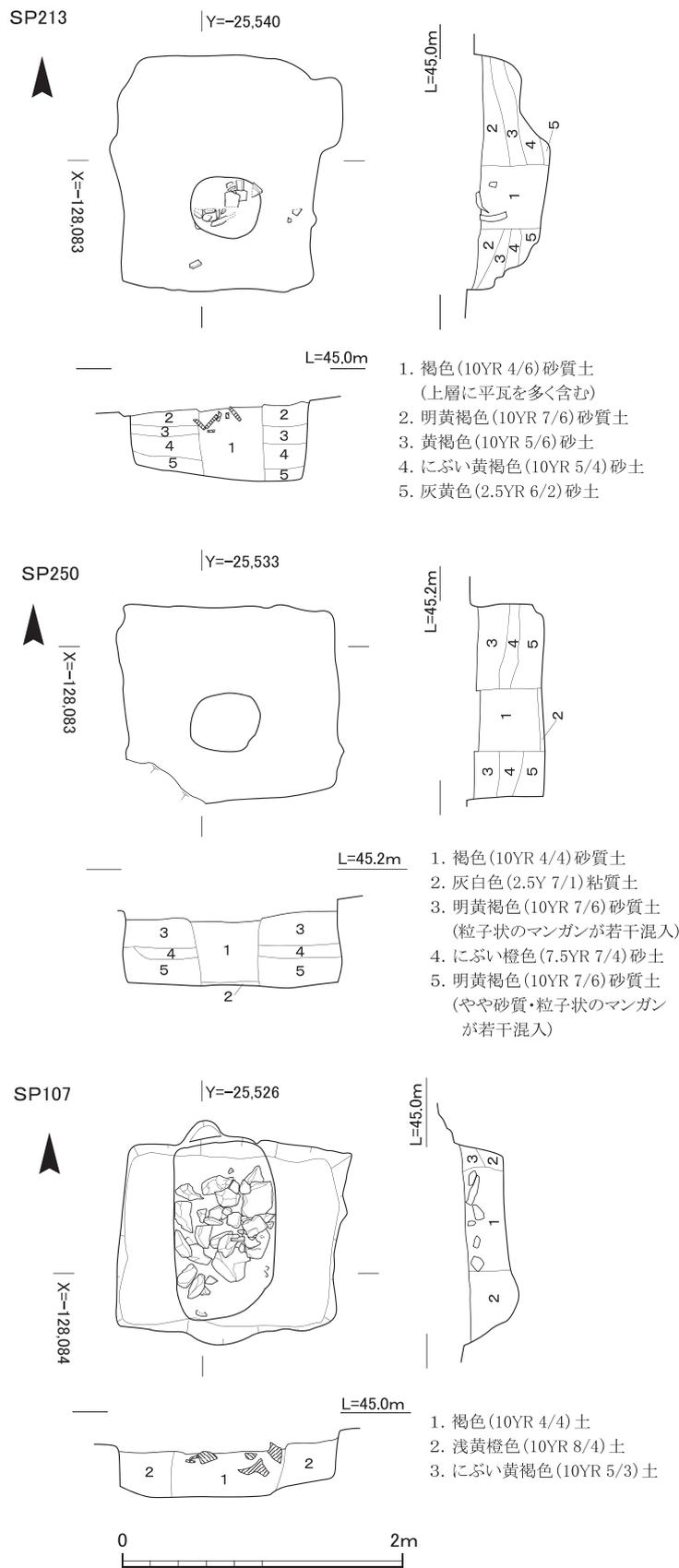


1. 灰黄褐色(10YR 5/2)砂質土
2. にぶい黄橙色(10YR 6/4)土
3. にぶい黄橙色(10YR 7/4)土
4. にぶい赤褐色(5YR 5/4)砂質土
5. 明黄褐色(10YR 7/6)砂質土



1. にぶい黄褐色(10YR 5/4)土
2. 灰白色(10Y 7/1)粘質土
3. 明褐色(7.5YR 5/6)土
4. 浅黄褐色(10YR 8/4)土
5. 明褐色(7.5YR 5/6)土

第45図 礎石・掘立柱併用建物S B 2020柱穴実測図3 (1/50)



1. 褐色(10YR 4/6)砂質土
(上層に平瓦を多く含む)
2. 明黄褐色(10YR 7/6)砂質土
3. 黄褐色(10YR 5/6)砂土
4. にぶい黄褐色(10YR 5/4)砂土
5. 灰黄色(2.5YR 6/2)砂土

1. 褐色(10YR 4/4)砂質土
2. 灰白色(2.5Y 7/1)粘質土
3. 明黄褐色(10YR 7/6)砂質土
(粒子状のマンガンが若干混入)
4. にぶい橙色(7.5YR 7/4)砂土
5. 明黄褐色(10YR 7/6)砂質土
(やや砂質・粒子状のマンガンが若干混入)

1. 褐色(10YR 4/4)土
2. 浅黄橙色(10YR 8/4)土
3. にぶい黄褐色(10YR 5/3)土

大きいのが、S P 213では掘形北側の中段に段差が認められる。検出時に直径0.5mの柱痕を確認した。遺物は柱痕埋土(1層)から破片化した瓦類が出土したが、掘形埋土(2～5層)からはほとんど出土しなかった。遺物としては丸瓦・平瓦の破片が多数あるほか、土師器の小破片がある(第67図72)。

柱穴 S P 250 (第46図中)

柱穴 S P 213の東約5.6mで検出した。平面形は、わずかに東西に長い方形を呈し、南北1.4m、東西1.55m、深さ0.6mである。検出時に直径0.48mの柱痕を確認した。遺物は掘形から土師器の小片が出土したのみである。

柱穴 S P 107 (第46図下)

柱穴 S P 250の東約5.4mで検出した。平面形は、わずかに東西に長い方形を呈し、南北1.5m、東西1.55m、深さ0.45mである。検出時に柱痕は認められず、長軸1.3mほどの楕円形を呈する土色の変化が認められた。これを柱の抜き取り穴と推定して掘り下げたが、多数の角礫が充填されたような状態であった。用途は不明であるが、柱の抜き取り後に角礫が落ち込んだものと考えられる。柱の直径を推測す

第46図 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020柱穴実測図4 (1/50)

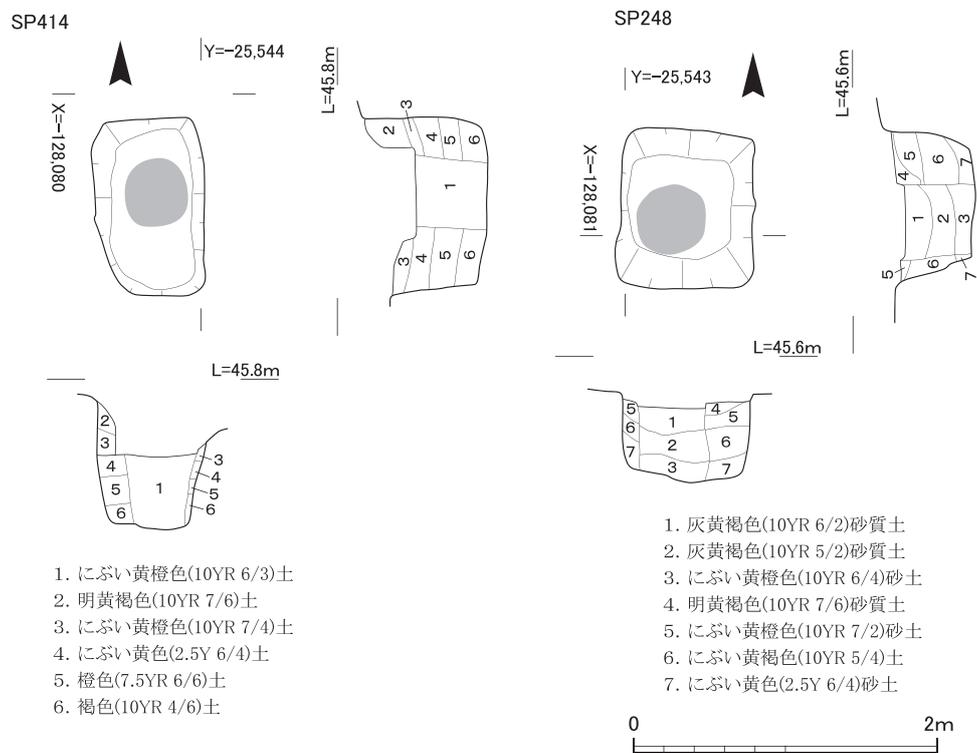
るような痕跡は認められなかった。遺物は柱抜き取り穴と推定される1層から破片化した瓦類や土師器・須恵器などが出土したが、掘形埋土(2・3層)からはほとんど出土しなかった。出土遺物としては細片化した丸瓦・平瓦の破片のほか、土師器の小破片、須恵器硯の破片などがある(第83図261・263)。

次に礎石・掘立柱併用建物S B2020の周辺で検出した単独の柱穴について取り上げる。

柱穴S P251(第44図左上) 柱穴S P093に重複して検出した。平面形は南辺中央がやや突出気味となる隅丸長形状を呈し、南北1.2m、東西0.85m、深さ0.25mである。遺物は埋土から丸瓦・平瓦の破片が多数あるほか、土師器の破片も少量出土した。

柱穴S P248(第47図右) 柱穴S P106の南約1.7mで検出した。S P248と次に述べる柱穴S P414の間の地点が、礎石・掘立柱併用建物S B2020の身舎の南西角の柱穴があるべき位置に当たる。S P248とS P414がS B2020に関わる柱穴なのかどうかは明らかにすることができなかった。S P248の平面形は隅丸方形を呈し、南北1.05m、東西0.87m、深さ0.6mである。検出時に直径0.5mほどの柱痕を確認していた。遺物は柱痕から土師器の小片が出土したのみである。柱穴の詳細な時期は不明である。

柱穴S P414(第47図左) 柱穴S P248の西約0.9mで検出した。S P248と同じく、S P414が礎石・掘立柱併用建物S B2020に関わる柱穴なのかどうかは明らかにすることができなかった。S P414の平面形はやや南北に長い隅丸方形を呈し、南北1.17m、東西0.73m、深さ0.8mである。検出時に直径0.45mほどの柱痕を確認していた。遺物は柱痕から土師器高杯脚部の破片が出土したのみである。柱穴の詳細な時期は不明である。



第47図 礎石・掘立柱併用建物S B2020関連柱穴実測図(1/50)

柱穴 S P 289 (第48図) 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020の礎石据え付け穴 S P 290と柱穴 S P 291のほぼ中間で検出した。建物として復元することはできず、単独の柱穴である。S P 289の平面形は、東辺が部分的に突出する隅丸方形を呈する。南北0.76m、東西0.8m、深さ0.05mで、非常に浅い。検出時に柱痕を確認することはできず、掘形を検出した時点で、その上面から軒丸瓦Ⅲ型式1点(第55図6)をはじめ、多数の丸瓦・平瓦が出土した。ただし土器類は出土していない。柱穴の詳細な時期は不明であるが、軒丸瓦Ⅲ型式が出土していることやS B 2020と重複することから第Ⅲ-2期以降と考える。

柱穴 S P 304 (第48図) 柱穴 S P 289の北西約0.5mで検出し、雨落ち溝 S D 293の南辺と重複する。平面形は隅丸方形を呈し、南北0.75m、東西1.0m、深さ0.05mであるが、北辺はS D 293との重複により不明な点がある。切り合い関係からS P 304の方が新しいと考える。S P 289と同様、検出時に柱痕を確認することはできず、掘形を検出した時点で、多数の丸瓦片・平瓦片と土師器の小片が出土した。柱穴の詳細な時期は不明であるが、S D 293と重複することから第Ⅲ-2期以降と考える。

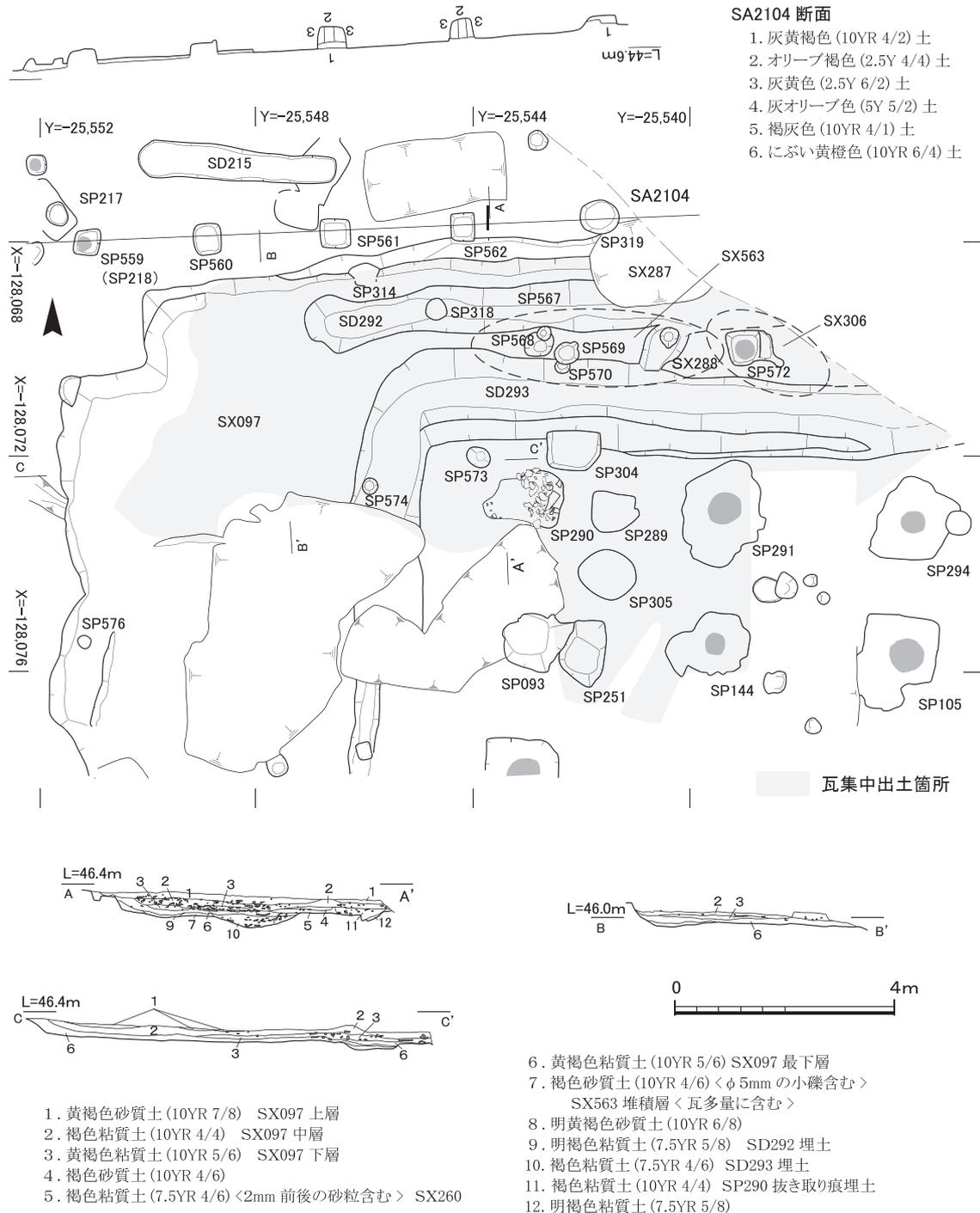
柱穴 S P 305 (第48図) 柱穴 S P 289のほぼ南に接して検出したが、建物として復元できない柱穴である。平面形は隅丸方形を呈し、南北0.9m、東西0.85mで、深さはわずかであった。掘形を検出した時点で、多数の丸瓦片・平瓦片が出土した。柱穴の詳細な時期は不明である。

(岡崎研一・筒井崇史)

雨落ち溝 S D 293 (第50図) 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020の北西側、区画 S X 097の完掘後に検出した(Ⅷ-r10~12、s12・t12・u12区)。S B 2020の雨落ち溝と推定される。検出長20.6m、幅1.3~1.6m、深さ0.15~0.25mである。溝の方位は北に対して2~3°東に振る。遺物はS D 293の北辺から多量に出土した(第49図)。その大半は丸瓦・平瓦の破片で、そのほかに軒丸瓦Ⅲ型式、須恵器・土師器、鉄釘などの破片がある(第56図8、第69図77~第71図86、第83図265~275、第90図421)。また、東西方向の部分では、これらの遺物を取り上げた後、溝底の直上で瓦類が細片化した状態で検出した。部分的に断ち割りなどを行って、状況の確認に努めたが、これら細片化した瓦類が溝底に敷かれたものであるかどうか、判断はつかなかった。溝の埋土は褐色粘質土で、細片化した瓦類を含む。出土した遺物やS B 2020との関係から第Ⅲ-1期に掘削され、第Ⅳ期には埋没したものと考える。なお、S D 293をS B 2020の雨落ち溝とみると、軒の出がやや短くなってしまい(約2.0m)、建物の復元の上では検討の余地がある。

区画 S X 097 (第48図) 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020の北西側で検出した(Ⅷ-r10~13、s12・13、t12・13区)。この区画はS B 2020を建てるために丘陵斜面を掘り込んで造成された平坦地と考えられる。S X 097の底面は、標高45.8m前後であることから、これがS B 2020の造成時の標高であると考えられる。S X 097の掘り込みは北西角とそこから伸びる北辺と西辺を確認しているが、北辺の東端は調査対象地外に延びるため、不明である。また、西辺はS X 097の南側に区画 S X 099とした浅い掘り込みが続くことから、断続的に伸びていたと考えられる。S X 097は北西角でクランク状を呈していることから、区画の掘削が少なくとも2時期あるのではな

いかと想定したが、土層断面の観察では明確な時期差を見出すことはできなかった。東西検出長14.9m、南北検出長9.5mを測る。S X 097とS X 099が一連の遺構とすると、西辺の検出長は18.8mに達する。北辺での深さは約0.4mである。北辺から北面廂の柱列の心まで約5mである。西辺からS B 2020の西側妻の柱列の心まで約8.5mである。北辺の方位は北に対して4.5°西に振る。S X 097の埋土は上から黒褐色粘質土、褐色粘質土、黄褐色砂質土である。遺物は各層から出土しており、瓦類が厚く堆積しているような状況であった。なかでも2・3層が非常に多い。出土

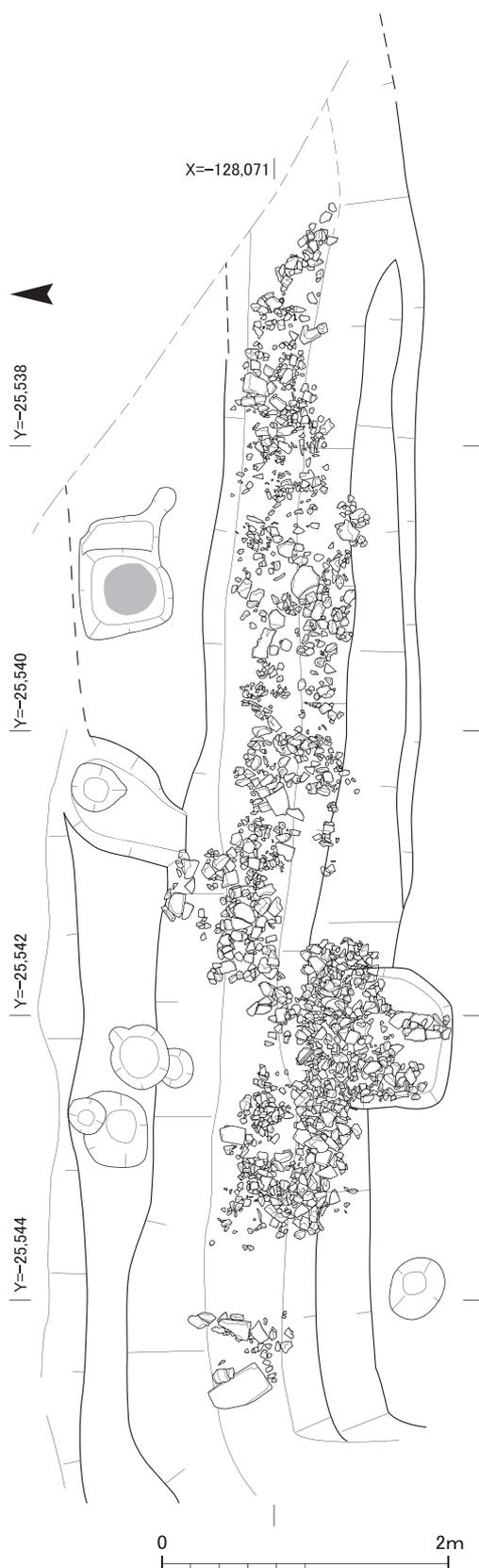


第48図 雨落ち溝S D 293・区画S X 097・掘立柱塼S A 2104実測図(1/120)

した遺物には軒丸瓦Ⅱ・Ⅲ・Ⅷ型式、丸瓦・平瓦、土師器・須恵器・緑釉陶器、ひさご形土製品の結合部、鉄釘などがある(第56図9～20・第84図282～341、第90図422)。軒丸瓦Ⅲ型式は第6～9次調査で出土した総点数のうち、およそ7割がこのS X 097もしくは雨落ち溝S D 293から出土した。また、軒丸瓦Ⅷ型式もS X 097での出土率が7割近くに達する。その一方で、軒平瓦の出土は確認していない。S X 097は出土した遺物やS B 2020の造営に伴って掘削された点からⅢ-1期に掘削され、Ⅳ期には埋没したものと考える。

なお、掘り込みの底面ではS B 2020の雨落ち溝S D 293のほか、溝S D 292を検出した。S D 292は検出長5.9m、幅約1.0m、深さ0.05～0.1mである。ただし、機能については不明である。遺物として丸瓦片や平瓦片、土師器小片などが出土した。平瓦片はH-B3類を1点のみだが確認した。

区画S X 099 (第50図) 区画S X 097の南側で検出した(Ⅷ-t12・13、u12・13、v13区)。S X 097の南への延長部分に当たる。検出長9.3m、残存幅2.5～4.8m、深さ0.2m前後である。平坦面の標高は45.6～45.8mである。S X 099の埋土は上層から瓦類を大量に含む灰黄褐色土、にぶい黄褐色土、黄褐色土である。出土した遺物には軒丸瓦Ⅰa・Ⅱ・Ⅲ・Ⅸ型式、丸瓦・平瓦、土師器・須恵器・三彩陶器片、ひさご形土製品の結合部、鉄釘、轆羽口などがある(第56図21・22、第85図342～354、第90図423)。S X 099では、三彩陶器の小破片が5点ほど出土している(図版第55-2)。三彩陶器は第5次調査の際に土坑S K 520から出土したのみで、今回の

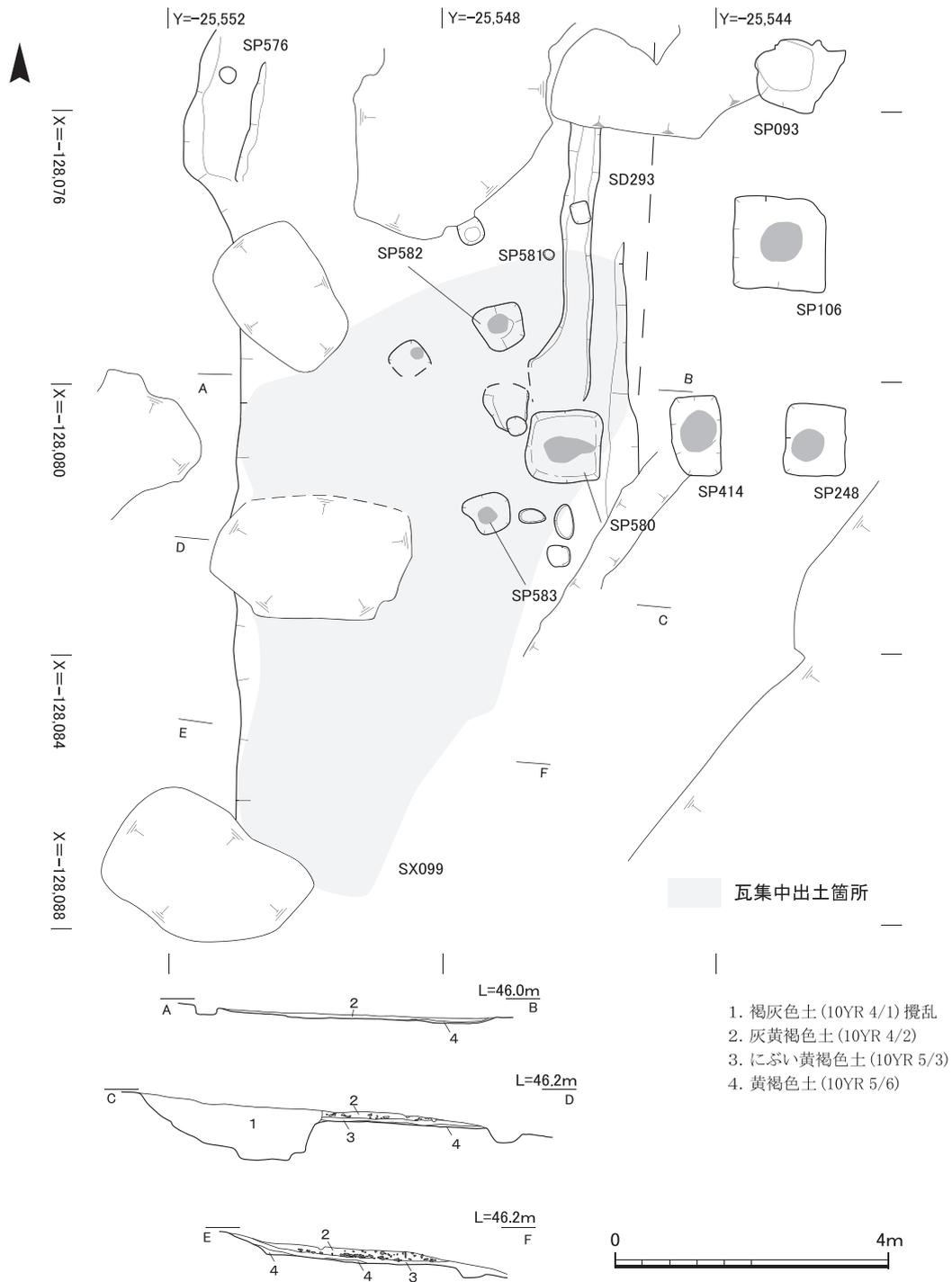


第49図 雨落ち溝S D 293遺物出土状況(1/50)

調査でも S X099からしか出土していない。なお、S X099でも軒平瓦の出土は確認していない。S X099がS X097と一連の遺構であるとすれば、S X099はS X097と同様に第Ⅲ-1期に掘削され、第Ⅳ期に埋没したものとする。

(筒井崇史)

掘立柱建物 S B 2021 (第51図) S B 2020の西側に接して検出した(Ⅷ - s14・15、t14・15、u14・15区)。桁行5間(8.7m)、梁行2間(4.2m)の南北棟の建物である。桁行の柱間寸法は1.7m、



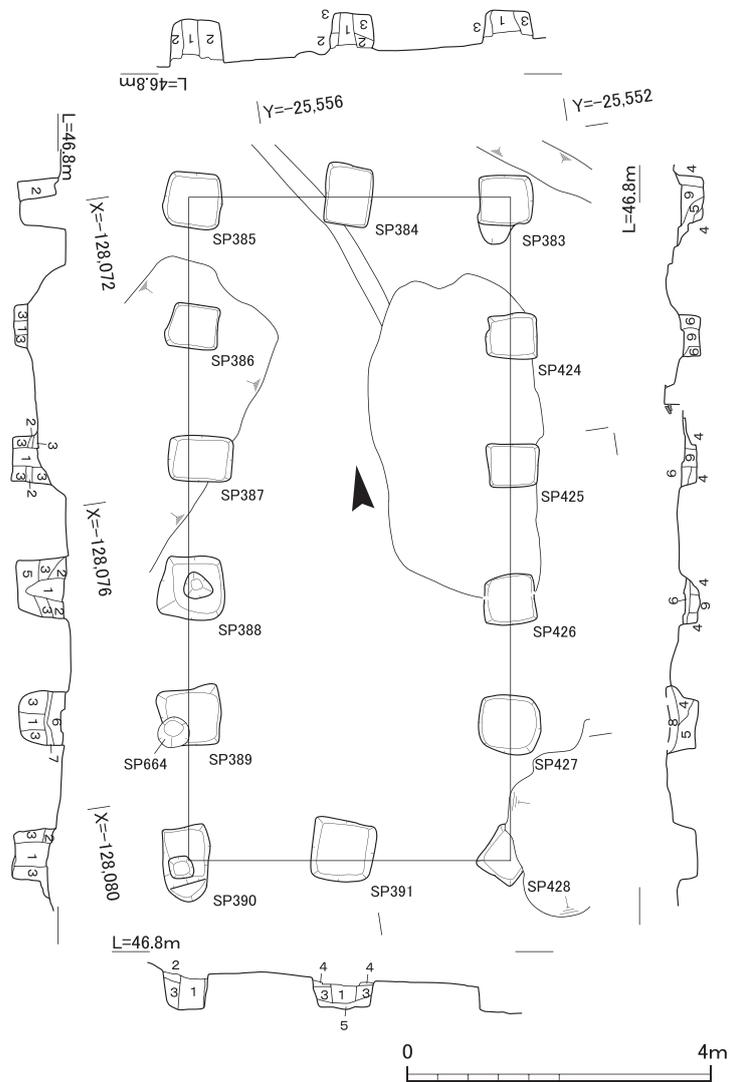
第50図 区画 S X099実測図(1/100)

梁行の柱間寸法は2.1mである。柱穴掘形は一辺約0.7mの隅丸方形である。掘形の埋土は明黄褐色土、灰黄褐色土、暗灰黄色土、浅黄色土などである。柱穴 S P 383～391・424～425で直径約0.2mの柱痕を確認した。柱痕の埋土は、柱穴 S P 383～391が褐色土、柱穴 S P 424～426が褐灰色土である。建物の方位は北に対して9°東に振る。遺物として、各柱穴から土師器小片や須恵器片、平瓦小片などが出土した(第86図355)。出土遺物などから第Ⅱ-1期に位置づけられる可能性が高い。

(山崎美輪)

掘立柱塼 S A 2104 (第48図) 区画 S X 097の北側で検出した(VIII-q11～13区)。4間分(検出長9.6m)を検出し、東は調査対象地外へ延びる。S X 097の北辺にほぼ平行する。西は柱穴 S P 559までで、それ以上西へは延びず、また南北のいずれにも屈曲しない。各柱穴は一辺0.4～0.6mの方形、もしくは長軸0.7mの楕円形を呈する。埋土は灰黄褐色土、オリーブ褐色土、灰黄色土などである。塼の方位は北に対して2.5°西に振る。遺物として瓦類や土師器の小片が出土した。S X 097の北辺とほぼ平行することなどから第Ⅲ-1期に位置づけられる。

土坑 S K 096 (第52図) 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020の西約9.7mで検出した(VIII-s14・t14区)。掘立柱建物 S B 2021と重複し、切り合い関係から S K 096の方が新しい。平面形はやや不整形な小判形を呈し、全長4.4m、幅2.2m、深さ0.2m前後である。埋土は、おおむね3層に分かれ、上層から灰黄褐色土層、炭を多く含む黒色土層、明黄褐色土層である。遺物は埋土から平瓦や塼、土師器、鞆羽口などの破片のほか、鉄滓が出土した(第73図93～95、第86図357～365、第91図424・428・429・432～434)。出土した遺物

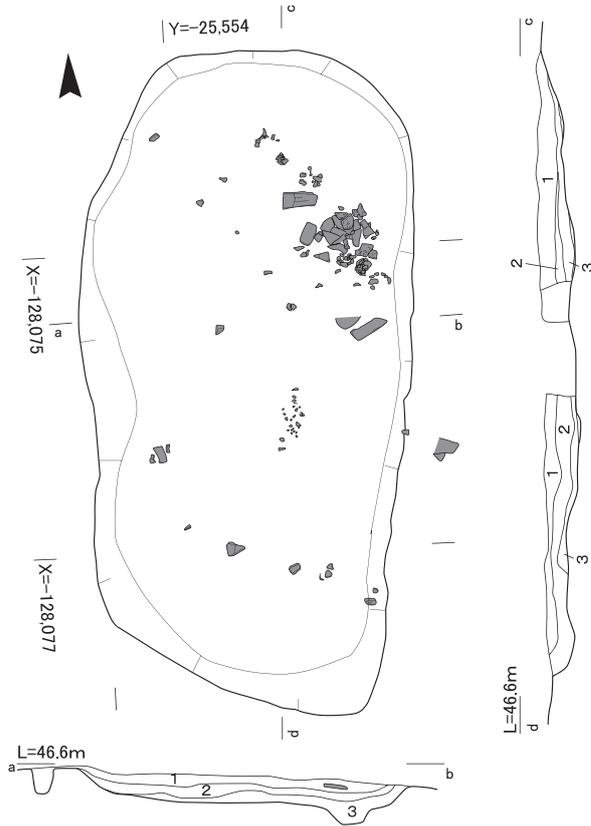


- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1. 褐色(10YR 4/4)土 | 6. 明黄褐色(2.5Y 7/6)土 |
| 2. 明黄褐色(10YR 6/6)土 | 7. 黄色(2.5Y 7/8)土 |
| 3. 灰黄褐色(10YR 4/2)土 | 8. にぶい黄褐色(10YR 4/3)土 |
| 4. 暗灰黄色(2.5YR 4/2)土 | 9. 褐灰色(10YR 6/1)土 |
| 5. 浅黄色(2.5Y 7/4)土 | |

第51図 掘立柱建物 S B 2021実測図(1/100)

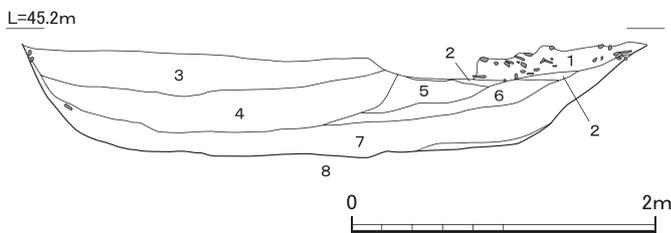
の内容から鍛冶作業に関連する遺物を廃棄した土坑ではないかと推定される。出土遺物や遺構の切り合い関係から第Ⅱ-2期以降に位置づけられる。

土坑 S K 143(第53図) 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020の南約8.8mで検出した(Ⅷ-x10・11区)。東西方向に主軸をもち、平面形が隅丸長方形を呈する。長辺6.2m、短辺4.1m、深さ0.7mである。埋土は大きく7層に分けられる。第1層は後述する瓦溜り S X 219の堆積層に相当する。第2～



1. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 土 (瓦を少量含む)
2. 黒色 (10YR 1.7/1) 土 (炭を多く含む、鉄滓など出土)
3. 明黄褐色 (10YR 7/6) 土 (炭を少量含む)

第52図 土坑 S K 096実測図(1/50)



- | | |
|--|-----------------------------|
| 1. 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 土
(瓦溜まりSX219埋土) | 5. 灰褐色 (7.5Y 5/2) 砂質土 |
| 2. 灰白色 (2.5Y 7/1) 砂質土 | 6. 黄褐色 (10YR 5/6) 砂質土 |
| 3. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 砂質土 | 7. 褐灰色 (10YR 4/1) 砂質土 |
| 4. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 砂質土 | 8. 浅黄橙色 (10YR 8/4) 砂質土 (地山) |

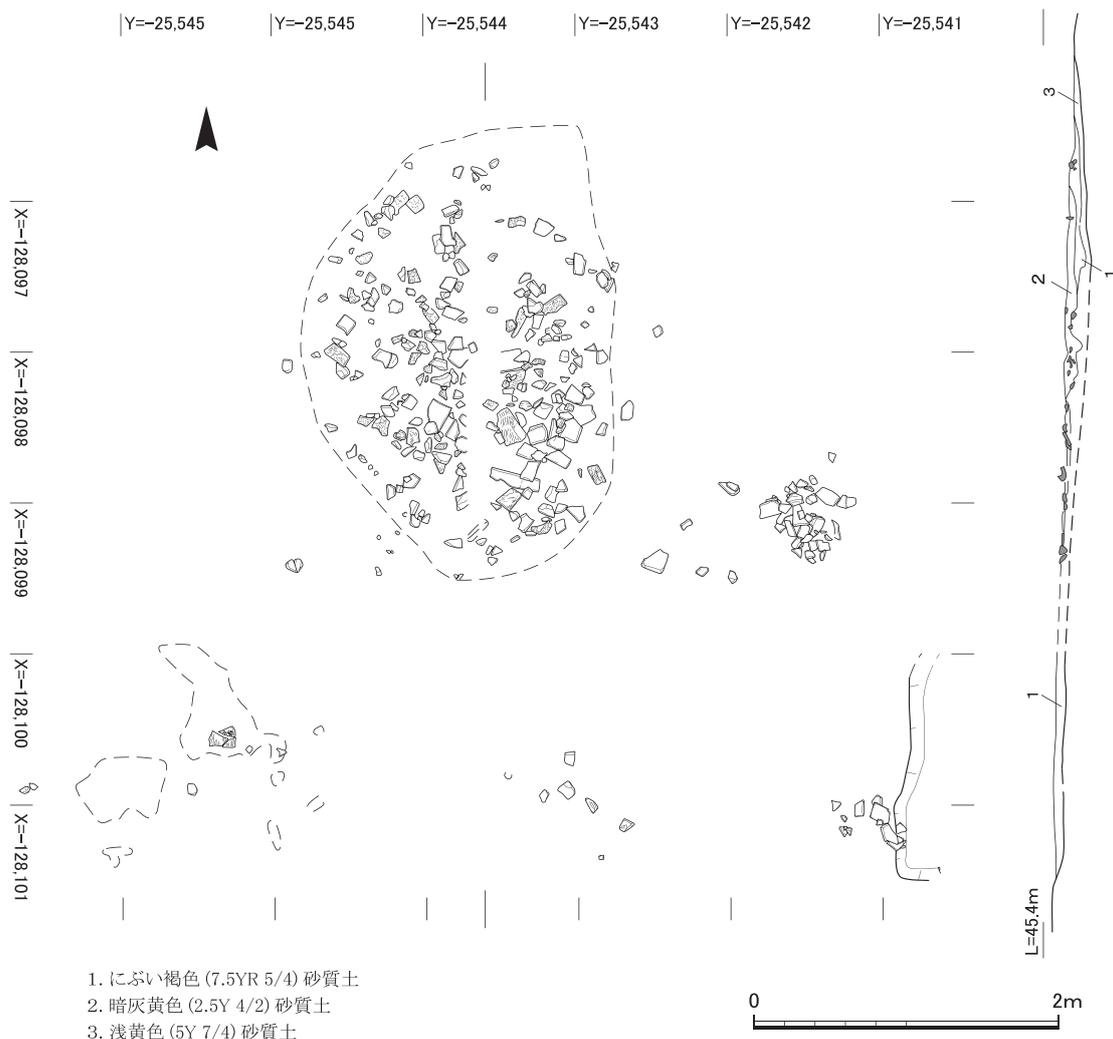
第53図 土坑 S K 143土層断面図(1/50)

7層が S K 143の埋土である。遺物として、第3～7層から土師器杯 A・甕、須恵器杯 A・杯 B 蓋などが出土した(第57図23、第86図366～370)。出土土器は第Ⅰ期のものに限られるが、瓦類には丸瓦 M-B類や平瓦 H-D類があり、第Ⅱ-2期以降に位置づけられる。

瓦溜り S X 219 上記土坑 S K 143の最上層で検出した(Ⅷ-x11区)。瓦類の堆積はやや歪な楕円形の広がりをもち、北東から南西にかけて主軸をもつ。長軸5.4m、短軸2.5mで、瓦類の堆積の厚さは約0.2mである。埋土は暗オリーブ褐色土で、軒丸瓦Ⅱ型式や軒平瓦Ⅱ型式、丸瓦・平瓦などの瓦類、土師器・須恵器の土器などが出土した。(第57図24・25、第86図373～376)。

瓦溜り S X 208(第54図) 土坑 S K 143や瓦溜り S X 219の南西側で検出した(Ⅷ-y11・12区、Ⅸ-a11・a12区)。北東から南西にかけて主軸をもつが、瓦類の広がりはやや歪である。長軸7.2m、短軸6.2mである。

瓦類の検出時やその後の取り上げの過程で、これらの瓦類が廃棄されたであろう土坑の輪郭の検出や、断ち割りを行って瓦類の堆積状況と土坑の底面の確認に努めたが、いずれも確認できなかった。瓦類の堆積状況は場所によって異なり、最上面の瓦類を除去すると、さらに瓦類の集中する部分が北半部で確認できた。第



第54図 瓦溜り S X 208実測図(1/50)

54図はこの範囲を図示したものである。瓦溜りの覆土はにぶい褐色砂質土で、大量の瓦類が出土した。出土遺物としては、軒丸瓦Ⅱ・Ⅲ型式のほか、埴仏、土師器杯、須恵器杯B蓋などの土器の小破片が出土している(第57図26～31、第86図371・372、第89図417、第90図420)。

(筒井崇史)

2) 出土遺物

美濃山廃寺第7次調査では美濃山廃寺に伴う遺構から、大量の瓦類をはじめ、土師器・須恵器などの土器類、ひさご形や覆鉢形などの土製品、鞆羽口や鉄滓などの冶金関連遺物、鉄製品などが出土した。また、弥生土器も出土した。これは美濃山廃寺下層遺跡に伴うものであるが、美濃山廃寺関連遺構から出土した場合は合わせて報告することとした。

以下では大量に出土した瓦類をはじめ、遺物の種別ごとに報告する。

(1) 瓦類

美濃山廃寺第7次調査で出土した瓦類は、出土した遺物のうち9割に達する。瓦類の型式分類

や分析方法については、第6次調査と同様の方法によることとし、数量の比較は原則として重量によって行った。第7次調査で出土した瓦類の総量は3,500kgに達する。その大半が丸瓦または平瓦である。また、塼はわずか1点のみで、1.6kgである。

以下では、軒瓦、丸瓦・平瓦、塼の順で概要を述べることにする。

①軒瓦

第7次調査で出土した軒瓦は、軒丸瓦7型式113点と、軒平瓦2型式9点である。軒瓦の型式分類は、美濃山廃寺第6次調査における分類に準じる(第6次調査報告67～89頁参照)。報告は遺構ごとに軒丸瓦・軒平瓦の順で行う。なお、重機掘削中や遺構面精査中など、いわゆる遺物包含層出土のものについては掲載していない。

区画溝SD100-3出土軒瓦(第55図1) 1は軒丸瓦Ⅱa型式である。瓦当の4/5程度が残存し、丸瓦部との接合部で剥離、欠損する。瓦当径は16.5cmである。胎土は密で、焼成は良好である。色調は浅黄色を呈する。

掘立柱建物・柱穴出土軒瓦(第55図2～7) 2は軒丸瓦Ⅱ型式である。掘立柱建物SB2001の柱穴SP042から出土した。中房と蓮弁の一部の破片で、Ⅱa型式なのかⅡb型式なのか判断がつかない。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰色を呈する。

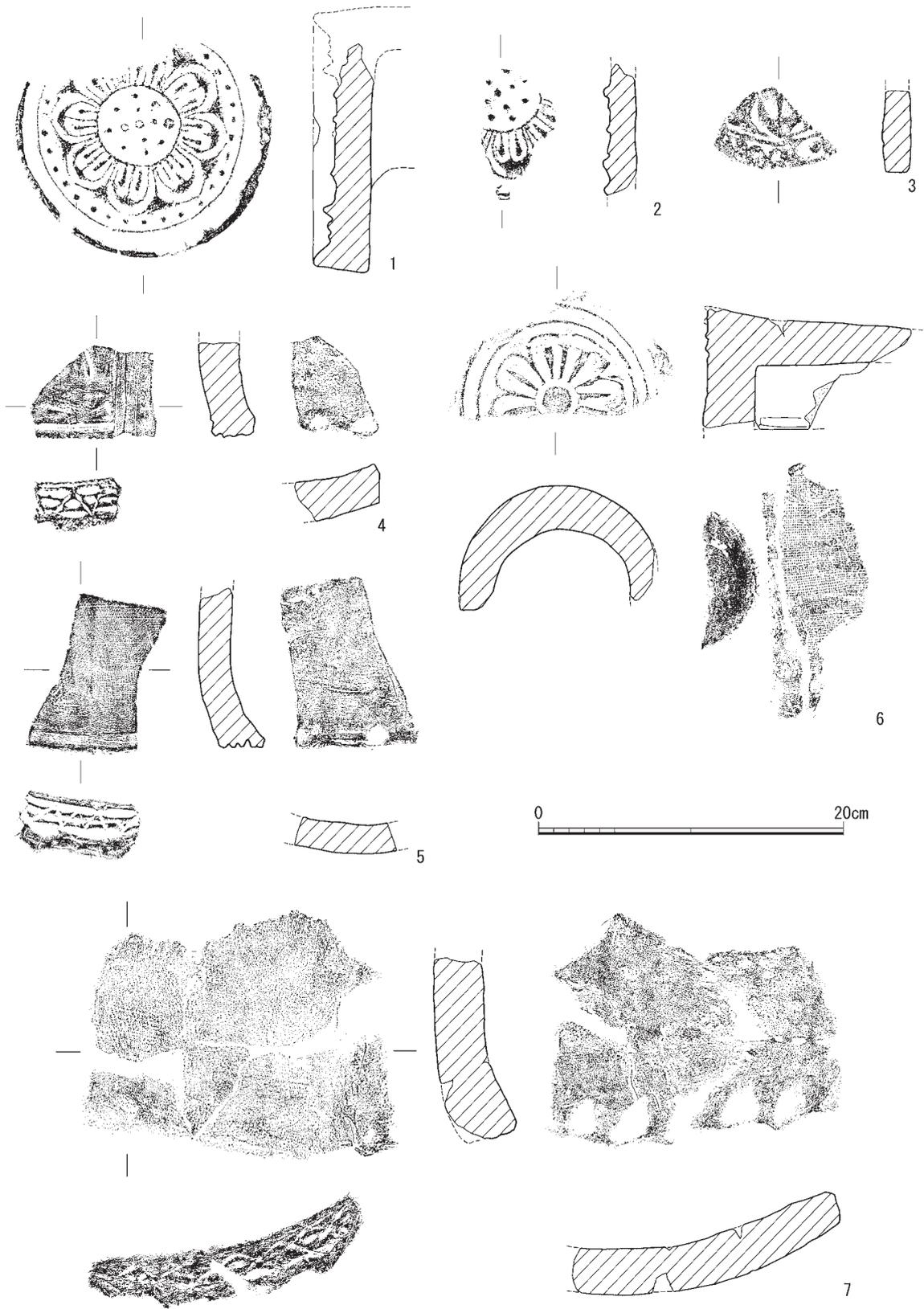
3は軒丸瓦Ⅰb型式である。掘立柱建物SB2003の柱穴SP080から出土した。外区と蓮弁の一部が残存する。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰色を呈する。

4は軒平瓦Ⅰa型式である。掘立柱建物SB2012の柱穴SP071から出土した。残存瓦当幅は5.2cmである。瓦当と右側縁の一部が残存する。凹面の瓦当縁に幅0.8cmほどの明瞭な段差がみられるが、次の5は同型式であるものの、段差は認められない。施文具の一部であろうか。側縁に2段のケズリを施す。胎土は密で、焼成は良好である。色調はにぶい橙色を呈する。

5も軒平瓦Ⅰa型式である。掘立柱建物SB2015の柱穴SP350から出土した。残存瓦当幅は7.8cmである。4にみられた凹面の瓦当縁の段差はみられない。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

6は軒丸瓦Ⅲ型式である。柱穴SP289から出土した。瓦当面と丸瓦部の1/2程度が残存する。瓦当径は14.5cm前後、残存長13.2cmである。中房の蓮子は大きめの1個を配置する。瓦当裏側から丸瓦部凹面にかけて布目が見られる。このことから製作技法として横置き一本作りの可能性が考えられる。後述する8や10～20では、瓦当面が薄く剥離することから、横置き一本作りに伴って粘土を詰めたことを示すと思われる。丸瓦部の凹面の側縁と端面にヘラケズリを施す。胎土は密で、焼成は良好である。色調は暗灰色を呈する。なお、SP289は掘立柱建物としては復元できなかったが、礎石・掘立柱併用建物SB2020と重複する柱穴である。

7は軒平瓦Ⅰb型式である。礎石・掘立柱併用建物SB2020の柱穴SP093から出土した。残存瓦当幅は17.4cmである。瓦当と右側縁の一部が残存する。側縁にケズリを施す。摩滅のため、凹面の瓦当縁の段差の有無は不明である。胎土は密で、焼成はやや軟質である。色調は淡黄色である。



第55図 軒瓦実測図1 遺構出土(1/4)



第56図 軒瓦実測図2 遺構出土(1/4)

溝S D293出土軒瓦(第56図8) 8は軒丸瓦Ⅲ型式である。瓦当の1/3余りが残存する。瓦当径は16.0cmである。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰色を呈する。

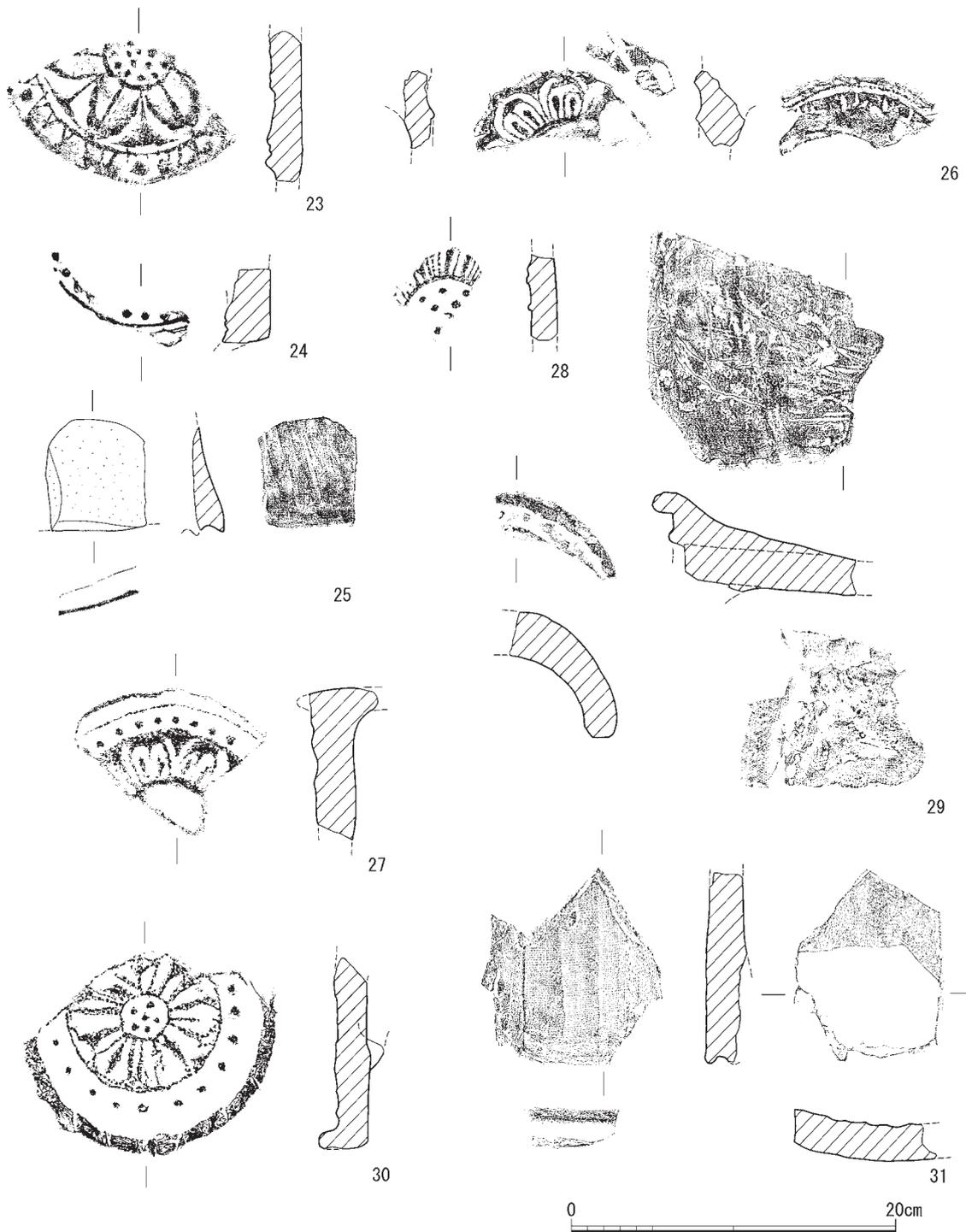
区画S X097出土軒瓦(第56図9～20) 9は軒丸瓦Ⅲ型式である。丸瓦部は1/2程度が残存するものの、瓦当は外区のごく一部が残存するのみである。残存長16.5cmを測る。凹面側に布目が残る。6と同様、横置き一本作りの可能性が高い。胎土は密で、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。10～19はいずれも軒丸瓦Ⅲ型式の破片資料である。19を除き、厚さが1.0～2.5cmほどに、薄く剥離しているものが多い。軒丸瓦Ⅲ型式については、第5次調査出土資料(報告書図23の1)や上記6の資料から、横置き一本作りと思われることから、瓦当の剥離も範への粘土のつめ方によるものと考えられる。19はやや厚手の資料である。これらはおおむね胎土は密で、焼成は良好である。色調は外面が灰色、断面がにぶい黄橙色を呈するものが多い。20は軒丸瓦Ⅱb型式である。外区と内区の一部が残存する。瓦当裏側には丸瓦部の接合に伴う刻み目の圧痕が転写されている。胎土は密で、焼成は良好である。色調は青灰色を呈する。

区画S X099出土軒瓦(第56図21・22) 21は軒丸瓦Ⅰa型式である。瓦当の2/5程度が残存する。瓦当の復元径は15.4cm、厚さ2.5cmである。瓦当裏面はナデを施す。胎土は密で、焼成はやや軟である。色調は灰白色を呈する。22は軒丸瓦Ⅸ型式である。瓦当の1/2程度と丸瓦部の一部が残存する。残存長は10.4cm、瓦当の復元径は13.0cmである。平城宮6313D型式と同範もしくは同文と考えられる。胎土はやや粗く、焼成は良好である。色調はにぶい黄褐色を呈する。

土坑S K143出土軒瓦(第57図23) 23は軒丸瓦Ⅰb型式である。瓦当の1/3程度が残存する。瓦当の復元径は16.4cm、厚さは1.9cmである。瓦当裏面はナデを施す。全体に摩滅が著しい。胎土はやや粗く、焼成はやや軟である。色調は浅黄橙色を呈する。

瓦溜りS X219出土軒瓦(第57図24・25) 24は軒丸瓦Ⅱ型式である。外区外縁の形状が明らかでないため、Ⅱa型式かⅡb型式か断定できない。外区の珠文のみの破片である。瓦当の復元径は16.8cmである。胎土は密で、焼成はやや軟である。色調は灰色が強い灰白色を呈する。25は軒平瓦Ⅱ型式である。平瓦部に接合した顎部が剥離したものである。瓦当の残存幅5.0cm、残存長6.8cmを測る。凸面にはナデを施す。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰色を呈する。

瓦溜りS X208出土軒瓦(第57図26～31) 26は軒丸瓦Ⅱ型式である。内区の蓮弁のみの破片である。瓦当裏面には丸瓦部との接合のため刻み目が施される。裏面を観察すると、刻み目を持つ粘土塊の前後に布目の圧痕がみられる粘土塊がある。範に粘土をつめる際や丸瓦部を接合する際に布を使用したのであろうか。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。27は軒丸瓦Ⅱa型式である。外区と内区の蓮弁の一部が残るものの、中房は摩滅しており、蓮子等も確認できない。瓦当の復元径は17.0cm、厚さは2.5cmである。全体に摩滅が著しい。胎土はやや粗く、焼成もやや軟である。色調は浅黄色を呈する。28は軒丸瓦Ⅱ型式である。中房と蓮弁の一部の破片である。瓦当の厚さは1.6cmである。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰黄色を呈する。29は軒丸瓦Ⅴ型式かと推定される資料である。外区と丸瓦部の一部が残存する。瓦当の復元径は15.0cmほど、残存長は14.4cmである。瓦当は外区の外縁と珠文が確認できる。内区は丸瓦部の



第57図 軒瓦実測図3 遺構出土(1/4)

接合部で剥落しているが、丸瓦部と外縁部の粘土では色調が異なり、接合部の状況がわかりやすい。丸瓦部の先端には刻み目などの加工は認められず、丸瓦部製作時の布目の圧痕が凹面側に残る。また、広端面に施されたケズリの痕跡も明瞭に確認できる。瓦当と丸瓦の接合部には粘土を補充し、その上からナデを施す。凸面は全体に縦方向のナデである。胎土は密であるが、稀に径4mm程度の砂粒を含む。焼成は良好である。色調は灰色を呈する。なお、第6次調査で類例が

出土している(第6次調査報告第62図18)。30は軒丸瓦Ⅶ型式である。丸瓦部とその接合部分が欠損するものの、瓦当の2/3程度が残存する。瓦当径は16.0cm、厚さは2.0cmである。全体に摩滅が著しく、瓦当裏面の調整等は不明である。胎土はやや粗く、焼成も軟質である。色調は浅黄色を呈する。31は軒平瓦Ⅱ型式である。顎部が剥落し、平瓦の製作時の平行タタキを確認できる。瓦当の残存幅は5.6cmである。胎土は密で、焼成は堅緻である。色調は灰色を呈する。

②丸瓦・平瓦

第7次調査で出土した丸瓦・平瓦については、第6次調査における分類に準じて、型式の分類、認定を行った(第6次調査報告67～69頁を参照)。報告は、代表的のものについて図示し、遺構ごとの出土傾向を重量で示した。

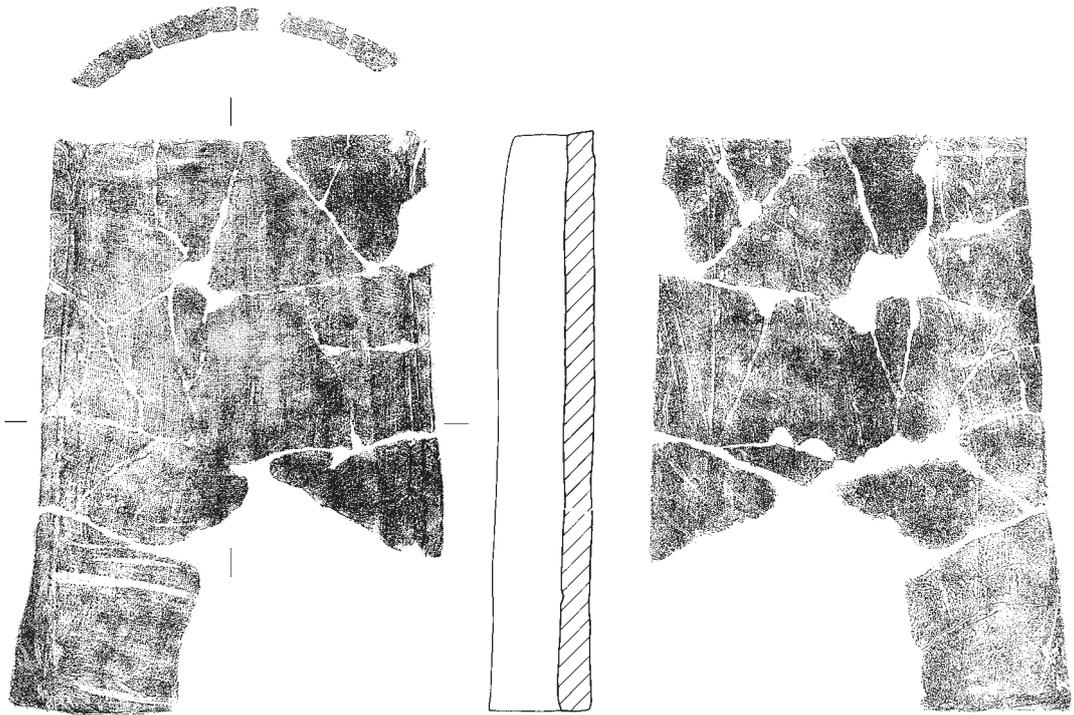
区画溝S D001・010・090・100出土瓦類(第58図32～第61図40) 4条検出した区画溝のうち、瓦類が大量に出土したのはS D090のみであり、残る3条のS D001・010・100については削平等もあるが、わずかししか出土しなかった。S D001の出土総量は2.7kgで、平瓦ばかりであった。H-D類の小片も含まれるが、大半はH-A類である。S D010の出土総量は1kgにも満たず、分類できないものばかりである。S D100の出土総量は1kg程度で分類できないものばかりである。

S D090では、Ⅷ-k17区付近で大量の瓦類が出土した(第13図)。この付近で出土した瓦類の総量は388.4kgである。このうち、平瓦は318.5kgと全体の8割以上を占め、明らかに丸瓦と断定できるものは1%程度しか確認できなかった。また5cm以下とした破片でも平瓦H-A類と思われるものが多いことから、平瓦の比率はさらに上がると思われる。平瓦はH-A1類が238.9kgと平瓦出土量の全体の75%を占める。H-A2類も42.6kg出土しており、凸面にナデを施すH-A類が出土平瓦の98%を占めることになる。このほかに、H-B1類を確認したものの、ごく少量である(2.1kg)。

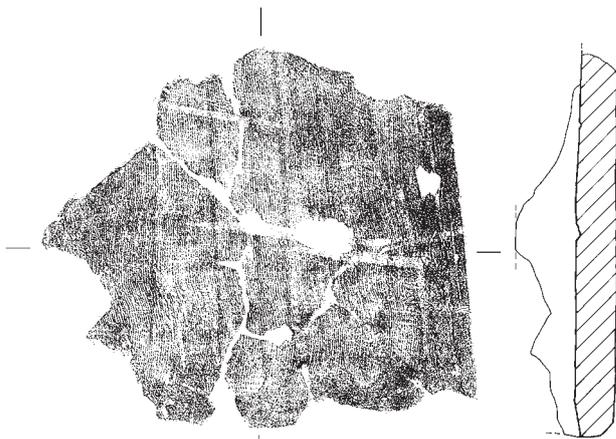
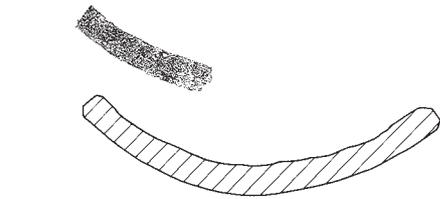
32～40はⅧ-k17区付近で出土したもので、いずれも平瓦H-A1類に分類できる。これらは、胎土や焼成、調整手法などの点で、ほぼ同じ特徴を有する。ただ色調のみは、橙色ないし赤褐色を呈するもの(32・33・35～37・40)と灰白色を呈するもの(34・38・39)に分かれ、前者が圧倒的に多い。出土資料から法量を復元すると、全長46～48cm、狭端幅25～27cm、広端幅31～32cm、厚さ2～4cm程度である。重量は32で6.2kg、36で4.2kgである。胎土は密で、0.5～2mm程度の砂粒を含むものが多い。焼成は良好なものが多い。凸面の調整はおおむね縦方向のナデで、丁寧に施されることが多いが、部分的に先行するタタキ痕跡を確認できる場合がある。凹面には杵板痕が明瞭に残る。杵板の幅は3～4cmである。

このほか、S D090-2の北西角からS D090-1かけて、第3次調査と第7次調査でそれぞれ平瓦が出土している。また、S D090-5でも平瓦の破片が出土している。

掘立柱建物S B2012出土瓦類(第62図41～44) 出土総量は6.4kgである(内訳は丸瓦1.5kg、平瓦4.9kg)。丸瓦は出土量が少なく、41も含めてM-A類かM-B類か判別のつかないものがほとんどである。平瓦はH-A～H-C類が確認でき、H-A類またはH-B類が主体である。これに対してH-D類は確認できなかった。したがって、S B2012の造営段階では1枚作り平瓦がまだ導入されていなかったと考えることができる。図示したもののうち、41が柱穴S P070、42が柱穴S P002、43・



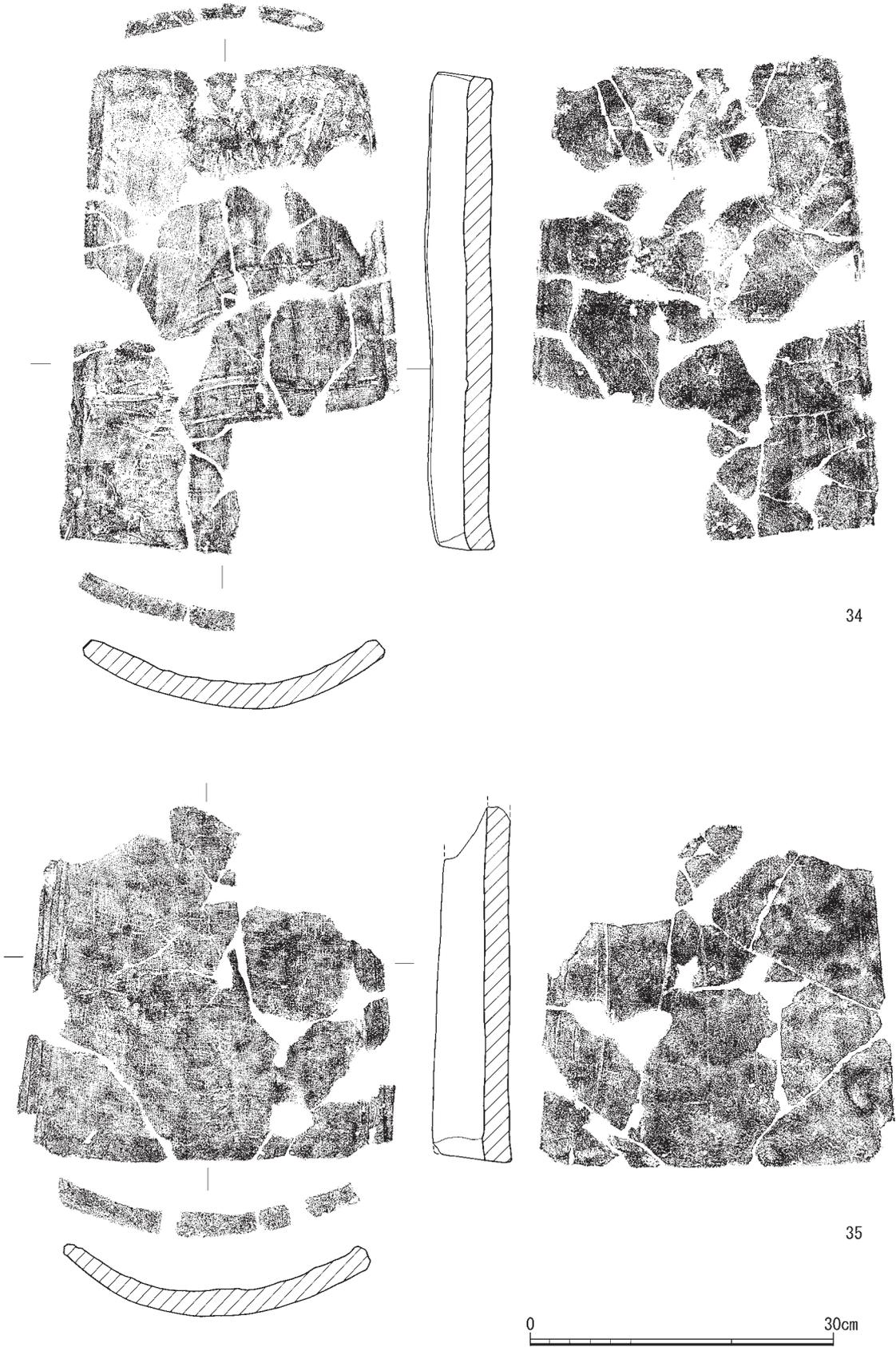
32



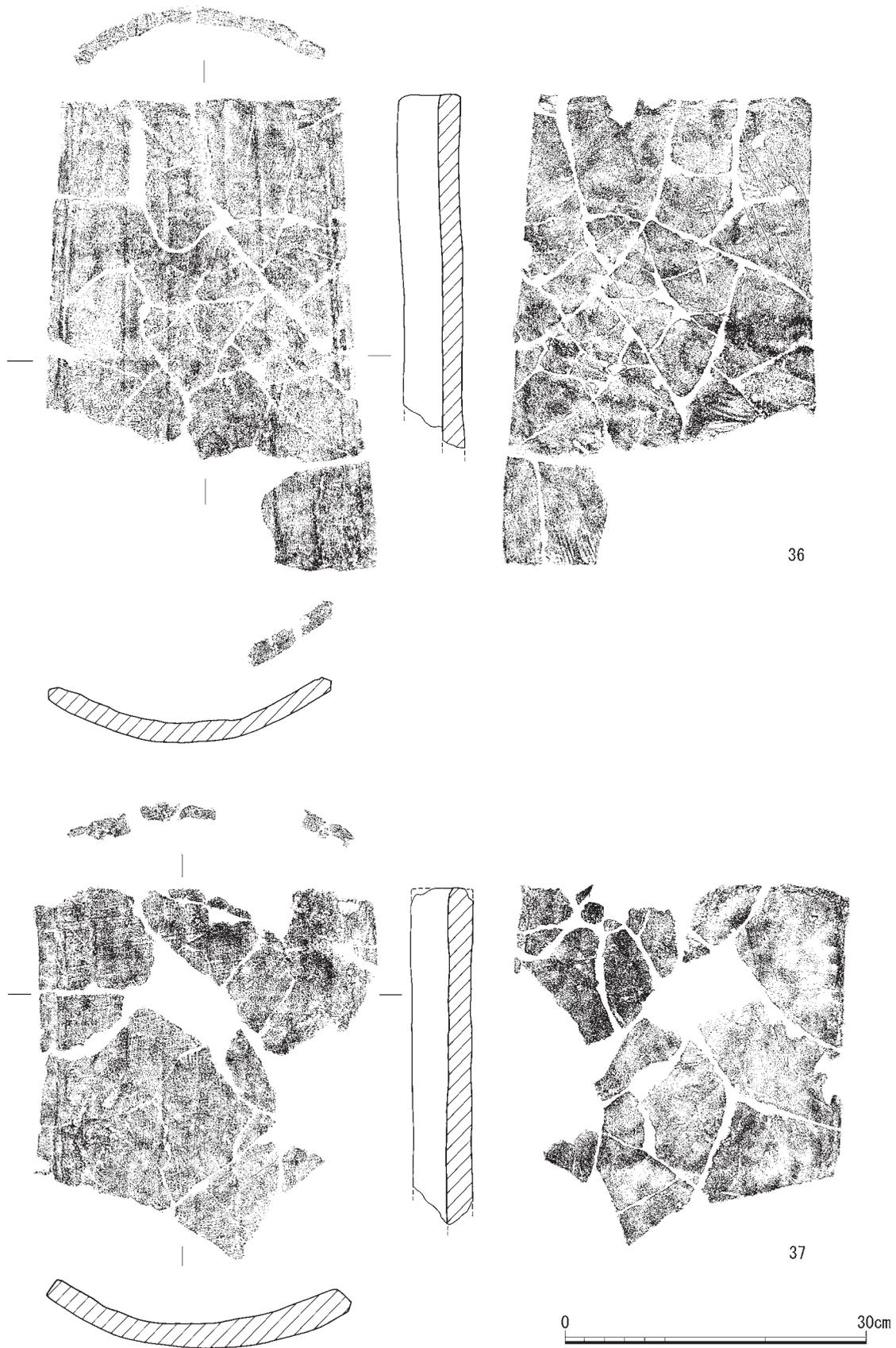
33



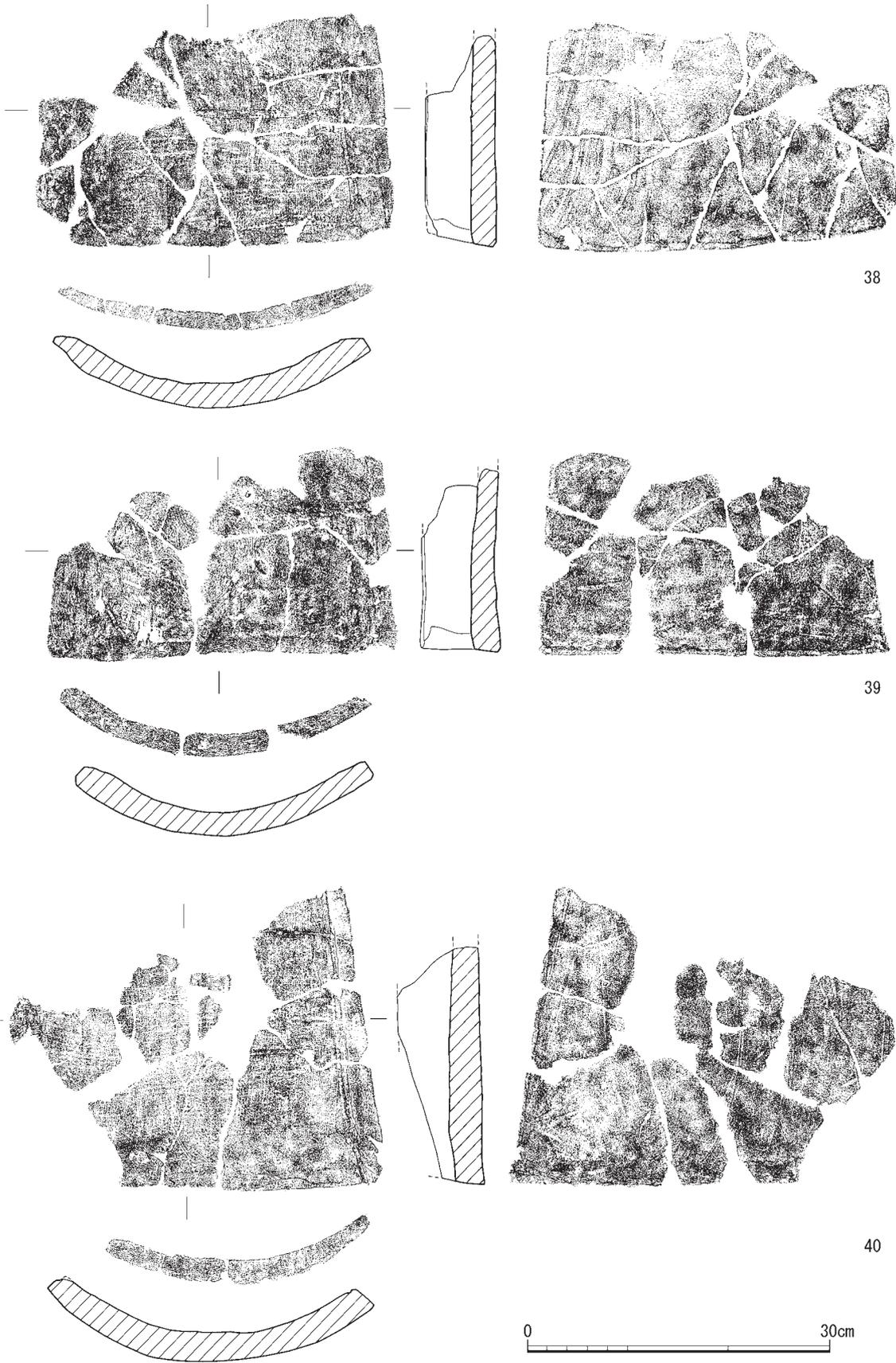
第58図 区画溝 S D090出土平瓦実測図1 (1/6)



第59図 区画溝 S D090出土平瓦実測図 2 (1/6)



第60図 区画溝 S D090出土平瓦実測図3 (1/6)



第61図 区画溝 S D090出土平瓦実測図 4 (1/6)

44が柱穴S P 351からの出土である。

掘立柱建物S B 2014出土瓦類 (第62図45～48) 出土総量は少なく、3.6kgである(内訳は丸瓦0.5kg、平瓦3.1kg)。丸瓦は出土量が少なく、45を含めてM-A類かM-B類か判別がつかない。平瓦はH-A～H-D類のいずれも確認できる。H-A類は、色調が赤褐色を呈するものである。H-C類またはH-D類は、焼成がやや軟質で、摩滅しているものが多い。45・48は柱穴S P 122、46・47は柱穴S P 118の出土である。

土坑S K 352出土瓦類 出土総量は1.9kgで、すべて平瓦である。型式はH-A1類またはH-A2類である。

総柱建物S B 2015出土瓦類 (第63図49～54) 各柱穴から大量の瓦類が出土した。出土総量は16.8kgである(内訳は丸瓦0.5kg、平瓦15.7kg、不明0.6kg)。明らかに丸瓦と判断できるものは図示した1点しかなく(49)、M-A類かM-B類かも判断できない。平瓦はH-A～H-D類のいずれも確認できるが、H-A類やH-B類はやや少ない(50・52)。縄タタキを施したH-C類が多く、その中には粘土紐成形のH-C2類が少数認められる(53)。大半は粘土板成形である。全体に摩滅気味のものも多く、確実にH-D類と言えるものは少ないが、凸面に縦位のタタキを施すものもあることから、一定量は存在するようである。出土している瓦類の色調はまちまちである。49・51～54は柱穴S P 350、50は柱穴S P 365からの出土である。

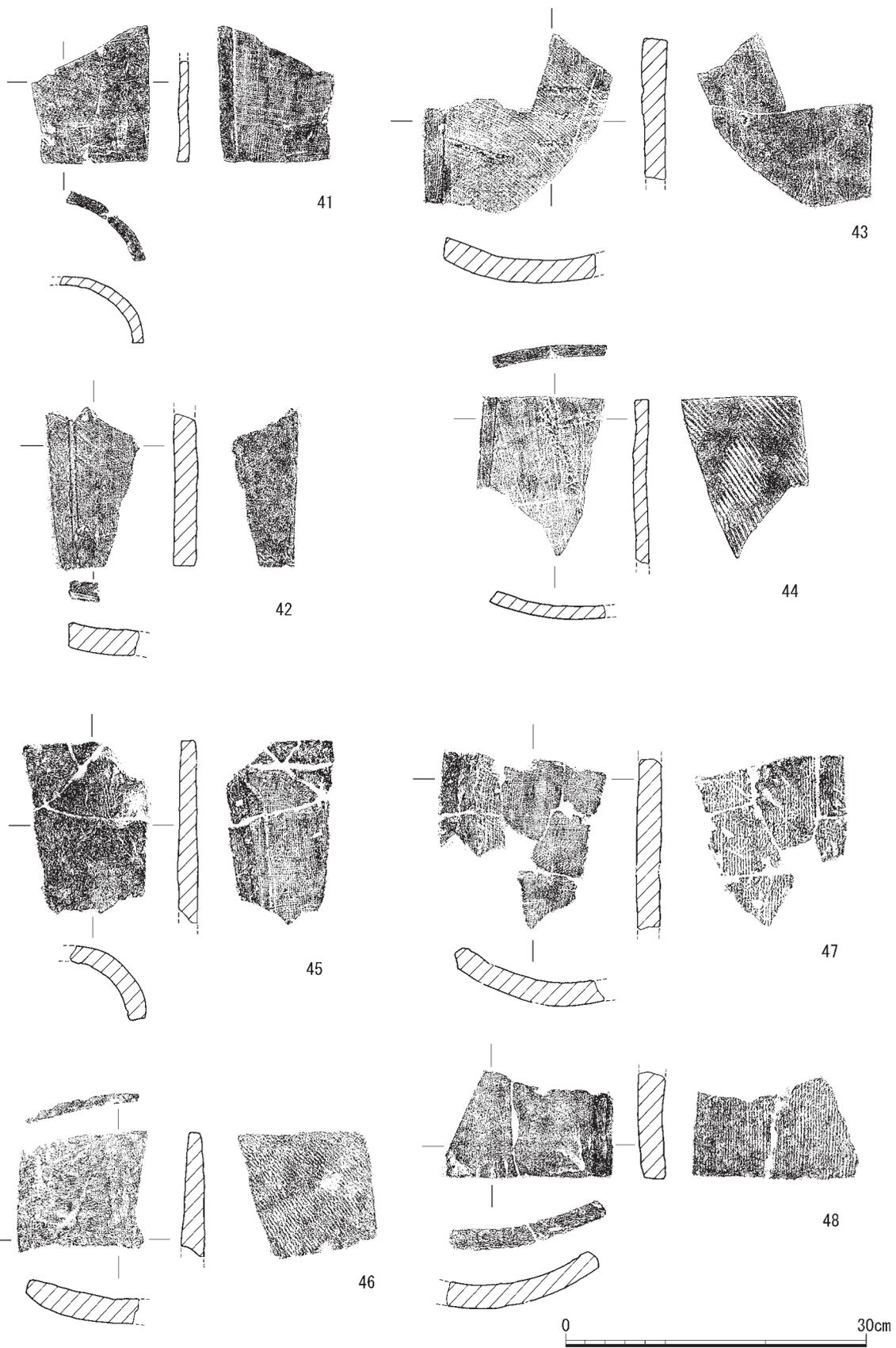
総柱建物S B 2010出土瓦類 出土総量は7.1kgである(内訳は丸瓦0.4kg、平瓦6.5kg、不明0.2kg)が、この建物については第4次調査の際に一部が調査されており、その際も多数の瓦類が出土しているため、今回提示した数量は本当の意味での総量ではない。丸瓦はM-A類かM-B類か判別のつかないものである。平瓦はH-A～H-D類までの各型式が出土している。H-C2類も1点のみだが、確認できる。H-D類が柱穴S P 188から出土している。

掘立柱建物S B 2005出土瓦類 出土瓦はわずか1点のみで、平瓦の破片である(0.1kg)。凸面に縦位方向と思われる縄タタキを施すが、摩滅も著しく、H-C類なのかH-D類なのか断定できない。

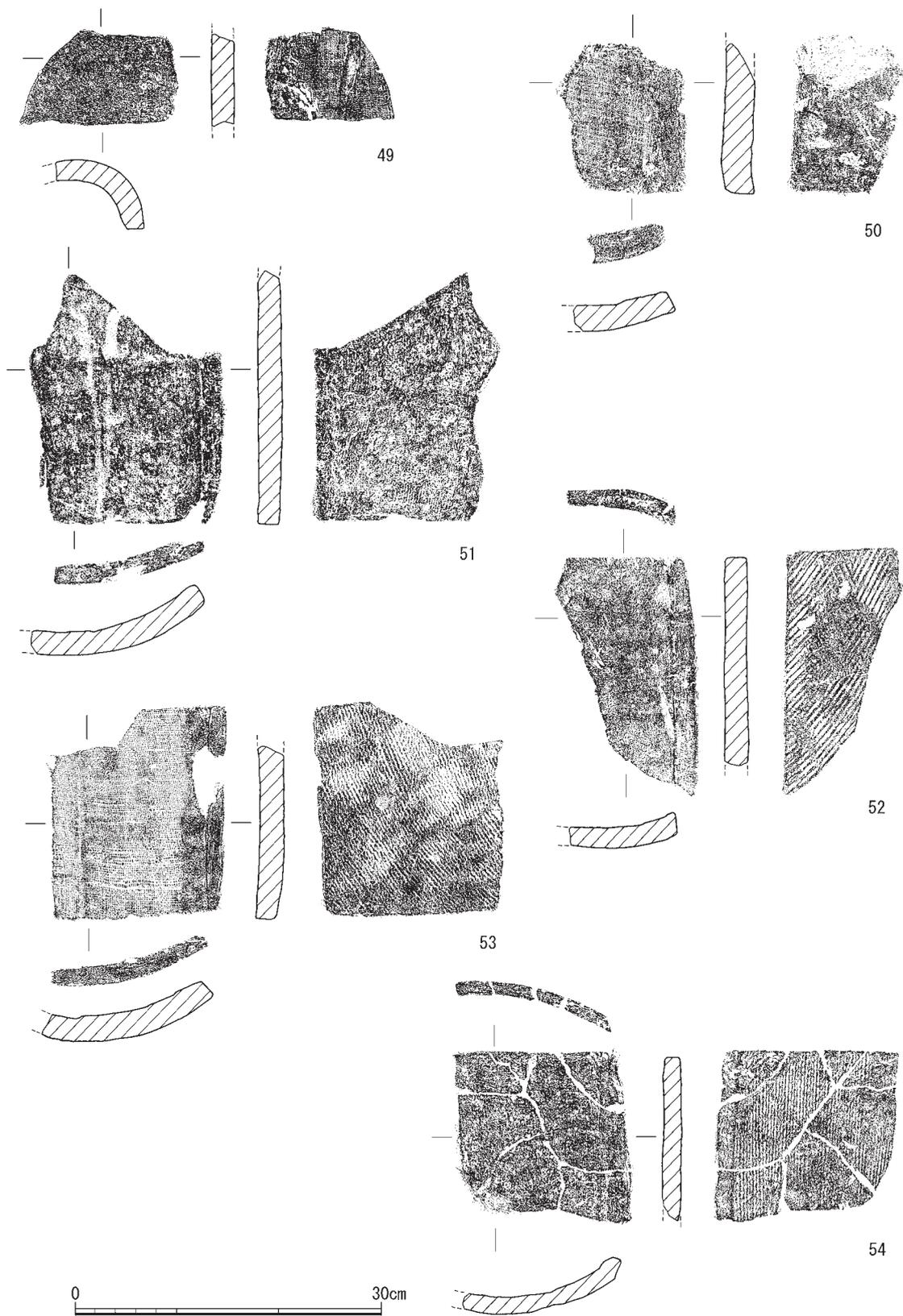
土坑S K 103出土瓦類 出土総量は0.6kgである(内訳は丸瓦0.2kg、平瓦0.4kg)。丸瓦や平瓦の破片が出土している。平瓦は細片が多いが、色調が明赤褐色を呈するH-A類の破片が確認できる。

土坑S K 126出土瓦類 出土総量は0.5kgである(内訳は丸瓦0.1kg、平瓦0.4kg)。丸瓦や平瓦の破片が出土している。平瓦はH-A2類の破片である。

掘立柱建物S B 2001出土瓦類 (第64図55～第65図62) 各柱穴から多数の瓦類が出土しており、出土総量は32.9kgである(内訳は丸瓦5.5kg、平瓦22.2kg、不明5.2kg)。掘立柱建物で出土した瓦類としては非常に多い。丸瓦はM-B類を確認しているが、判別のできないものも多い。平瓦はH-A～H-D類のいずれも確認できる。摩滅しているものも多いが、H-C類ないしH-D類と考える凸面に縄タタキを施すものが多い。明らかにH-D類と判断できるものもある(62)。H-B1類の1点は平瓦の幅が通常の半分ほどに打ち割られたものがあり、鬘斗瓦の可能性がある(59)。美濃山廃寺全体で、明らかに鬘斗瓦と思われる資料はなく、可能性があるものとして59のみを確認した。55は柱穴S P 040、56・59は柱穴S P 046、57は柱穴S P 042、58・62は柱穴S P 043、61は柱穴S



第62図 掘立柱建物 S B 2012・2014出土瓦類実測図(1/6)



第63図 総柱建物 S B 2015出土瓦類実測図(1/6)

P044からの出土である。また、60はS P042とS P046の出土資料が接合したものである

掘立柱建物S B2003出土瓦類(第66図65・66) 出土総量は6.3kgである(内訳は丸瓦0.4kg、平瓦2.5kg、不明3.4kg)。大型の破片は少なく、長さ10cm未満のものが多い。丸瓦は出土量が少なく、M-A類かM-B類か判別のつかないものがほとんどである。平瓦はH-A～H-D類のいずれも確認できる。摩滅をしているものが多く詳細は明らかにできない。丸瓦・平瓦とも胎土に長石やチャートなどの砂粒を含むが、焼成は全体に甘いものが多い。出土している資料の色調はまちまちである。65はH-D類で柱穴S P087からの出土、66はH-B2類で柱穴S P080からの出土である。

掘立柱建物S B2004出土瓦類(第66図67～69) 出土総量は少なく、3.8kgである(内訳は丸瓦0.1kg、平瓦1.5kg、不明1.7kg)。67を除くと、明らかに丸瓦と思われる破片はほとんどない。平瓦も破片が小さく、摩滅もしているが、H-D類の可能性のあるものが含まれる(68・69)。

掘立柱建物S B2016出土瓦類(第65図63・64) 出土総量は5.8kgである。大半が平瓦(5.6kg)で、丸瓦と思われる破片は含まれていない。平瓦は摩滅が著しく、凸面の調整や凹面の布目などの判別できないものも多い。しかし、わずかにみとれる特徴からH-D類である可能性が高い(63)。胎土に微細な砂粒を含むが、焼成が甘く摩滅の著しい一群と、胎土に径1mm程度の砂粒を含み、焼成がやや軟質の一群とが、全体に占める割合が高そうである。後者は一枚作りであることが確実であるが、前者は摩滅のため確かなことはわからない。柱穴S P345から摩滅気味の平瓦H-B1類の資料が出土した(64)。

掘立柱建物S B2017出土瓦類 出土総量は非常に少なく、わずか0.4kgである(内訳は平瓦0.2kg、不明0.2kg)。明らかに丸瓦と思われる破片は含まれていない。平瓦は摩滅が著しく、詳細は不明であるが、縦位に縄タタキを施すものがある。

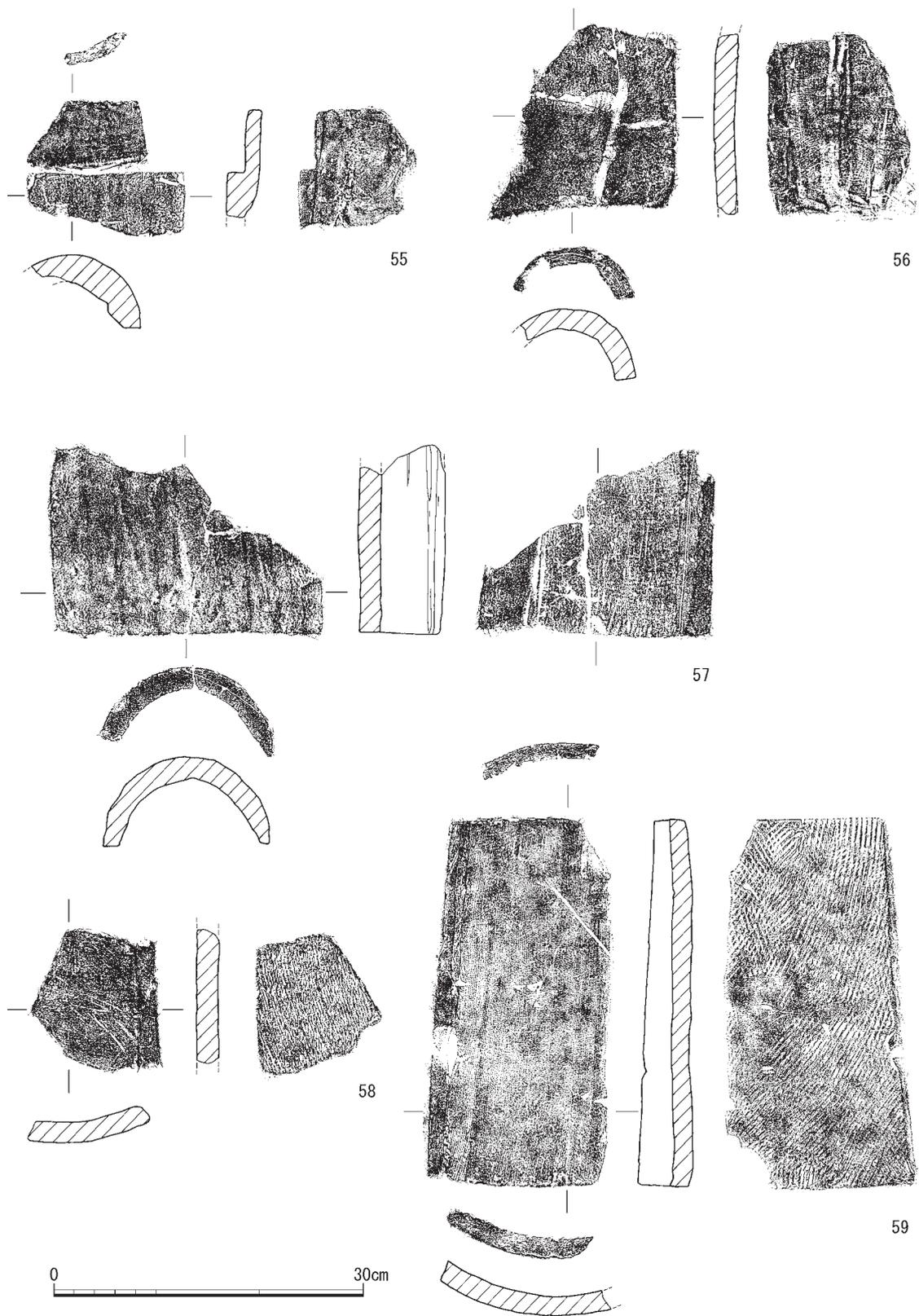
溝S D405出土瓦類 出土総量は1.8kgで、すべて平瓦と考えられる。平瓦も残りの良いH-A1類が2点ある(同一個体かもしれない)が、残りは小破片である。

土坑S K092出土瓦類 出土総量は少なく、1.0kgである(内訳は平瓦0.3kg、不明0.7kg)。全体に細片が多く、丸瓦と思われる破片はごくわずかである。平瓦も縦位に縄タタキを施すものが1点あるほかは小破片のみである。

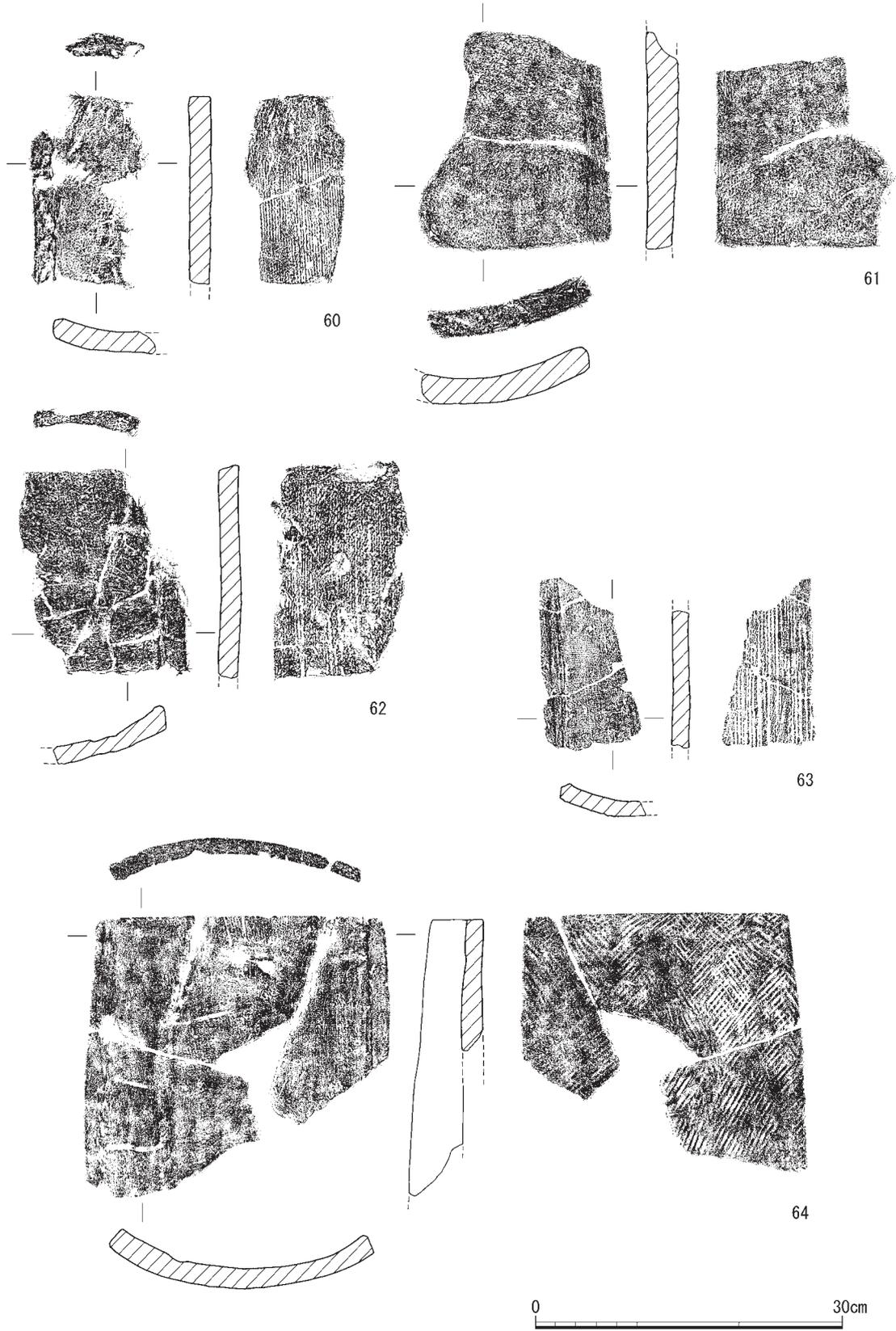
掘立柱建物S B2009出土瓦類 出土総量は4.0kgである(内訳は丸瓦0.1kg、平瓦3.8kg、不明0.1kg)が、この建物についても第3次調査の際に一部が調査されており、その際も多数の瓦類が出土しているため、今回提示した数量は本当の意味での総量ではない。丸瓦は量が少なく詳細は不明である。平瓦はH-A類が2.5kgと多く出土している。また、H-D類も1.3kg出土している。

雨落ち溝S D355出土瓦類 出土総量は1.1kgで、すべて平瓦である。摩滅が著しいが、胎土に径1～2mm程度の長石やチャートなどを含む、やや粗いもので、焼成が甘く、色調は灰オリーブ色ないし橙色を呈するものが多い。これは調整が不明瞭であるが、区画溝S D090で大量に出土しているH-A1類ないしH-A2類と同一型式に位置づけられると考えている。

土坑S K415出土瓦類 出土総量は16.2kgである(内訳は丸瓦2.0kg、平瓦14.2kg)。土坑の一括資料であるため、出土破片数は29点である。丸瓦には玉縁の破片があり、M-B類が含まれる



第64図 掘立柱建物 S B 2001出土瓦類実測図(1/6)



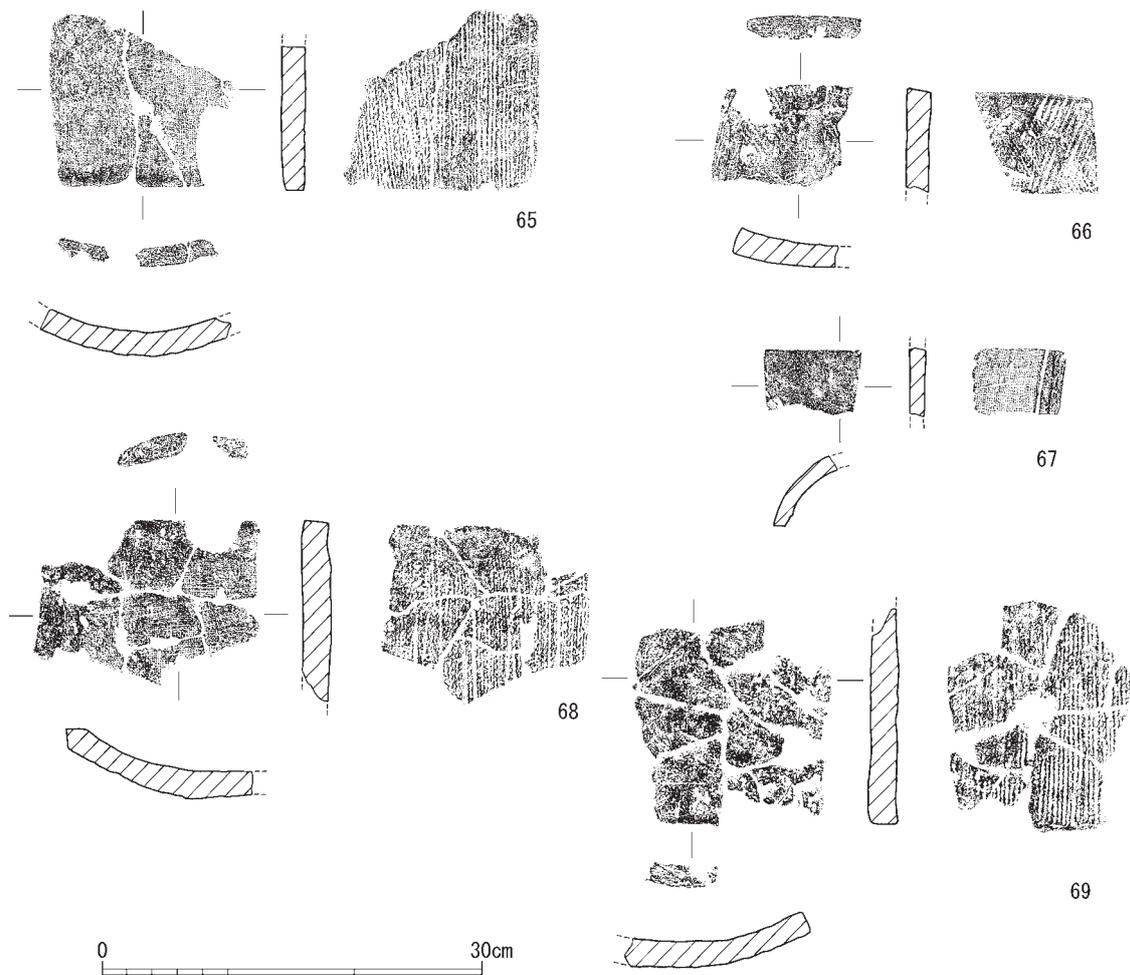
第65図 掘立柱建物 S B 2001・2016出土瓦類実測図(1/6)

(1.35kg)。平瓦はH-B1ないしH-B2類が多く、明らかに一枚作りの平瓦は確認していない。H-B1ないしH-B2類は焼成がやや甘く、摩滅の著しいものが多い。ただし、小さな破片資料であるが、硬質なものも含まれる。H-A類とH-C類と思われる破片もあるが、摩滅が著しく詳細は不明である。なお、S K 415からは覆鉢形土製品が1点出土している(第88図399)が、H-D類が認められないということは覆鉢形土製品の時期を考える上で参考になる。

土坑 S K 433出土瓦類 出土総量は3.6kgである(内訳は平瓦0.4kg、不明3.2kg)。破片資料が多く、長さが10cmに満たないものが大半である。平瓦は摩滅の著しいものもみられるが、調整や胎土・色調などの点から、区画溝 S D 090で大量に出土しているH-A1ないしH-A2類と同一型式に位置づけられるものが多い。

土坑 S K 225出土瓦類 出土総量は1.2kgである(内訳は平瓦0.8kg、不明0.4kg)。平瓦はH-A1類とH-C1類の大きめの破片が1点ずつあるほかは小片のみである。

礎石・掘立柱併用建物 S B 2020出土瓦類 個々の柱穴や礎石据え付け穴の遺存状況が異なるため出土量に違いがあるが、S B 2020全体での瓦類の出土総量は182.3kgで、内訳は丸瓦24.9kg、平瓦133.9kg、不明23.5kgである。丸瓦には破片資料が多いため、M-A類かM-B類か判断できるも



第66図 掘立柱建物 S B 2003・2004出土瓦類実測図(1/6)

のが少ない。判断できるものの大半はM-B類である。平瓦は、個々の柱穴では量の多寡に違いがあるものの、全体として凸面に縦位の縄タタキを施すH-D類が多い。なお、柱穴S P 250から瓦類の出土はなかった。

礎石据え付け穴S P 290 出土総量は6.6kgである(内訳は丸瓦0.4kg、平瓦3.2kg、不明3.0kg)。不明なものが多く、丸瓦の量が少ない。平瓦は凸面に縦位の縄タタキを施すH-D類がみられる。

柱穴S P 291(第68図75) 出土総量は35.3kgである(内訳は丸瓦5.4kg、平瓦26.3kg、不明3.6kg)。丸瓦はM-A類・M-B類の区別がつかないものが大半で(5.0kg)、M-B類と判断できるものが少量存在する(0.4kg)。丸瓦にくらべて平瓦が多く、その半数が凸面に縦位の縄タタキを施すH-D類である(12.5kg)。また、平瓦は詳細に分類できないものが8.7kgほどある。このほかH-B1類が一定量存在する(1.8kg)。

礎石据え付け穴S P 294 出土総量は4.5kgである(内訳は丸瓦0.6kg、平瓦2.5kg、不明1.4kg)。長さが10cmを超えるような破片はほとんどない。丸瓦・平瓦とも型式分類ができないものが8割を超える。

柱穴S P 142 出土総量は3.7kgである(内訳は丸瓦0.6kg、平瓦2.1kg、不明1.3kg)。丸瓦はM-A類かM-B類か、判別のできない破片がほとんどであるが、M-B類と断定できるものが1点(0.1kg)ある。平瓦はH-B1類が最も多く(0.7kg)、次いでH-C類が多い(0.3kg)。H-D類と断定できるものはなく、可能性のあるものが少しある程度である(最大で0.4kg)。

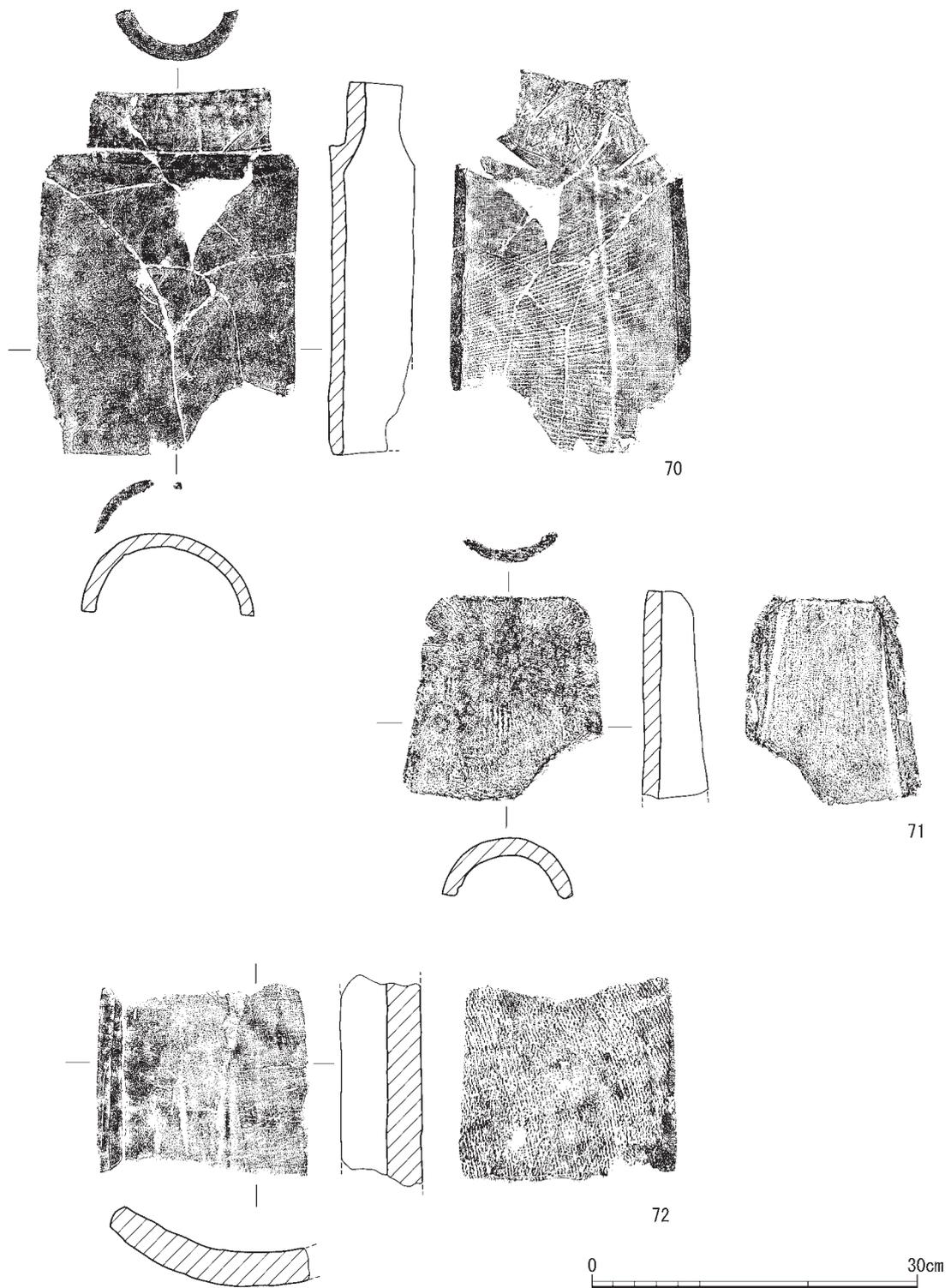
柱穴S P 093(第68図73・74) 出土総量は58.5kgで、S B 2020の柱穴の中では最も大量の瓦類が出土した(内訳は丸瓦6.8kg、平瓦45.9kg、不明5.8kg)。平瓦が圧倒的に多く、かつその2/3程度が凸面に縦位の縄タタキを施すH-D類である(32.1kg)。ただし、1枚作りと断定できないものもある。詳細な分類のできないものが7.3kgほどある。丸瓦はM-A類・M-B類の区別がつかないものが全体の9割を超え(6.4kg)、M-B類と判断できるものは1割に満たない(0.4kg)。

礎石据え付け穴S P 144 出土総量は1.6kgである(内訳は丸瓦0.2kg、平瓦1.0kg、不明0.4kg)。長さが10cmを超えるものはほとんどなく、小さな破片が多い。

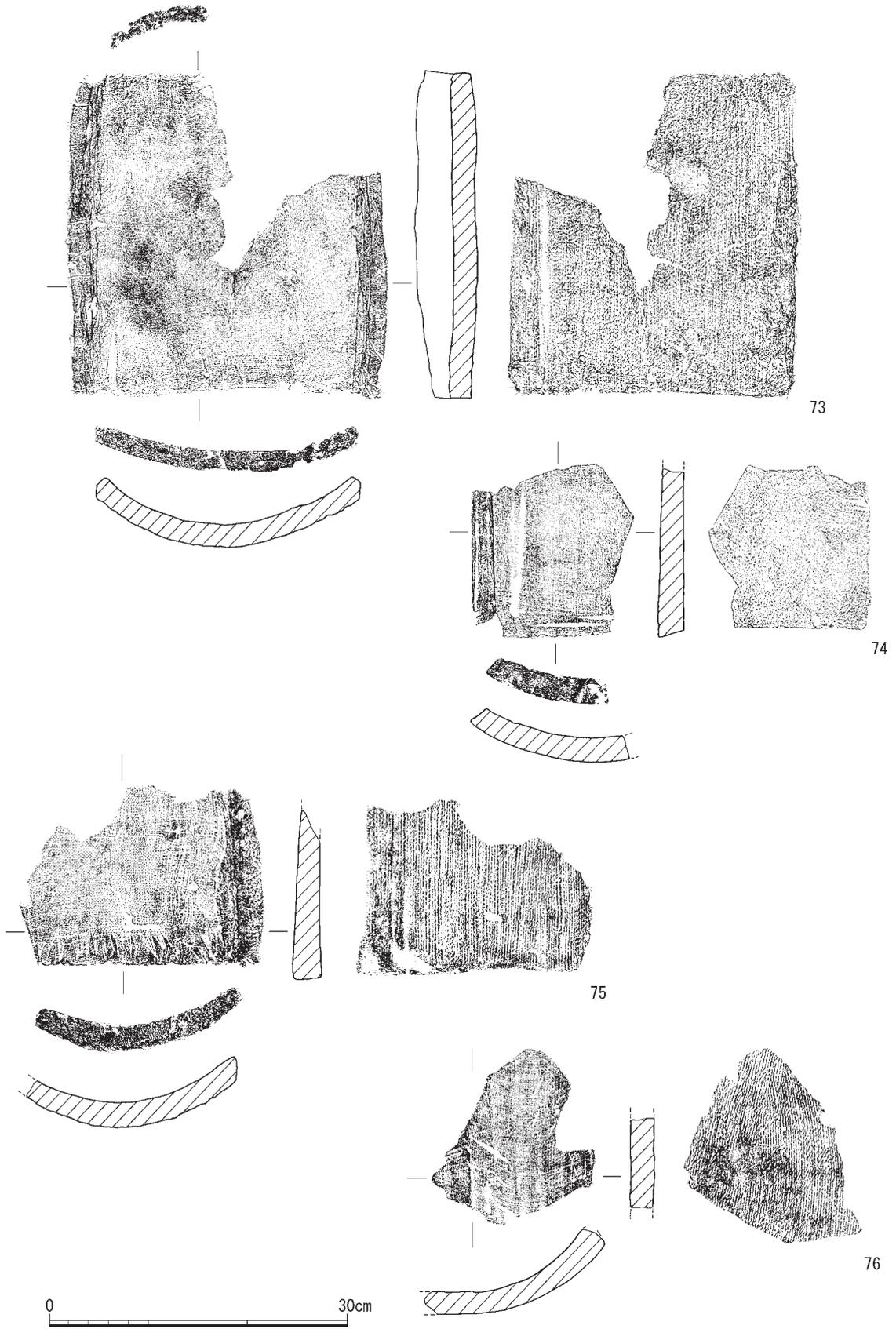
柱穴S P 105 出土総量は16.4kgである(内訳は丸瓦0.8kg、平瓦12.8kg、不明2.8kg)。平瓦が圧倒的に多く、その半数が凸面に縦位の縄タタキを施すH-D類である(6.7kg)。このほかH-B1類が一定量存在する(1.3kg)。丸瓦は全体の出土量が少ないものの、1/3程度がM-B類である(0.3kg)。

柱穴S P 141(第67図70・第68図76) 出土総量は12.7kgである(内訳は丸瓦2.5kg、平瓦10.0kg、不明0.2kg)。平瓦が圧倒的に多く、その大半が凸面に縦位の縄タタキを施すH-D類である(7.1kg)。このほかH-A2類が一定量存在する(1.7kg)。丸瓦はM-A類・M-B類の区別がつかないものは、70のみで、M-B類である(1.5kg)。なお、76は平瓦H-C類であるが、凸面に幅1.5cm程度の朱線が残る。建物の柱や組物を朱塗りする際に付着したものと考えられる。76は掘形出土であるため、S B 2020ではなく、ほかの建物で使用されていたものが混入した可能性がある。

柱穴S P 106 出土総量は10.9kgである(内訳は丸瓦1.5kg、平瓦6.6kg、不明2.8kg)。平瓦のうちその半数が凸面に縦位の縄タタキを施すH-D類である(2.9kg)。このほかH-C類が一定量存在す



第67図 礎石・掘立柱併用建物S B 2020出土瓦類実測図1 (1/6)



第68図 礎石・掘立柱併用建物S B 2020出土瓦類実測図2 (1/6)

る(1.8kg)。丸瓦はM-A類・M-B類の区別がつかないものが多く、M-B類と断定できるものは1点のみである。

柱穴 S P 139 出土総量はわずか0.1kgで、最も少ない。しかも5cm以下の小破片のみである。

柱穴 S P 138 出土総量は13.8kgである(内訳は丸瓦2.5kg、平瓦10.0kg、不明1.3kg)。平瓦が多く、そのうちH-D類が7割近くに達する(6.8kg)。また、H-B1類もしくはH-B2類も1割ほどある(0.8kg)。丸瓦はM-A類かM-B類か、判別のできない破片ばかりである。

柱穴 S P 140 出土総量は4.3kgである(内訳は丸瓦1.7kg、平瓦2.4kg、不明0.2kg)。破片数は少ないが、大型の破片が多い。丸瓦ではM-A類とM-B類の割合が同じである(0.6kgずつ)。平瓦ではH-D類の割合が高い(1.8kg)。

柱穴 S P 213(第67図72) 出土総量は12.7kgである(内訳は丸瓦1.6kg、平瓦10.8kg、不明0.3kg)。丸瓦はM-A類かM-B類か、判別のできない破片が多いが、1点M-A類であることが確認できる(0.6kg)。平瓦は、凸面に縦位の縄タタキを施すH-D類が1/3程度を占める(3.1kg)。ただし、72は粘土紐の痕跡がみられるH-C2類である。

柱穴 S P 107 出土総量は1.0kgで(内訳は丸瓦0.3kg、平瓦0.4kg、不明0.3kg)、非常に少ない。長さが10cmを超えるような破片はほとんどなく、丸瓦はM-A類・M-B類の区別がつかない。平瓦は凸面に縦位の縄タタキを施すH-D類がみられる。

なお、各柱穴から出土した平瓦のうち、一枚作りと推定される平瓦H-D類が多く出土している。したがってS B 2020の造営時期は一枚作りが主体的になる段階と考えることができる。

さて、S P 093出土資料を代表例として、S B 2020出土瓦類の胎土・色調・焼成について述べる。丸瓦の胎土は長石やチャートなどの細砂を含むものが多い。色調はにぶい黄橙色ないし橙色、淡黄色、灰白色など暖色を呈するものが多い。焼成はやや軟質なものが多いが、須恵質に近い硬質なものもみられる。これらの色調は灰色や灰白色を呈するものがある。平瓦の胎土・色調・焼成も丸瓦とおおむね同じような特徴がみられる。胎土は長石やチャートなどの細砂を含むものが多い。粒径の大きな礫を含むことはないが、稀に0.5～1.0cm程度の小レキを含むことがある。色調はにぶい黄橙色や淡黄色、灰白色など暖色を呈するものが多い。また、灰色やオリーブ黒色を呈するものもある。これらは燻されたようで、断面が淡黄色などを呈するものがみられる。焼成はやや軟質なものが多い。また、S P 093で確認したH-B1類も上記のような色調や焼成を呈するものがあり、第6次調査の1号窯や瓦溜りから出土しているH-B1類の瓦類とは色調や焼成の上で、異なる特徴がみられる。

柱穴 S P 251 出土総量は7.1kgである(内訳は丸瓦0.8kg、平瓦2.8kg、不明3.5kg)が、およそ5割が判別のできない小破片か摩滅の著しい破片である。丸瓦はM-A類・M-B類の区別がつかない。平瓦は凸面に縦位の縄タタキを施すH-D類が多い(1.1kg)。

雨落ち溝 S D 293出土瓦類(第69図77～第71図86) 出土総量は375.4kgで、内訳は丸瓦73.3kg、平瓦171.0kg、不明131.1kgである。丸瓦はM-A類かM-B類か判別がつかないものが多いが、分類を確認できたものはすべてM-B類である(12.4kg)。平瓦はH-A～H-D類までの各型式が出土して

いるが、H-A～H-C類は非常に少なく(12.0kg)、大半がH-D類である(118.9kg)。

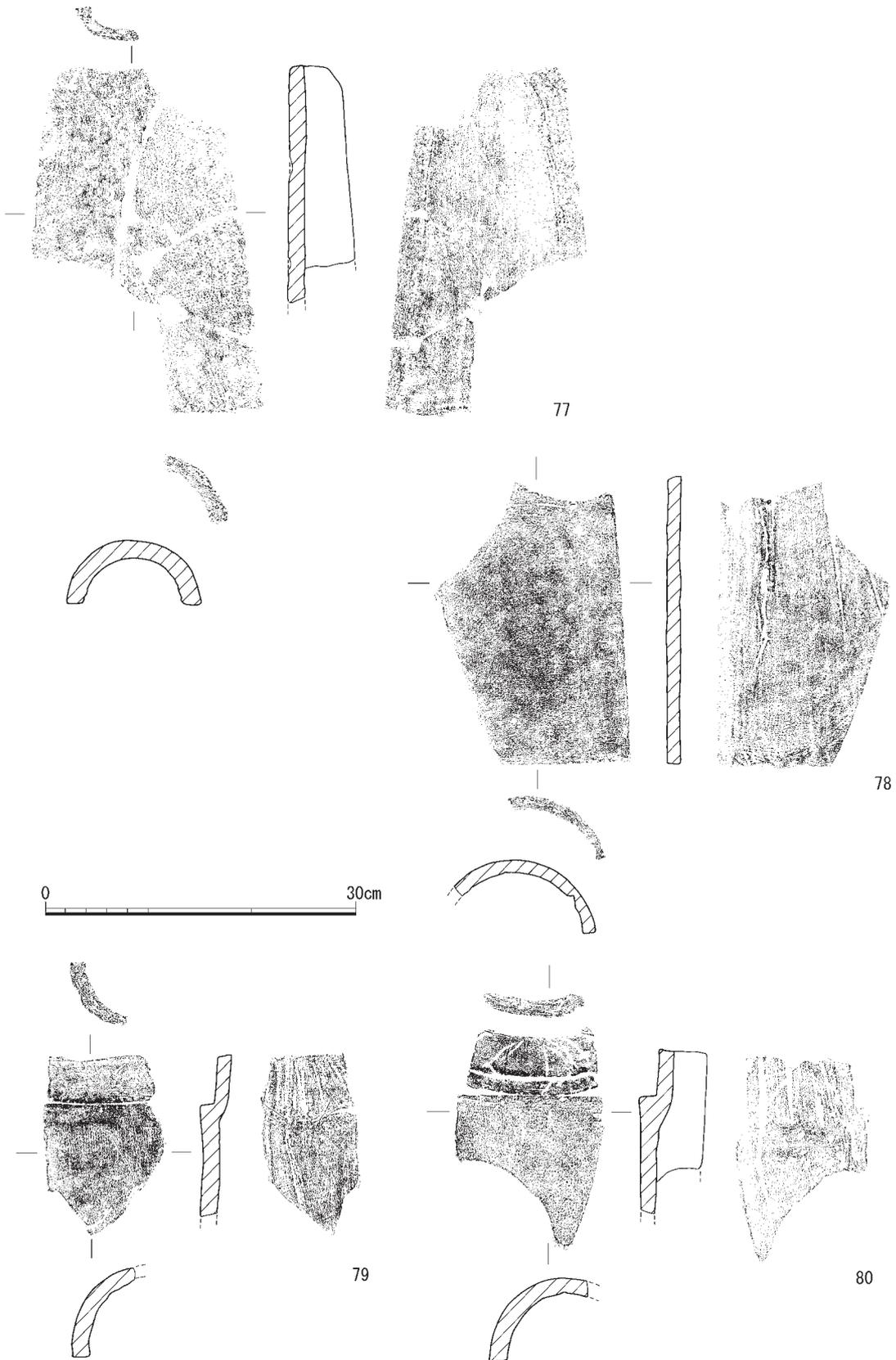
溝 S D 292出土瓦類 出土総量は2.2kgである(内訳は丸瓦0.2kg、平瓦0.9kg、不明1.1kg)。全体に大型の破片はみられない。丸瓦はM-A類・M-B類の区別のつかない小破片が多い。平瓦には縦位の縄タタキを施すものが多くみられ、H-D類と考えられる。1点のみだが、H-B3類がある。

区画 S X 097出土瓦類 出土総量は1261.2kgである(内訳は丸瓦223.9kg、平瓦422.7kg、不明614.6kg)。出土総量のおよそ半数が5cm以下、もしくは平瓦か丸瓦か判別のつかない破片である。丸瓦は8割ほどが破片資料(分類不可)で、M-A類かM-B類か判別がつかない。ただM-B類が一定量確認できる(25.5kg)。M-A類と断定できる資料は少なく(4.6kg)、判別のつかない資料の多くがM-B類である可能性はある。平瓦は4割ほどが分類不可である(166.9kg)が、H-A類からH-D類までの各型式を確認することができた。このうち最も多いのは、H-D類の191.1kgで、平瓦全体の1/2近くを占める。ほかの型式は出土量がおおむね少なく、H-B類で37.8kg、H-C類で18.7kg、H-A類で8.2kgの順となる。ほかの地点で出土例をあまりみないH-B3類が0.7kg確認できた。平瓦の出土傾向からは一枚作りの一群が主体的であることが確認できる。桶巻作りの一群は出土量も少なく2次的な利用か、他所から混入の可能性もあるだろう。

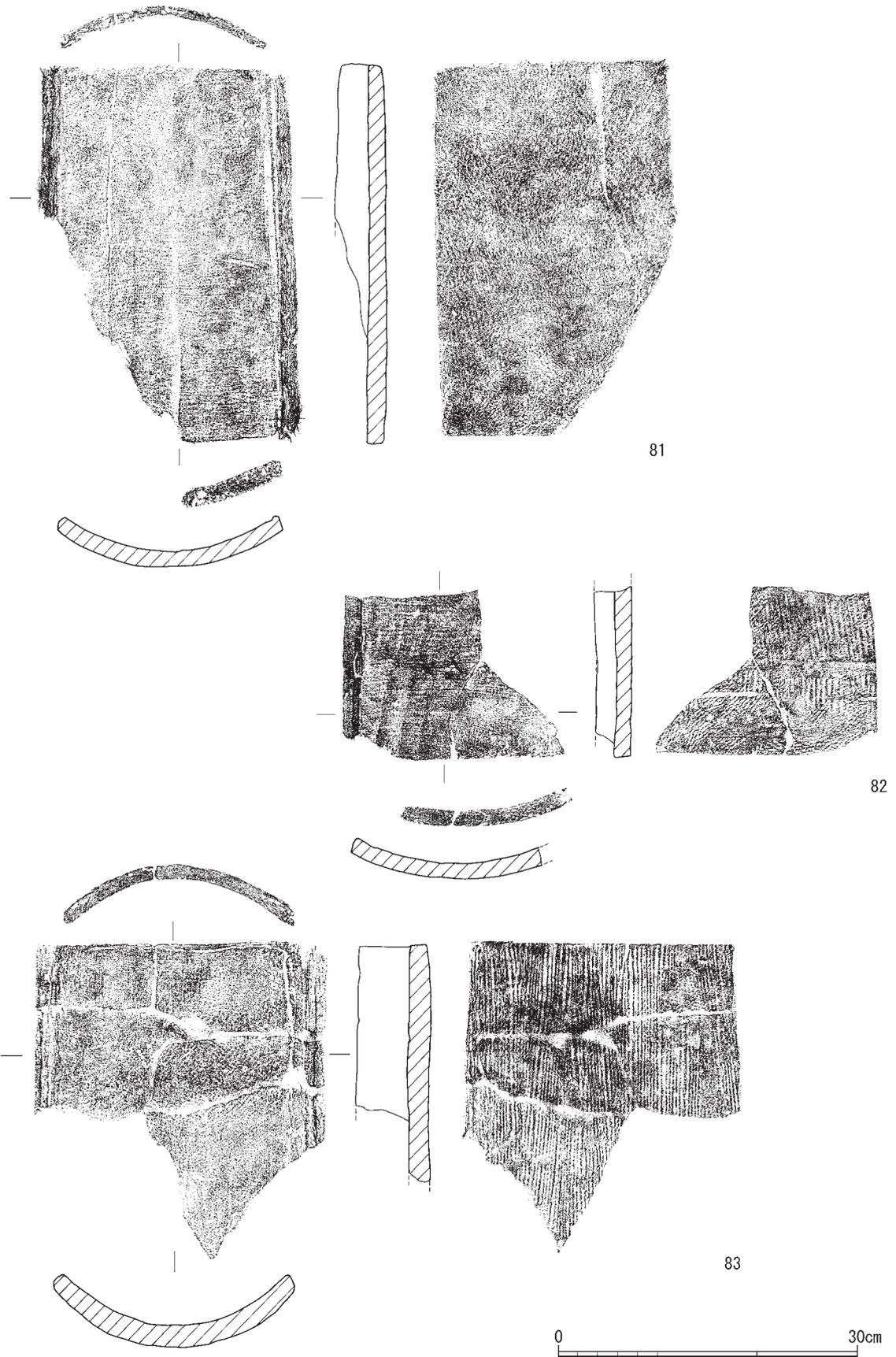
区画 S X 099出土瓦類 出土総量は274.3kgである(内訳は丸瓦41.6kg、平瓦110.2kg、不明122.8kg)。5cm以下の破片や丸瓦と平瓦の区別がつかないような破片が全体の1/2近くを占める。丸瓦は大半が破片資料(分類不可)で、M-A類かM-B類か判別のつかないものである。ただ、M-B類と確認できたものが2.8kgある。平瓦は1/3ほどが分類不可である(38.6kg)が、H-A類からH-D類までの各型式を確認することができた。このうち最も多いのはH-D類の59.9kgで、全体の1/2以上を占める。ほかの型式は出土量がおおむね少なく、H-C類5.8kg、H-B類4.1kg、H-A類1.8kgである。全体的な出土傾向は区画 S X 097と同じであり、平瓦は一枚作りの一群が主体的であることが確認できる。桶巻作りの一群も同じく2次的な利用か、他所から混入の可能性があるだろう。

瓦溜り S X 208出土瓦類(第73図96～98) 出土総量は226.3kgである(内訳は丸瓦46.1kg、平瓦89.1kg、不明91.1kg)。丸瓦の大半はM-A類かM-B類か判別のつかないものであるが、M-B類が5.7kg確認できる。平瓦は出土総量の1/3ほどが分類不可である(25.9kg)。各型式が出土しているが、量的に最も多いのはH-B類(31.3kg)あり、以下、H-C類(13.8kg)、H-D類(9.2kg)、H-A類(8.9kg)と続く。H-B類ではH-B1類が主体であるが、H-B2類も一定量確認できる(5.4kg)。ほかの出土例にくらべH-C類の比率がやや高い。平瓦は桶巻作りの一群を主体とし、一枚作りのものも一定量存在することがわかる。

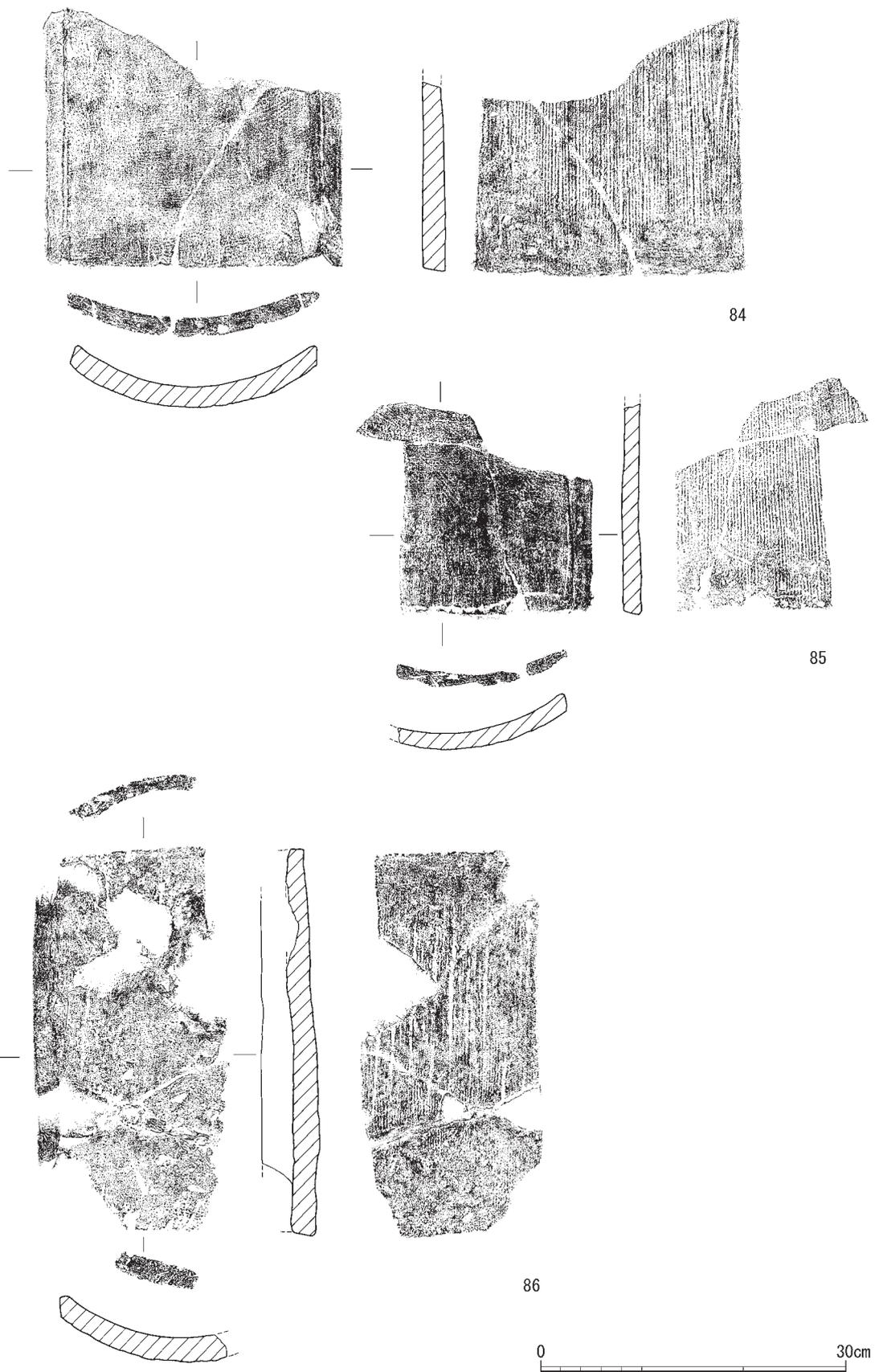
瓦溜り S X 219出土瓦類 出土総量は85.1kgである(内訳は丸瓦21.3kg、平瓦30.0kg、不明33.8kg)。S X 219の出土傾向として、5cm以下や丸瓦・平瓦の判別が不可能なものが多く、丸瓦と平瓦の出土比があまり変わらず、他の遺構における出土比とくらべてやや異なる。丸瓦はM-B類かM-A類か判別のつかないものが大半を占める。平瓦では出土量のほぼ半数をH-B1類が占める(13.5kg)。その他の平瓦は、いずれも少量であるが、H-A2類1.5kg、H-C類1.8kg、H-D類2.8kgを確認した。平瓦はH-B1類が主体で、その他の平瓦は補修に伴うものと考えられる。なお、



第69図 雨落ち溝 S D293出土瓦類実測図 1 (1/6)



第70図 雨落ち溝 S D293出土瓦類実測図 2 (1/6)



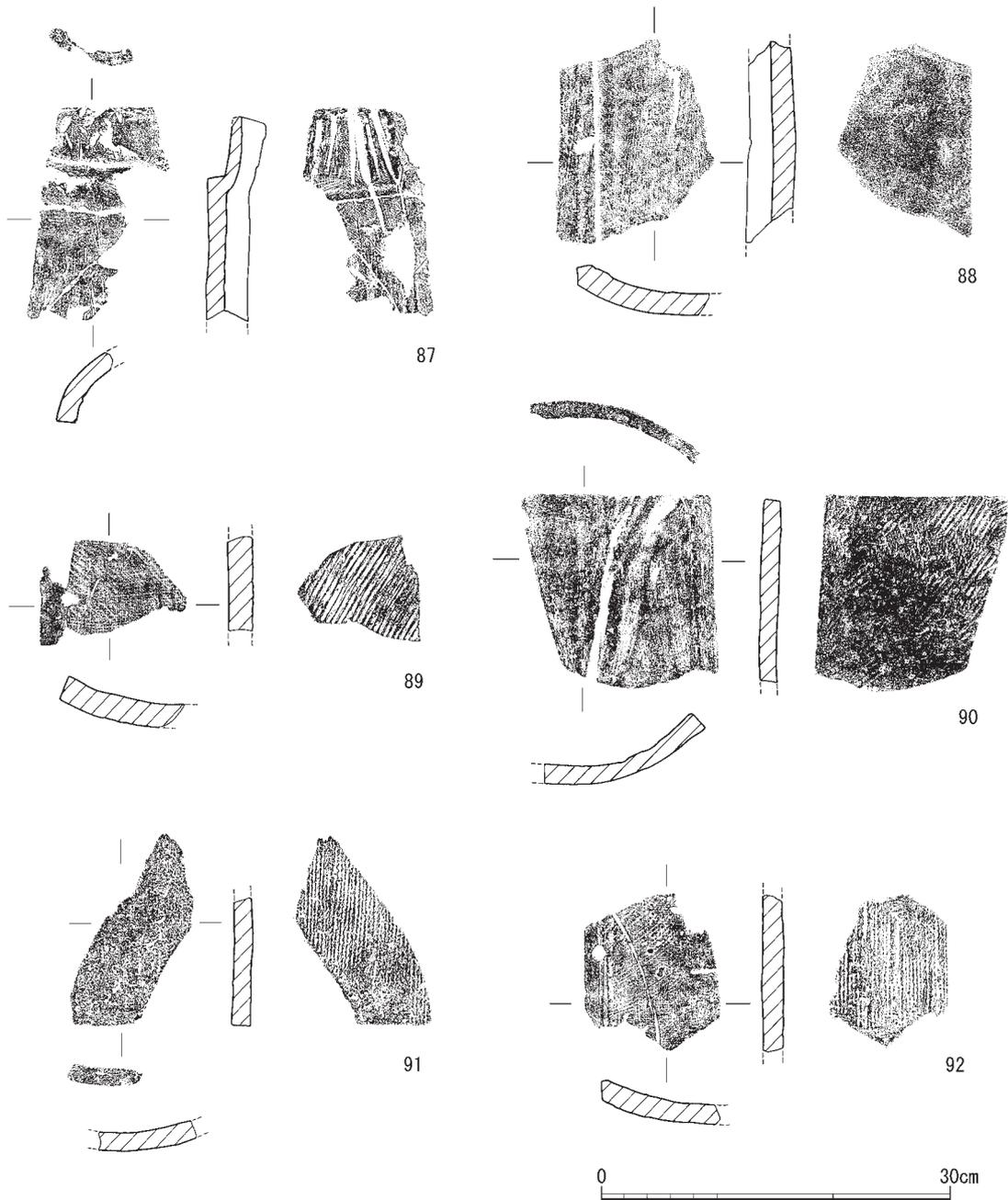
第71図 雨落ち溝SD293出土瓦類実測図3(1/6)

H-D類がやや多い点はこれらの瓦が葺かれていた建物の使用期間を考える上で重要である。

土坑S K143出土瓦類(第72図87~92) 出土総量は19.5kgである(内訳は丸瓦0.3kg、平瓦12.1kg、不明7.1kg)。丸瓦は細片が多く、図示できたのはM-B類1点のみである(87)。平瓦も細片が多いが、H-A類からH-D類までの各型式が確認できる。H-A類1.4kg、H-B類7.9kg、H-C類2.3kg、H-D類0.5kgと、H-B類が2/3を占める。少量ながらH-D類が確認できる点(91・92)は注意が必要である。

③ 埴

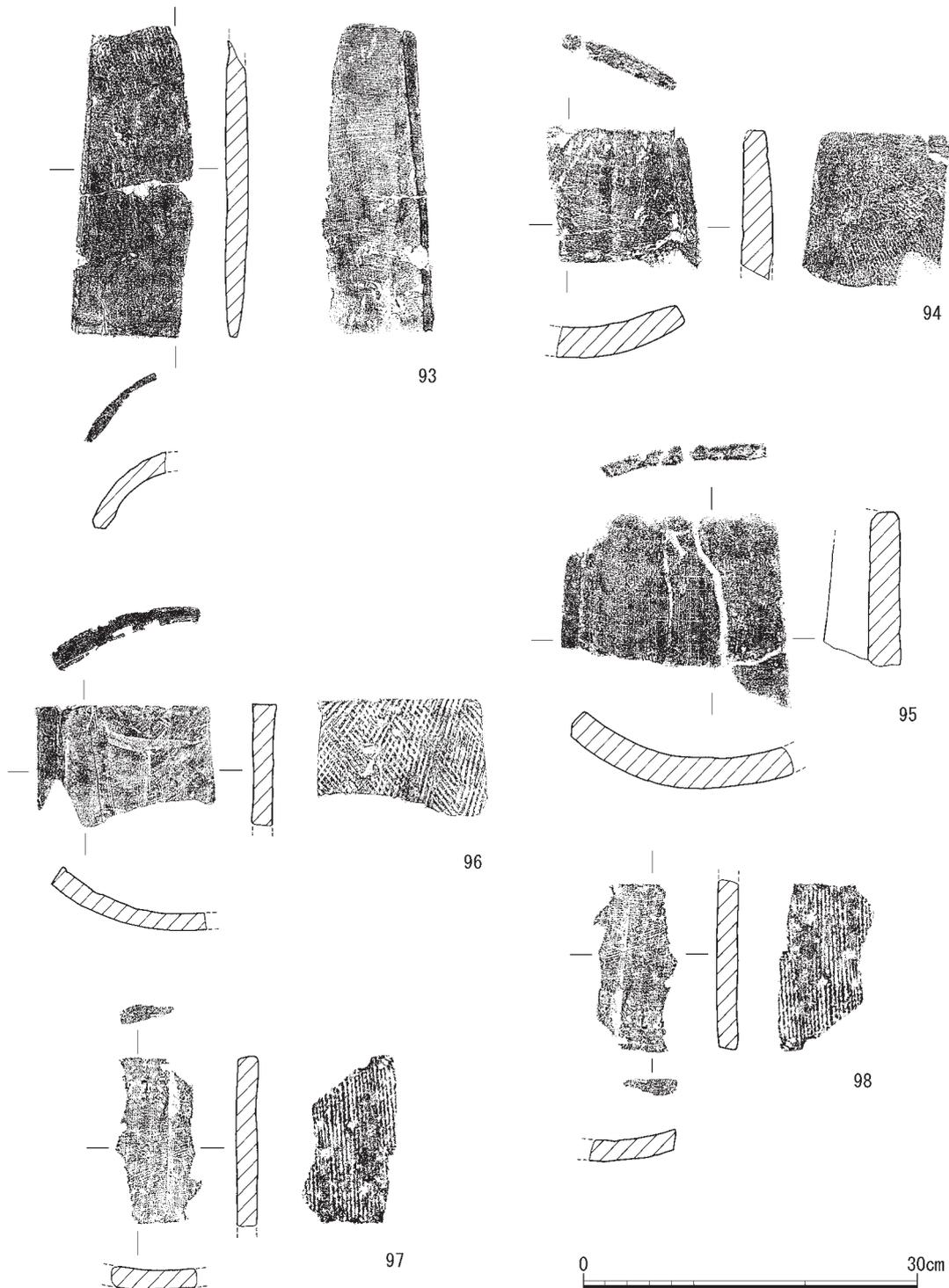
第7次調査で出土した埴は1点のみである(第74図99)。南部の土坑S K096から出土した。ほ



第72図 土坑S K143出土瓦類実測図(1/6)

ば直方体を呈するが、欠損している部分で、塼表面が上方に向かって立ち上がることから、塼の上面に別の構造物が一体となって造形されていた可能性がある。長辺20.0cm、短辺14.5cm、高さ5.3cmである。胎土は3mm以下の長石や石英を含む。焼成は良好で、色調は浅黄色である。

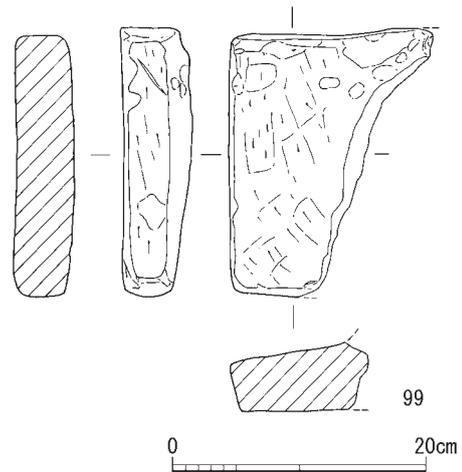
(筒井崇史)



第73図 土坑 S K096・瓦溜り S X208出土瓦類実測図(1/6)

(2) 土器

美濃山廃寺第7次調査で出土した土器は、瓦類にくらべてそれほど多くない。全体の出土傾向としては、北東部で検出された土坑や柱穴からの出土が多く、掲載した土器のうちおよそ1/3を占める。また、残存状態の良好なものが多い。これに対して北東部を除く各地点ではごくわずかな量しか出土していない。ややまとまって出土した地点としては南部の雨落ち溝 S D 293 や区画 S X 097 があり、掲載した土器のうちおよそ1/6を占める。このほか、奈良三彩と思われる陶器片が区画 S X 099 からのみ出土している。なお、第6次調査地と第7次調査地にまたがる遺構の遺物については、第7次調査に伴う出土遺物として報告することにした。



第74図 土坑 S K 096 出土埴実測図(1/6)

① 区画溝出土土器

区画溝から出土した土器には、土師器・須恵器のほか、下層遺跡に伴う弥生土器がみられる。出土土器の総量は少なく、細片も多い。この中で、第6次調査地から第7次調査地にかけての区画溝 S D 001 の東辺で残存率の高い須恵器鉢 A などが出土している。また、区画溝 S D 090 では、大量の瓦類が出土しているものの、土器はごくわずかである。

区画溝 S D 001 出土土器 (第75図100～105) 100は弥生土器の鉢の底部と考えられる。101は土師器高杯の脚柱部で、上部は中実である。105は土師器甕である。残存率が1/12程度の小破片であるが、口縁端部がほぼ水平な面をなす。102は須恵器壺 K の体部である。体部最大径は16.0cmである。肩部には灰が少し被る。103は須恵器杯 B の底部である。高台の外側の端部が接地する。底径11.2cm、残存高2.9cmである。104は須恵器鉢 A である。底部は尖底ではなく丸底である。口径22.3cm、器高12.2cmである。胎土は2mm以下の砂粒を含む。焼成はやや軟質で、灰白色を呈する。102を除く5点は第6次調査で出土したものである。

区画溝 S D 010 出土土器 (第75図106～112) 106・107は弥生土器の甕ないし壺の底部である。108は須恵器杯である。平底気味の底部から緩やかに弧状に立ち上がる。区画溝 S D 100 で出土した113と同一器形のものであろう。109は須恵器杯 B の底部である。高台の内側の端部が接地する。110・111は須恵器杯 B 蓋で、110はつまみ、111は口縁部の破片である。111の口縁部は笠形に近い。須恵器は109をのぞき、残存率1/12以下の小破片である。112は土師器甕である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部に面をもつ。

区画溝 S D 100 出土土器 (第75図113) 113は須恵器杯で、杯 H 蓋を杯に転じたような器形を呈する。内面全体に灰が被る。口径11.7cm、器高3.4cmである。胎土は1mm以下の砂粒を含む。焼成は堅緻で、灰色を呈する。

区画溝 S D 090 出土土器 (第75図114～120) 114～116は弥生土器である。114は甕の口縁部で、

受け口状を呈する。口径15.0cm、残存高2.2cmである。摩滅のため判別しにくいだが、列点文を施しているようである。外面に煤が付着する。115は壺の底部である。断面観察から粘土紐で輪台を作り、内部に粘土を充填した後、体部の粘土を積み上げているのが確認できる。116は壺の底部である。117は土師器杯Aである。内面には間隔の広い放射状暗文が認められる。小破片であるが、焼成は良好で、橙色を呈する。胎土は密である。118～120は須恵器である。118は杯Bの底部である。高台の内側の端部が接地する。119は水瓶もしくは浄瓶と推定される。平底に鶏卵形を呈する体部からなる。頸部より上を欠損する。肩部内面には頸部を接合した痕跡が確認できる。体部外面下部には灰オリーブ色を呈する自然釉が、また肩部には灰が付着する。底部外面には高台が剥離した痕跡が認められた。残存高は10.6cmである。美濃山廃寺における水瓶の出土例は、第4次調査の際に、今回、総柱建物S B 2009として報告した建物の柱穴S P 185の抜き取り穴から出土している例があるのみである。120は甕の体部上半である。外面は平行タタキを施した後カキメを施す。内面には同心円の当て具痕跡が残る。

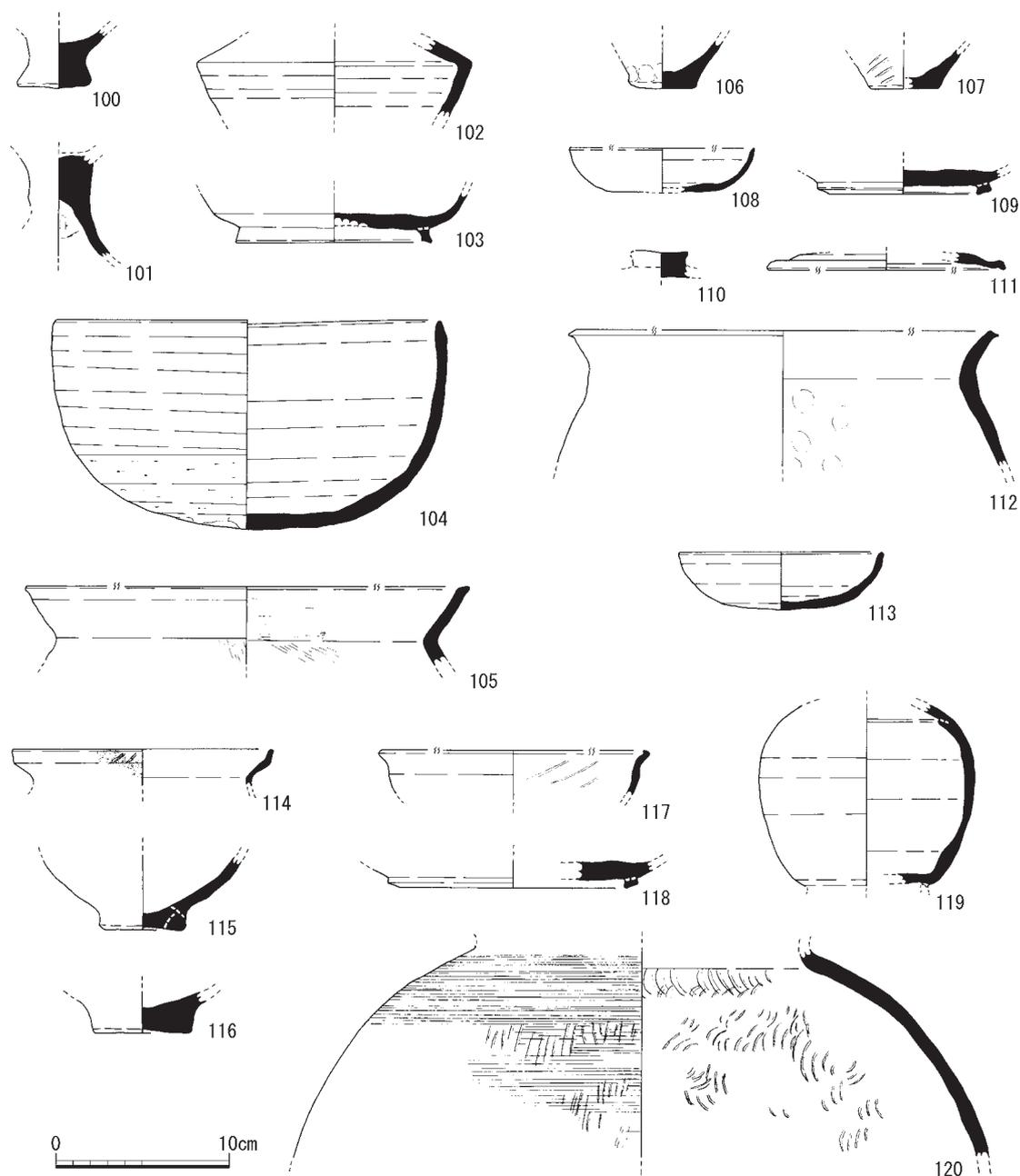
②北東部出土土器

北東部では掘立柱建物跡S B 2012の各柱穴や土坑S K 352から大量の土器が出土している。第6次調査地でもこの北東部に隣接する地点で多数の土器が出土しており、美濃山廃寺全体でも多数の土器が出土した区画と考えることができる。

掘立柱建物S B 2012出土土器（第76図121～第77図180） S B 2012出土土器については、各柱穴ごとに報告する。121・122は柱穴S P 074から出土した。121は土師器杯Aである。口縁端部内面がわずかに肥厚する。口径19.8cmである。122は須恵器杯の口縁部である。口径14.6cmである。

123～138は柱穴S P 072から出土した。123～131は土師器である。123・124・126は杯Aである。123・126は放射状暗文がみられるが、小破片である。124は暗文を施していない。口径15.0cm、残存高3.5cmである。125は杯である。口縁端部は肥厚、あるいは巻き込まず、断面方形状におさめる。127は皿Aである。内面に放射状暗文を施す。128はやや厚手の皿である。摩滅のため調整は不明であるが、口径22.4cmである。129はやや小型の椀Cである。口縁部にヨコナデを施す。口径10.6cm、残存高2.8cmである。130は小型の杯である。器形は半球形状を呈し、ほぼ完形である。口縁部内面に煤が付着することから、灯火器として使用されたものであろう。口径8.2cm、器高3.1cmである。131は甕である。大きく外反し、口縁端部をつまみ上げる。132は蓋である。内外面ともナデを施し、口縁部にヨコナデを施す。外面のミガキや内面の暗文はみられない。133～138は須恵器である。133・134は杯である。134は口縁部がやや強い回転ナデで外反気味を呈する。134は杯Aかもしれない。135は杯Bの底部である。底径11.6cm、残存高3.1cmである。136は杯B蓋である。頂部はやや扁平であるが、口縁部は屈曲しない。137は皿B蓋である。口縁部はわずかに屈曲気味である。口径28.6cm、残存高1.9cmである。138は口縁部が直立気味の甕Cである。体部外面に平行タタキを施す。

139～148は柱穴S P 002から出土した。139～147は土師器である。139は口縁端部を欠損するものの、杯Cと推定される。内面に放射状暗文を施す。140・141は杯Aである。140は放射状暗文



第75図 区画溝出土土器実測図(1/4)

を施すが、141は摩滅のため暗文の有無は不明である。142・143は皿Aである。142は暗文を施さないが、143は摩滅のため暗文の有無は不明である。143は142にくらべて口縁部の外反度は弱い。143は口径24.0cm、器高2.2cmである。139～143はいずれも微細な砂粒を含み、焼成は良好である。橙色を呈する。144は鉢Bもしくは椀である。外面の下半部にはミガキもしくはヘラケズリを施す。145は皿で、口縁端部が肥厚しない。146は甌の口縁部である。小さな把手が取り付け。小破片のため、口径の復元は困難である。147は高杯杯部である。内面は摩滅のため暗文の有無は不明である。口縁部にヨコナデ、外面はミガキもしくはハケを施す。148は須恵器杯Aである。焼け歪みがある。口径13.2cm、器高4.2～4.5cmである。

149・150は柱穴S P 200から出土した。149は須恵器杯の口縁部、150は須恵器鉢の口縁部の小破片である。この2点は第6次調査で出土したものである。

151～153は柱穴S P 201から出土した。151は土師器甕である。口縁端部を両側からやや強くヨコナデを施す。152は須恵器杯Aの底部破片である。153は須恵器杯B蓋である。この3点も第6次調査で出土したものである。

154は柱穴S P 203から出土した須恵器杯B蓋の小破片である。これも第6次調査で出土したものである。

155は柱穴S P 202から出土した土師器甕である。全体に摩滅気味であるが、体部外面にハケを施す。口径21.8cm、残存高6.0cmである。

156は柱穴S P 204から出土した須恵器杯Bの底部である。高台端部を欠損する。これも第6次調査で出土したものである。

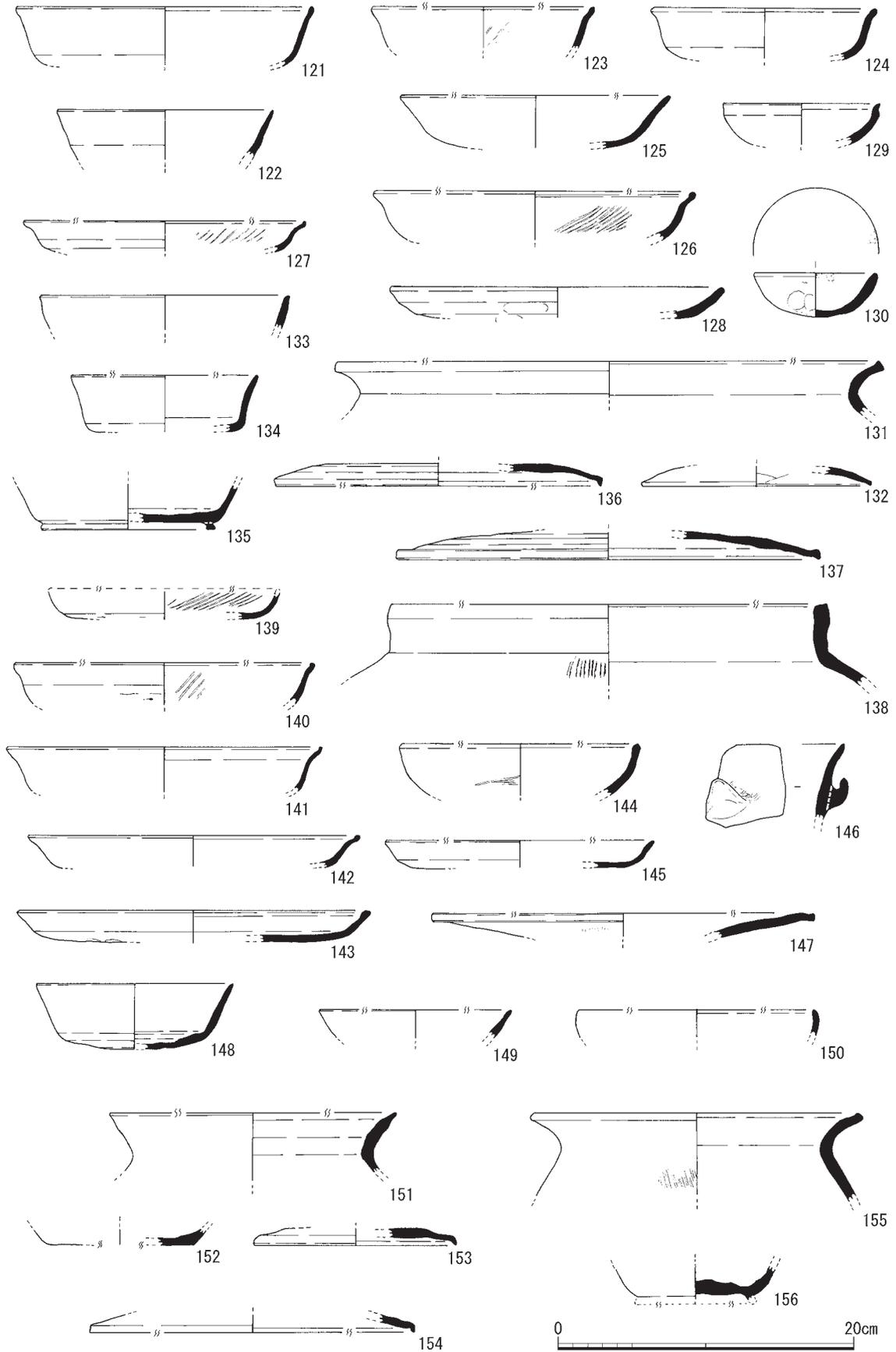
157～163は柱穴S P 003から出土した。157～160は土師器である。157は皿である。摩滅が著しく調整は不明で、口縁端部を丸くおさめる。158は甕である。口縁端部を上方へつまみ上げる。口径17.8cm、残存高4.0cmである。159は甕または甕Bの把手である。160は平底気味の杯で、口縁部内面に煤が広く付着する。灯火器として使用されたものであろう。口径8.2cm、器高2.7cmである。161～163は須恵器である。161・162は杯B蓋である。ともにやや扁平な笠形を呈する。161は頂部に回転ヘラケズリを施す。焼成時の火ぶくれがある。口径15.6cm、残存高2.0cmである。162は頂部がヘラキリ後ナデを施す。口径19.4cm、残存高1.5cmである。163は須恵器甕である。口縁部外面に波状文を3条施す。口径36.0cm、残存高5.2cmである。

164・165は柱穴S P 035から出土した。165は須恵器杯B、164は同蓋である。164は外面全体に灰を被るため、頂部の調整は不明である。口径15.0cm、残存高1.9cmである。165はやや外反気味に口縁部が広がる。口径15.8cm、器高6.0cm、底径8.5cmである。器高が高い点は注意される。

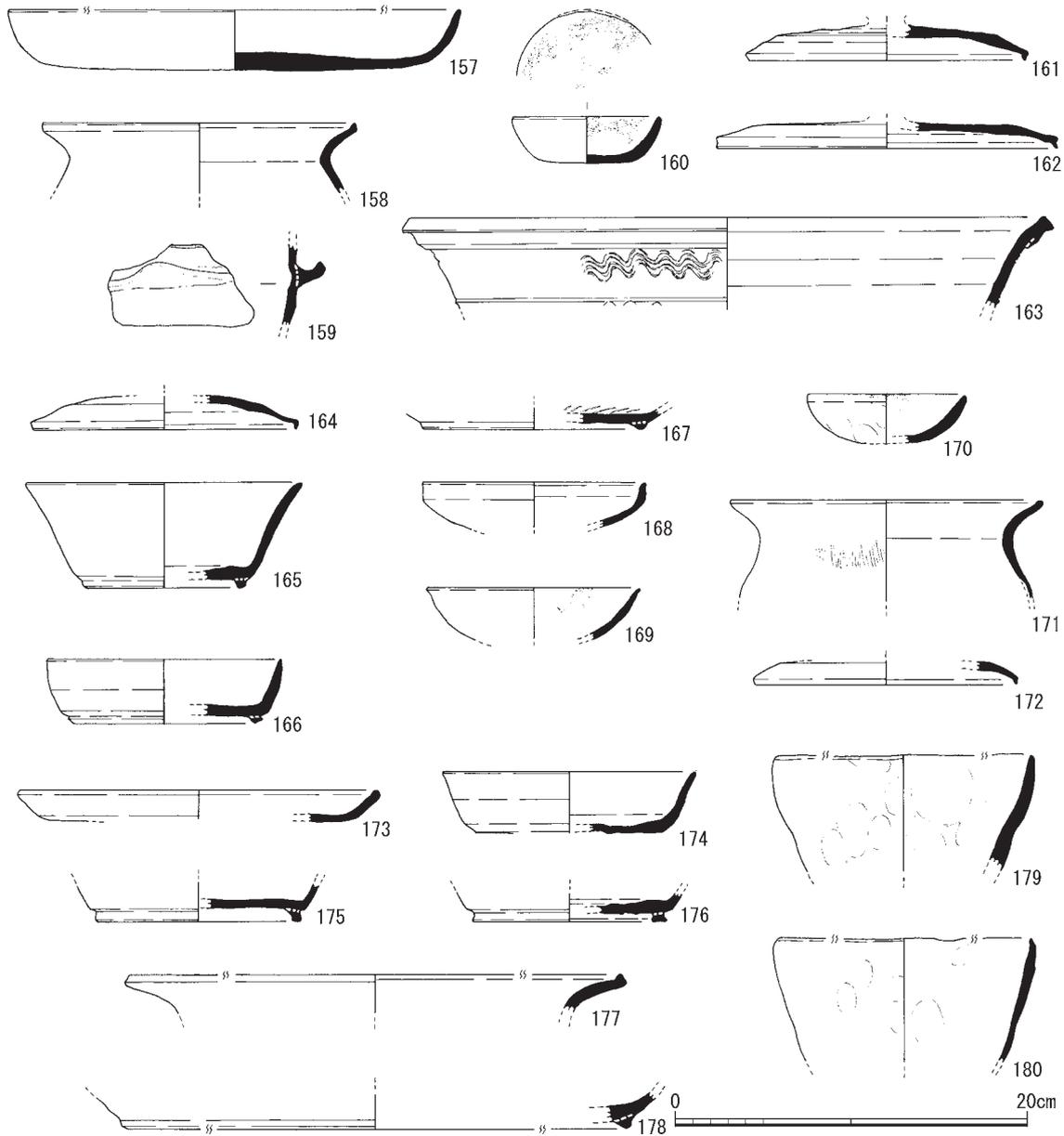
166は柱穴S P 070から出土した須恵器杯Bである。やや厚手で、内湾気味の器形を呈する。口径13.2cm、器高3.7cm、底径10.2cmである。

167～172は柱穴S P 071から出土した。167～171は土師器である。167は杯Bの底部の破片である。内面に放射状暗文を施すが、底部によくみられる螺旋状暗文は確認できない。底径12.6cm、残存高1.2cmである。168は椀Cである。口縁部にヨコナデを施す。口径12.6cm、残存高2.6cmである。169・170は杯で、どちらも内面に煤が付着する。169は口径12.0cm、残存高2.9cmである。170は口径9.0cm、残存高2.8cmである。灯火器として使用されたものであろう。171は甕である。外面に縦方向のハケを施す。口径17.8cm、残存高5.5cmである。172は須恵器杯B蓋の口縁部のみの破片である。頂部に回転ヘラケズリを施すようである。

173～177は柱穴S P 351から出土した。173は土師器皿Aである。摩滅気味のため暗文の有無は確認できない。177は土師器甕である。口縁部のみ的小破片である。口縁端部は断面三角形に肥厚させる。174は須恵器杯Aである。口径14.4cm、器高3.5cmである。175・176は須恵器杯Bの底部である。175は底径11.6cm、残存高2.3cmである。176は底径10.9cm、残存高1.6cmである。



第76図 掘立柱建物S B2012出土土器実測図1 (1/4)



第77図 掘立柱建物S B 2012出土土器実測図2 (1/4)

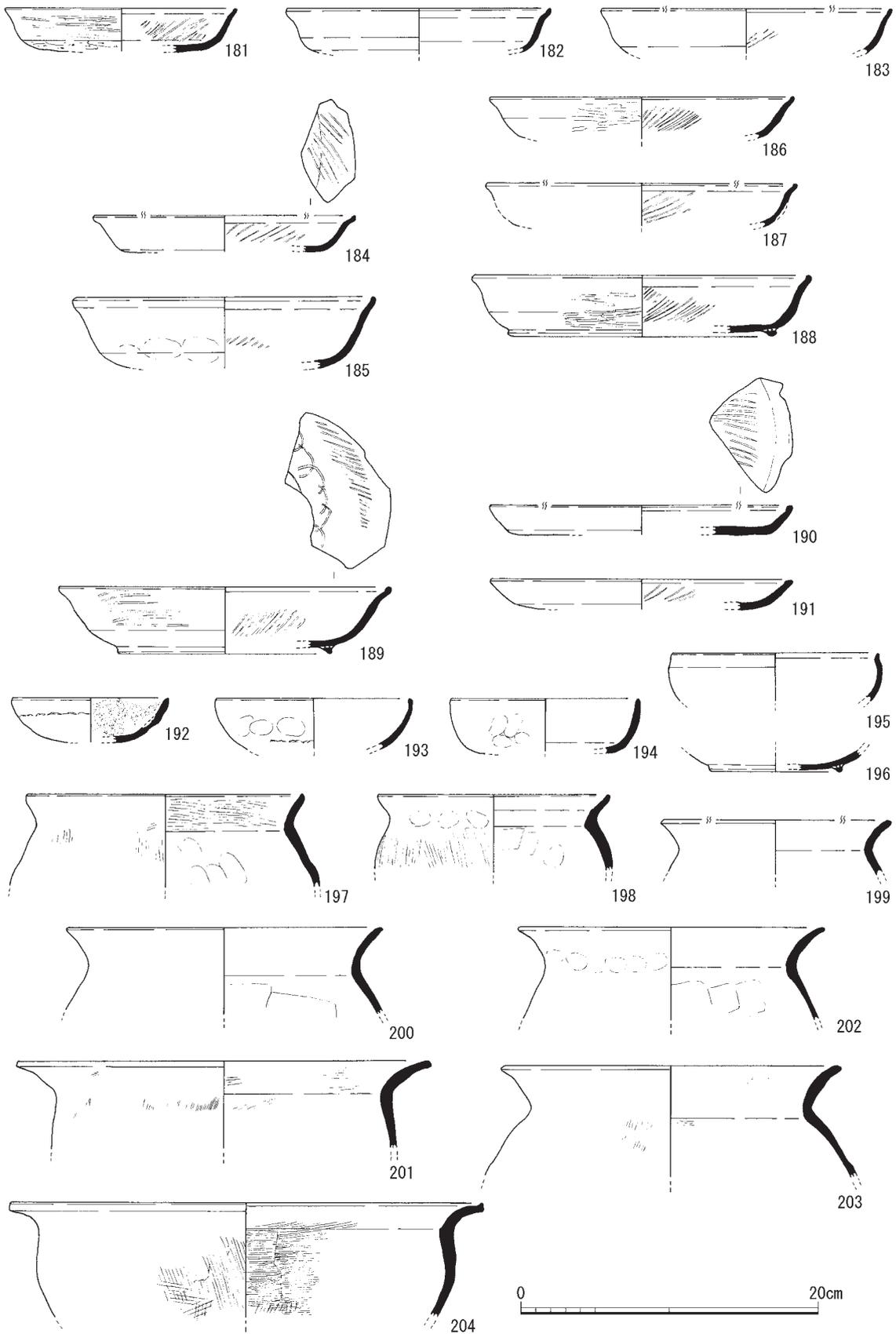
178は柱穴S P 228から出土した土師器杯Bもしくは皿Bの高台付近の小破片である。

179・180は製塩土器である。179はS P 071から、180はS P 074から出土した。口径等の復元は困難であるが、逆円錐形を呈すると思われる。内外面ともユビオサエやナデで成形、調整する。

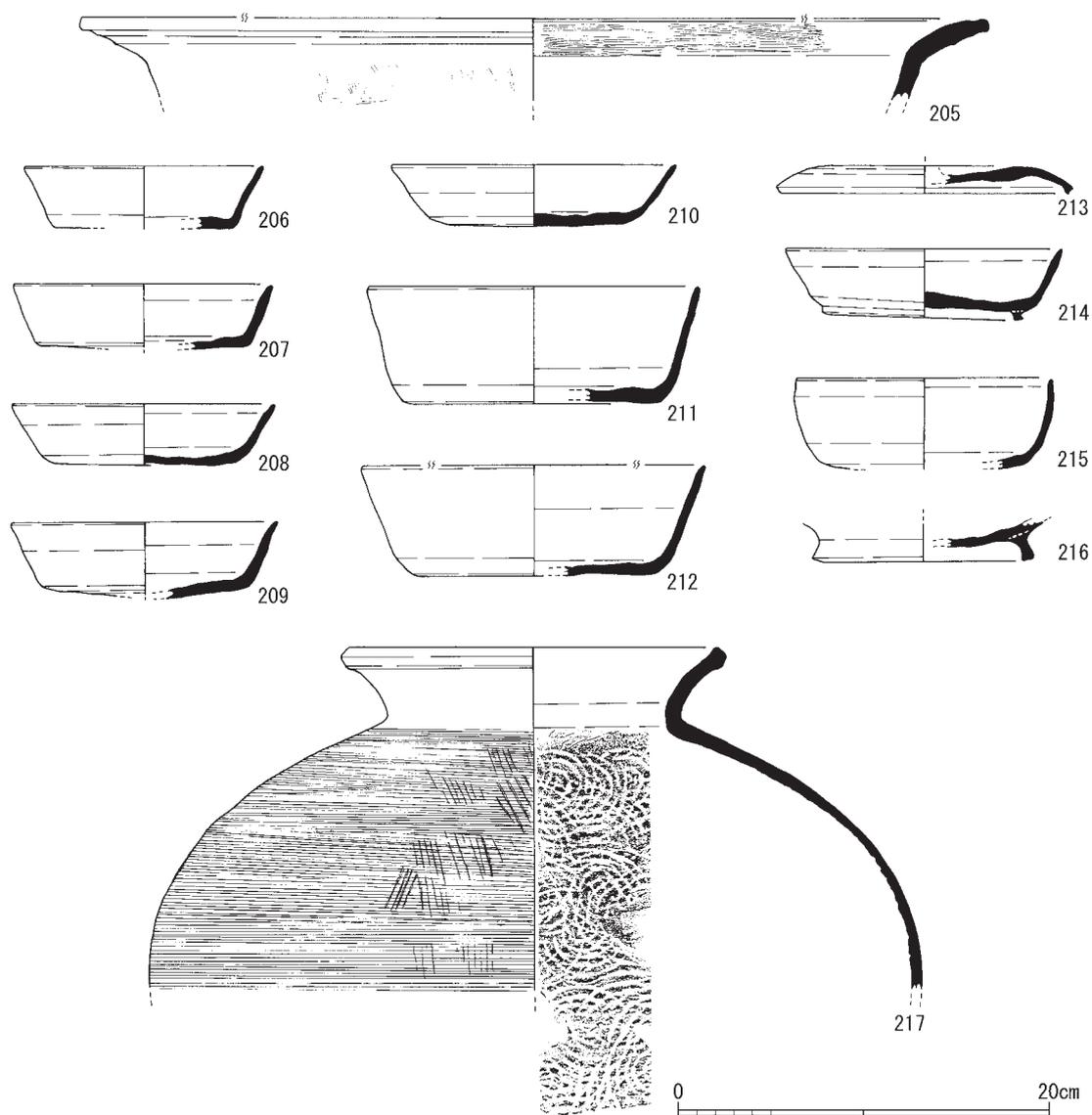
土坑S K 352出土土器(第78図181～第79図217) 181～205は土師器である。181～187は杯Aである。181は口縁部内面に放射状暗文を施す。外面にミガキを施すが、ややまばらである。底部外面にケズリを施す。口径15.4cm、残存高2.9cmである。182は摩滅のため、調整や暗文の有無などは不明である。口径17.7cm、残存高3.0cmである。183は内面にかすかに放射状暗文を認めることができる。184は内面に放射状暗文を施すが、外面の調整は摩滅のため不明である。185はややは器高が高い杯Aである。内面に放射状暗文がかすかに確認できる。内外面ともヨコナデで

調整し、底部にはユビオサエ痕が確認できる。口径20.0cm、残存高4.3cmである。186・187も内面に放射状暗文を認めることができる。186は外面にミガキを施す。181～187の胎土はおおむね1mm前後の砂粒を含むが密なものが多く、焼成は良好である。色調は橙色から明赤褐色を呈するものが多い。188・189は杯Bである。ともに外面にミガキを施し、内面に放射状暗文を施す。188は口縁部下半から底部にかけてケズリを施す。調整手法は都城でみられるb1手法(注7)に近いが、底部内面に螺旋状暗文はなさそうである。口径22.4cm、器高4.2cm、底径17.3cmである。189は底部内面に螺旋状暗文も施す。口径22.0cm、器高4.5cm、底径14.3cmである。ともに胎土は1mm以下の砂粒を少し含む程度で、焼成は良好である。色調は橙色を呈する。190・191は皿Aである。190は底部内面に放射状暗文を施す。暗文の施文位置が都城のものとは異なることから、在地における変容形態と推定される。どちらも口縁部が底部から内湾気味に立ち上がる点に注意される。192は杯である。内面に煤が厚く付着しており、灯火器として使用されたものであろう。口径10.4cm、残存高3.0cmである。193・194は杯ないし椀である。内湾気味の口縁部に外面にユビオサエ痕が残る。ともに口径は13cm前後である。195と196は胎土や色調が類似することから同一個体と思われるが、接合しないため、別々に報告する。195は口縁部が内湾気味に立ち上がった後、口縁端部にヨコナデを施して外反させる。口径13.8cm、残存高3.3cmである。196は底部である。摩滅気味であるが、底部外面にケズリを施している可能性がある。残存高1.2cm、底径8.8cmである。両者の胎土は1mm以下の調整等を含む密なもので、焼成は良好である。色調は明赤褐色を呈する。197～203は甕である。口縁部が外反した後、端部を丸く納めるものが多い。調整は個体ごとにまちまちであるが、体部外面にタテハケを施すものがほとんどである。法量からみると、口径17cm前後の小型品(197～199)と口径22cm前後の中型品(200～203)の2種があるようである。204・205は鍋である。ともに口縁部内面と体部外面にハケを施し、203は体部内面にハケを、205は体部内面にナデを施す。204は口縁端部をわずかにつまみ上げる。口径31.5cm、残存高7.7cmである。

206～217は須恵器である。206～212は杯Aである。法量は大きく2種あり、口径18cm前後、器高6cm前後の大型品(211・212)と、口径13～15cm、器高3～3.5cmの小型品(206～210)である。いずれも回転ナデを施し、底部はヘラキリ後、不調整もしくはナデを施す。これらの胎土は1mm程度の砂粒を含むものも多く、焼成はやや軟質なものもあるが、堅緻なものが多い。色調は灰色ないし灰白色を呈するものが多い。213は杯B蓋である。焼成時の焼け歪みが著しいが、笠形を呈すると思われる。214は杯Bである。少し焼けひずむ。口径14.9cm、器高3.9cm、底径9.9cmである。215は杯Eと推定される。やや内湾気味に立ち上がる口縁部を有する。底部に高台はもたないと思われる。胎土は1mm以上の砂粒も含むが密で、焼成はやや生焼け気味である。色調は灰白色を呈する。口径13.8cm、残存高4.9cmである。216は杯Bもしくは壺の底部と思われる。やや高めの高台が特徴的である。残存高2.1cm、底径10.8cmである。217は甕である。体部外面にタタキを施した後、全体にカキメを施す。体部内面には同心円の当て具痕が残る。口径19.7cm、残存高18.6cmである。



第78図 土坑S K352出土土器実測図1 (1/4)



第79図 土坑S K352出土土器実測図2 (1/4)

土坑S K 353出土土器(第80図218) 土師器甕である。体部内外面にハケを施す。口径29.2cm、残存高5.5cmである。

③北部

北部で出土した土器は北東部くらべて著しく少ない。北東部では建物の柱穴にも多数の土器が認められたが、北部で検出した建物の多くは、土器が少なく、むしろ瓦類が多い。美濃山廃寺の中では土器の少ない区画ということができる。

掘立柱建物S B 2014出土土器(第80図219~223) いずれも須恵器である。219は杯Aの底部であろう。220は杯Aで、内面に漆らしきものが付着する。回転ナデを施し、底部外面はヘラキリ後ナデを施す。焼け歪みが著しい。219・220は柱穴S P 122掘形出土である。221は杯の口縁部で、柱穴S P 120掘形出土である。222は杯B蓋である。やや扁平であるが、口縁端部は屈曲しない。外面全体に灰が被るが、頂部はヘラキリ後不調整である。口径16.3cm、器高2.3cmである。221・

222は柱穴S P 118出土である。223は甕の口縁部の小破片で、柱穴S P 119掘形出土である。

総柱建物S B 2015出土土器(第80図224・225) どちらも須恵器である。224は円面硯の脚部である。脚部に長方形と推定される透かし孔がみられるが、長さや幅等は不明である。脚部下部に沈線が2条めぐり、内面は軽くヘラケズリを施す。胎土は密で、稀に3mm大の砂粒を含む。焼成は堅緻で、色調は灰色を呈する。底径19.5cm、残存高6.4cmである。ただし、もう少し底径が大きい可能性もある。柱穴S P 365柱痕出土である。225は鉢Aと推定される破片である。体部下半から底部にかけて残存する。底部の形状は平底状を呈する。底部付近に回転ヘラケズリもしくは手持ちのヘラケズリを施す。2mm以下の砂粒を少し含み、焼成は堅緻である。色調は灰白色を呈する。残存高は6.0cmである。S B 2015に関連した柱穴S P 495出土である。

柱穴S P 137出土土器(第80図226) 土師器杯である。平底気味の底部に内湾気味の口縁部を持つ。口縁部にヨコナデを施し、それ以下にハケを施す。口縁部に煤が付着するため、灯火器として使用されたのであろう。口径12.4cm、器高3.1cmである。

土坑S K 103出土土器(第80図227～234) 227～230は土師器である。227は杯Aであるが、摩滅が著しく調整や暗文の有無は不明である。口径17.8cm、残存高2.9cmである。228は皿Aであろう。口縁部にヨコナデを施すが、外面は摩滅する。暗文は施していないようである。口径17.5cm、残存高1.7cmである。229・230は杯である。230はやや厚手の器形を呈する。

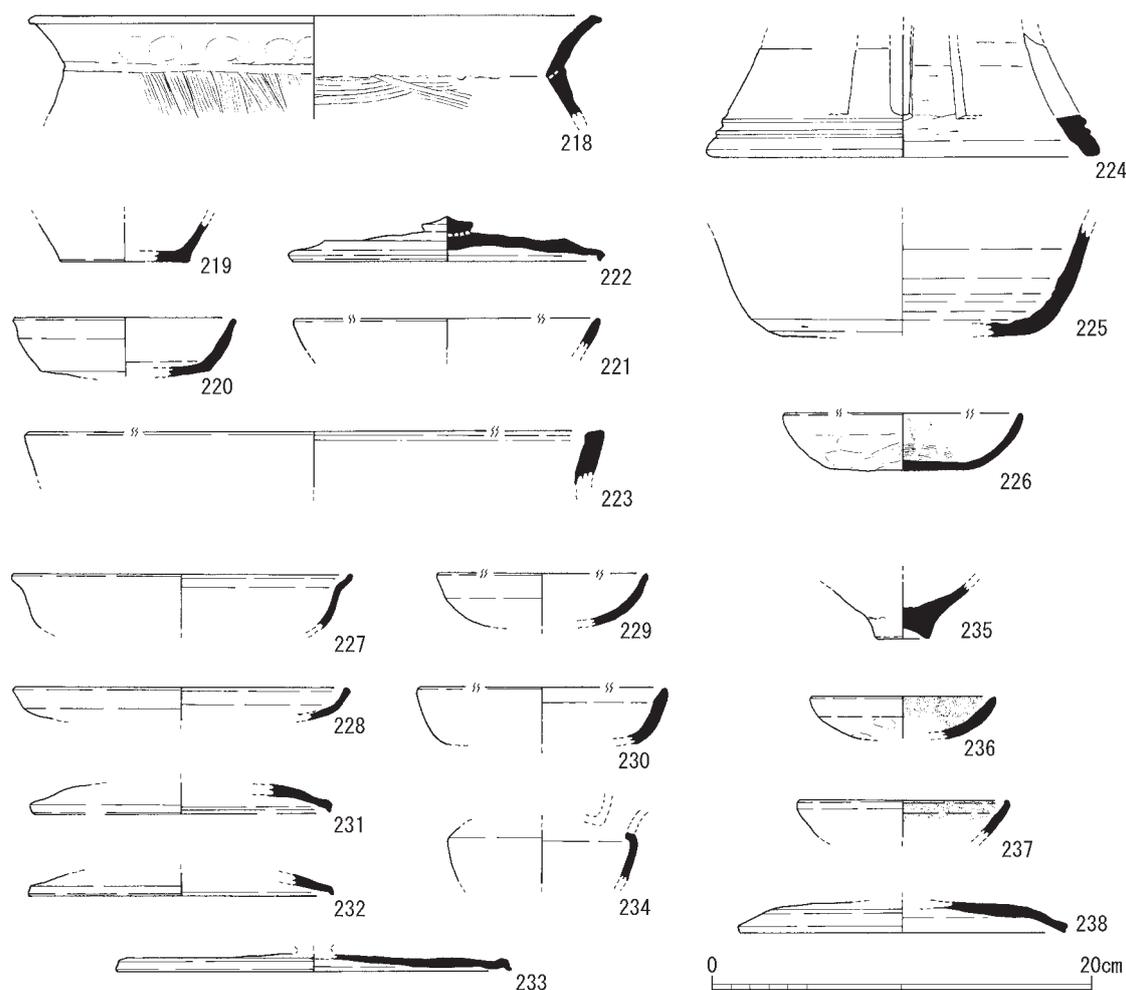
231～234は須恵器である。231・232は杯B蓋の口縁部の小破片で、口縁部の形状は屈曲しないと思われる。232は口径16.0cm、残存高1.2cmである。焼成がやや軟質である。同じく233は杯B蓋であるが、焼け歪みのためか、扁平な状態になっており、口縁部の形状は屈曲気味である。口径20.8cm、残存高0.9cmである。234は小型の平瓶の体部と推定される。肩部に口頸部の接合部分の痕跡が認められる。体部の復元最大径は10.0cmである。胎土には1mm以下の砂粒を含み、焼成はやや軟質である。色調は灰白色を呈する。

土坑S K 126出土土器(第80図235～238) 235は弥生土器の壺または鉢の底部と考えられる。236・237は土師器の杯または皿である。内面に煤が付着しているため、灯火器として使用されたのであろう。236は口径9.6cm、残存高2.3cm、237は口径11.0cm、残存高1.9cmである。238は須恵器杯B蓋である。口縁端部の断面形は方形状を呈するが、全体の形状は笠形を呈する。胎土は1～3mm程度の砂粒を含み、焼成はやや軟質である。色調は灰白色を呈する。口径17.2cm、残存高1.6cmである。

④中央部

北部同様、出土した土器は少なく、むしろ瓦類が多い。土器の少ない区画である。

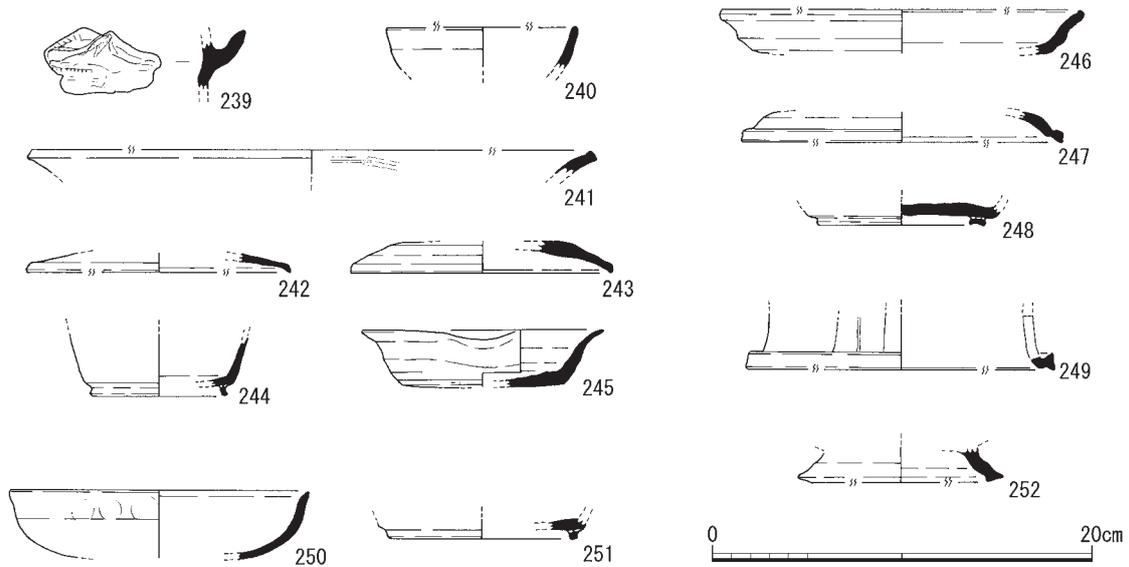
掘立柱建物S B 2001出土土器(第81図239～245) 239は土師器甕の把手で、柱穴S P 042掘形出土である。240は土師器杯の小破片で、柱穴S P 042出土である。241は土師器甕の口縁端部の小破片である。内面に粗いハケを施す。柱穴S P 041掘形出土である。242・243は須恵器杯B蓋で、全体の形状は笠形を呈する。242は摩滅のため調整不明であるが、243は頂部に回転ヘラケズリを施すようである。243は内面が研磨されたような状態であることから転用硯であろう。口径



第80図 北東部・北部検出遺構出土土器実測図(1/4)

13.6cm、残存高1.7cmである。242は柱穴S P 044柱痕、243は柱穴S P 044の一段下げの際の出土である。244は須恵器杯Bで、口縁端部を欠損する。小型の杯Bである。244も底部内面が研磨されたような状態であり、転用硯であろう。残存高3.3cm、底径7.1cmである。柱穴S P 045掘形出土である。245は口縁端部が外方に大きく折り曲げられることから、須恵器皿Eと推定する。口縁部の一部を片口状をしており、内面には朱の痕跡が遺存していた。また、内面は研磨されたような状態であり、朱墨用の硯として使用されていたのであろう。柱穴S P 048掘形出土である。いずれの須恵器も胎土は1mm以下の砂粒を少し含むものが多いが、焼成は堅緻なもの、軟質なものそれぞれある。また、転用硯が多く確認できる点は、S B 2001をはじめ、中央部で検出した大型の側柱建物の性格を考える上で重要である。

掘立柱建物S B 2003出土土器(第81図246~248) 246は土師器皿Aもしくは杯Aである。口縁部外面に強いヨコナデを施して、口縁部が大きく外反する。内面に暗文は施さない。247は須恵器杯B蓋である。口縁端部の破片であるが、端部が屈曲する。246・247はともに柱穴S P 086出土である。248は須恵器杯Bの底部である。やや扁平な高台を呈する。残存高1.2cm、底径8.8cmである。柱穴S P 089掘形出土である。



第81図 中央部検出遺構出土土器実測図(1/4)

掘立柱建物 S B 2017出土土器(第81図249) 須恵器円面硯の脚部の破片である。長方形の透かし孔が穿たれるが、長さや幅などは不明である。外面全体に灰を被る。外面に縦方向の沈線が1条確認できる。柱穴 S P 276掘形出土である。類似した破片資料が礎石・掘立柱併用建物 S B 2020の柱穴 S P 107から出土している(第83図263)。

土坑 S K 092出土土器(第80図250・251) 250は土師器杯Cである。口縁部にヨコナデを施し、それ以下の内外面にナデを施す。全体に摩滅気味である。胎土は3mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。色調は橙色を呈する。口径15.7cm、残存高3.6cmである。251は須恵器杯Bの底部の小破片で、高台付近のみが遺存する。1mm以下の砂粒を含み、焼成は軟質である。色調は灰白色を呈する。残存高1.1cm、底径10.0cmである。

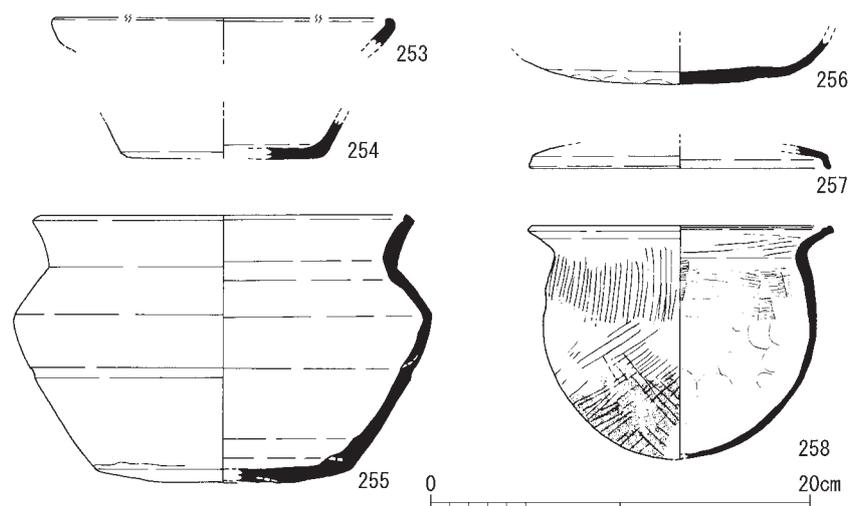
溝 S D 405出土土器(第81図252) 須恵器壺の高台と思われる。高台高は1.8cmであるが、残存率が1/12以下なので、図示した底径は不確かである。1mm以下の砂粒を含み、焼成は堅緻である。色調は灰色を呈する。

⑤西部

北部や中央部と同様、出土した土器は少ない。図示できたのもわずか6点である。

土坑 S K 225出土土器(第82図253~255) 253は土師器甕の口縁端部で、斜め上方につまみ上げ気味に肥厚する。254は須恵器杯Aである。底部から口縁部への立ち上がりの部分に当たる。255は須恵器鉢Dである。口縁部から体部にかけては回転ナデで仕上げ、体部下半にヘラケズリを施す。回転台等を使用しているのではなく、手持ちの可能性もある。底部外面はヘラキリ後ナデを施す。胎土は2mm以下の砂粒を含み、稀に8mm大の小礫を含む。焼成はやや甘く、全体に生焼け気味である。色調は浅黄色を呈する。口径19.2cm、器高14.1cmである。

土坑 S K 433出土土器(第82図256~258) 256は土師器杯または皿の底部である。口縁部を欠損するが、底部からの立ち上がり付近より上方にヨコナデを施し、底部は内外面ともユビオサエ



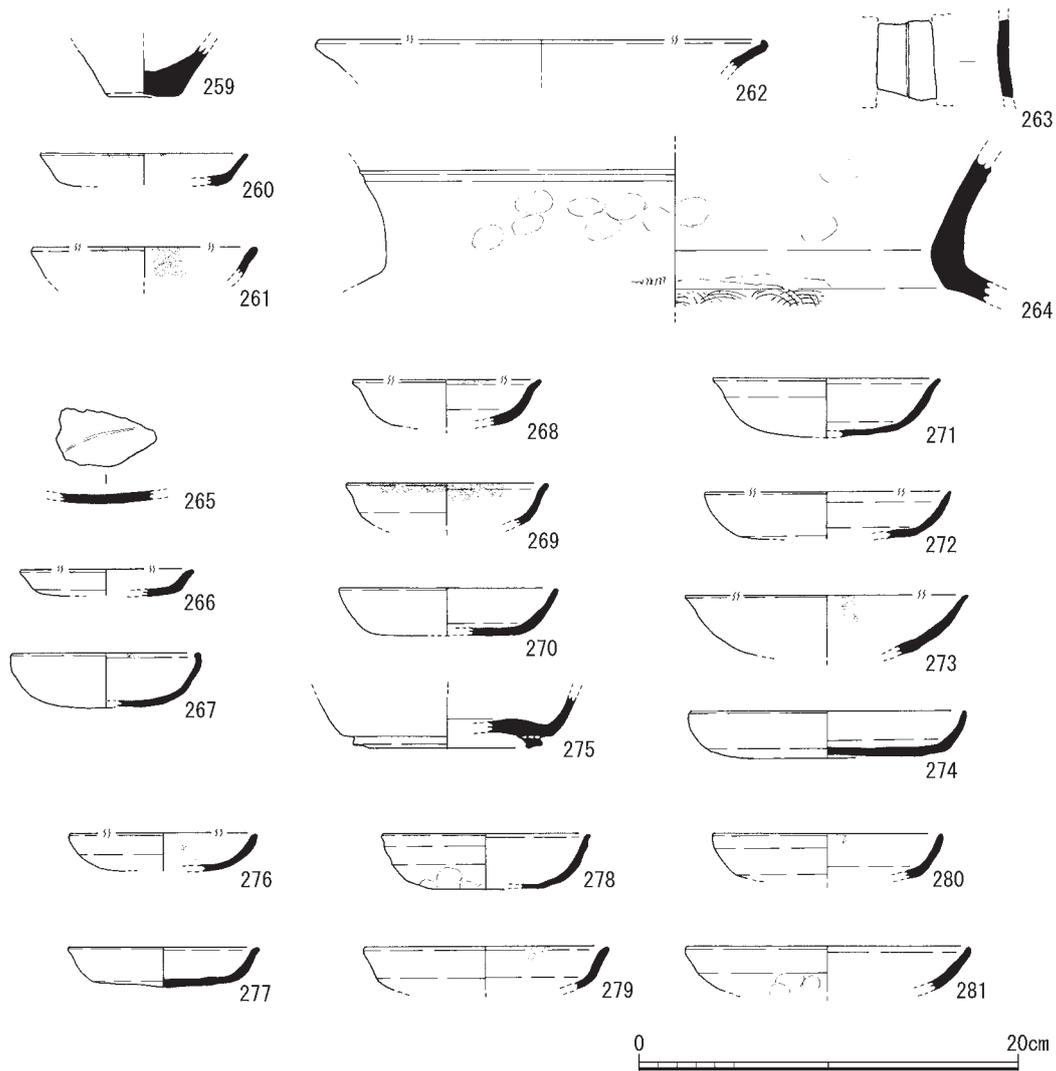
第82図 西部検出遺構出土土器実測図(1/4)

やナデを施す。摩滅気味のため明確ではないが、底部外面にヘラケズリを施している可能性もある。残存高2.5cmである。257は須恵器杯B蓋の口縁端部である。口径15.8cm、残存高1.2cmである。258は須恵器甕である。焼成は須恵質であるが、調整に土師器の特徴をみることができる。体部外面は粗いハケを施す。体部内面の上半には細かいハケの痕跡を確認できる。下半はユビオサエとナデを施す。また、口縁部内面に凸線状の稜を1条めぐらす。土師器ではみられない特徴である。なお、底部外面に煤が付着する。口径15.5cm、器高12.4cmである。胎土は1mm以下の砂粒を含み、焼成は堅緻である。色調は灰色である。

⑥南部

南部では礎石・掘立柱併用建物S B 2020の周囲に当たる雨落ち溝S D 293や区画S X 097・099の埋土から多数の土器が出土した。これらの大半は小型の土師器杯・皿類で、口縁部に煤の付着しているものが多い。また、S B 2020よりも南側では、瓦溜りを検出しており、瓦類とともに少量の土器類が出土した。

礎石・掘立柱併用建物S B 2020出土土器(第83図259～264) 各柱穴から出土した遺物は、瓦類が圧倒的に多く、土器類は非常に少ない。259は弥生土器壺の底部である。柱穴S P 248柱痕から出土した。260・261は土師器杯もしくは皿である。260はわずかに、261は厚くそれぞれ煤が付着する。どちらも灯火器として使用されたものであろう。260は柱穴S P 106柱痕から、261は柱穴S P 107から出土した。262は土師器甕の口縁部である。端部を内方に折り曲げたような形態である。柱穴S P 106の最上層から出土した。263は須恵器碗の脚部の破片である。破片の両側に透かしがある。穿孔の状況から方形の透かしと想定される。柱穴S P 107抜き取り穴から出土した。類似した破片資料が北部の掘立柱建物S B 2017の柱穴S P 276掘形から出土している(第81図249)。264は須恵器甕の頸部である。口縁端部の形状は不明であるが、頸部の径などから大型の甕であると予想される。外面に沈線が2条めぐり、体部外面に平行タタキ痕、体部内面に同心円の当て具痕を確認できる。柱穴S P 291柱痕から出土した。



第83図 礎石・掘立柱併用建物S B2020・雨落ち溝S D293・攪乱S X287出土土器実測図(1/4)

雨落ち溝S D293出土土器(第83図265~275) 265~274は土師器である。265は杯もしくは皿の底部の破片で、内面に螺旋状暗文が残る。底部外面はケズリの後ミガキである。266は皿Cである。平底気味の底部に外反気味に立ち上がる口縁部からなる。267~270は口径10~11cm前後の杯である。267・270は内湾気味の口縁部を、268・269は外反気味の口縁部を呈する。268・269は口縁部に煤が付着しており、灯火器として使用されたと思われる。271~273は口径13~15cm前後で、中型の杯である。271は口縁部が大きく外反する。272・273は内湾気味に立ち上がった口縁部の上半がわずかに外反するものである。273は口縁部に煤が付着しており、灯火器として使用されたと思われる。274は緩やかに内湾気味に立ち上がる皿である。口径14.6cm、器高2.3cmである。275は須恵器杯Bの底部である。底径8.4cm、残存高2.8cmである。

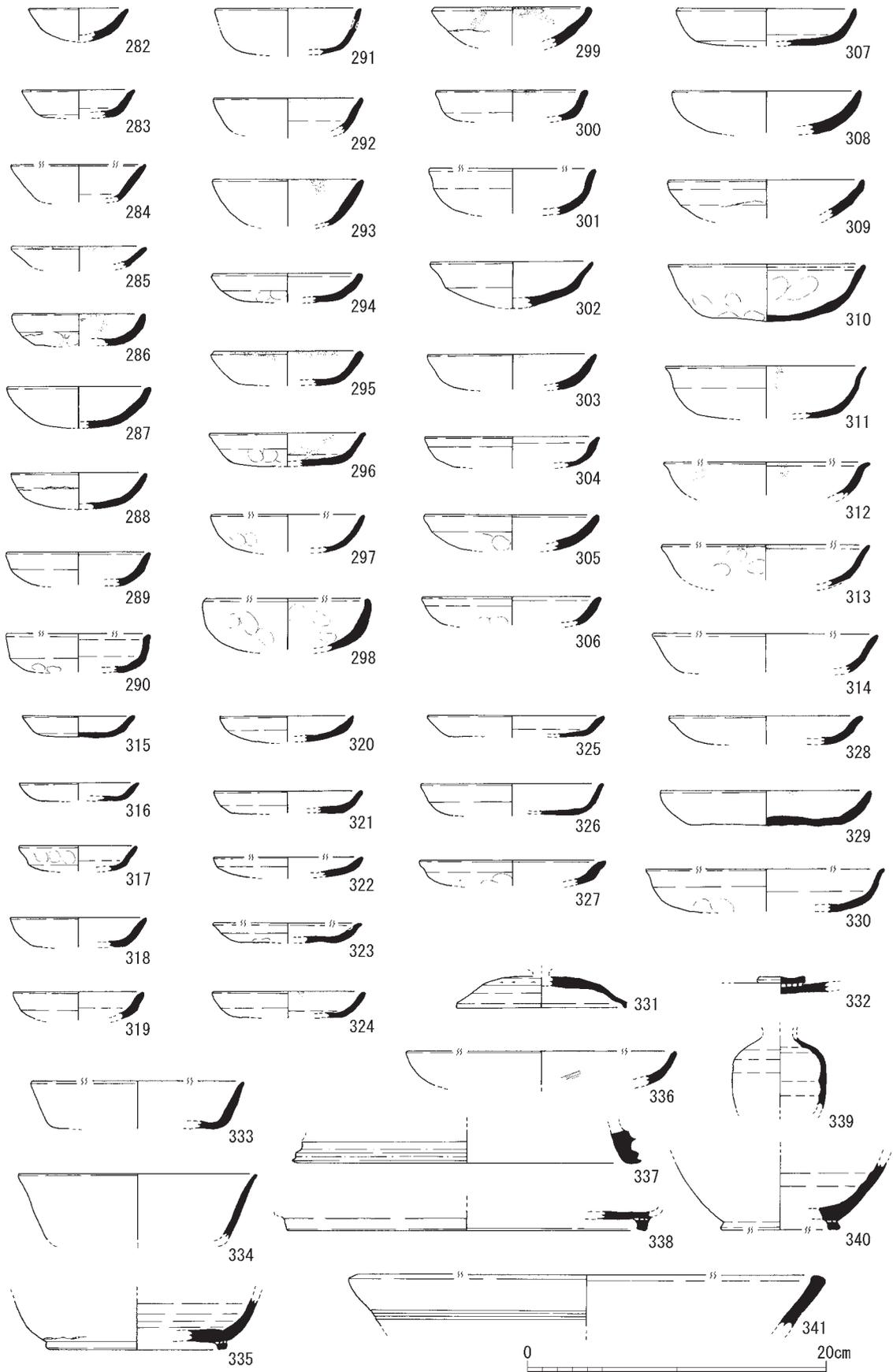
攪乱S X287出土土器(第83図276~281) 図示したのはいずれも土師器である。276・277は小型の皿である。276は緩やかに立ち上がり、277は口縁端部がわずかに外反する。278は杯である。ヨコナデを2段に施す。口径11.0cm、残存高3.0cmである。279~281は中型の皿で、279・280は

口径12cm前後、281は口径15.0cmである。276・279・280には煤が付着しており、灯火器として使用されたと思われる。S X 287は区画S X 097の上層で検出した攪乱であり、これらの出土遺物は本来S X 097に伴うものとする。

区画S X 097出土土器(第84図282～341) 282～330は土師器である。282～314は杯である。口径に対して器高が高いことから杯と判断した。口縁部の形状は多様であり、特定の器形を呈しない。口径から大きく大・中・小の3つに区分できる。282～297・299・300は口径7～10cmで、小型品である。298・301～306は口径11～12cmで、中型品である。307～314は口径が12～15cmで、大型品である。315～330は皿である。杯にくらべて器高が低いことから皿と判断した。杯と同様に口縁部の形態は多様であり、やはり法量から大・中・小の3つに区分できる。315～320は口径7.5～9cmで、小型品である。321～324は口径10cm前後で、中型品である。325～329は口径が12～14cmで、大型品である。330は復元口径16cmほどでさらに大型品である。以上の杯・皿の一部には、大小を問わず、口縁部に煤が付着しているものがみられる(285・286・293・295・296・299・300・303・311～313・324・329など)。煤の付着しないものも多くみられるが、接合できないような小片が多いことから、出土した杯・皿類の多くが灯火器として使用されたものと思われる。また、S X 097の下層に当たる雨落ち溝S D 293やS X 097の攪乱であるS X 287などからも灯火器として使用された多数の土師器杯・皿類が出土している。これら同一地点において一定の出土量があることから、礎石・掘立柱併用建物S B 2020における儀式等において供えられた灯火器を廃棄したものとする。あるいはS B 2020に仏像が安置されていたとするならば、仏前に供えられた灯火器を廃棄したものとすることもできる。これらの土師器杯・皿類の胎土は2mm以下の砂粒を含み、密なものが多い。焼成は良好なものが多い。色調は明黄褐色や橙色を呈するものが多い。

331～341は須恵器である。331は小型の杯B蓋である。笠形を呈し、頂部に回転ヘラケズリを施す。口径11.3cm、残存高2.1cmである。332は杯B蓋のつまみである。333は杯A、334は杯、335は杯Bである。いずれも小破片である。336は皿である。内湾気味に立ち上がる口縁部を呈する。337は硯の脚部である。底径23.4cm、残存高2.3cmである。透かしの下端部分と思われるところを確認できる。同一個体と思われるものが、北に約20mのところ遺物包含層から出土している。出土地点が異なるため、別に図示した(第87図393)。338は皿Bの高台部分である。底部内面が研磨されたような状態であり、転用硯であろう。底径は24.0cmである。339は壺Mの体部上半の破片である。外面に灰を被る。遺構の埋没時期を示す遺物と考える。340は壺の底部である。上部の形態等は不明である。341は甕の口縁部の小破片である。外面に沈線が2条めぐる。

区画S X 099出土土器(第85図342～354) 342～347は土師器である。342・343は区画S X 097で出土した小型の皿と同法量のものである。どちらも口縁部に煤が付着している。341は口径7.0cm、残存高1.4cmである。344・345は同じく中型の皿と同法量のものである。やはりどちらにも口縁部に煤が付着している。345は胎土は異なるが、京都府木津川市所在の馬場南遺跡出土の灯芯痕をもつ皿Cに近い形態をとる。^(注8)口径12.0cm、残存高1.6cmである。以上の342～345はい



第84図 区画S X 097出土土器実測図(1/4)

ずれも灯火器として使用されたものであろう。346・347は甕である。346は口縁部内面と体部外面にハケを施す。口径20.6cm、残存高4.3cmである。347は口縁端部をややつまみ上げる。

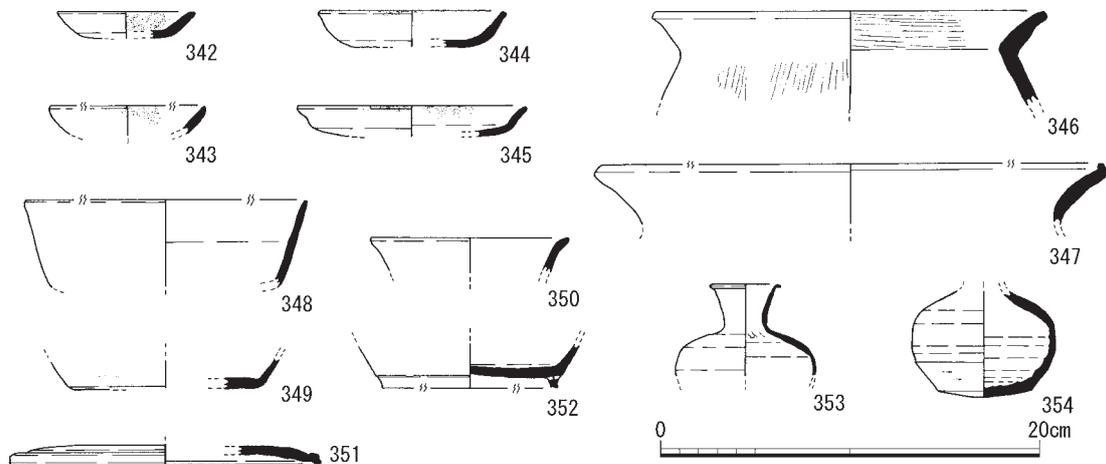
348～354は須恵器である。348は杯の口縁部、349は杯Aの底部の破片である。348は残存高4.6cmで、深手の杯である。350は壺の口縁端部の可能性があり、大きく外反する。351は杯B蓋で、全体の形状は扁平で、口縁端部がわずかに屈曲する。口径16.2cm、残存高1.0cmである。352は杯Bの底部である。353・354は壺Mで、353は体部最大径付近よりも上の、354は頸部から下の破片資料である。353は口縁端部をわずかに折り曲げたような形態を呈する。口縁部の内面と外面全体に灰を被る。口径3.3cm、残存高4.9cmである。354は体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリを施し、底部はさらにナデを施す。高台は有さない。体部最大径7.6cm、残存高5.6cmである。胎土は353が砂粒をあまり含まない精良であり、354は1mm程度の砂粒を含むものである。焼成はともに堅緻で、色調もともに青灰色を呈する。

図版第55-(2)は三彩陶器である。3～10cm角の破片が10点ほど出土したが、全体の形状を復元できるものはなく、そのうち5点を掲載した。釉薬は淡緑灰ないし黄褐色を呈する。胎土は砂粒をほとんど含まず、精良であるが、焼成は軟である。胎土の色調は浅黄橙色ないし灰白色である。

掘立柱建物S B 2021出土土器(第86図355) 須恵器杯B蓋の口縁部の破片である。口縁部は笠形を呈すると思われる。口径19.0cm、残存高1.3cmである。柱穴S P 388掘形から出土した。

柱穴S P 664出土土器(第86図356) 掘立柱建物S B 2021を構成する柱穴S P 389と重複し、より新しい柱穴S P 664から出土した須恵器皿である。口縁端部内面に沈線様の凹線がみられるので皿Cの可能性もあるが、底部が非常に厚く(約1cm)、類例を知らない器形である。体部下半に回転ヘラケズリを施す。胎土は1mm以下の砂粒を少し含み、焼成が軟で、焼け歪みと摩滅が著しい。色調は灰白色を呈する。口径20.1cm、器高3.4cmである。

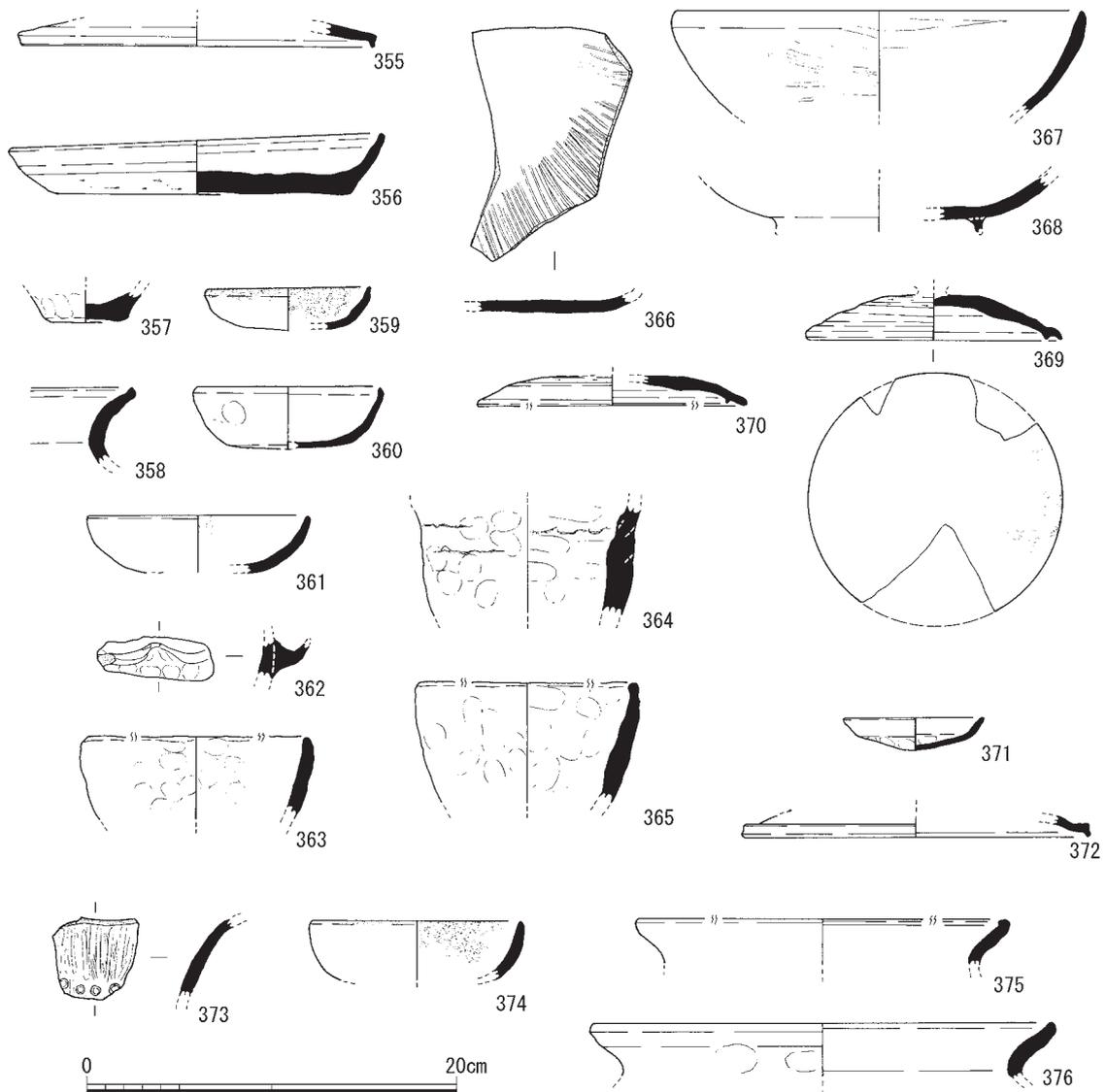
土坑S K 096出土土器(第86図357～365) 357は弥生土器の甕の底部である。358～362は土師器である。358は甕の口縁部で、小破片のため復元実測はしていない。口縁端部をわずかにつま



第85図 区画S X 099出土土器実測図(1/4)

み上げる。359は内面に煤が厚く付着している小型の杯である。口径8.8cm、器高2.4cmである。灯火器として使用されたものと思われる。360は359より一回り大きい杯である。口縁端部がやや内方に傾く。口径10.0cm、器高3.4cmである。361も杯であるが、摩滅が著しく、調整は不明である。口縁部に煤が付着することから灯火器として使用されたと思われる。362は甕か鍋の把手と思われる。363～365は製塩土器である。いずれも口縁部や体部のみの小破片であるが、逆円錐形を呈すると思われる。内外面ともユビオサエとナデで調整する。364は粘土紐接合痕が残り、363・365にくらべてやや厚手である。

土坑S K 143出土土器(第86図366～370) 366～368は土師器である。366は皿の底部である。底部内面に放射状暗文が確認できるが、螺旋状暗文はみられない。破片の一端に口縁部への立ち上がりを確認できることから、本来であれば螺旋状暗文も施されるべきであるが、施されていないのは在地色であろう。底部外面の一部にヘラミガキを施す。367は大型の鉢で、底部を欠損す



第86図 南部検出遺構出土土器実測図(1/4)

るが、尖底状を呈する可能性もある。口縁部にヨコナデを施し、内面にナデ、外面にハケを施す。胎土に1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。色調は灰黄褐色を呈する。口径22.0cm、残存高5.6cmである。368は杯Bである。高台端部を欠損するため、正確な底径は不明であるが、約11cmである。内面は摩滅するため暗文の有無は不明であるが、外面はヨコナデの痕跡を確認できる。残存高は3.0cmである。369・370は須恵器杯B蓋で、内面にかえりを有する。どちらも頂部外面に回転ヘラケズリを施す。369は内面に煤らしきものが付着しており、灯火器として使用された可能性がある。3mm以下の砂粒を含み、焼成は堅緻である。色調は灰色を呈する。口径13.8cm、残存高2.4cmである。370は369よりも扁平な器形を呈するが、残存率が1/12以下なので法量は不明である。2mm以下の砂粒を含み、焼成は堅緻である。色調は灰色である。

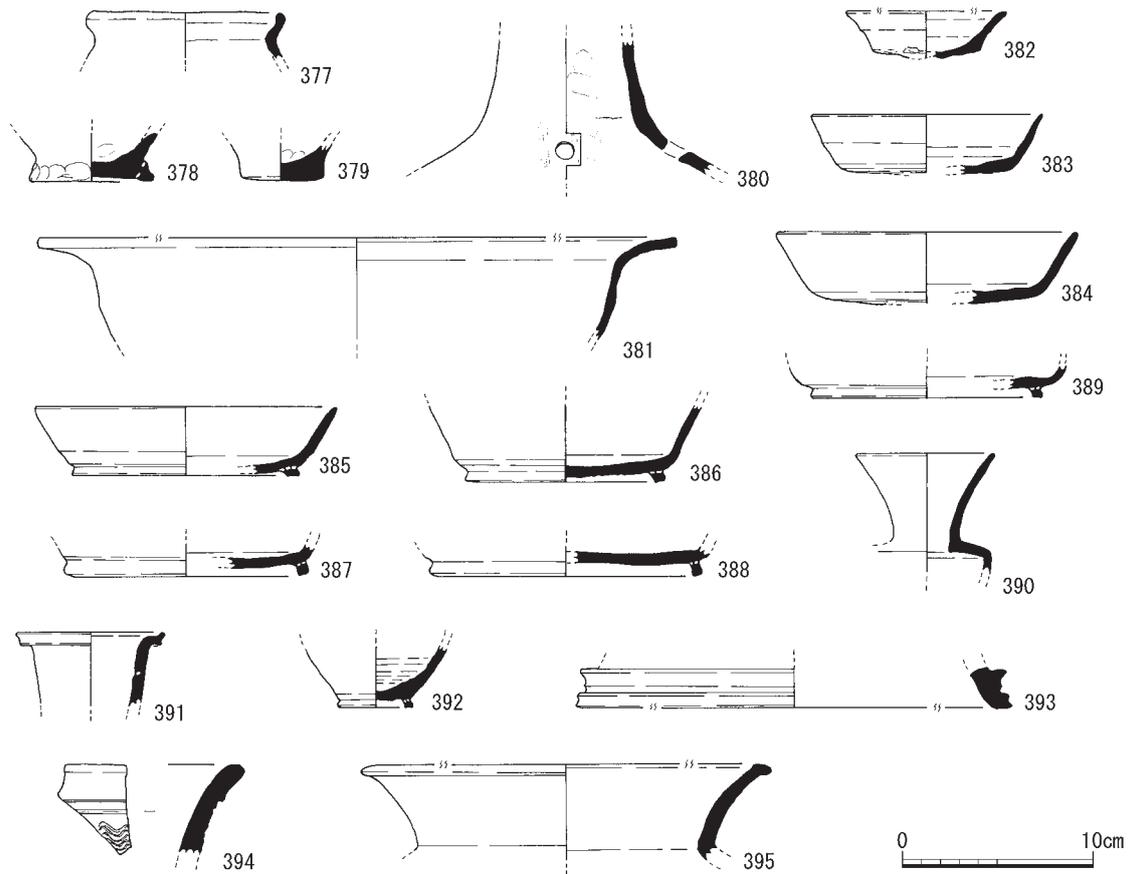
瓦溜り S X 208 出土土器 (第86図371・372) 371は土師器の小型の杯である。口縁部の煤が付着することから灯火器として使用されていたのであろう。口径7.6cm、器高1.8cmである。1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。にぶい黄橙色を呈する。372は須恵器杯B蓋の口縁の破片である。端部がわずかに屈曲する。1～2mmの砂粒を含み、焼成は堅緻である。灰色を呈する。口径18.8cm、残存高1.2cmである。

瓦溜り S X 219 出土土器 (第86図373～376) 373は弥生土器広口壺の口縁部の破片である。外面に縦方向のヘラミガキを施し、破片の最下部には直径0.6cmほどの竹管文が配置されている。374は土師器杯である。内面に煤が厚く付着しており、灯火器として使用されたと思われる。口径11.4cm、残存高3.2cmである。375・376は土師器甕である。375は口縁端部を内方に折り曲げ、丸くおさめる。376は端部をわずかに肥厚させ、断面方形状を呈する。口径24.8cm、残存高2.9cmである。374・375はともに1～2mm程度の砂粒を少し含み、焼成は良好である。色調はともににぶい黄橙色を呈する。

遺物包含層出土土器 (第87図377～395) 377～380は弥生土器である。377は受け口状口縁を呈する小型の甕である。口径10.0cm、残存高2.4cmである。378は鉢の底部と推定される。外面をユビオサエで整形している。底部の平面形は円形ではなく卵形であるため、底径は6.0～6.8cmである。残存高は2.0cmである。379は壺の底部である。残存高2.0cmである。380は器台の筒部から脚部にかけての破片である。円形の透かし孔が穿たれる。残存高は7.1cmである。

381は土師器鍋である。全体に摩滅・剥離が著しく調整は不明である。残存率も1/12以下である。

382～395は須恵器である。382は皿Eであろうか。内面の底部から口縁部への立ち上がりの屈曲が不明瞭である。383・384は杯Aである。383は口径12.1cm、器高3.1cmである。384は口径15.6cm、器高3.8cmである。385～389は杯Bである。385は口径15.9cm、器高3.7cm、底径12.0cmである。386は残存高4.1cm、底径9.5cmである。387・388はいずれも底部のみで、底径は11.9～13.5cmである。390は平瓶の口頸部である。口径7.2cm、残存高6.3cmである。391は壺KもしくはLの口縁部である。口径7.8cm、残存高3.9cmである。392は壺Mの体部下半である。高台を有する。底径3.9cm、残存高3.2cmである。393は硯の脚部の破片である。同形態のものが区画S X 097から出土しており、胎土や焼成などから同一個体の可能性が高いが、出土地点が異なるため、



第87図 遺物包含層出土土器実測図(1/4)

別々に報告する(第84図337)。394は甕の口縁部の小破片である。口縁部外面に波状文を施すが、小破片のため口径の復元等は困難である。395は甕の口縁部である。口縁端部に面を作り、外下方に折り曲げたような形状を呈する。

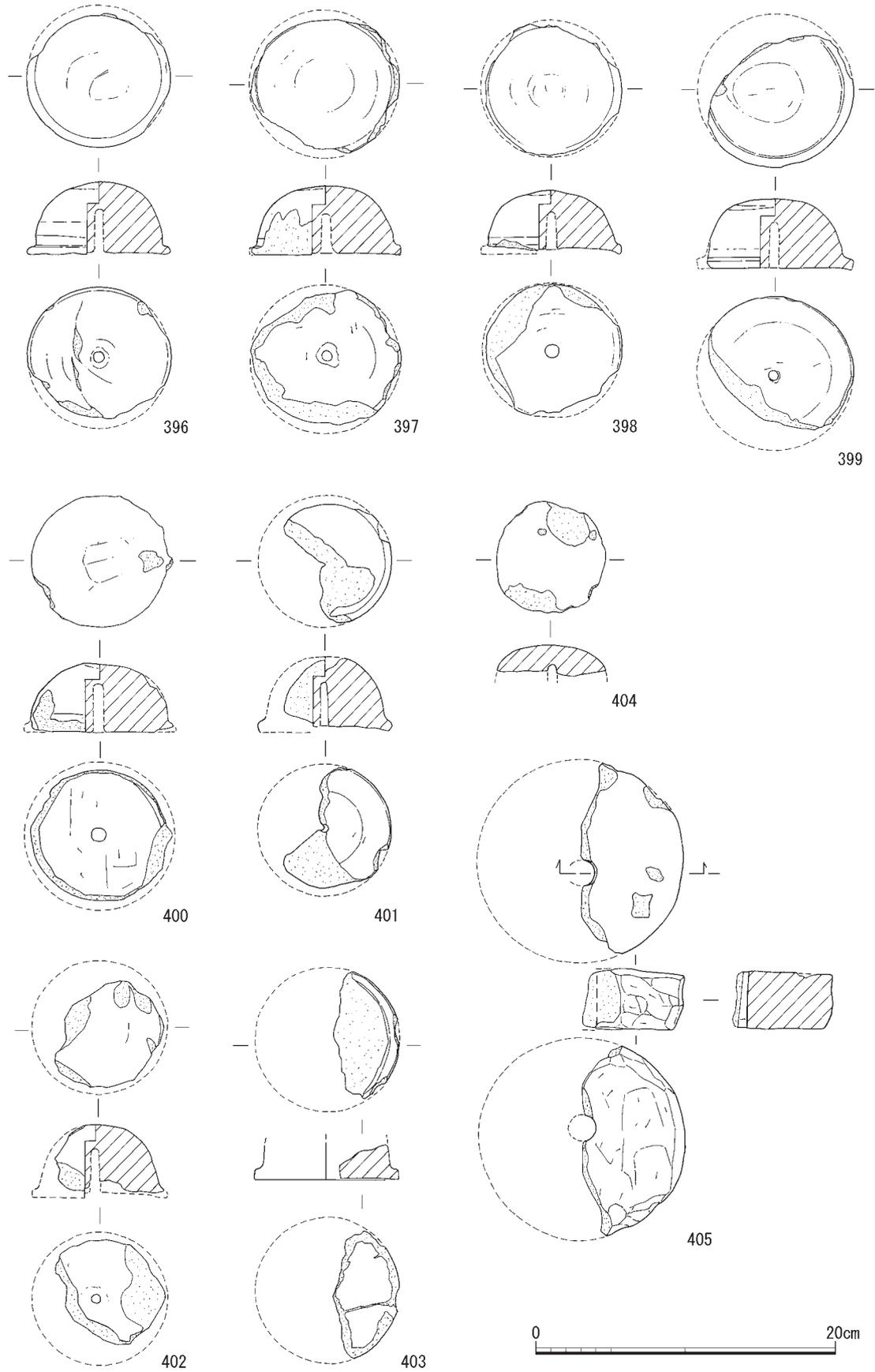
(筒井崇史)

(3) 土製品

美濃山廃寺を特徴づける遺物として、覆鉢形土製品^(注9)・ひさご形土製品がある。第7次調査では、上記2種のほか、宝輪形土製品の出土を確認している(第88・89図)。

396～404は覆鉢形土製品である。出土した覆鉢形土製品は法量・胎土・色調・焼成などに若干の差が認められるが、形態はほぼ同一である。ただし、完形品はなく、円盤状部や半球状部の一部を欠損するものが多い。また、底面の中央に穿孔を施す。法量は底径9.4～10.0cm、高さ4.3～4.9cmで、底面の穿孔は直径0.6～1.0cm、深さ2.8～3.2cmである。胎土はおおむね密で、0.5～1.5mm程度の白色粒や黒色粒を含む。焼成も良好なものが多く、全体に須恵質に焼き上がっている。色調は灰色ないし灰白色である。

396はⅧ-q18区、397はⅧ-p14・q14区ほか、398・404はⅧ-n15区、400はⅧ-j17区の精査中等の際に出土したものである。399は土坑S K415、401は区画S X097、403は時期不明の溝S D211の出土である。402は調査地南端で表採したものである。403は下部の周縁1/3程度、404は上部の破片



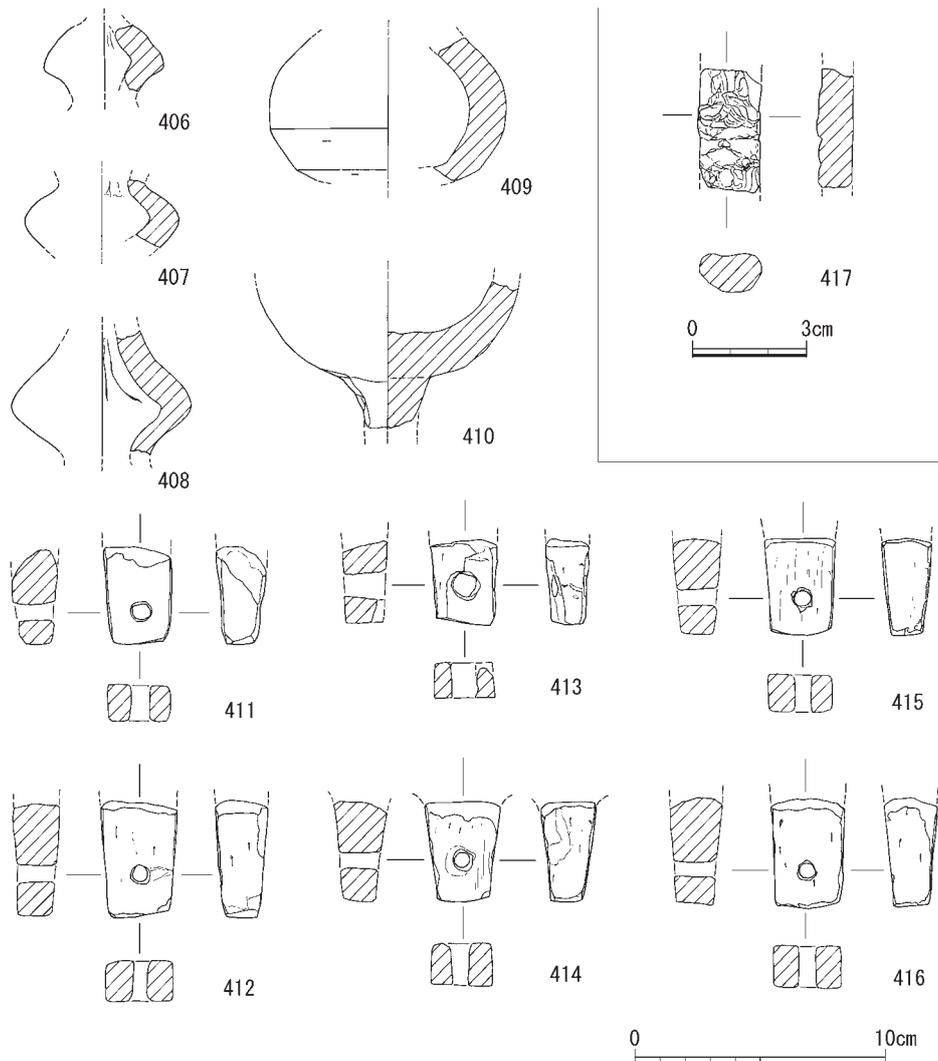
第88図 覆鉢形土製品・宝輪形土製品実測図(1/4)

である。404は底部から穿たれた穿孔の先端がかろうじて認められる。

405は、宝輪形土製品である。土坑S K143の断ち割り時に出土した。このため出土層位は明らかでないが、6層ないし7層と考えている。残存する外周から直径は13.6cmに復元でき、厚さは3.8cmである。推定される本来の大きさの1/2程度しか残存しない。外周の円弧の中心ではないが、ほぼ中央に直径1.8cmに復元できる穿孔が認められる。図の上面側は摩滅が著しいが、下面側は不定方向のケズリを施す。側面にもケズリを施す。中央に穿孔が認められることや、円盤状を呈することなどから、相輪の一部である宝輪を土製品で模したものではないかと推定される。土製の宝輪については、馬場南遺跡などで類例が知られるが、美濃山廃寺出土例は法量が小さく、仕上げも粗雑である。

406～416は、ひさご形土製品である。ひさご形土製品の概要や各部の名称等は第6次調査報告121頁を参照されたい。

406・407はともに一段目で、406はⅧ-y14区、407はⅧ-v12区の出土である。最大径4.6～6.1cm



第89図 ひさご形土製品・埴仏実測図(1/3・1/2)

である。408は二段目と推定され、最大径7.0cm、残存高5.0cmである。掘立柱建物跡S B 2012の柱穴S P 072から出土した。S P 072は多数の土器類が出土しており(第76図123~137)、ひさご形土製品の年代を考える上で重要な資料である。出土土器から美濃山廃寺の第Ⅱ-1期に位置づけられる。409・410は最下段である。どちらも厚さは1.5cm前後あり、409の最大径は9.2cmである。409は礎石・掘立柱併用建物S B 2020の柱穴S P 106の柱痕から出土した。410は区画溝S D 090-5から出土した。

410~416は下部の結合部が剥落したものである。形状は、やや扁平な方柱状を呈し、長軸幅2.7~3.0cm、短軸幅1.7~2.0cm、高さ3.4~4.3cmである。中央には直径0.7~0.9cmほどの円形の穴が穿たれている。突起の表面はケズリで仕上げているものが多い。

417は埴仏である。蓮台の上に座禪を組んだ仏像が少なくとも2体以上押し出されたものである。また側縁は残存しており、左右に仏像が並ぶ型式ではなく、縦に並ぶ一列二段以上のものと考えられる。上の仏像は首から上が、下の仏像は首から上が欠損する。下の仏像の頂部には天蓋が認められる。仏像の脇の付近の衣の上に金箔が遺存している。また、凶像面から仏像への立ち上がりの辺りには金箔の接着に使用したと思われる漆も遺存していた。仏像の背面は縦方向に面取りをしている。残存長3.3cm、幅1.7cm、厚さ1.0cmである。胎土は密で、焼成は良好である。色調は橙色を呈する。なお、第6次調査報告143~146頁に、本例を含めた美濃山廃寺出土埴仏の製作方法の検討が行われている。併せて参照されたい。

(筒井崇史)

(4) 鍛冶関連遺物

第7次調査では鉄製品、羽口、鉄滓が出土した(第90・91図)。出土した冶金関連遺物の総重量は3,528.7gで、最も多く出土した鉄滓は2,005.1gである。炉壁613g、羽口402.7g、鉄製品507.9gである。鉄塊系遺物は認められなかった。

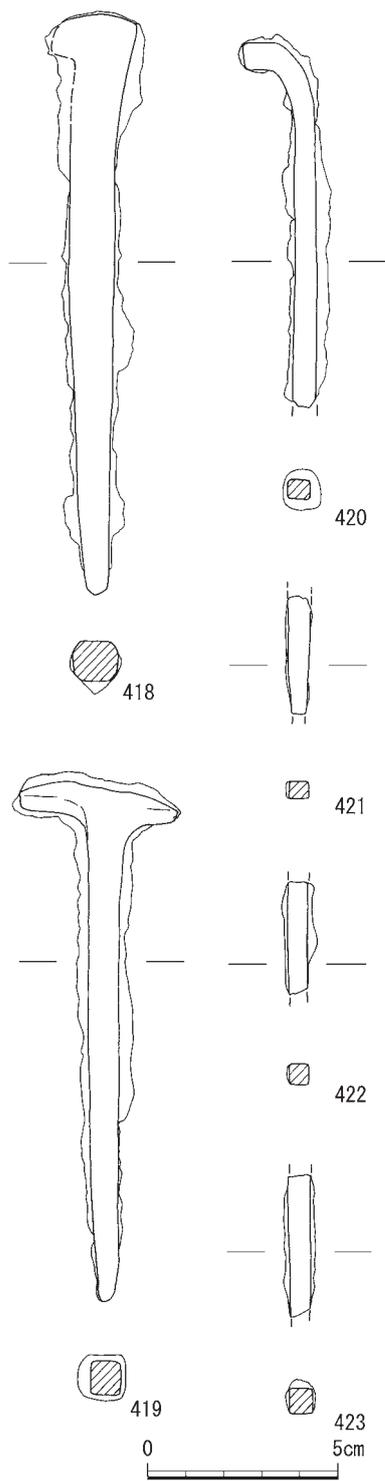
418～423は釘である。418は礎石・掘立柱併用建物S B 2020の柱穴S P 106から出土した。頭部は折曲頭形で、残存長15.4cm、最大幅2.6cm、重さ76gである。419はS B 2020の柱穴S P 093から出土した。頭部は鋌頭形で、残存長14.0cm、最大幅4.4cm、重さ78.8gである。420は瓦溜りS X 208から出土した。頭部は折曲頭形で、残存長9.9cm、最大幅1.7cm、重さ21.7gである。421は雨落ち溝S D 293から出土した。頭部のない破片で、残存長3.1cm、最大幅0.7cm、重さ2.2gである。422は区画S X 097から出土した。頭部のない破片で、残存長3.0cm、幅0.5cm、重さ3.1gである。423は区画S X 099から出土した。頭部のない破片で、残存長3.75cm、幅0.8cm、重さ4.5gである。

424～429は羽口である。このうち炉内側の端部が残存しているのは424～427である。第91図では胎土が溶融している溶融部、熱により胎土がやや溶けかかった半溶融部、炉と接合していることにより還元環境にあった還元部をそれぞれ3種類のスクリーントーンで示した。

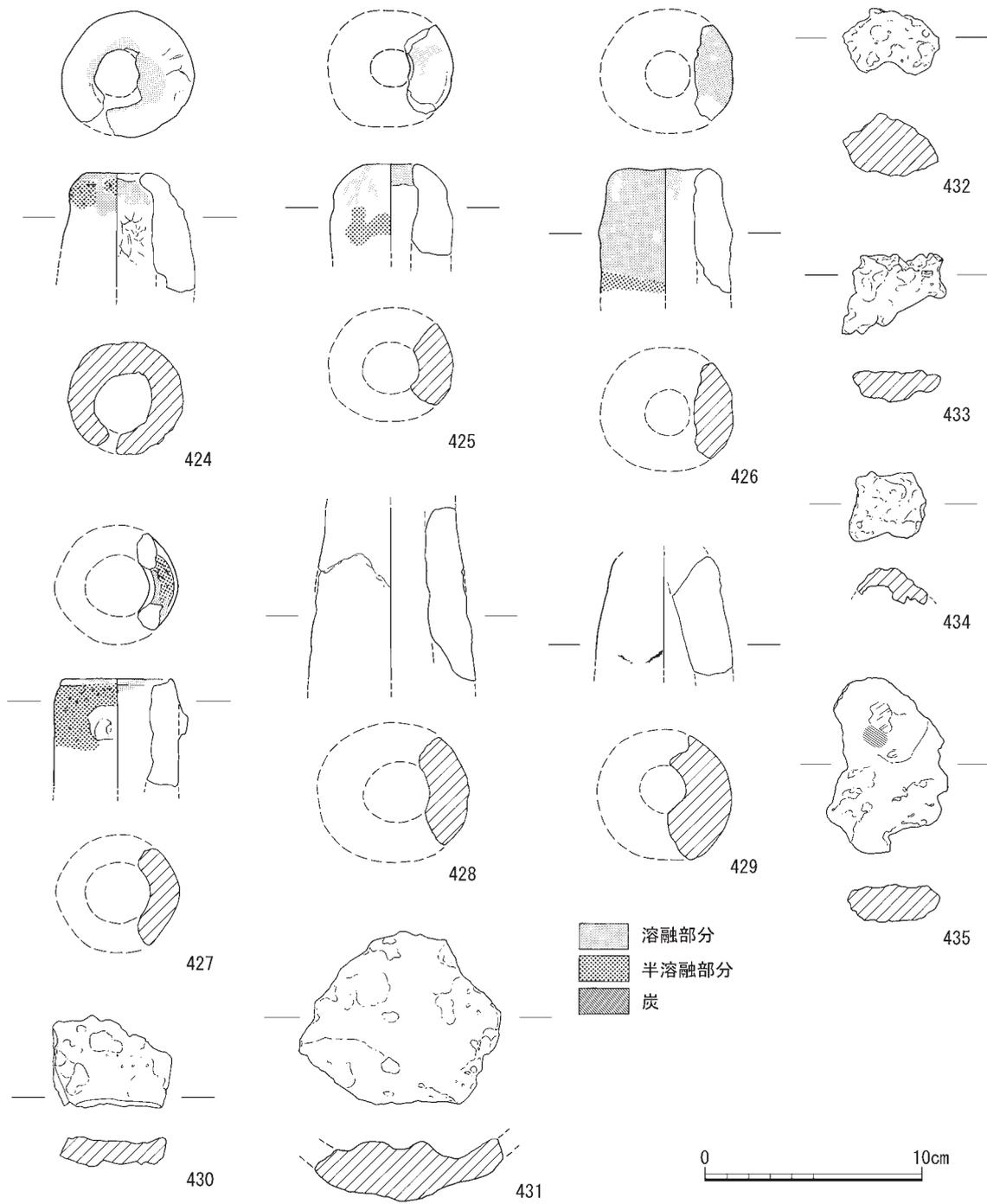
424は土坑S K 096から出土した。残存長5.5cm、先端部外径4.5cm、内径2.4cm、重さ92.3gである。425はV-d18区周辺の遺物包含層から出土した。残存長4.0cm、先端部外径5.0cm、内径2.4cm、重さ25.9gである。426は区画S X 099から出土した。残存長5.7cm、先端部外径4.0cm、内径2.6cm、重さ37.0gである。427は土坑S K 103から出土した。残存長5.0cm、先端部外径5.5cm、内径3.2cm、重さ33.3gである。

428は土坑S K 096から出土した端部のない破片である。残存長7.9cm、重さ46.8gである。429はS K 096から出土した端部のない破片である。残存長5.2cm、重さ167.4gである。

430～435は鉄滓である。430は掘立柱建物S B 2012の柱穴S P 002から出土した。約4.3×5.5cmで、57.7gである。431もS B 2012のS P 002から出土した椀形鉄滓である。約8.0×9.3cmで、182.5gである。432はS K 096から出土した鉄滓である。約3.1×4.5cmで、21.9gである。433も



第90図 鉄製品実測図(1/2)



第91図 輔羽口・鉄滓実測図(1/3)

S K096から出土した鉄滓である。約3.8×4.8cmで、23.2gである。炭の小片が嚙んでいる。434もS K096から出土した鉄滓である。3.2×3.7cmで、17.5gである。435はS B2012の柱穴S P351から出土した。約8.1×5.6cmで、100.5gである。

(関広尚世)

5. 美濃山廃寺下層遺跡第10次調査

1) 検出遺構

(1) 竪穴建物

竪穴建物 S H3002 (第92図上) 調査地北東部で検出した。周壁溝の一部は区画溝 S D001・010と重複しており、途切れる部分がある。また、南西隅は攪乱により検出できなかった。平面形は六角形を呈し、一辺4.2m前後、長軸9.5m、短軸8.5m、深さ0.2mである。周壁溝は、幅0.3m、深さ0.15mである。支柱穴は検出できなかった。遺物として周壁溝から壺の頸部や甕の口縁部が出土した(第99図436・437)。

竪穴建物 S H3003 (第92図下) 竪穴建物 S H3002の東約5mで検出した。周壁溝のみが遺存し、床面の大半は削平されてしまったようである。南半部は境界溝による削平のため検出できなかった。平面形は隅丸の六角形を呈し、一辺3.5~4.1m、長軸7.0m、短軸6.5mである。周壁溝は幅0.3m、深さ0.08m前後である。南西に柱穴を2基検出しており、支柱穴は4基で構成されていたとみられる。柱間の距離は4.3mである。遺物として甕の口縁部が出土した(第99図438)。

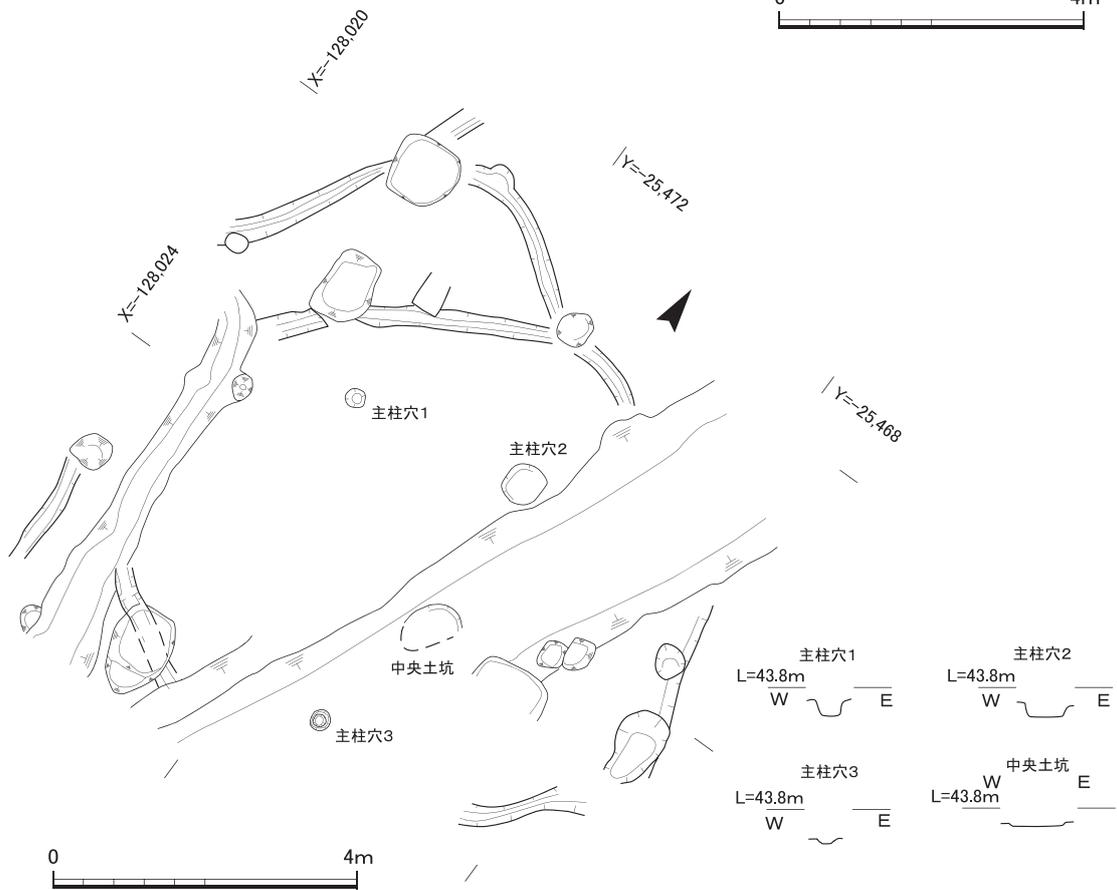
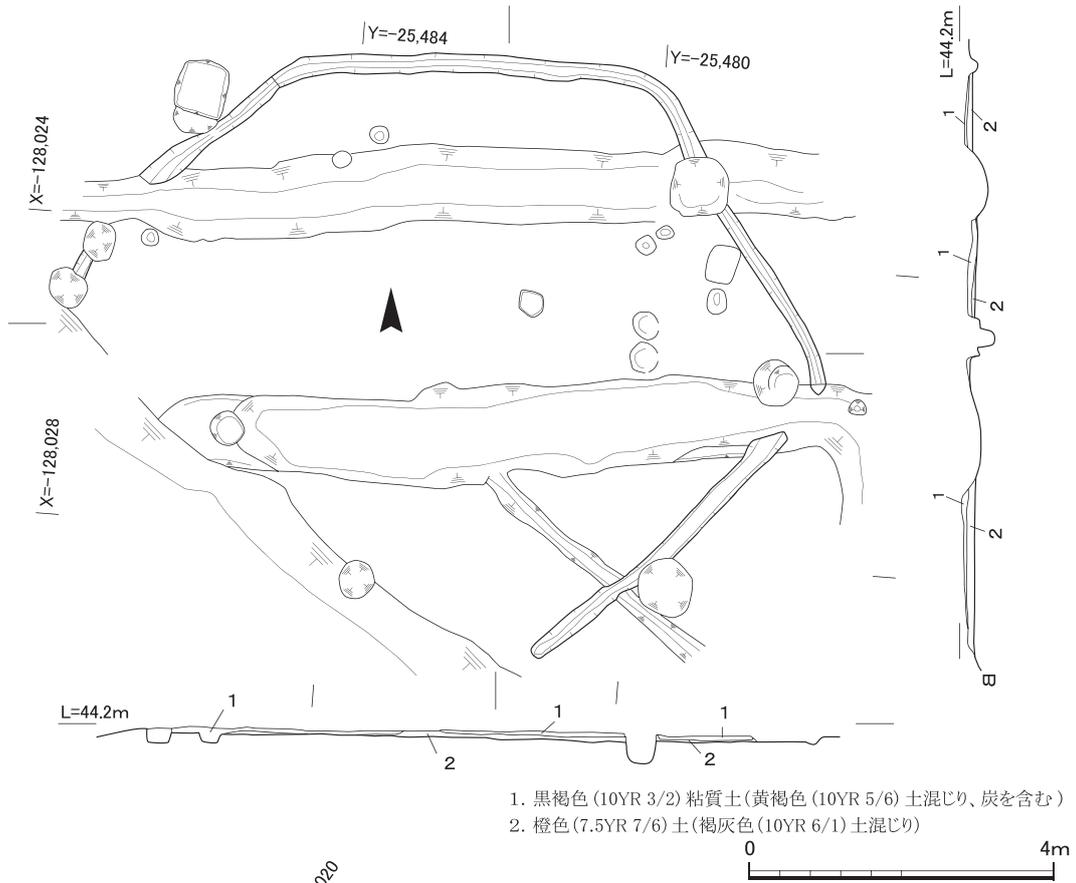
竪穴建物 S H3010 (第93図) 竪穴建物 S H3002の北西約8.0mで検出した住居跡である。平面形は五角形を呈し、一辺4.5~6.0m、南北8.0m、東西8.0m、深さ0.1mである。周壁溝は幅0.2m、深さ0.35mである。支柱穴は5基検出しており、住居の形態に合わせて支柱穴も五角形に配されている。柱間距離は3.0~3.5mである。長軸0.8m、短軸0.5mを測る楕円形の中央土坑も検出した。遺物は、甕もしくは壺の底部が出土した(第99図440・441)。

竪穴建物 S H3008 (第94図上) 調査地中央部で検出した。周壁溝と思われる小規模な溝を検出したに留まる。ゆるく「く」字状に屈曲することから竪穴建物の周壁溝と判断した。幅0.2~0.5mで、深さは0.05m未満である。遺物は出土しなかった。

竪穴建物 S H3011 (第94図下) 竪穴建物 S H3008の東約20.0mに位置する。周壁溝の一部のみが遺存していた。周壁溝は直線的に掘削されており、検出長6.2mである。深さは0.2mである。遺物は出土しなかった。

竪穴建物 S H3009 (第95図) 竪穴建物 S H3008の北東約8.0mで検出した。南半分は削平を受けており検出できなかった。深さは0.3mを測る。周壁溝を3条検出しており、複数回の建て替えが行われたと考える。支柱穴と思われる柱穴を4基確認できたが、検出位置から本来もう少しあったと思われる。また、直径0.7mの中央土坑も検出した。遺物として甕の底部、鉢、器台の筒部などが出土した(第99図445~448)。

竪穴建物 S H3006 (第96図上) 調査地西端で検出した。平面形は正方形を呈し、一辺4.5mである。周壁溝は幅0.3m、深さ0.2mである。南西隅から溝が1条掘られており、丘陵の裾に向かっていることから排水溝と判断した。検出長は約3.0mで、それ以降は調査地外となり、検出できなかった。柱穴は、南壁に平行に2基検出しており、4本の支柱穴で構成されたと推定される。柱間の距離は約2.8mである。遺物として壺の底部や高杯の杯部などが出土した(第99図449・450)。

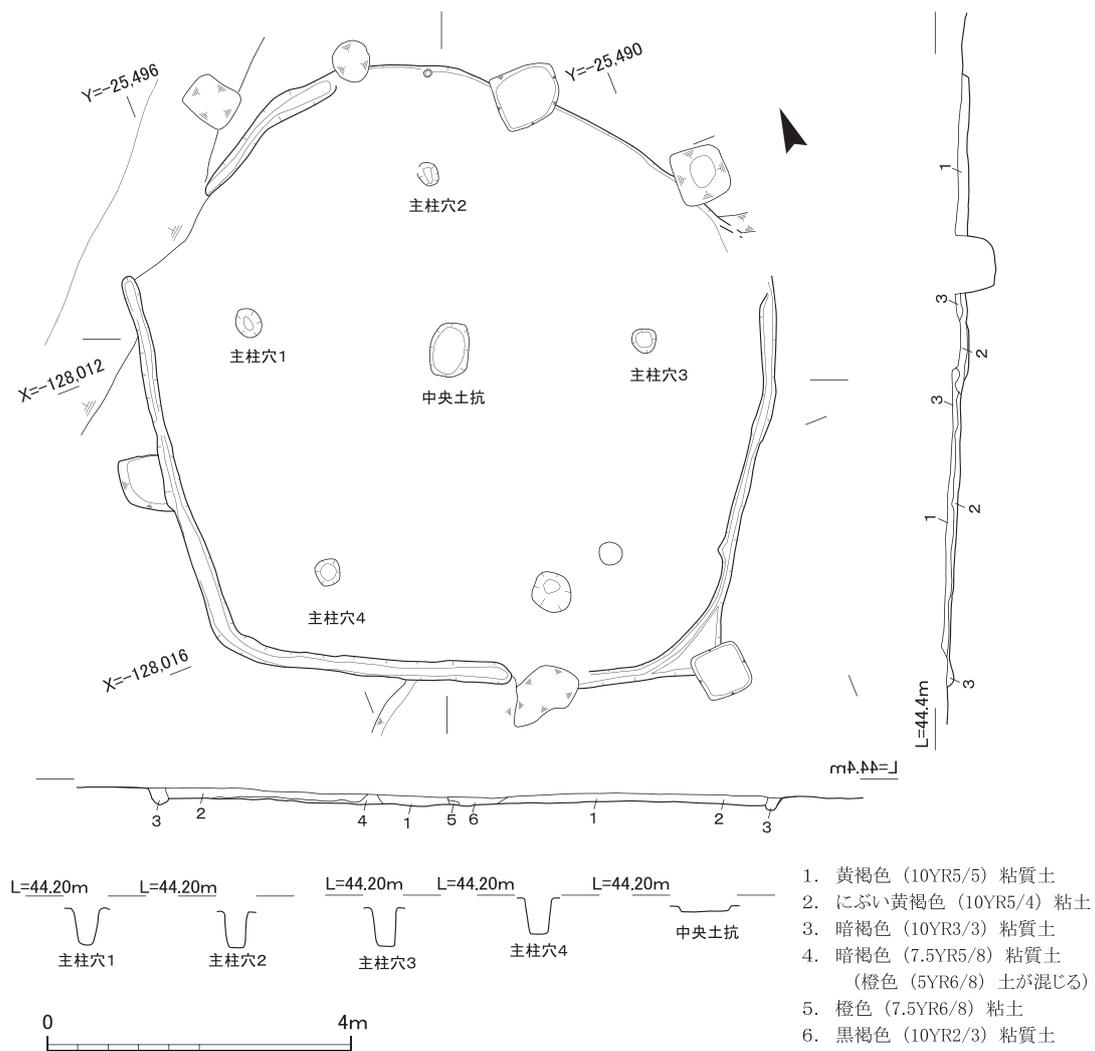


第92図 竪穴建物 S H3002・3003実測図(1/100)

竪穴建物 S H3015 (第97図) 調査地の西端で検出した。周壁溝の一部と、排水溝と推測される溝を検出した。周壁溝は境界溝の削平や攪乱によって部分的な検出に留まっている。検出長は、北東部が4.5m、南東部が6.0mである。ゆるく弧を描くように掘削されている。排水溝は検出長3.0m、深さ0.4mである。遺物は、床面から壺や甕、鉢などが、排水溝から鉢がそれぞれ出土した(第44図451~460)。

竪穴建物 S H3014 (第98図上) 竪穴建物 S H3015の南西15.5mで検出した。周壁溝の一部のみが遺存していた。周壁溝はゆるく弧を描くように掘削されており、検出長5.8m、深さ0.2mである。遺物として高杯の脚部が出土した(第99図472)。

竪穴建物 S H3016 (第98図下) 調査地南部で検出した。竪穴建物 S H3017と重複していた。平面形は円形を呈する。遺構の南半部は礎石・掘立柱併用建物 S B2020の造営に伴って削平されており、検出できなかった。周壁溝は幅0.4m、深さ0.15m前後である。主柱穴は、住居北西側に柱穴3基確認しており、4基の柱穴で構成されていたとみられる。また、周壁溝の東側から排水溝を検出した。検出長3.0m、深さ0.2mである。遺物として甕の口縁部が出土した(第100図471)。



第93図 竪穴建物 S H3010実測図(1/100)

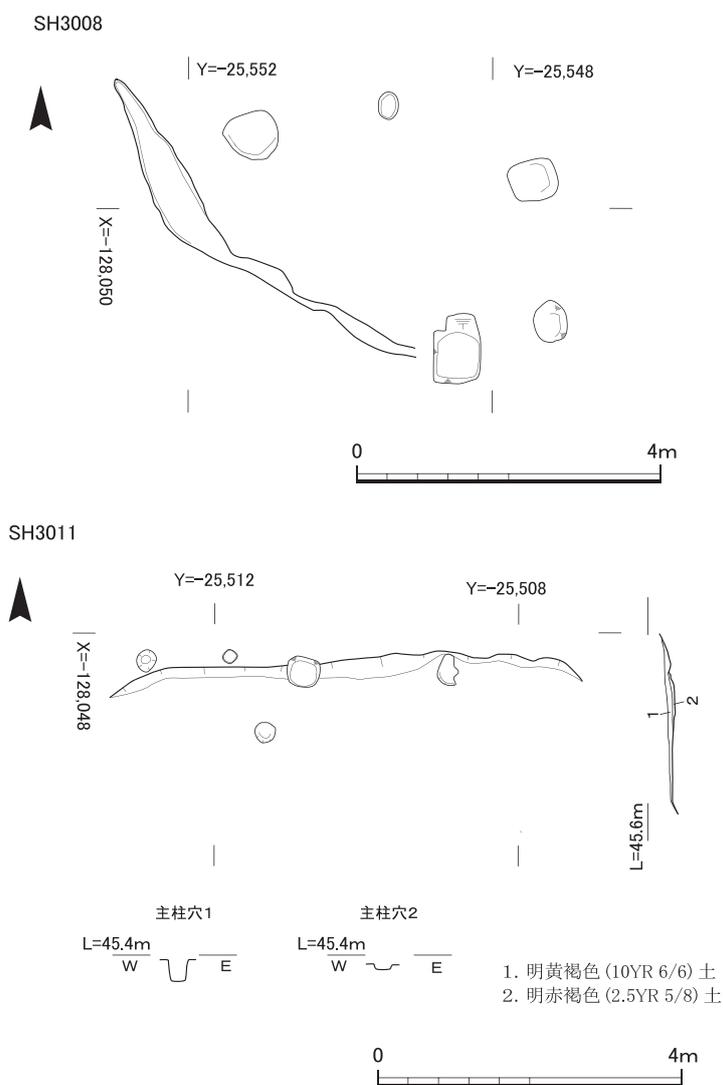
竪穴建物 S H 3017 (第98図下) 竪穴建物 S H 3016と重複して検出した。平面形は円形を呈する。S H 3016と同様に、遺構の南半部は礎石・掘立柱併用建物 S B 2020に伴う区画 S X 097の造営によって削平されていた。主柱穴は、いくつか検出しており、4基で構成されていたとみられる。周壁溝は2条検出しており、建て替えと思われる。幅0.3m、深さ0.1m前後である。遺物として甕の口縁部や高杯の脚柱部、鉢、甕、壺の底部などが出土した(第100図473~482)。

(山崎美輪)

(2) その他の遺構

溝 S D 3018 竪穴建物 S H 3003の北西側で検出した(V-d18・19, e19, f19区)。全長8.7m、幅0.25~0.35m、深さ0.1~0.15mである。竪穴建物に伴う排水溝の可能性を考えたが、対応する竪穴建物を確認することができなかった。弥生土器の底部などが出土した(第99図439)。

土坑 S K 432 区画溝 S D 090-4の東側で検出した(VIII-n17区)。平面形は、やや不整形な楕円形状を呈する。長軸2.2m、短軸1.3m、深さ0.17mである。埋土は明褐色粘質土である。最上層に



第94図 竪穴建物 S H 3008・3011実測図

は瓦片もみられたが、埋土からは弥生土器のみが出土したので、弥生時代の遺構と判断した。弥生土器広口壺や器台、有孔鉢、底部などが出土した(第99図461～466)。

土坑 S K 209 土坑 S K 143の東側で検出した(VIII-x9・y9区)。平面形はやや不整形な円形を呈する。南北2.7m、東西3.0m、深さ0.18mである。埋土は上層がにぶい黄褐色粘質土、下層が明黄褐色粘質土である。弥生土器片が出土した。

(筒井崇史)

2) 出土遺物

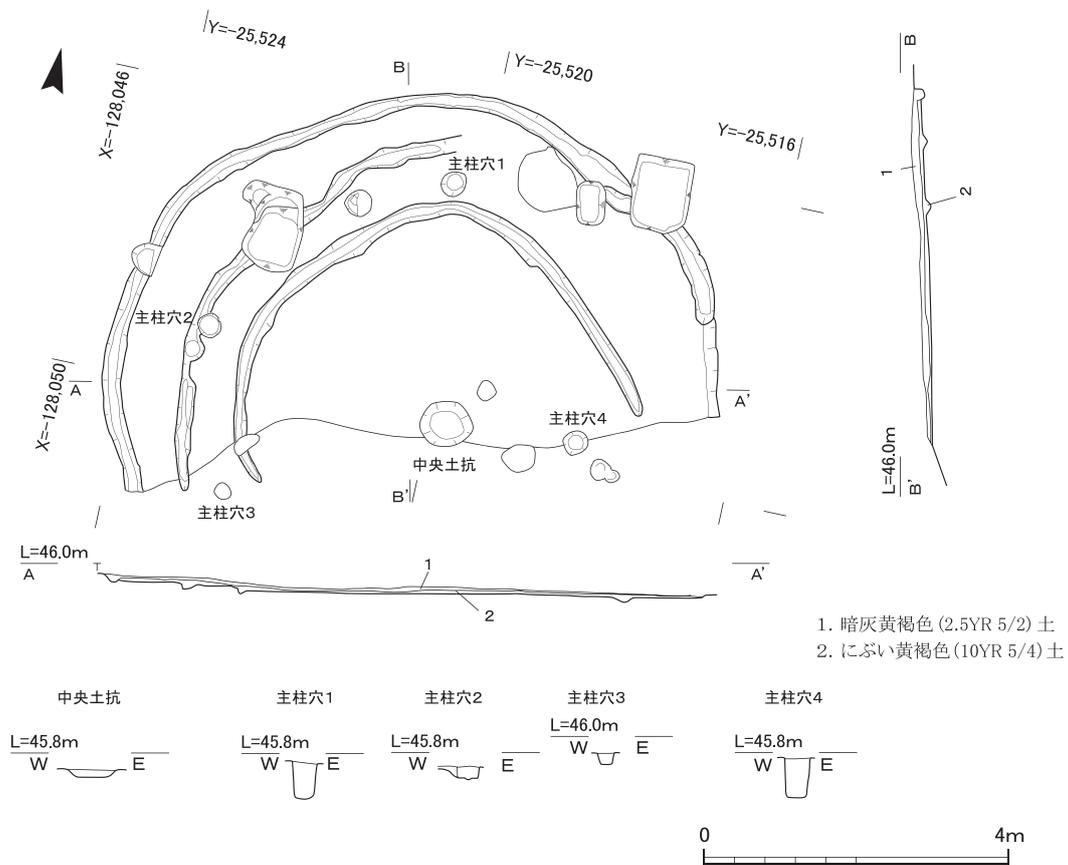
竪穴建物 S H 3002出土土器(第99図436・437) 436は甕の口縁部である。口縁部外面にヘラ状工具による刺突文を施す。口径15.6cm、残存高2.3cmである。437は広口壺などの頸部で、肩部から頸部への立ち上がりには突帯を1条めぐらす。外面には縦方向のミガキを施す。

竪穴建物 S H 3003出土土器(第99図438) 438は甕の口縁部である。端部を欠損するが、つまみ上げるようである。

溝 S D 3018出土土器(第99図439) 439は鉢の脚台部と思われる。残存高2.6cmである。

竪穴建物 S H 3010出土土器(第99図440・441) 440・441は甕もしくは壺の底部である。

柱穴 S P 441出土土器(第99図442～444) 442は小型の甕と思われる。口径11.4cm、残存高5.0cmである。443は椀形を呈する鉢である。444は甕の底部である。

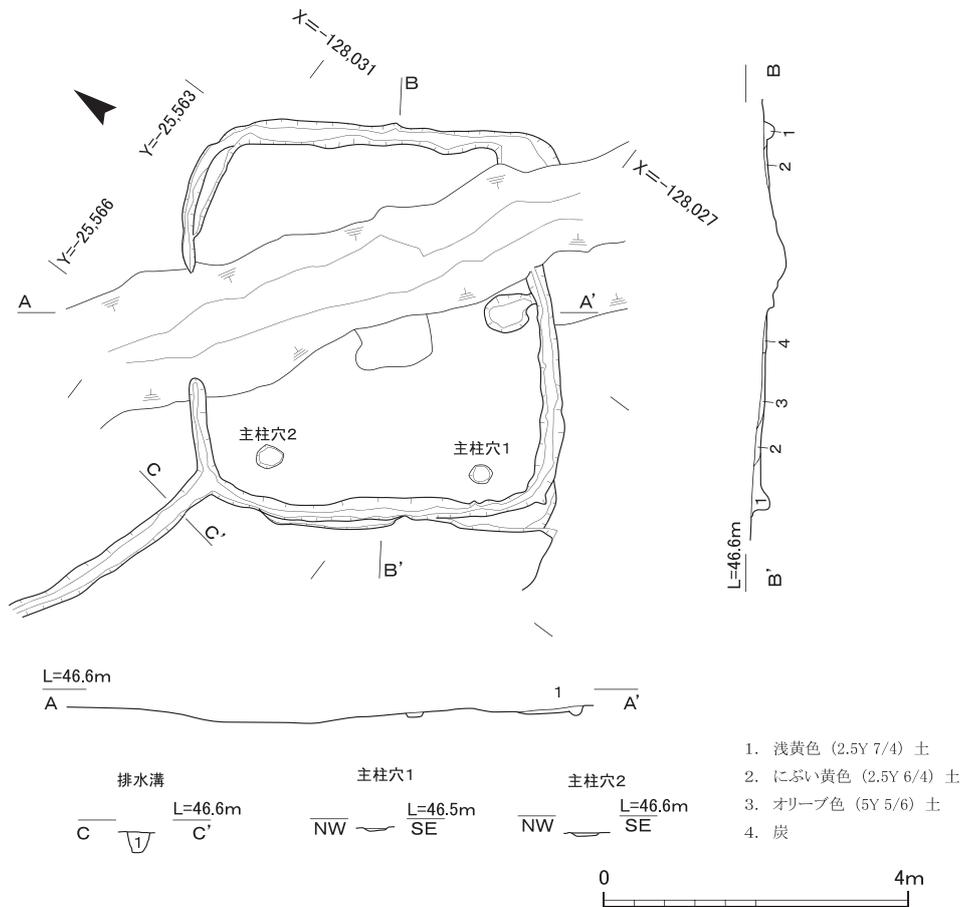


第95図 竪穴建物 S H 3009実測図(1/100)

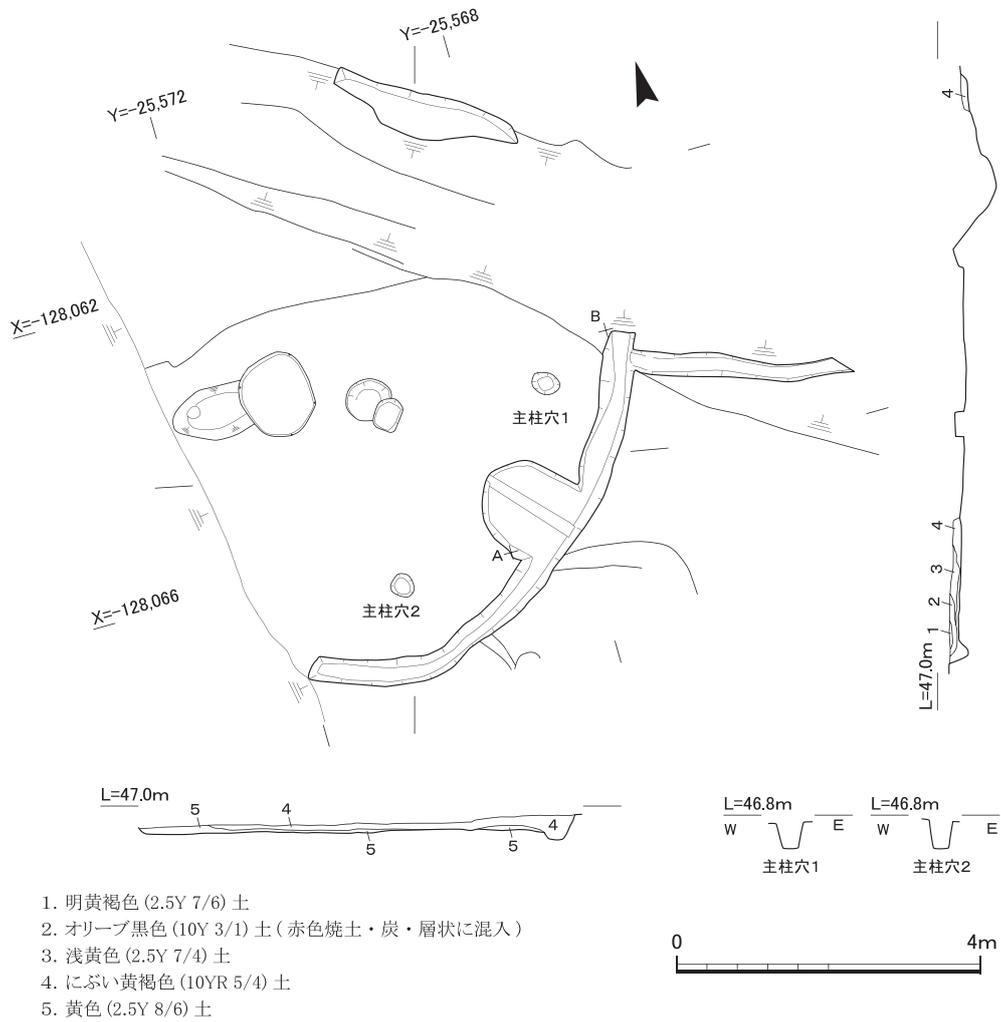
竪穴建物 S H3009出土土器(第99図444~447) 444・445は甕もしくは壺の底部である。447は鉢である。内湾気味に立ち上がる体部に、頸部で強く屈曲して外反する口縁部を有する。推定口径23cm以上の大型の鉢と推測する。口縁部はヨコナデ、体部は内外面ともミガキを施す。448は器台の筒部から脚部にかけての破片である。外面にミガキを施す。

竪穴建物 S H3015出土土器(第99図452~460) 452は櫛描き沈線4条、列点文を施す近江系壺である。453~456は壺もしくは甕の底部である壺もしくは甕の底部である。456の外面にはタタキを施す。457はいわゆる近江系の鉢である。口縁部外面に列点文、肩部から体部の外面にかけては櫛描直線文4条、列点文、櫛描直線文5条、櫛描波状文4条を施す。体部下半にはハケを施す。458は大型の鉢である。口径28.2cm、残存高12.0cmである。内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。459は近江系の鉢、もしくは手焙り形土器の体部最大径付近の破片と思われる。最大径付近には突帯が1条めぐる。460は甕である。口縁部は「く」字状呈し、体部中位付近に最大径がある。底部は突出底である。口縁部内外面にヨコナデを施し、体部外面にはタタキの後、ハケを施す。体部内面にハケを施す。口径16.2cm、器高27.4cmである。

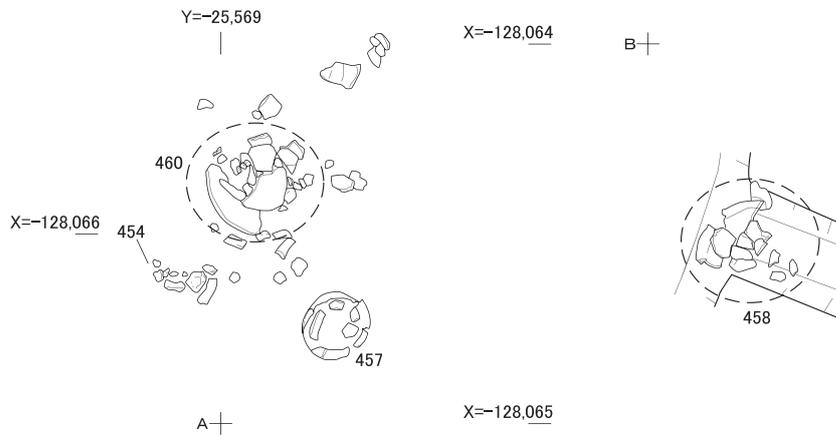
土坑 S K 432出土土器(第99図461~466) 461は広口壺の口縁部である口縁部外面に擬凹線文を施す。462・463は甕もしくは鉢の底部である。463の外面に木の葉状の圧痕が残る。464・465



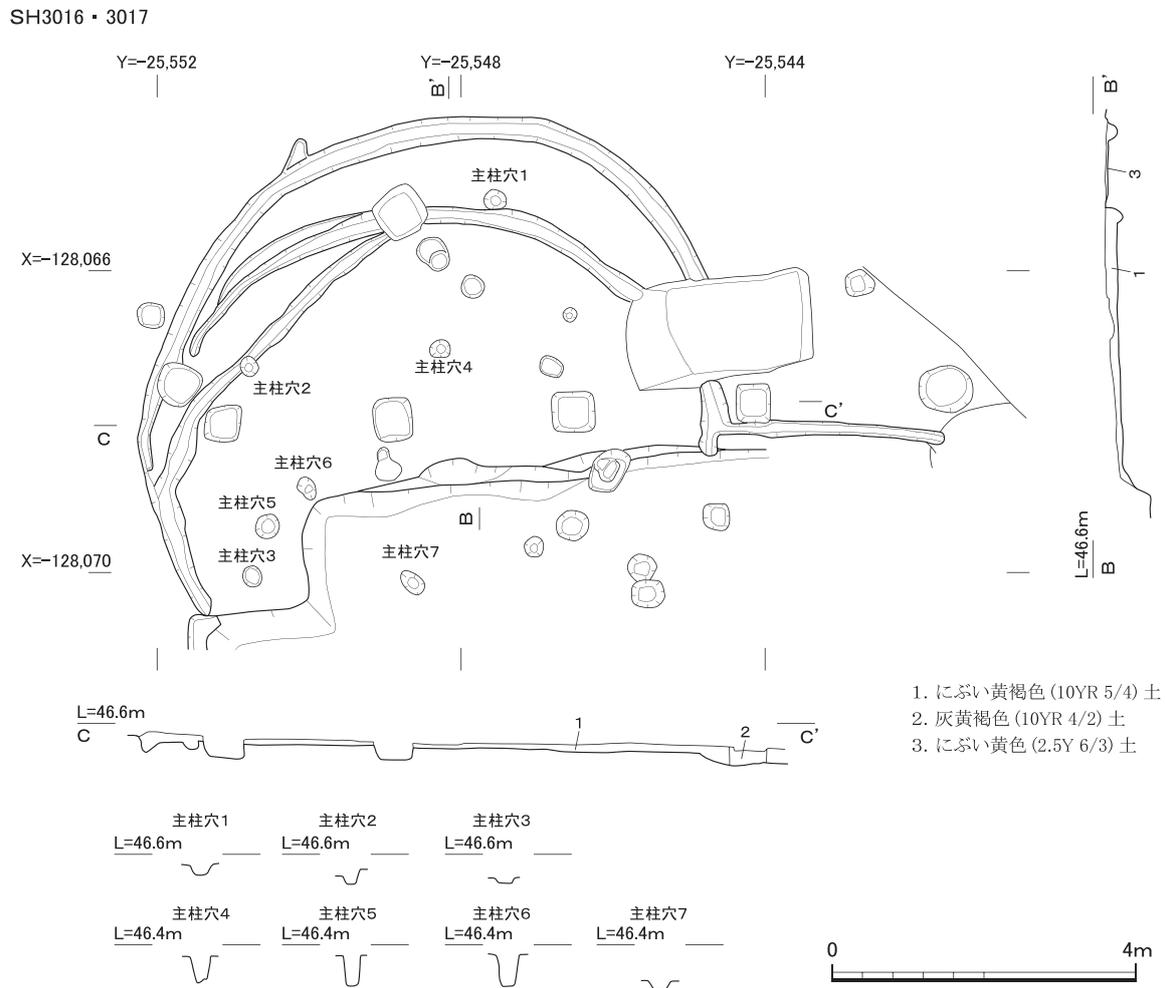
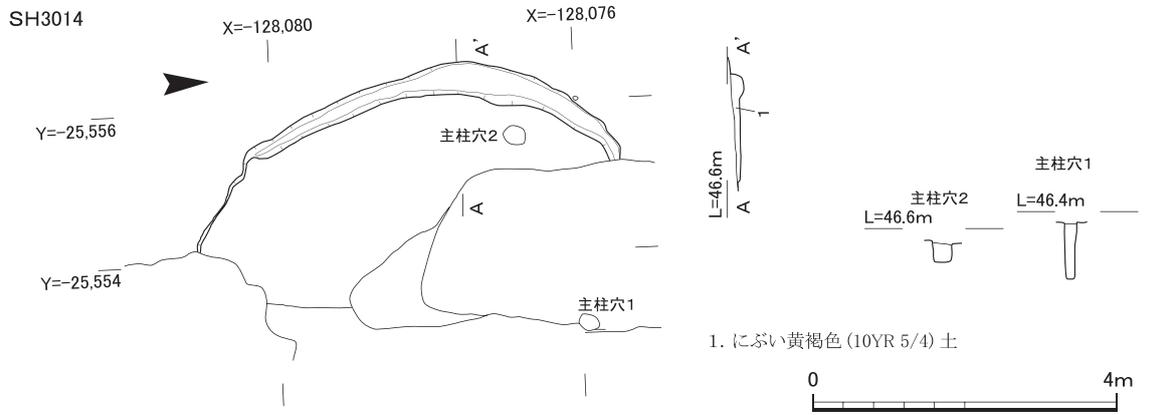
第96図 竪穴建物 S H3006実測図(1/100)



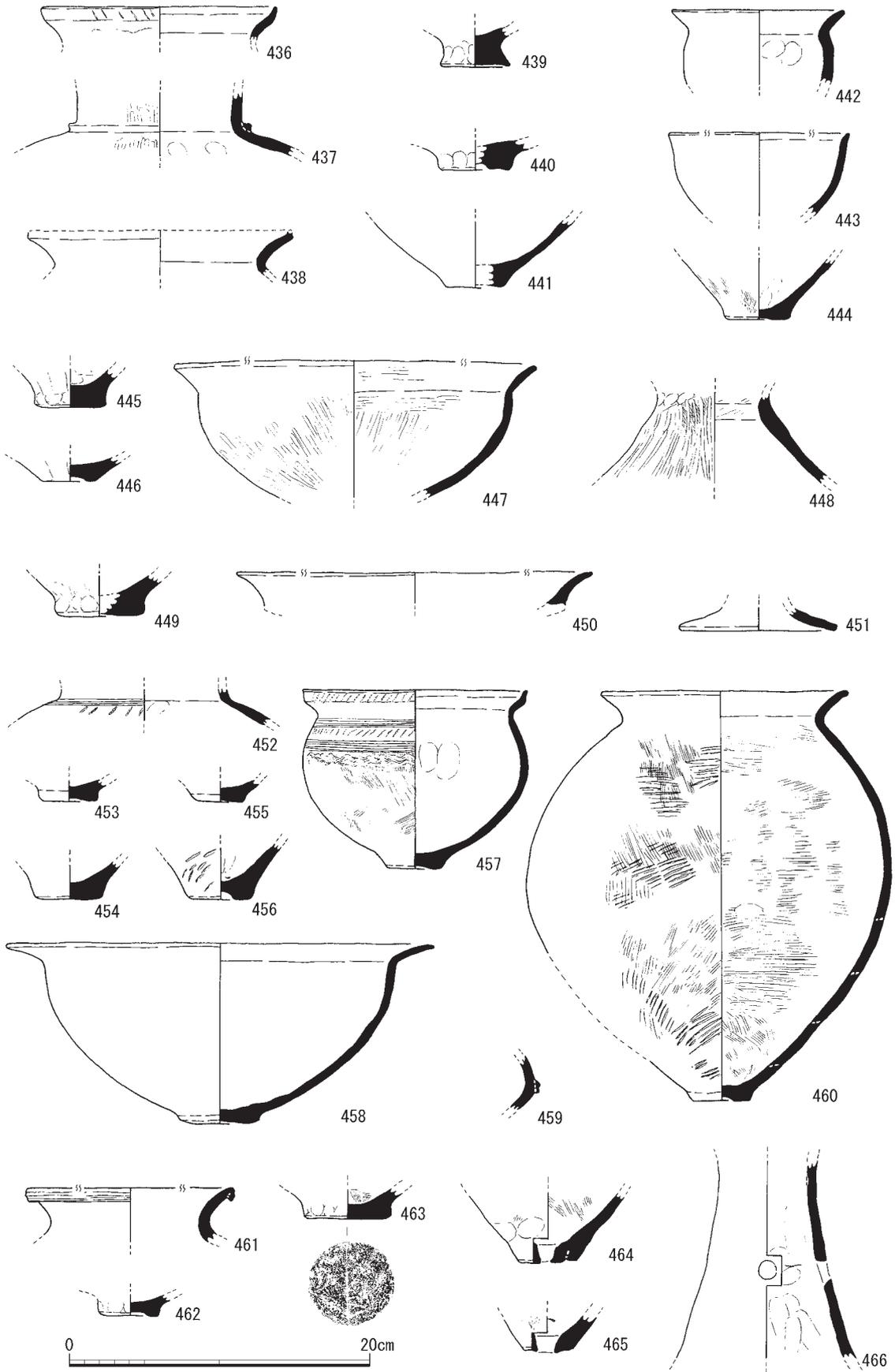
1. 明黄褐色 (2.5Y 7/6) 土
2. オリーブ黒色 (10Y 3/1) 土 (赤色焼土・炭・層状に混入)
3. 浅黄色 (2.5Y 7/4) 土
4. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 土
5. 黄色 (2.5Y 8/6) 土



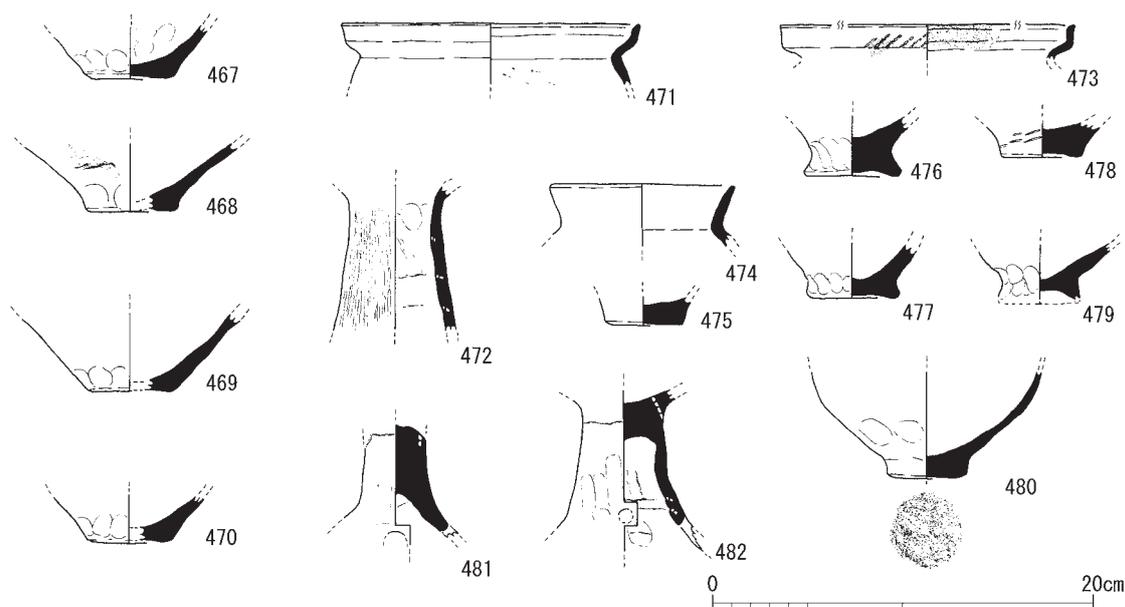
第97図 竪穴建物 S H3015実測図(1/100)



第98図 竪穴建物 S H3014・3016・3017実測図(1/100)



第99図 弥生土器実測図1 (1/4)



第100図 弥生土器実測図2 (1/4)

は有孔鉢の底部である。466は器台の筒部である。内外面ともナデを施し、筒部中位に円形の透かし孔がある。

柱穴 S P 445出土土器(第100図467・468) 467・468は甕の底部である。468の外面には煤が付着する。

柱穴 S P 3020出土土器(第100図469) 469は甕の底部である。

柱穴 S P 3021出土土器(第100図470) 470も甕の底部である。

竪穴建物 S H 3014出土土器(第100図472) 472は高杯の脚部である。外面に細かなミガキを施す。

竪穴建物 S H 3016出土土器(第100図471) 471は受け口状口縁を呈する甕である。

竪穴建物 S H 3017出土土器(第100図473～482) 473は受け口状口縁を呈する甕である。外面に刺突文を施す、いわゆる近江系の甕である。474は小型の甕であろうか。475は壺であろうか。476・477・479・480は鉢の底部であろう。480は平底で、底部外面に木の葉状の圧痕がみられ、その他の底部は脚台状を呈する。478は甕の底部で、外面にタタキを施す。481・482は高杯脚柱部である。ともに円形の透かし穴がある。481は脚柱上部が中実である。482は脚柱部内面に粘土紐接合痕とシボリ痕跡が認められる。

(山崎美輪・筒井崇史)

6. 遺構と遺物の検討

1) 礎石・掘立柱併用建物 S B 2020について

礎石・掘立柱併用建物 S B 2020は、当初、柱間寸法7mの柱穴列を複数検出し、前後の柱穴列は3.5mずれて、千鳥に配置されるような状況を確認した。この段階では柱穴が規則正しく配置されているため、宝幢遺構の可能性も考えたが、寺院内での位置や規則性、規模などが必ずしも宝幢遺構とは言えないという意見を^(注11)得た。一方、これらの柱穴群を建物として復元する場合、7mを測る柱間の中間の地点に、礎石を配する以外に柱を建てる方法がないという意見が提示され^(注12)た。この意見を受けて、さらに調査を進めると、遺構検出面が良好に残存する北西部で、礎石を据えるための穴を確認した(礎石据え付け穴 S P 290・294・144)。このため、7mの柱間寸法の中間には礎石据え付け穴が存在していたが、その後の地形の改変により、削平されたものと判断した。

S B 2020の復元 S B 2020は南北に1間ずつの廂を持つ東西棟の建物であるが、東端部が調査対象地外に位置するため、正確な規模は不明である。S B 2020の東側に当たる第6次調査地では建物として復元できなかったが、複数の柱穴が検出されている。これらの検出面は標高43.3～43.5mで、最も高い位置で検出されたS B 2020の礎石据え付け穴 S P 290の検出面(標高45.9m、柱穴底面の標高44.6m)よりもさらに2.5mも低い。したがって、S B 2020と第6次調査検出の柱穴群との間には2m以上の段差があり、寺院内が雛壇状に造成されていた可能性を示す。

もし、美濃山廃寺の内部が雛壇状に造成されていたすれば、S B 2020の桁行の規模もある程度予想できる。まず、東側の余地から7間、もしくは8間の可能性があるが、9間以上は上記の雛壇の想定から困難と考えられる。また、柱穴と礎石が交互に配列され、柱穴と礎石の配置が左右対称であるとする、8間が妥当である。そして桁行8間であるとする、調査対象地外には北東角の柱穴や東側の妻柱などが残存している可能性が高い。いずれにしても将来の調査の機会に委ねることにしたい。

礎石・掘立柱併用建物 S B 2020の性格 S B 2020については、礎石・掘立柱併用建物と推定される。掘立柱と礎石を併用する建物の例はいくつか知られているが、今回のように千鳥に配列されている例は確認されていない^(注13)。また、建物の構造については、上記で桁行8間の可能性を指摘した。このS B 2020の性格について述べてみたい。

S B 2020を桁行8間で復元した場合、その中軸線を南へのばすと、第6次調査B地区に想定される金堂相当施設推定地を通ることになる。さらに建物の構造や規模、位置を考慮すると、講堂である可能性が高いと考えられる。古代寺院で、桁行8間の平面形式となると、奈良県飛鳥寺や山田寺、大阪市四天王寺、宮城県多賀城廃寺などに類例がある^(注14)。また、朝鮮半島では統一新羅時代の感恩寺や仏国寺の講堂も桁行8間であり、第6次調査報告140～142頁で指摘しているように、ひさご形土製品等と同様に新羅からの影響の可能性もある^(注15)。

(筒井崇史)

2)美濃山廃寺の遺構の変遷について

(1)分析の視点

美濃山廃寺で検出した遺構の変遷については、瓦類や土器類の出土状況に、掘立柱建物群の方位などを加味して検討した。瓦類の検討と分析については、第6次調査報告132～138頁を参照されたい。土器類については、奈良文化財研究所による飛鳥・藤原地域と平城宮における土器編年^(注16)を参照して年代を推定している。ただし、両地域とも政治的中心地であり、在地の土器編年には各地域の様相が反映されるという点にも留意しておきたい。

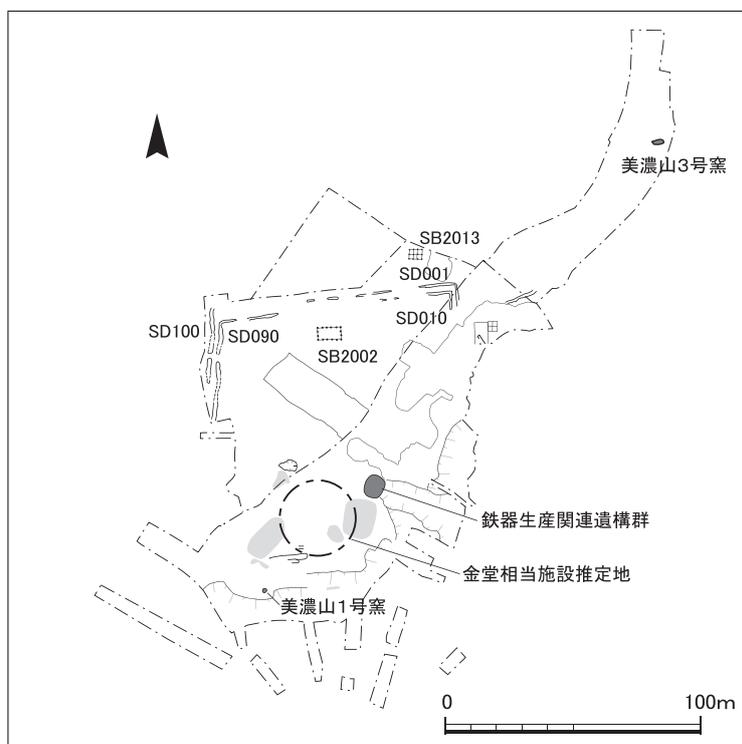
美濃山廃寺では、区画溝が大きく西に振っているほか、建物の方位も一致しないものが多く、大きなまとまりを捉えにくい。その上、各柱穴から出土している土器を検討すると、かならずしも同一方位のものが同時期とは言えないような状況である。そこで、柱穴から土器が出土し、建物の時期が決定できる場合には、そちらを時期の根拠とした。なお、建物群については、建物の方位と出土土器から大きく6グループ(A群～F群)に分けた。

また、遺構の構造的特徴としては、側柱建物において、梁行3間のものと梁行2間のもの^(注17)があり、構造的には前者が古い様相を示しているという。美濃山廃寺においても個別に側柱建物の出土遺物を検討すると、おおむね前者から後者への移行が読み取れる。この点から梁行3間の建物は相対的に古い時期のものと考えることができると判断した。

(2)時期区分について

以上のような諸点をふまえて遺構の変遷について検討を加えた結果、大きく4時期に分けることができる(第Ⅰ～Ⅳ期)。第Ⅱ・Ⅲ期についてはさらにそれぞれ2小期に分けることが可能である。以下、各時期の概要について、遺構を中心に見ていくことにする。

①第Ⅰ期(7世紀後半～8世紀初頭、第101図) 第3～5次調査や今回の第6・7次調査で検出した区画溝SD001・010・090・100は、この段階には掘削されていた可能性が高い。美濃山廃寺に関連する建物のうち、掘立柱建物SB2002と総柱建物SB2013の柱穴からは瓦類がまったく出土しない。両建物は第Ⅱ期に下がる可能性もあるが、他の建物の柱穴から多数の瓦類が出



第101図 美濃山廃寺第Ⅰ期主要遺構配置図

土する点をふまえると、美濃山廃寺の創建初期に造営されたために、瓦類が混入しなかったと考えられる。ただし、建物方位は座標北に対してそれぞれ西と東へ3°程度の振れがあって一致しない。このため当初は、方位に対する制約が弱かったと考えられる。

また、第6次調査の美濃山1号窯と鉄器生産関連遺構群、第9次調査の美濃山3号窯がある。これらは美濃山廃寺の創建に伴い、釘等の鉄製品や瓦類の生産を行っていたものと考えられる。

第6次調査地B地区では、第6次調査報告132～138頁で指摘したように、特定型式の軒瓦(軒丸Ⅰ・Ⅱ型式、軒平瓦Ⅰ・Ⅱ型式)と平瓦H-B類が集中して出土することから、この付近に美濃山廃寺の中心的な建物が造営されたと推定される(金堂相当施設推定地)。ただし、第6次調査B地区では建物や基壇等の痕跡を確認することはできなかった。

最後に、この時期の年代についてみることにする。まず、鉄器生産関連遺構群周辺で出土している土器群がある(第6次調査報告第98図339～353)。美濃山廃寺の中では最も古く、上限を示すものである。出土土器の様相から7世紀後半に位置づけられる。これより後出土する資料が鉄器生産関連遺構群の上層や遺物包含層等から出土している(第6次調査報告第96図290～第97図322)。出土土器の様相から7世紀末から8世紀初頭に位置づけられる。これに対応する瓦類として、軒丸瓦Ⅰa・Ⅰb、Ⅱa・Ⅱbの各型式、軒平瓦Ⅰa・Ⅰb、Ⅱの各型式、丸瓦M-A類、平瓦H-B類がある。また、平瓦H-A類は断定できないが、第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけて用いられた可能性がある。

なお、第Ⅰ期については、出土している土器資料を見るとやや時間幅があり、軒丸瓦もⅠ型式とⅡ型式とでは若干の時間差が存在する可能性があるため、今後、2小期に細分することができるかもしれない。しかし、遺構の分布状況から第Ⅰ期は、7世紀後半から8世紀初頭に属し、美濃山廃寺の「創建期」と考えたい。

②第Ⅱ期 調査地の北半部を中心に掘立柱建物の増える段階である。遺構から1枚作りの瓦が出土するか否かで、2小期に分けた。

第Ⅱ-1期(8世紀前半、第102図上) 建物の方位の点では大きく2グループに分けられるが、出土している遺物から時期差は認められない。まずA群として、北に対して大きく東に振る(17～22°)一群があり、第6次調査の掘立柱建物S B 055・475がそれに当たる。これは丘陵の地形に制約されたためであろう。S B 475に近接する溝S D 039もおおむね同方位で、同時期の可能性が高い。S D 039では大量の遺物が出土しており、なかでも土師器杯B(第6次調査報告第88図142)は1点のみの確認であるが、内面に二段放射暗文を伴い、奈良時代前半ごろの特徴をもつものである。第Ⅱ期の年代を考える上で重要な資料である。

次にB群として、北に対して西に少し振る(7°)建物群がある。この段階に位置づけられるのは第7次調査の掘立柱建物S B 2012のみである。また、近接して検出した土坑S K 352もこの段階に位置づけられる。S B 2012の各柱穴やS K 352からは大量の土器が出土している。なお、S B 2012は西側に廂を持つ建物として復元したが、廂と区画溝S D 001が重複するため、この段階で、人為的にS D 001は埋められていた可能性が高い。区画溝S D 010の埋没時期は特定できないが、

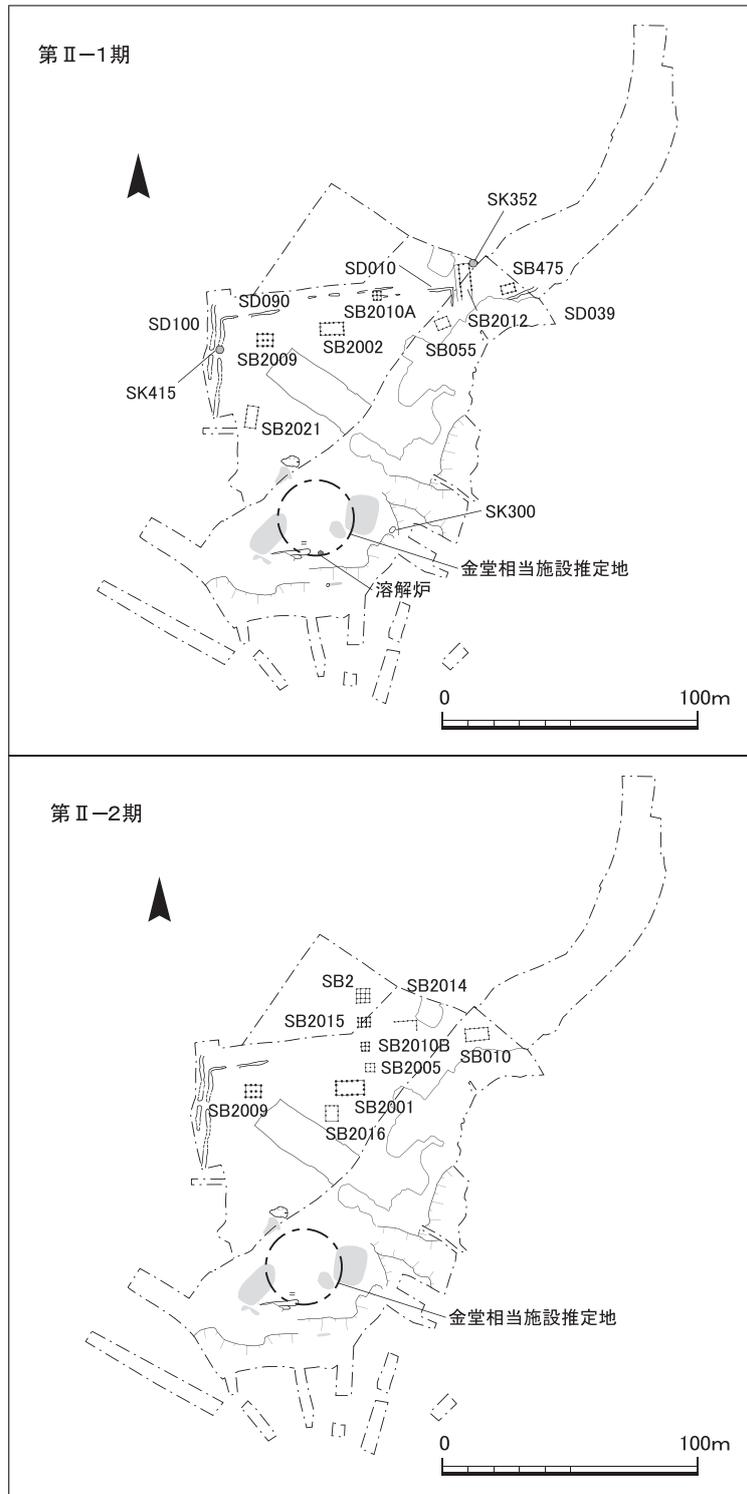
S D001と同時か、掘立柱建物S B2011が造営される第Ⅱ-1期までであったと考える。

また、第8次調査では、弥生時代後期の竪穴建物の埋没過程で生じた凹地の最上層から美濃山廃寺の第Ⅰ～Ⅱ期の土器が出土している。^(注18)これらは掘立柱建物の整備に伴い、区画溝よりも北側に存在した凹地を整地した時期を示す遺物と理解している。

さらに、この時期に位置づけられる遺構として、第6次調査の溶解炉S L 1と落ち込みS X20がある。S L 1は大きく破壊されていることから時期は判断しにくいですが、青銅素材の溶解炉ということで、寺院の造営や整備に伴う鋳造品の製作を行っていたと推定される。溶解炉内に廃棄された瓦類は、軒丸瓦Ⅰ型式や平瓦H-A類が多く、平瓦H-D類はまったくみられない。土器類もS D039などで出土しているものと同型式の須恵器杯B蓋(第6次調査報告第101図438)が出土していることから、おおむねこの時期と判断される。これらの遺構の検出状況から、美濃山廃寺の北半部を中心に掘立柱建物群が整備された時期と考えられる。

このほか、注目される遺構として、第6次調査の土坑S K300、第7次調査の土坑S K415がある。両遺構からは覆鉢形土製品と平瓦H-A類やH-B類が共伴して出土しており、覆鉢形土製品が第Ⅱ-1期に位置づけられることを示している。

さて、第Ⅱ-1期の年代を示す資料としては、第6次調



第102図 美濃山廃寺第Ⅱ期主要遺構配置図

査地北部や第7調査地北東部で出土した土器群がある。同地点で出土した土師器には都城で出土する杯Aや杯Bと同形態のものがあり、内面に暗文を施すものが多い(第6次調査報告第88図141・142、第7次調査報告第76図123・126・127・139・140、第78図181～191など)。都城での暗文の変遷をふまえると、一段斜放射暗文のものが多いことから、8世紀前半の年代を与えることができる。

第Ⅱ-2期(8世紀中頃、第102図下) 1枚作りである平瓦H-D類が含まれる点で第Ⅱ-1期よりも新しく位置づけられる。また、遺物の出土傾向としては瓦類を柱穴内に大量に含む点が挙げられる。

建物の方位の点では大きく、北に対して西に2°程度振るグループ(C群)と同じく5°程度振るグループ(D群)に分けられる。C群は、第Ⅰ期のS B 2002のあり方を踏襲する一群である。C群の建物としては第7次調査の掘立柱建物S B 2001・S B 2005・S B 2016、総柱建物S B 2009・S B 2010B・S B 2015、第8次調査の掘立柱建物S B 2などが該当する。

S B 2001は、S B 2002と同様の構造(桁行5間、梁行3間)を呈するが、規模が一回り大きくなっており、両者の間に切り合い関係がないものの、近接して検出したことから、S B 2002からS B 2001への建て替えを想定したい。また、遺構の性格あるいは機能面については、構造や位置がほぼ同じであることから、大きく変化したとは考えにくい。S B 2016は桁行3間に復元されており、その点でS B 2001と同じである。S B 2016はS B 2001の前面にある建物で、何らかの関連性があると思われる。S B 2005は小規模な2間四方の建物で、その性格は不明である。

総柱建物のうち、S B 2009は規模の点からも美濃山廃寺における立地の点からも、その特殊性は明らかであり、北部で検出したS B 2010・S B 2015などとは大きく異なった性格が考えられる。一方、区画溝S D 090では大量の平瓦H-A1類が投棄されているが、近くに建物等が存在しないため、いずれの建物に伴うものか不明である。ただし、S B 2009の東西の雨落ち溝と推定されるS D 355・656や、南側に広がる攪乱S X 5015では、多数のH-A1類が集中して出土しているため、S B 2009にH-A1類が用いられていた可能性が高い。この想定が正しければ、S D 090の埋没とS B 2009の廃絶は同時期である可能性が高い。S D 090やS D 100では、埋土に平瓦H-D類と断定できるものがごくわずかしみられないことから、区画溝の廃絶は第Ⅲ期まで下らない可能性が高く、第Ⅱ-2期末までに埋没していたと考える。

残る3棟はS B 2001の北方におおむね東辺を揃えて建てられている。ただしS B 2010Bが2間四方、S B 2015・S B 2が3間四方であることから、造営に時期差があるのかもしれない。

次にD群の建物としては、第7次調査の掘立柱建物S B 2014と第6次調査の掘立柱建物S B 010がある。両建物は第Ⅱ-2期の遺構と考えているが、S B 2014は梁行が2間であることから第Ⅲ期まで下がる可能性がある。また、S B 010は梁行3間でS B 2002やS B 2001などと同じ特徴を持つが、出土遺物の点から第Ⅲ期に下がる可能性がある。したがって、両建物は第Ⅱ-2期から第Ⅲ期にかけての建物である可能性がある。

このほか、第Ⅰ期における寺域の区画施設として区画溝が認められたが、第Ⅱ期に区画溝よりも

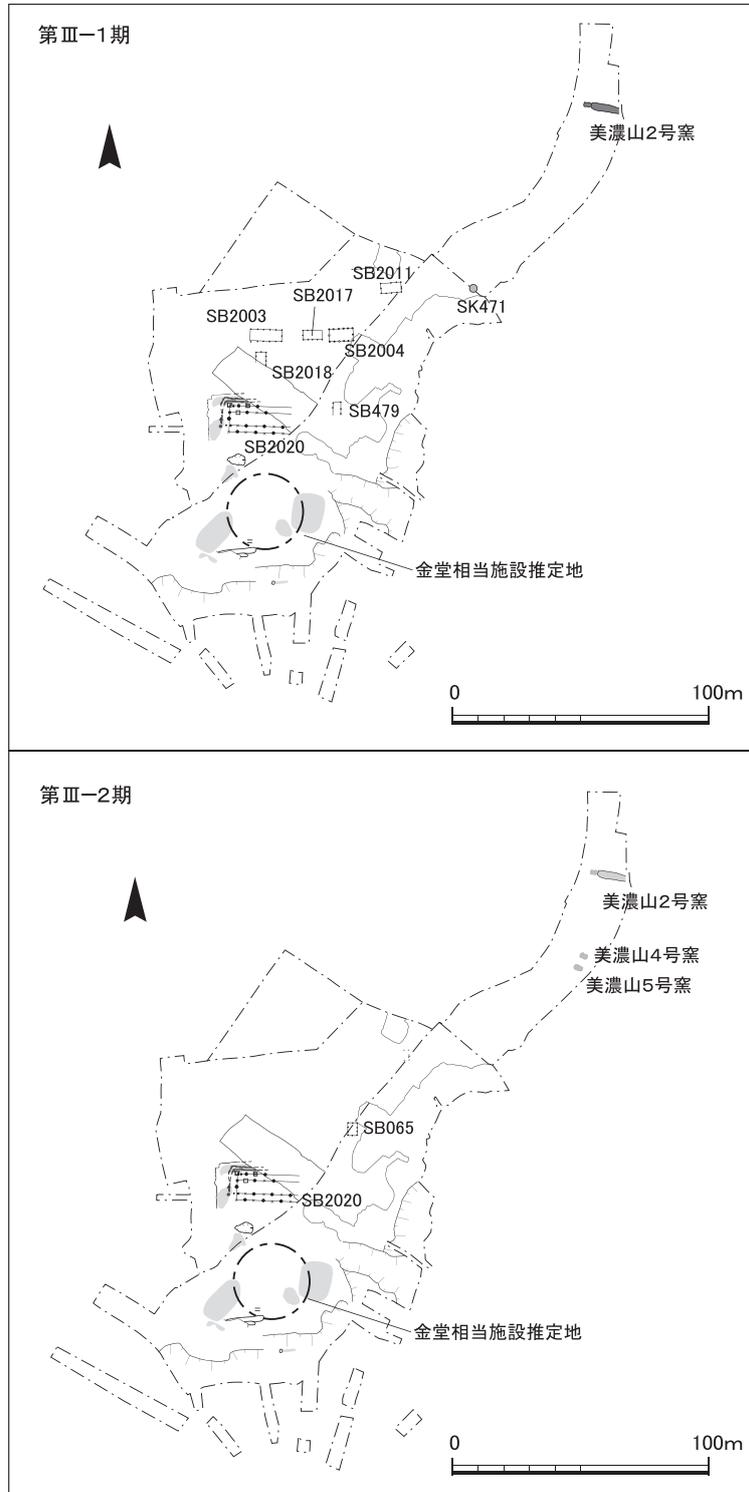
北側の範囲に掘立柱建物群が整備される過程で、これらの区画溝は順次埋め立てられていったと考えられる。区画溝が埋められたことによって、新たな遮蔽施設として第8次調査の北半部で検出された柵が整備されたものと思われる。

第Ⅱ-2期の出土土器は、第Ⅱ-1期よりもやや新しい年代を示しており、平瓦H-D類も新たに出現する。これらの遺構の検出状況などから、美濃山廃寺の北半部を中心に掘立柱建物群が引き続き整備された時期と考え、第Ⅱ期全体を「整備期」と考えたい。

③第Ⅲ期 調査地南部に大型の礎石・掘立柱併用建物であるS B2020が造営される段階である。S B2020に補修瓦が認められることから前後2小期に分けることができる。

第Ⅲ-1期(8世紀後半、第103図上) 礎石・掘立柱併用建物S B2020が造営されることをもって画期とすることができる。

これらと同時期に位置づけられる建物は、方位の点から大きく、北に対して東に2°程度振るグループ(E群)と、北に対して西に2°程度振るグループ(F群)に分けられる。E群は、S B2020のほか、第7次調査の掘立柱建物S B2003・S B2018などが該当する。S B2020とS B2003はともに、桁行の長さが確定しないが、前者を8間、後者を5間で復元すると、両者の推定中軸線はおおむね一致することから同時期の遺構と考える。F群は、第7次調査の掘立柱建物



第103図 美濃山廃寺第Ⅲ期主要遺構配置図

S B2004・S B2017などが該当する。S B2004は規模と立地の点で、掘立柱建物S B2001・2002を建て替えた建物である可能性が高い。それに伴う小規模な建物群としてS B2003・S B2017・S B2018が造営される。これらの建物群は、前段階の建物群に比べると、梁行が3間から2間に変化している点に注意される。また、第7次調査の掘立柱建物S B2011は第6次調査の掘立柱建物S B010の機能を引き継ぐ建物と考える。この他に北東部には多数の土器群が出土した土坑S K471がある。

以上のように、北東部と中央部の建物群は第Ⅱ期に整備された後、第Ⅲ期も引き続き、建て替え等によって建物の更新が行われていたと考える。しかし、西部の大型総柱建物S B2009は、この段階にはすでに廃絶していた可能性が高く、北部の総柱建物群もこの段階まで存続していたかどうか不明である。仮にこうした倉庫群が廃絶したとするならば、寺院そのものが継続しているにも関わらず、倉庫群が欠落してしまうことになる。どこかに代替地が成立した可能性もあろう。

軒瓦では、S B2020の周辺から出土する軒丸瓦はⅢ型式とⅧ型式に限られるが、前者が圧倒的に多く、S B2020造営当初の軒丸瓦、後者は修理時の補修瓦と推定される。

第6次調査地南部の金堂相当施設推定地周辺では、軒丸瓦Ⅳ・Ⅵ～Ⅷ型式が少量出土している。これらは第6次調査報告132～135頁で検討したように、金堂相当施設の補修瓦と考えている。このうち、第Ⅲ-1期に位置づけられるのは軒丸瓦Ⅳ・Ⅵ型式と推定している。

この時期の年代を示す資料として、第6次調査土坑S K470(第6次調査報告第93図215～240)、第7次調査区画S X097・099などで出土している土器群(第7次調査報告第84図282～第85図354)がある。第7次調査S X097・099では、灯火器として使用された土師器杯・皿類が多数出土しているが、時期を決定できるものは少ない。この時期を特徴づけるものとして須恵器の小型壺(平城宮土器の分類では壺M)の存在がある。S X097・099では掘削から埋没までかなりの時間が経過していると思われるが、出土している土器は、8世紀後半の年代を与えることができる。これに対応する瓦類として、軒丸瓦Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ型式、軒平瓦Ⅴ型式、丸瓦M-B類、平瓦H-D類がある。軒瓦は、軒丸瓦Ⅲ型式がS X097・099などで多数出土していることから、礎石・掘立柱併用建物S B2020がこの時期に造営されたものと考えられる。遺構の分布状況や瓦の出土状況から美濃山廃寺に新たな大型建物が造営された「拡充期」と考えたい。

第Ⅲ-2期(8世紀末～9世紀初頭、第103図下) 補修用と推定される軒丸瓦の存在から設定したものの、第Ⅲ-2期に位置づけられる建物は、礎石・掘立柱併用建物S B2020のほかには、第6次調査掘立柱建物S B065のみである。このことが美濃山廃寺がすでに衰退しつつあることを示しているのか、それとも第Ⅲ-1期に造営された建物群が存続しているのか、出土遺物からは明らかにできなかった。

S B2020に伴う補修瓦として、軒丸瓦Ⅷ型式をあげることができ、この段階にも引き続き、S B2020は存在したと考えられる。また、第6次調査地南部の金堂相当施設推定地周辺で出土した軒丸瓦のうち、第Ⅲ-2期に位置づけられるのは、軒丸瓦Ⅶ・Ⅷ型式と推定している。また、軒平瓦Ⅴ型式は、軒丸瓦Ⅷ型式と胎土や焼成、色調などが類似しており、組み合う可能性があるこ

とからこの段階のものと推定したい。その他の軒瓦は出土量が少なく、金堂相当施設やS B 2020の補修に伴う軒瓦であろう。補修瓦の1つである軒丸瓦Ⅶ型式は、検討したように8世紀末ごろの年代を与えることができ、これが第Ⅲ-2期の年代と考えることができる。

第Ⅲ-2期は、金堂相当施設やS B 2020が存在するものの、その他の建物群の数が著しく減少することから美濃山廃寺の「衰退期」と考えたい。

④第Ⅳ期 第7次調査区画S X 097・099や第6次調査瓦溜りS X 21では美濃山廃寺の廃絶時期を示す可能性のある遺物として、土師器の杯・皿類(多くは灯火器として使用)や瓦が出土している。これらは在地の土師器杯・皿類と考えられ、平安時代前期ごろと推定される。したがって、このころをもって美濃山廃寺は廃絶したものと考える。これ以降の土器資料はほとんど出土しておらず、近世になって大規模な開発が始まるまで、土地利用の実態は不明である。

以上の点から、第Ⅳ期は美濃山廃寺の「廃絶期」と考えたい。

(3)まとめ

以上、美濃山廃寺における検出遺構の変遷について、出土遺物や掘立柱建物の方位などから検討を加え、4期6区分の変遷を考えた。第6次調査報告46～51頁で報告したように、削平が著しく、実態を明らかにすることはできなかったが、第6次調査B地区に金堂相当施設を推定し、出土遺物からその造営が美濃山廃寺の創建期に位置づけられることを明らかにした。これを第Ⅰ期とした。第Ⅱ期は、2小期に分けたが、金堂相当施設推定地の北方で、多数の掘立柱建物の展開が確認できた。これらの性格については次項で検討するが、美濃山廃寺における諸施設の造営と整備と位置づけることができる。第Ⅲ期は、掘立柱建物群と金堂相当施設推定地の間に礎石・掘立柱建物S B 2020が造営された段階で、出土した2種類の軒丸瓦から2小期に分けることができた。この段階は金堂相当施設推定地とS B 2020の位置関係から、「仏地」の拡充期と位置づけることができる。第Ⅳ期は、美濃山廃寺の廃絶期に当たる。

(筒井崇史)

3)美濃山廃寺の景観について

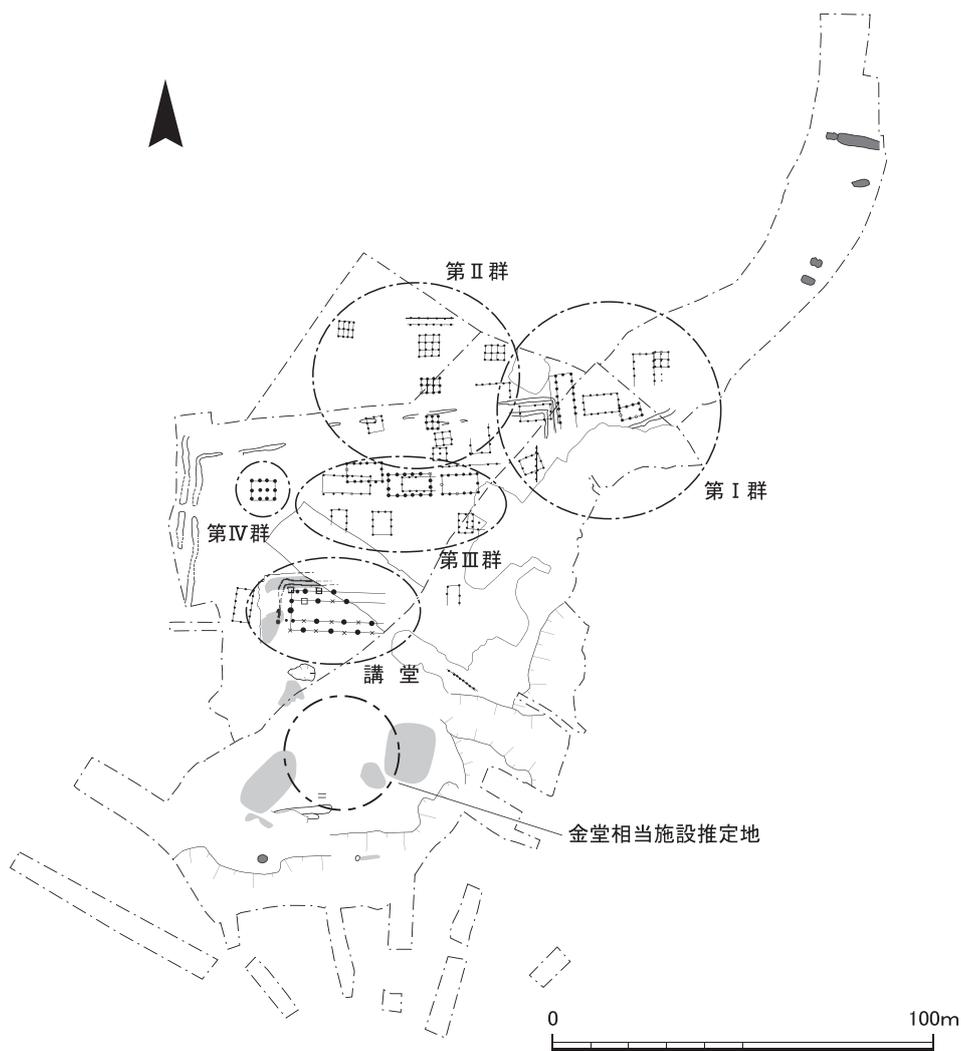
(1)はじめに

前項では美濃山廃寺第6・7次調査で検出した遺構が、建物の方位や切り合い、遺物の出土状況などから4期6区分に分かれることを示した。これにより、美濃山廃寺で寺院の中心施設が整うのは第Ⅱ～Ⅲ期ということが出来る。第6次調査地B地区には瓦類の出土状況から金堂相当施設の存在が想定でき、また、第7次調査地南部には講堂の可能性も考えられる礎石・掘立柱併用建物S B 2020が造営されていたと考えられる。これらをふまえて寺院景観を検討し、そこから復元できる美濃山廃寺の歴史的意義についてまとめてみたい。

さて、寺院の景観についてはこれまで数多くの先行研究がある。たとえば、三輪嘉六氏や坂詰秀一氏は主要伽藍以外の施設も視野に入れた研究の重要性を説いた。^(注19)特に坂詰氏は、古代インドの例を参照して、仏地と僧地が分化したことを述べている。また、日本の平地伽藍を類型化す

るとともに、仏地・僧地・俗地にわけ、僧地については川原寺や飛鳥寺などの僧坊と食堂の配置にも言及した。これに対し、上原真人氏は僧地や俗地は分けにくいものであるため、仏地と僧地に大別するのが適当だとしている。^(注20)その後、奈良時代以降が中心ではあるが、墨書土器等の文字資料の出土により、寺院の維持管理施設とその配置が明らかになる事例が増えた。景観研究においても、より踏み込んだ記述がなされるようになり^(注21)、これにより寺院全体の敷地を「寺院地」と呼び、主要堂塔から構成される区画を「伽藍地」、寺院の維持管理施設からなる区画を「附属院地」と呼び^(注22)、さらに大衆院・政所院・修理院・倉垣院など諸施設が特定される場合も多い。

美濃山廃寺の景観を検討する上で、これらの先行研究の対象となった寺院と大きく異なるのは、国分寺以前の創建であること、寺院の諸施設を示すような文字資料の出土がないこと、出土遺物から創建段階において官からの援助があった可能性が低いという点である。このため附属院地を構成する諸施設を特定できる可能性は低く、また、検出された建物群の配置などから、上原氏の示した「仏地」と「僧地」という区別のほうが、より検出遺構を評価できる可能性が高いことから、この2大区分を用いて美濃山廃寺を評価してみたい。



第104図 美濃山廃寺寺院内建物群想定復元図

なお、検出した建物の多くが第7次調査地の第Ⅱ～Ⅲ期に属する遺構群であるため、これらの時期を中心に景観復元を行う。

(2) 第6次調査B地区・第7次調査南部(仏地推定地)

第6次調査B地区では竹林造成による強い削平を受けているため、遺構はほとんど検出できなかった。しかし、近世以降の堆積層から寺院創建期の軒瓦と推定している軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ型式、軒平瓦Ⅰ・Ⅱ型式が多数出土すること、覆鉢形土製品やひさご形土製品などもこの一帯から出土していることから、仏教関連施設があった可能性が高い。第6次調査報告140～142頁にあるように覆鉢形土製品やひさご形土製品から、塔信仰が行われていたことが考えられるが、塔の中に小塔を納めたとは考えにくいことから、堂が営まれ、その中に小塔を納めたのではないかと推定される。金堂は金人(仏像)を納めるための堂宇であるから厳密に金堂と呼ぶことは適切でないかもしれないが、この空間に想定される建物をあえて金堂相当施設と呼んでおきたい。

これに対して第7次調査で検出した礎石・掘立柱併用建物S B 2020は、建物規模や、建物の周囲から軒丸瓦Ⅲ型式のほか多数の瓦類が出土していることなどから、講堂としての役割を担っていた可能性がある。講堂は僧地の一部とも理解されているが、一方で金堂・塔などとともに七堂伽藍の1つに数えられていることや、他の掘立柱建物群の検出状況を考慮して、今回の調査では「仏地」の領域に含めておきたい。

(3) 第6次調査A地区北部、第7次調査地北東部・北部・中央部、第8次調査(僧地推定地)

第7次調査を中心に多数の掘立柱建物を検出した。これらには側柱建物と総柱建物が認められ、いくつかのグループに分けることができる(第Ⅰ～Ⅳ群)。以下、各遺構の報告順で群ごとに概要を述べる。

第Ⅰ群は、側柱建物を主体とする一群で、とくに第7次調査北東部から第6次調査A地区北部にかけて認められる。これらは第6次調査掘立柱建物S B 475(第Ⅱ-1期)→第7次調査掘立柱建物S B 2012(第Ⅱ-1期)→第6次調査掘立柱建物S B 010(第Ⅱ-2期)→第7次調査掘立柱建物S B 2011(第Ⅲ-1期)という変遷が考えられる。周辺では、大量の土器が廃棄された土坑や溝が確認されている。これらの出土土器の内容から第6次調査溝S D 039(第Ⅱ-1期)→第7次調査土坑S K 352(第Ⅱ-1期)→第6次調査土坑S K 470(第Ⅲ-1期)という変遷が考えられる。他の区画では土器がほとんど出土しないことから、この区画が生活空間であり、文献等にみえるいわゆる大衆院としての性格を担っていた可能性がある。

第Ⅱ群は、主に総柱建物からなる一群で、第7次調査北部や第8次調査地で検出した。6棟検出したうち、総柱建物S B 2010・2015や第8次調査で検出した総柱建物S B 2の3棟は、個々の建物規模は異なるが、東辺をほぼ揃えて、南北に並んで建てられている。こうした配置などから寺院の倉庫群であった可能性がある。S B 2010やS B 2015は建て替えも認められるが、第Ⅲ期以降も引き続き存続したかどうかは明らかでない。

第Ⅲ群は、第Ⅰ群の側柱建物群よりもやや大型の側柱建物群であり、第7次調査地の中央部、S B 2020の北側に認められる。桁行5間(9.1～10.9m)、梁行3間ないし2間(4.5～5.5m)の大型

掘立柱建物を東西に3棟検出しており、第7次調査掘立柱建物S B2002(I期・第Ⅱ-1期)→第7次調査掘立柱建物S B2001(第Ⅱ-2期)→第7次調査掘立柱建物S B2004(第Ⅲ-1期)と建て替えられた可能性がある。中央部で検出した第7次調査掘立柱建物S B2003・2016～2018、第6次調査掘立柱建物S B065は、上記3棟に付属する建物群と考えられる。またS B2001やS B2017の柱穴から硯や朱硯(第81図245・249)を含む転用硯などが出土していることから、これらの建物周辺で寺務作業を行っていた可能性があると考えられる。断定は難しいが、政所院としての性格を担っていた可能性がある。

第Ⅳ群は、総柱建物S B2009のみからなる。S B2009は第7次調査地西部で検出し、礎石・掘立柱併用建物S B2020の柱穴に次ぐ、一辺1.0～1.4m程度の大型柱穴で構成される。また、S B2009の周辺にはほかの建物がみられず、区画溝S D090・100の内側に位置し、1棟のみ独立した状態で存在している点が特異である。桁行3間(6.0m)、梁行2間(4.6m)、総面積27.6㎡であり、山田寺の宝蔵とされるS B660(桁行3間(6.0m)、梁行3間(5.0m)、総面積30㎡)と規模が類似する。^(注23)以上の点をふまえ、寺院に関連する建物と考えると、山田寺の例と同様に宝蔵もしくは経蔵である可能性もあると考えられる。

以上のように、調査地の北半部で検出された建物群は、僧侶が生活し寺院を運営するための空間であったと考えられる。

(4)まとめ

これまで景観や伽藍配置研究の対象となってきた寺院は、官からの影響を多く受け、国分寺などの鎮護国家思想のもとに造営された寺院が中心である。第6次調査報告149・150頁でも述べたようにこうした朝廷の仏教施策は聖武朝に最高潮に達する。たとえ地方豪族の氏寺であっても、造営ないし修繕の技術や寺院形態などが強い影響を受けたことは想像に難くない。美濃山廃寺では検出された遺構を仏地と僧地に大別でき、特に僧地内の建物群については側柱建物や総柱建物のまとまりからさらに小区画が想定できた。いわゆる政所院や倉庫の集まる倉垣院と考えられる一群も存在したが、断定できる要素に乏しい。

仏地においては、いわゆる塔・金堂・講堂という伽藍配置が整っていたとは考えられず、独自の発展をしたのではないかということが読み取れる。また、土製品も特殊なものが出土し、信仰形態も独自なものであった可能性が高い。このことは官の影響をほとんど受けず、新羅系渡来人の影響を受けて創建されたことによるのかもしれない。

奈良時代後半になって、平城宮と同文の軒瓦が出土することから、朝廷の仏教施策の影響を多少受けるようになると考えられる。しかし、検出遺構から、いわゆる七堂伽藍が整い、附属院地を構成する諸施設が全て整っていたとは考えにくい。このことから寺院の形態まで官の統制を受けることはなかったと考えられる。第Ⅳ期には建物の建て替え等もされなくなり、寺院が維持できなくなって廃絶したと考えられる。

(筒井崇史・関広尚世)

7. 総括

美濃山廃寺第7次調査の成果について、第6次調査の成果と合わせて、美濃山廃寺の総括としたい。この総括には、八幡市教育委員会が実施した第8次調査、ならびに当調査研究センターが実施した第9次調査および美濃山瓦窯跡の発掘調査の成果も合わせて参照した。

1) 美濃山廃寺の景観

古代寺院の構造については、いくつかの分類が可能である。美濃山廃寺の調査では、具体的な金堂や塔などの伽藍に相当する遺構を確認することはできず、第6次調査地B地区に、出土した軒瓦や丸・平瓦の分布から金堂相当施設を推定できたにとどまる。これに対して、第7次調査地を中心に第6・8・9次調査地に広がって多数の側柱建物群・総柱建物群を検出した。これらの遺構群は検出された掘立柱建物の構造や分布などから、生活空間や寺務作業空間、倉庫群などを想定した。そして前者を「仏地」、後者を「僧地」と位置づけることができると考えた。

2) 遺構の変遷

出土遺物や掘立柱建物の造営方位・構造などから検討を加え、第Ⅰ～Ⅳ期の4期に大別し、第Ⅱ・Ⅲ期をそれぞれ2小期に細分した。

第Ⅰ期は、第6次調査地B地区に金堂相当施設を造営した段階で、美濃山廃寺の創建期と考えている。具体的な建物については明らかにできなかったが、出土遺物等から信仰の中心的な施設が営まれていたと考えられる。

第Ⅱ期は、金堂相当施設をはじめとする「仏地」と考えた範囲の北側に、多数の掘立柱建物群の整備が進む段階である。一部の建物は第Ⅰ期に造営された可能性があるものの、本格的な整備は第Ⅱ期に行われたと考えている。この段階から次の第Ⅲ期にかけては遺構数も多い。建物の建て替えなどもほぼ同じ地点で確認できる。これは「僧地」に当たる空間の整備と考えられよう。

第Ⅲ期は、第7次調査地南部に礎石・掘立柱併用建物S B2020が造営される段階である。美濃山廃寺存続期間のほぼ中間期で、大規模な建物の造営を行っていることが注意される。S B2020の造営は、「仏地」の拡充の段階と捉えることができよう。

第Ⅳ期については、具体的に遺構を確認することはできなかった。このため、美濃山廃寺の廃絶に至る段階と理解している。

以上、各期の評価としては、第Ⅰ期は創建期、第Ⅱ期は「僧地」の整備期、第Ⅲ期は「仏地」等の拡充期、第Ⅳ期は廃絶期と考えている。

さて、美濃山廃寺の存続期間の実年代については、南山城地域における土器編年に課題があるものの、飛鳥・藤原地域や平城宮での編年をもとに実年代を推定した。美濃山廃寺の変遷は先述の通り4期区分とし、第Ⅰ期；7世紀後半～8世紀初頭、第Ⅱ期；8世紀前半～中頃、第Ⅲ期；8世紀後半～末、第Ⅳ期；9世紀前半代と想定できる。

3) 生産関連遺構群について

第7次調査では、羽口や鉄滓等が、土坑や掘立柱建物の柱穴掘形などから出土した。これらの出土地点は調査地の広範囲に及ぶが、鍛冶炉等の遺構を確認することはできなかった。これは後

世の竹林造成等で大きく削平されたためと考えられ、丘陵の東側斜面や頂部の平坦地のいずれかの場所に鍛冶関連の遺構が存在していた可能性を示すものである。第7次調査で出土した鍛冶関連遺物は、建物の補修用として作られた製品やその関連遺物であった可能性がある。これに対して第6次調査A地区南部で検出した鍛冶遺構は、出土遺物などから美濃山廃寺創建期の寺院造営に伴うものと評価できる。

また、第7次調査地では、礎石・掘立柱併用建物S B2020の周辺を中心に大量の瓦が出土した。これらの大半は平瓦H-D類と分類した1枚作りの平瓦である。これを生産していた瓦窯としては第9次調査で検出した美濃山2・4・5号窯が候補になる。2～5号窯については、調査期間等の関係から平成24年度に本格的な調査を実施したため、その調査成果については、今後の整理作業を待たねばならないが、美濃山廃寺と不可分の関係にあると考えられる。これらの瓦窯と美濃山廃寺の関係については、別の機会に検討することにした。

4)美濃山廃寺出土軒瓦

型式ごとの出土点数や出土傾向、年代等については、第6次調査報告132～135頁で述べた通りである。以下、美濃山廃寺出土軒瓦の意義について簡単にまとめることにしたい。^(注24)

①美濃山廃寺の軒瓦の変遷 美濃山廃寺の創建時の軒丸瓦としては、I a・I b・II a・II b型式がある。同じく軒平瓦としてはI a・I b・II型式がある。各型式の系統は異なるものであることから、美濃山廃寺の造営に当たり、各地から集められた可能性がある。このため、いずれか1種類の型式をもって創建軒瓦とするのではなく、複数の瓦が使用されていた可能性を考える必要もある。これらの軒瓦はすでに述べている通り、仏地の周辺で集中的に出土しており、金堂相当施設の位置を推定するための根拠となっている。

次に、奈良時代中頃以降の特徴でもある一本作りの軒丸瓦Ⅲ型式は、その出土位置から礎石・掘立柱併用建物S B2020の造営に伴う当初の軒丸瓦であったことが確実である。ただし、軒平瓦がまったく確認されておらず、平瓦を軒平瓦の代わりに利用していた可能性が高い。

軒丸瓦Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ型式は、出土状況等から第6次調査地B地区に想定された金堂相当施設の補修瓦と想定される。軒丸瓦Ⅳ・Ⅵ型式は、8世紀後半の第3四半期ごろ、軒丸瓦Ⅶ型式は8世紀末ごろのものと想定され、少なくとも2回にわたって補修された可能性がある。

軒丸瓦Ⅷ・Ⅸ型式のうち、Ⅸ型式は8世紀第3四半期ごろのものと推定され、軒丸瓦Ⅲ型式のものと同時期のものであろう。一方、Ⅷ型式は時期不明であるが、出土状況からS B2020の補修瓦である可能性が高く、その時期は第Ⅲ-2期、8世紀末と推定される。

②古代交通路と軒瓦 美濃山廃寺出土の軒丸瓦の同文・同范関係は、第Ⅰ・Ⅱ期と第Ⅲ期で異なる。まず、第Ⅰ期の軒丸瓦Ⅰ型式における同文様例として、九頭神廃寺出土例をあげることができる。九頭神廃寺出土例は、新羅系の特徴を有する軒丸瓦と考えられており、美濃山廃寺における渡来系の要素の1つとみることができる。次に軒丸瓦Ⅱ型式は、八幡市志水廃寺や西山廃寺と同文様の軒丸瓦で、ほかの寺院で同范例や同文例が確認されていないことから、山背国綴喜郡内でも現在の八幡市域に限定されて生産された可能性のある軒丸瓦であろう。このように第Ⅰ・

Ⅱ期の同文・同範瓦の分布範囲から、瓦の技術が綴喜郡の西部や交野郡との関わりで伝わったと考えられる。

一方、さらに時期的に新しく位置づけられる軒丸瓦Ⅲ・Ⅵ・Ⅸ型式は平城宮出土軒丸瓦と同範ないし同文様、もしくはその影響を受けていると考えられるものである。いずれにしても8世紀中頃から後半にかけての年代を与えることができ、官との関わりを指摘できる軒丸瓦である。

またⅣ・Ⅶ型式は、近隣の古代寺院において確認されており、前者は大阪府枚方市百済寺や八幡市西山廃寺で出土している。また、Ⅶ型式は志水廃寺や木津川市山背国分寺塔跡、京田辺市興戸廃寺・普賢寺などで出土している。このように新しい時期になると、同文・同範瓦の分布範囲がさらに広がることになる。

軒丸瓦の分布は、森郁夫氏の研究にもあるように寺院の立地が影響したと考えられる。^(注25)古北陸道沿いにある木津川の右岸と左岸域でも相楽郡内では川原寺式の影響を受けた寺院が集まるのに対し、綴喜郡のとくに西部ではその影響を全く受けず、独自の発展をしたと考えられてきた。美濃山廃寺における九頭神廃寺との同文瓦の存在はこれを如実に語り、当時の交野郡(枚方市側)との交流が密であったことを示している。このことは、軒丸瓦のみならず、埴仏においても類似性が見られた百済寺についても同様に、交流のあったことを示している。

補修瓦については軒丸瓦Ⅳ型式が西山廃寺と百済寺と同文であり、さらに新しい時期の軒丸瓦Ⅶ型式については志水廃寺のほか、木津川市山背国分寺、京田辺市興戸廃寺・普賢寺などで出土している。このように美濃山廃寺の創建時と補修時の軒丸瓦のあり方は、若干異なる。前者にくらべると、後者の方が同文様を共有する寺院の分布範囲に広がりが見られる。他方、軒丸瓦Ⅱ型式に見られるように綴喜郡内、特に八幡市域の寺院で軒丸瓦の文様に一定のまとまりがあることも忘れてはならない。これは、古北陸道沿いに分布した久世郡や相楽郡の寺院に対し、綴喜郡では古山陰道や古山陽道といった古代の交通路があり、これらの交通路を背景に寺院が造営された可能性を示している。

③**仏教施策と軒瓦** 前項では古代交通路と軒瓦の分布について述べたが、朝廷の仏教施策もこれに影響を与えたと考えられている。美濃山廃寺は、第6次調査報告でも述べたように渡来系氏族の影響を受けながら建立されたと考えられる。綴喜郡で軒瓦の型式がまとまっているのは、そこが交通の要所であっただけでなく、渡来系氏族の影響を受けた独自の信仰を目的とした寺院を建立しようとしたこととも関係する。第6次調査報告149・150頁でも述べているように仏教施策にはいくつかの画期があり、特に天武・持統期、そして聖武期において鎮護国家思想の高まりがみられる。この思想の高まりが最高潮に達したのは聖武期以降であり、これらは美濃山廃寺や周辺の古代寺院で補修が行われた時期とあまり変わらない。それゆえに平城宮出土軒丸瓦と同範ないし同文様、もしくはその影響を受けている瓦が出土するものと考えられる。また、補修瓦の分布範囲が広がるのも情報や技術の広範囲にわたる共有がなされていることの結果と言える。

5)美濃山廃寺の造営氏族について

南山城地域における古代寺院の多くは渡来系氏族によって造営されたと推測されるものが多い。綴喜郡内の古代氏族の復元的研究は余り進んでいないが、『正倉院文書』「隼人計帳」綴喜郡大隅郷の項に隼人系氏族の居住を示す記述がある。他にも内氏、高句麗系高井氏、任那系多々良氏、また、継体天皇の筒城宮の推定地でもあることから息長氏が居住していた可能性がある。このうち、美濃山廃寺の造営に関わった氏族については内氏である可能性も指摘されていた。^(注26)

今回の一連の発掘調査では、美濃山廃寺の造営氏族に関する手掛かりを得ることはできなかった。しかし、今回の調査の結果、創建の段階で軒丸瓦Ⅰa式、ひさご形土製品、覆鉢形土製品など、新羅の影響を受けた遺物が少なからず散見されるという点を明らかにすることができた。また、出土軒瓦などをみていくと、南山城地域の他の郡、相楽郡・綴喜郡東部・久世郡との関連よりも河内国交野郡との関わりが深く、国や郡をこえて一つの文化圏を形成していた可能性が高い。さらに綴喜郡ではいわゆる川原寺式、紀寺式の軒丸瓦が認められず、独自の様相を展開することは先に述べた通りである。

ところで、軒丸瓦Ⅰa型式と同文様の軒丸瓦が出土する枚方市九頭神廃寺は、小笠原好彦氏によって、渡来系の氏族である河内馬飼造によって造営されたと想定されている。^(注27) また、8世紀後半の建立になるが、枚方市百済寺も渡来系氏族の百済王氏によって建立されたと言われ、軒丸瓦Ⅳ型式と同文様の軒丸瓦が出土している。このように美濃山廃寺と深い関わりを持つと思われる枚方市の九頭神廃寺や百済寺でも、渡来系氏族によって寺院が創建されたと考えられている。また、何度も述べてきたように、美濃山廃寺そのものにも、新羅をはじめとする渡来系の文物の影響を見て取ることができる。このことをもって、ただちに美濃山廃寺の造営氏族が渡来系氏族であると判断することはできないが、美濃山廃寺の造営に何らかの影響を与えている可能性は否定できないと思われる。

これらを総合すると、純粹に従来想定されてきた内氏の氏寺ではなく、渡来系氏族の影響を色濃く受けた寺院の可能性が高い。この点をふまえると限定的に分布する軒丸瓦や造塔供養を中心とする当時の仏教施策とはやや異なった信仰形態をもった寺院であった可能性がみえてくる。美濃山廃寺がこれまでの寺院のイメージとは異なる特色を持つ寺院であり、それが仏教の受容や浸透の一過程を示していることを指摘して、本調査報告のまとめとしたい。

(筒井崇史・関広尚世)

注1 美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次調査として、当調査研究センターが実施した。その調査成果については本報告集1を参照されたい。

注2 大洞真白『美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡範囲確認調査(1～5次)報告書』(『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第39集 八幡市教育委員会) 2006

本報告の記述に当たり、美濃山廃寺第1～5次調査の成果については上記文献を参照した。

注3 美濃山廃寺として第1～5次調査を、美濃山廃寺下層遺跡として第1～8次調査を実施している。これらの調査成果については、第6次調査報告5～8頁を参照されたい。

- 注4 この遺構については、特に森郁夫(帝塚山大学)、大脇潔(近畿大学)、山岸常人(京都大学)、高正龍(立命館大学)、箱崎和久(奈良文化財研究所)の各氏からさまざまなご教示を得た。
- 注5 当調査研究センターで実施した「美濃山麿寺検討会」の参加者は次の通りである。
上原真人(京都大学、当調査研究センター理事)、石崎善久・福島孝行(以上京都府教育委員会)、小森俊寛・大洞真白・備前知世(以上八幡市教育委員会)、森島康雄(京都府立山城郷土資料館)、調査担当者、当調査研究センター職員
- 注6 注2文献12~15頁、図版1~3を参照のこと。
- 注7 都城における土師器供膳具の調整手法は、奈良文化財研究所の報告を参照した。b1手法は、口縁部外面をヨコナデし、底部はヘラケズリで調整するもので、口縁部のみミガキを加えるもの。
- 注8 伊野近富・筒井崇史・松尾史子ほか「馬場南遺跡第2次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第138冊 財団法人京都府埋蔵文化財踏査研究センター) 2010
- 注9 覆鉢形土製品については既存の資料にもとづいて、大洞真白氏が検討を加えている。
大洞真白「美濃山麿寺出土の覆鉢形土製品について」(『古代摂河泉寺院論叢集』第2集 摂河泉古代寺院研究会) 2005
- 注10 注8文献107~109頁、第63図831・832、注23参照。
- 注11 宝幢遺構に関しては高正龍氏(立命館大学)からさまざまなご教示を得た。
- 注12 大型柱穴群を建物として復元するにあたっては、箱崎和久氏からさまざまなご教示を得た。
- 注13 箱崎氏のご教示や管見による類例としては以下のようなものがある。
平城宮第1次大極殿院S B7802(奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』XI(奈良国立文化財研究所学報第40冊) 1982
平城宮第1次大極殿院S B7700(奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』XIV(奈良国立文化財研究所学報第51冊) 1993
平城宮東院庭園S B17700(奈良文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』XV(奈良文化財研究所学報第69冊) 2003
平城京三条に坊二坪S B4601(奈良国立文化財研究所編『平城京左京二条二坊・三条二坊』(奈良国立文化財研究所学報第54冊) 1995など。
- 注14 奈良文化財研究所編『山田寺発掘調査報告書』(『奈良文化財研究所学報』第63冊 奈良文化財研究所) 2002、箱崎和久『奇偉荘嚴の白鳳寺院・山田寺』(『シリーズ「遺跡を学ぶ」』085 新泉社) 2012など。
- 注15 朝鮮半島の事例も、注14の各文献を参照した。
- 注16 飛鳥時代の土器編年については下記の文献を参照した。
奈良国立文化財研究所編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』(『奈良国立文化財研究所学報』第31冊 1978)、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ』(『奈良国立文化財研究所学報』第55冊) 1996
また、平城宮における土器編年については下記の文献を参照した。
奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告Ⅶ』(『奈良国立文化財研究所学報』第26冊 1977)、同『平城宮発掘調査報告XⅣ』(『奈良国立文化財研究所学報』第51冊) 1993、同『平城宮発掘調査報告XⅥ』(『奈良文化財研究所学報』第70冊) 2005など
- 注17 古代の建築において、宮殿や官衙・寺院などでは、唐からもたらされた新しい建築様式として、梁行2間を主体とするが、古墳時代以来の建築様式では梁行を3間のものも多くみられるという。下記文献では、前者を「律令型」、後者を「在来型」と呼んでおられる。美濃山麿寺における主要な掘立柱建物についても、出土遺物等から後者が古く、前者が新しく位置づけられる傾向が確認できる。

- 松本修自「軸部と屋根」（『古代の官衙遺跡 I 遺構編』奈良文化財研究所）2003
- 注18 八幡市教育委員会小森俊寛・大洞真白氏のご教示による。
- 注19 三輪嘉六「古代寺院における寺域の問題」（『考古学ジャーナル』61 ニューサイエンス社 1971）、坂詰秀一「初期伽藍の類型認識と伽藍構成における僧地の問題」（『文学部論叢』第63号 立正大学）1979、関廣尚世「寺院景観への一試論」（『考古論集 - 川越哲志先生開館記念論文集 - 』）2005
- 注20 上原真人「仏教」（『岩波講座日本考古学』4 岩波書店）1986
- 注21 網伸也「畿内における在地寺院の様相」（『古代』110号 早稲田大学考古学会）2001
山路直充「国分寺における寺院地と伽藍地」（『古代』110号 早稲田大学考古学会）2001
- 注22 大脇潔「古代寺院と事変の景観を復原する」（『撰河泉の古代寺院とその周辺』第1回撰河泉古代寺院フォーラム資料 撰河泉文庫 1997）、注21網論文など。
- 注23 奈良文化財研究所編『山田寺発掘調査報告書』（『奈良文化財研究所学報』第63冊 奈良文化財研究所）2002 154～157・470～473頁。
- 注24 なお、以下で取り上げる軒瓦は、いずれも同範であるという判断に至っていない。したがって、同文様の軒瓦として扱う。
- 注25 森郁夫「古代山背の寺院経営」（『学叢』第8号 京都国立博物館）1986
- 注26 中島正「山背の古墳と寺院」（『季刊考古学』60号 雄山閣）1997
- 注27 小笠原好彦「九頭神麿寺の性格と造営氏族」（『日本古代寺院造営氏族の研究』東京堂出版）2005